特274
842

0057028000

0057028-000

特２７４－８４２

輝く陸軍将校生徒

陸軍将校生徒試験常置委員・編

大日本雄弁会講談社

改訂版
昭和１５

AJF

輝く陸軍將校生徒

842

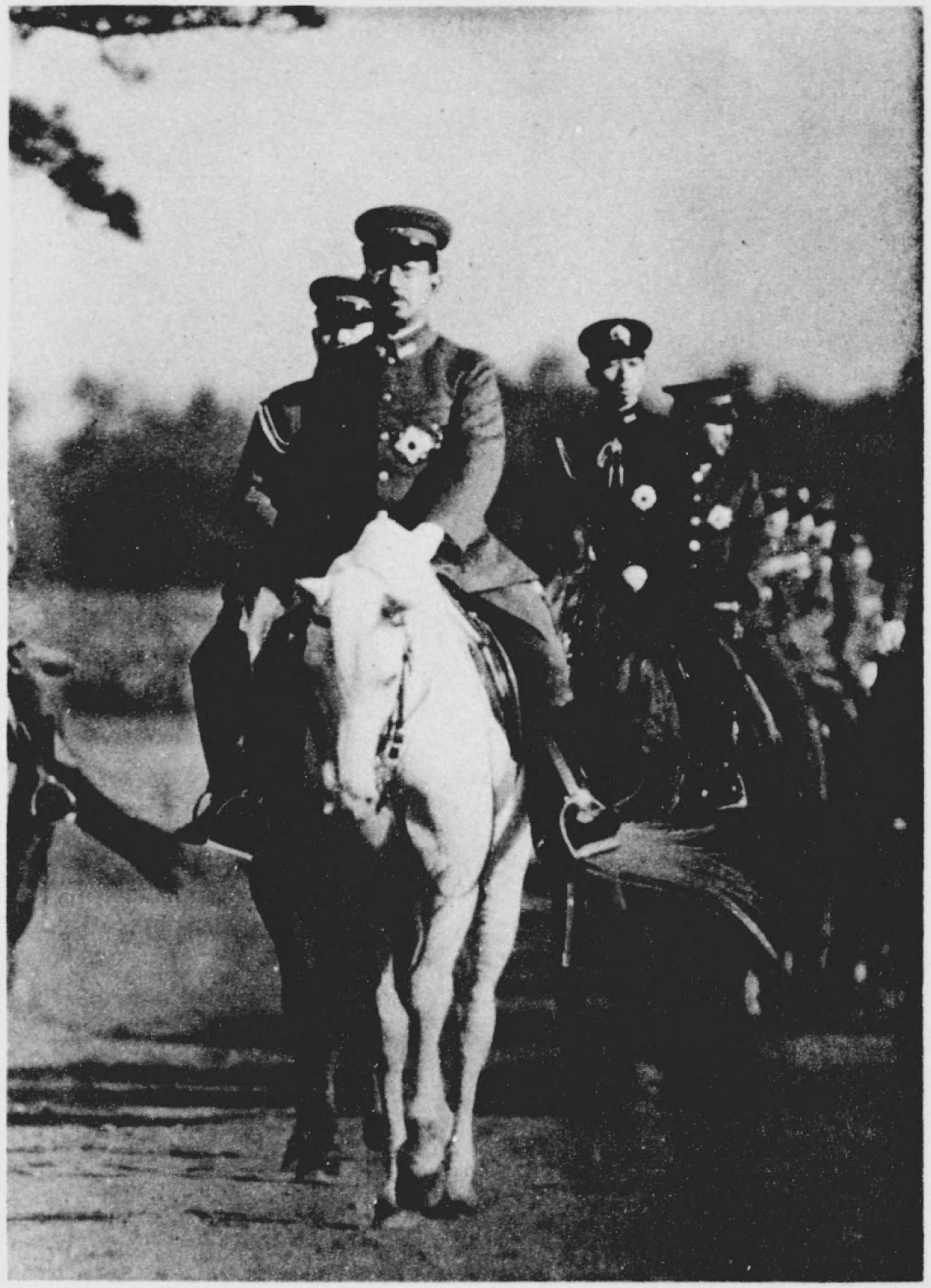
567

特274
842
納本

輝く陸軍將校生徒

教育總監部監修

陸軍將校生徒試驗常置委員編



一死報國

正三書

序

『一匹の狼の率ゐる羊の群は、一匹の羊の率ゐる狼の群よりも強い』

といふ諺がある。軍の強弱は、實に之を率ゐる將校の優劣によること最も多きは改めて言ふまでもない。

日露戰役及びその後の滿洲事變、支那事變に於ける我が陸軍の赫々たる成果は勿論、又今次歐洲戰爭に於ける獨軍の電擊的活動も、共に多年有爲の將校を養成し來つた賜であつて、斯かる優秀なる將校は、幼少時代からの立派な教育に依つて始めて得られるものである。之我が國に於て、陸軍幼年學校及び陸軍豫科士官學校を設けて、靑少年時代から陸軍將校の後繼者を教育する所以である。

今や世界情勢の變轉に伴なひ、我が國防國家體制の完成急を要するの秋、將來軍の中核をなす優秀なる將校を翹望すること、實に今日より急且切なるはない。

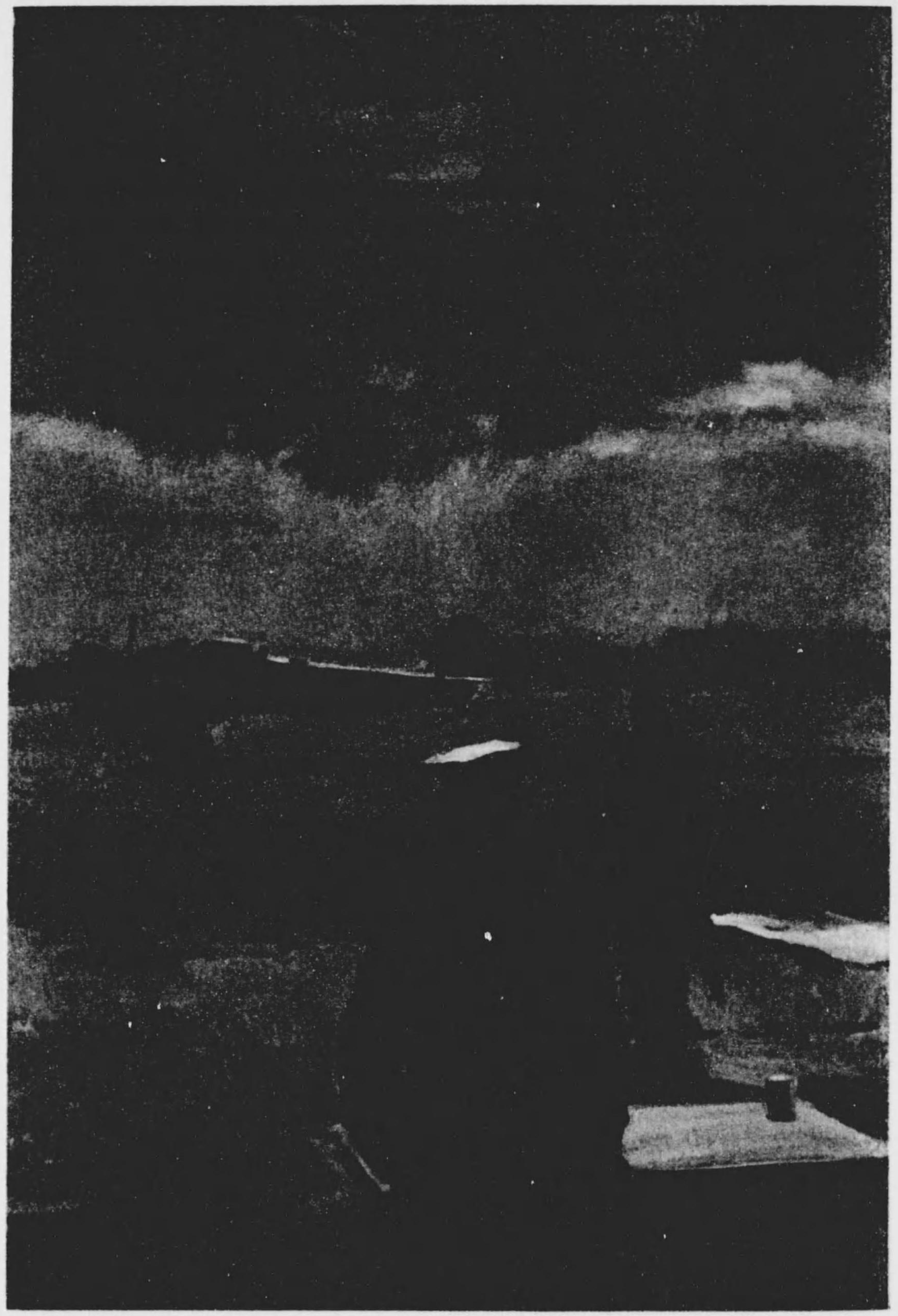
本書は此の重大時局に際し、天下有爲の青少年に、陸軍將校生徒生活の實況を紹介したものである。

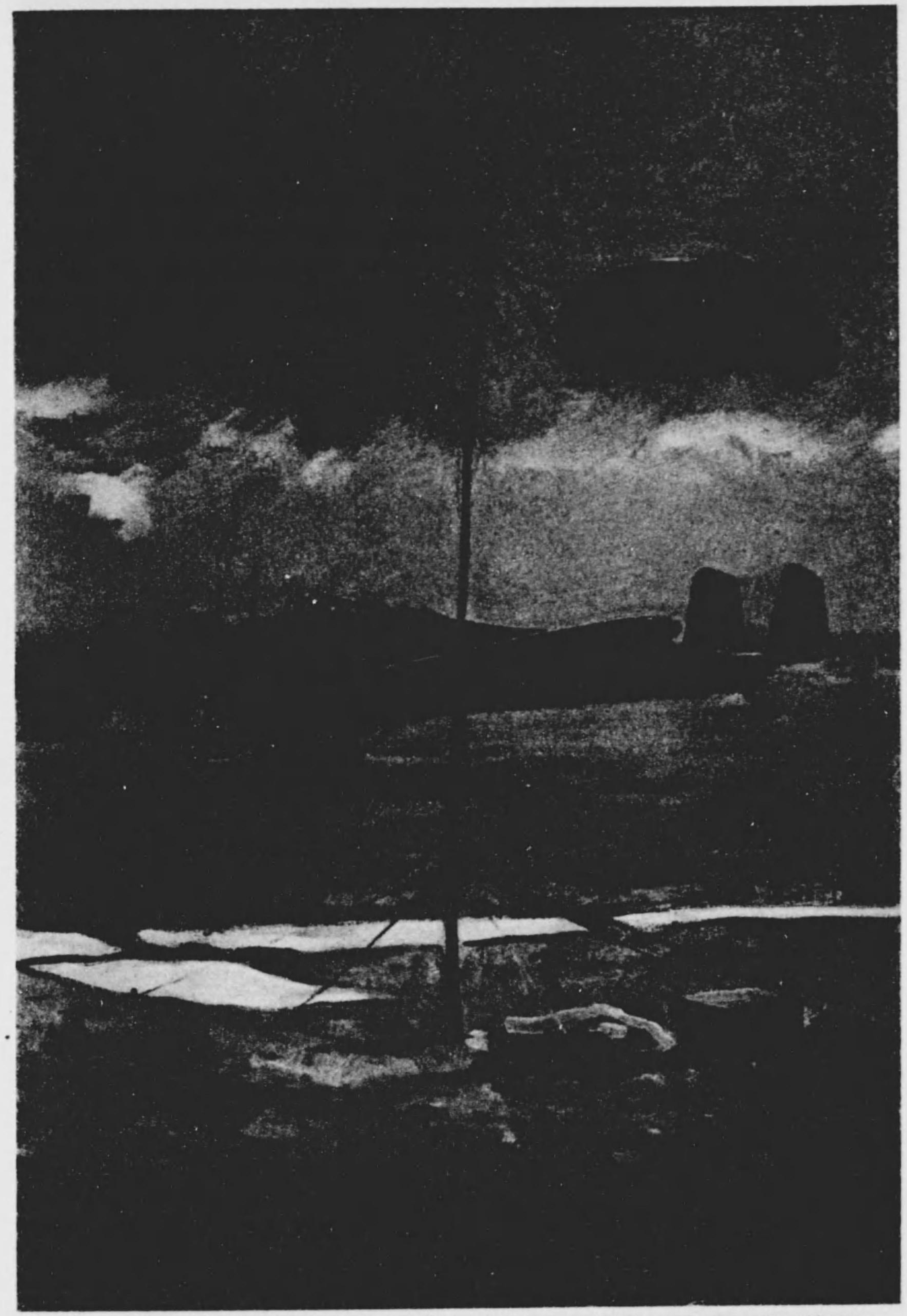
一讀するに記述平易懇切にして、其の實相に觸れ克く編纂の主旨に副へるを觀て、本書が軈て來るべき國際間の集團的對立に際し、亞細亞の盟主日本の國運を雙肩に擔ひ、颯爽として活躍場裡に立たんとする青少年の爲に、好指針となることを堅く信じて、敢へて廣く之を推擧せんと欲するのである。

昭和十五年八月

教育總監部本部長
兼陸軍將校生徒試驗常置委員長
陸軍中將　今村均

莊嚴な遙拜‥‥東天漸く白みかかる早朝だ。清新な空氣に心身を清め、遙拜所に出る。各生徒が肅然と立つて脫帽、宮城、伊勢大神宮等を遙拜し奉りなは、兩親のいます方にも敬禮し、終つて御勅諭を奉讀する。（岡　吉枝畫）





羽搏く陸の荒鷲の雛……陸軍航空士官學校生徒、即ち陸の荒鷲の若雛は、連日大陸の空を望んで猛訓練に鍛へられてゐる。今もし上空を翔け行く三機編隊の最新式輕爆機が、想定敵地を爆撃すべく基地を出發し、續いて同じく三機が今や離陸した。いづれも機首をそろへて、驀進の意氣すでに敵を呑み、必勝の信念あふれるばかりだ。旗信號を振るものも、機上の勇士も、皆、若き士官候補生である。頼もしきかな。

（村上松次郎畫）

最後の練磨……卒業を目の前に、士官候補生の訓練はいよ〳〵猛烈となる。これは、歩兵士官候補生の壯烈な戰鬪演習。略帽を被り、防毒面をつけ、戰車、砲兵及び飛行機と協力して空陸一體となり敵陣に突撃、實に元氣潑剌實戰そのまゝである。（伊藤幾久造畫）

最後の練磨……卒業を目の前に、士官候補生の訓練はいよ〳〵猛烈となる。これは、歩兵士官候補生の壮烈な戰鬪演習。略帽を被り、防毒面をつけ、戰車、砲兵及び飛行機と協力して空陸一體となり敵陣に突撃、實に元氣溌剌實戰そのまゝである。（伊藤幾久造畫）

目次

大元帥陛下の御尊影（口繪御寫眞）

使命は重し、われ等の將校生徒……二
擧國の大精神と皇軍の任務……二
若人の華となれ……四

陸軍幼年學校の卷……七

尙武剛健に伸び行く生活……九
御皇室の御殊遇……九
一誠五條大和魂……一一
常に凜然たれ……一六
陣中勤務と少年達人……一八
和やかな夕、靜肅な夜……二〇
食ふ、語る、歌ふ……二一
大家庭と鍊膽會……二五
海でも健兒……三〇
歸省の喜び……三三
楠公會……三四
乃木會……三五
義士會……三六
訓練旅行……三七
運動會と學藝會……三八
寒稽古……四一
卒業式……四二

東京陸軍幼年學校參觀記……四五

皆すべて軍事的……四五
實に幸福な生活……四八

大家庭の献立……五三
旺盛なる攻撃精神……五四
幼年學校生徒發育率概況表……五六
尊き記念室……五八
將校生徒になりたい……六〇
仙臺陸軍幼年學校參観記……六二
雄大剛健の大自然……六二
名古屋陸軍幼年學校參観記……六八
軍神橘精神……六八
大阪陸軍幼年學校參観記……七二
大楠公の精神は生きてゐる……七二
廣島陸軍幼年學校參観記……七七
鯉城を仰ぐ廣大な武學寮……七七
熊本陸軍幼年學校參観記……八二
無言の教訓を與へる阿蘇山の雄姿……八二
學窓から故郷の後輩へ……八八
憧憬の星の生徒……八八
光榮に輝く幼年學校……八八
心は躍る入校……八九
日々の生活……九〇
樂しい訓練旅行……九二
夏季休暇……九二
優秀なる諸君を待つてゐる……九三

陸軍豫科士官學校の巻……九五

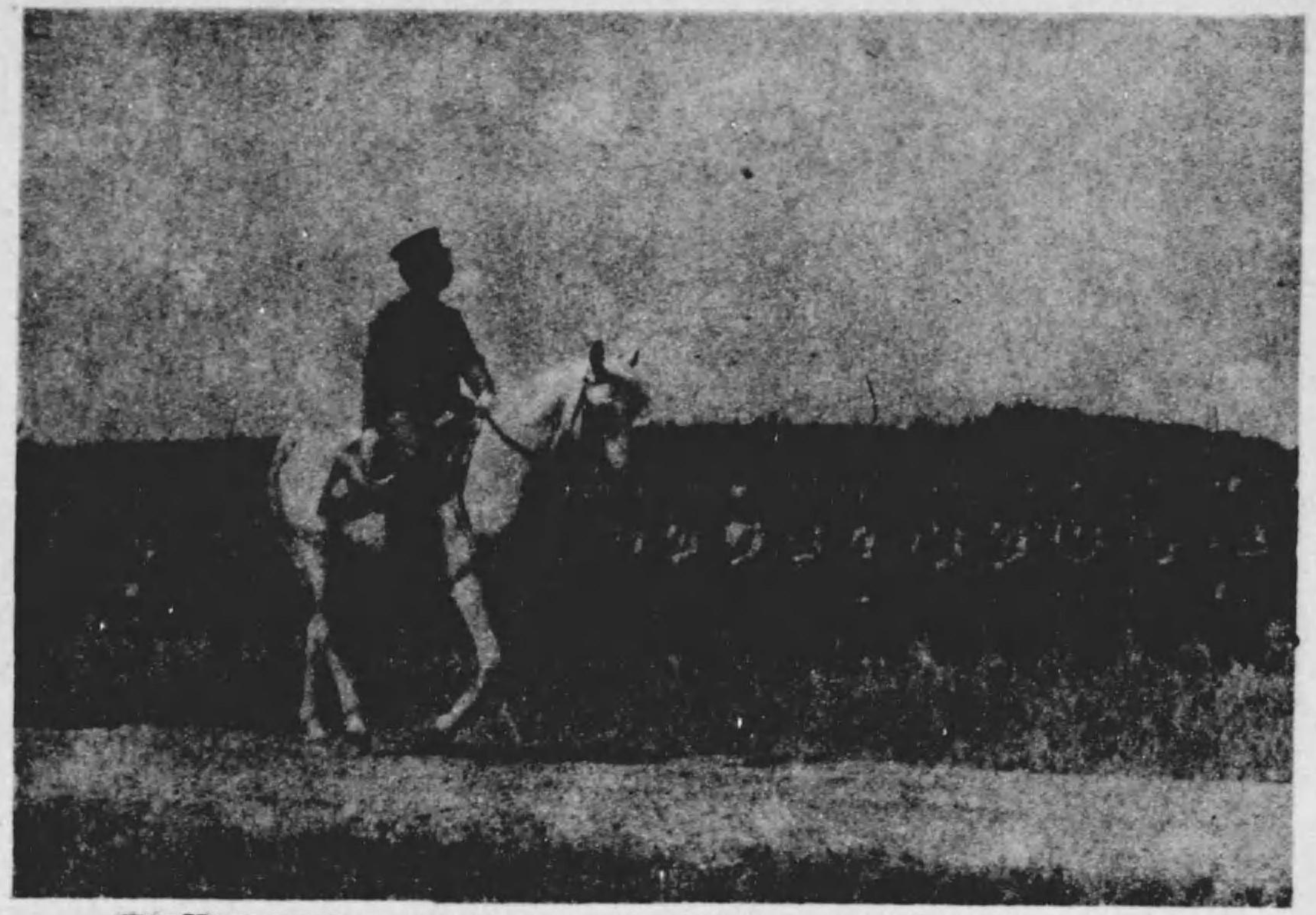
市谷臺上の武生活……九六
在校生……九六
御皇室の御殊遇……九七
充實せる日課……九七
「軍ノ主トスル所ハ戰鬪ナリ」……一〇二
精神と精力の集中主義……一〇八

武の家に育つ……一一一
陸軍豫科士官學校參観記……一一三
將校の卵が通つた坂……一一三
すべてに驚く設備と内容……一一五
内務生活の樂しみ……一一八
一生徒の日記より……一一八
幼年學校受験突破記……一二一
私の志願の動機……一二一
各學科の準備……一二一
その他の經驗……一二四
難關第一日……一二四
試驗は運でない……一二五
電報を拜む……一二六
身體檢査から入校まで……一二八
幼年學校生徒の父の手記……一二九
次男の將來と親心……一二九
父の苦心の數々……一三〇
登龍の門を志す……一三二
一家協力の準備……一三三
伸び行くわが子……一三四
父も遙拜す……一三六
豫科士官學校受験突破記……一三六
いよいよ開戰……一三六
焦躁のうちに過ぎて……一三七
第一關門を通過……一三八
亂讀よりも精讀……一三九
恐るべからずとの確信……一四〇
陸士へ來れ……一四一

陸軍士官學校參観記……一四三

輝く陸軍將校生徒

輝く歷史……一四四
聖慮を畏みて……一四四
最後の錬磨……一四七
將校になる土臺石……一四九
野營演習……一五一
敷地二十餘萬坪……一五六
若き人傑の群……一五九
光榮の卒業式……一六二
陸軍航空士官學校參觀記……一六五
若鷲の武生活……一六六
操縦と整備と通信の三大科目……一六六
進取・明朗・純眞……一七〇
どこを見ても羨まし……一七六
空に爆音地に砂塵……一八三
永遠に忘れ得ず……一八八
結辭……一九〇
陸軍士官學校・幼年學校校歌集……一九三
附
陸軍豫科士官學校 陸軍幼年學校 受驗入校の手引……二一一
陸軍豫科士官學校受驗入校の手續……二一二
陸軍幼年學校受驗入校の手續……二二三
身體檢査規則中必要事項……二二八
陸軍豫科士官學校 受驗者答解に對する所見……二三六
陸軍幼年學校 受驗者答解に對する所見……二四六
陸軍豫科士官學校 最近十箇年間入學試驗問題集……二五四
陸軍幼年學校 最近十箇年間入學試驗問題集……二八七



使命は重しわれ等の將校生徒、恐れ多くも龍顔を咫尺の間に拜したてまつり、感激の極いよいよ一死奉公の決意を固める

使命は重し　われ等の將校生徒

☆肇國の大精神と皇軍の任務

われ等が身命をさゝげて愛する祖國、皇國日本は、小學生も知つてゐるやうに、武をもつて建てられた神國である。

神武天皇が日本を肇め給うた、肇國の大精神は、武なのだ。だから、日本人は武を尚ぶ。祖先から今にいたるまで尚武の國民である。

かしこくも三種の神器に、御劍があることは、皇室と國民と共に武徳を重んじ、義と勇とこそ日本人の大切な精神であることを、神代の時から明らかに示されたものである。

武の徳、卽ち、邪なるものを破り、正義をあらはす武徳こそ、我等日本人の強い道徳なのだ。

この武徳をもつて、祖國の護に心身をさゝげ、國威を發揚するものが、卽ち皇軍である。

日本の軍隊は、かしこくも、天皇陛下御親ら率ゐさせ給ふ故に、「皇軍」といふ。

明治天皇が、軍人に賜はつた御勅諭の始に、

我國の軍隊は世々天皇の統率し給ふ所にそある

と御示しあらせられ、更に、

夫兵馬の大權は朕か統ふる所

と仰せられ、殊に軍人の最も光榮なることは、

朕は汝等軍人の大元帥なるそされは朕は汝等を股肱と頼み汝等は朕を頭首と仰きてそ其親は殊に深かるへき

と仰せ給うた。この厚い大御心を拜して、皇軍軍人の光榮に、誰か感激しないものがあらう。

明治天皇は軍人に、猶訓へ諭し給うた。

我武維揚りて其榮を耀さは朕汝等と其譽を偕にすへし

武徳を揚げかゞやかして、その譽を、大元帥陛下と偕にしたてまつるのが、皇國軍人の使命である。

汝等皆其職を守り朕と一心になりて力を國家の保護に盡さは我國の蒼生は永く太平の福を受け我國の威烈は大に世界の光華ともなりぬへし

かしこくも、大元帥陛下の大御心と一心になりたてまつり、祖國日本を護つて、わが國民の生活を、永遠の平和と幸福のうちにおき、日本の國威を世界にかゞやかすのが、皇國軍人の大いなる任務である。

尊くも光榮あるかな、皇軍の使命と任務、しかも、この重

大な使命と任務を全うすべく、皇軍の將來を一身に負ふものが、われ等の『將校生徒』なのだ。

『將校生徒』、この名がもつてゐる大切な責任、名譽、大いなる使命、これを、『將校生徒』を志望する青少年諸君は、まづ深く身にしみて自覺しなければならない。

☆若人の華となれ

われ等の祖國日本は、今、肇國以來の最も重大な時局に直面してゐる。

既に獨立せる滿洲國を扶けて、その國運の繁榮を永遠に計り、日滿一體の實績をあげて、大陸に於ける日本民族の發展を十分ならしめ、同時に大陸國防の備を十二分に固くしなければならない。更に一方、中華民國の南京に樹立せる中央政府と固く手を握り、今まで歐米の侵略的勢力の下に喘いでゐた支那そのものを、名實ともに完全なる國家たらしめ、東亞の平和と新秩序を永遠に建設しなければならない。これまた、皇道に依る我が日本の重大なる使命であり責任である。

以上の大いなる使命と責任を達成すべく、日本の現在と將來は、國歩まさに多難の道を、幾重にも突破して邁進しなければならぬ。その一つの道が卽ち『東亞新秩序の建設』である。

歐米の勢力に依存して、今なほ抗日戰を敢へてしつゝある支那地方政權を、あくまでも潰滅し、中華民國を赤化しつゝある共產勢力を淸掃し、更に、我が建設を妨害する歐米諸國をして平和と新秩序の建設に協力させ得た時こそ、そこに始めて事變も處理せられ、新しい東亞の黎明が現出するのである。卽ち、この目的を完全に達成すべく、更に長期にわたる堅忍不拔の覺悟を、日本全國民が肚の底にきめてゐなければならない。

かくの如き日本の重大な立場を、誰が第一線に立つて固く守り、使命の遂行と責任の實行に邁進してゐるか。これこそ言ふまでもなく、わが忠烈義烈なる皇軍數百萬の精銳である。

試みに亞細亞の地圖を開いて見るならば、北は滿ソ國境、滿蒙國境より支那大陸を西にかけて橫斷し、更に南へ縱斷して海南島より南支那海にわたり、大陸の國防を固め作戰を進めつゝある皇軍の將兵こそ、實に日本の國運を双肩に擔うて日夜奮勵しつゝあることを、われ等は深く認識しなければならない。

滿ソ國境に配備されつゝあるソ聯極東軍の兵力は、歐洲戰の勃發と擴大にかゝはらず、いさゝかも減少してゐない。新トーチカの堡壘群を諸所に强化し、狙擊師團三十、騎兵師團七、飛行機二千、戰車千八百を既に配備し、臨機に本國から輸送して增强し得る態勢をもつて、歐洲と極東と兩方面ともに攻勢をとり得る軍備を、ソ聯は既に充實したのである。故に、日本の國防計畫は、支那事變を處理し得る軍備だけでは到底、不足なのである。のみならず、寡をもつて衆を擊破し得る皇軍特有の訓練を常に完全にして、ソ聯の增强する軍備に、今既に對應しつゝあるのである。

英國は現在、歐洲戰の擴大するに從つて、對獨作戰のために國力を擧げてゐながら、しかも、支那に於ける抗日政權の援助を、依然として續行中である。更に、この英國を支援して日本を壓迫しつゝあるものが、卽ち米國である。ソ聯もまた支那の抗日政權を、あくまでも援助して、日本國力の消耗を計りつゝあることは言ふまでもない事實である。

『日本の勃興を妨げ、亞細亞に新秩序を建設せんとする日本を打倒せよ』

ソ聯、英、佛、米、共に皆、この日本打倒の意圖に於て一致してゐる。かくの如き險惡な國際情勢の中に、わが日本は滿洲國と中華民國を扶けて、本來

將校生徒は、やがて皇軍戰鬪力の中心となる

の使命に邁進しなければならない。卽ち肇國以來の最も重大な時局に直面し、實に今こそ國難時代であることを、われ等は深く膽にきざみつけて擧國一致、皇國の國威を愈〻宣揚しなければならないのである。

この國威宣揚の第一線に立つ者が、前述の如く忠勇義烈なる皇軍將兵である。しかも、日本は國民皆兵の國であり、尙武の國である。男子滿二十歲になると、皆、光榮ある兵役の義務をもつてゐる。

大元帥陛下、御親しく率ゐさせ給ふ皇軍の一人となり、聖なる祖國の國威を宣揚する第一線に立つのは實に日本男子の光榮であり本懷である。しかも、赫々たる連勝の傳統を有する皇軍を敎育し、訓練し、指揮し、忠君愛國の至誠より發する軍人精神を磨き、世界無比の精銳なる性格を、ます〳〵向上充實させるのが、將校たる者の任務である。

軍隊の强弱は、中心に立つてゐる將校が、精銳であるか否かによつて分かれるのである。故に將校の責任は實に重い。

將校は軍隊の幹であり、軍人精神と軍紀の本源である。かしこくも大元帥陛下の大命を奉じ、皇軍の一部を率ゐる大任を負ひ、精銳必勝の軍隊を練りあげ一朝有事の際には戰場に立つて衆敵を擊滅する。大元帥陛下の股肱として最高の名譽を一身に擔ひ、國家の干城として國民の信賴を得てゐるのである。故に、堅實なる志操、高潔なる品性、健全なる身體、卓越なる技能を養つて、常に、聖旨に應へたてまつるのが、將校の本分である。

この將校には誰がなるか。

忠君愛國の至誠に燃えて、皇軍の將校たらんことを志願する靑少年が、卽ち將校になるのである。

諸君が選ばれて合格し、まづ『將校生徒』たるの榮冠を頂き、陸軍幼年學校に、或は陸軍豫科士官學校に入學し、武德を養ひ、普通學と軍事學を修め、光輝ある皇軍の幹である將校に任官して、前述の如き、最も重大な責任を全了するのである。

『人は武士、花は櫻木』

と、古來、言はれてゐる。尙武の國に男子と生まれて、皇軍の中心たる將校に成ることこそ、靑少年諸君の熱烈なる希望であらう。

將校生徒は若人の華である。

選ばれて若人の華となれ。これこそ諸君の最大の本懷とするところであらう。

陸軍幼年學校の巻☆

明治天皇から軍人に賜はつた御勅諭に奉答すべく、東京陸軍幼年學校生徒は、左の五條を誓ふ。

☆

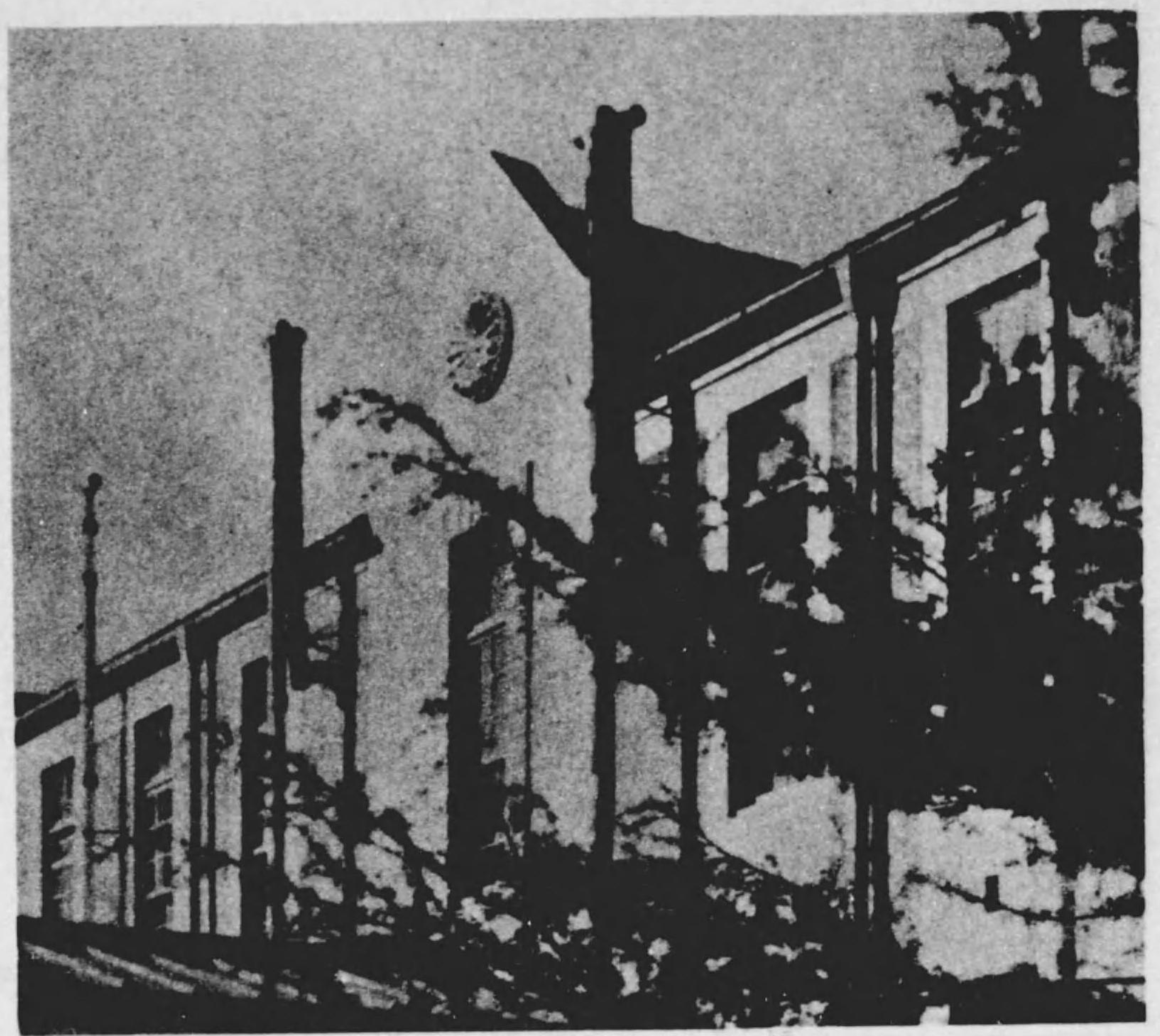
一、純忠至誠　生ヲ捨テ義ヲ取ル

一、淡白ニシテ　喜ンデ命令ニ服従ス

一、氣節ニ生キ　實行ヲ尙ブ

一、責任ヲ重ンシ　功利ニ超越ス

一、質素剛健ニシテ　廉恥ヲ知ル



輝く菊花の御紋章

尙武剛健に伸び行く生活

☆御皇室の御殊遇

陸軍幼年學校は、東京、仙臺、名古屋、大阪、廣島、熊本の六箇所に設けられてゐる。

晴れの入校を許された『將校生徒』は、この六校に分かれて教育を受けるのだ。

陸軍幼年學校生徒には、誰がなるか。

入校の年の三月三十一日に、滿十三歳から滿十五歳までの少年ならば、どんな家庭の誰でも志願して、體格と學科と人物の試驗を受けられる。大勢の中から選ばれて入校を許され、あの凜々しい軍服を着、劍を帶びて、光榮ある『將校生徒』になるのだ。

かしこくも、皇族殿下、王公族殿下にあらせられて陸軍幼年學校出身の方々が大勢いらせられて、軍務に御精勵あそばされる。

故竹田宮恒久王殿下（第一期）
朝香宮鳩彦王殿下（第五期）
東久邇宮稔彦王殿下（第五期）
故北白川宮成久王殿下（第五期）
李王垠殿下（第十四期）
賀陽宮恒憲王殿下（第十七期）
山階宮芳麿王殿下（第十八期）（現山階芳麿侯爵）
秩父宮雍仁親王殿下（第十九期）
山階宮茂麿王殿下（第二十六期）（現葛城茂麿伯爵）
竹田宮恒德王殿下（第二十七期）
李鍵公殿下（第二十七期）
故北白川宮永久王殿下（第二十八期）
朝香宮孚彦王殿下（第三十期）
李鍝公殿下（第三十期）
賀陽宮邦壽王殿下（第四十期）

御十五方の殿下が、いづれも御少年時代から『幼年學校生徒』として軍籍に入らせられ、他の生徒と同じやうに、日夜の訓育をお受けあそばされたのである。

明治天皇、大正天皇、御親しく陸軍幼年學校に行幸あらせられ、生徒の學術修習の有樣を天覽あそばされた。

明治天皇は聖旨を傳へさせられた。

「陸軍幼年學校生徒ハ將來國軍ノ楨幹トナルヘキモノナリ故ニ其志操堅確品性高潔學術優秀ナルヲ要ス之ヲ以テ幼年學校生徒ノ性格並ニ敎育ニ就キテハ陛下ノ常ニ御心ヲ留メサセラルルトコロナリ」

將來、皇軍の幹となる幼年學校生徒の責任は、實に重い。故に每年の卒業式には、皇族殿下を御差遣あそばされ、優等生には、大元帥陛下より御賜品をたまはる。

陸軍特別大演習、海軍大觀艦式には、幼年學校生徒に陪觀の榮をたまはり、校長には拜謁仰付けられ、職員生徒一同に紅白の御紋章の御菓子をたまはる。

學校本館の正面に、燦としてかゞやく菊花御紋章は、特に畏き御許を受けて掲げたてまつつたもの、皇室の御思召が陸軍幼年學校に、いかに深く厚くあらせられるか、生徒は本館の正面に輝く尊き御紋章を拜するたびに、一死報國を誓ひ、

熱い感激に咽ぶのだ。

皇國の少年が『將校生徒』を志願する數、年ごとに多くなつてゐるのは、まことに當然である。

畏くも宮殿下の御起居遊ばされる皇族舍

☆一誠五條大和魂

大勢の志願者の中から選ばれて、いよ〳〵陸軍幼年學校に入り、『將校生徒』の榮冠を授けられた者は、全部、學校の中で生活する。朝起きるから夜寢るまで、すべて規律的に皆が一致協同してやる。尙武剛健の生活だ。

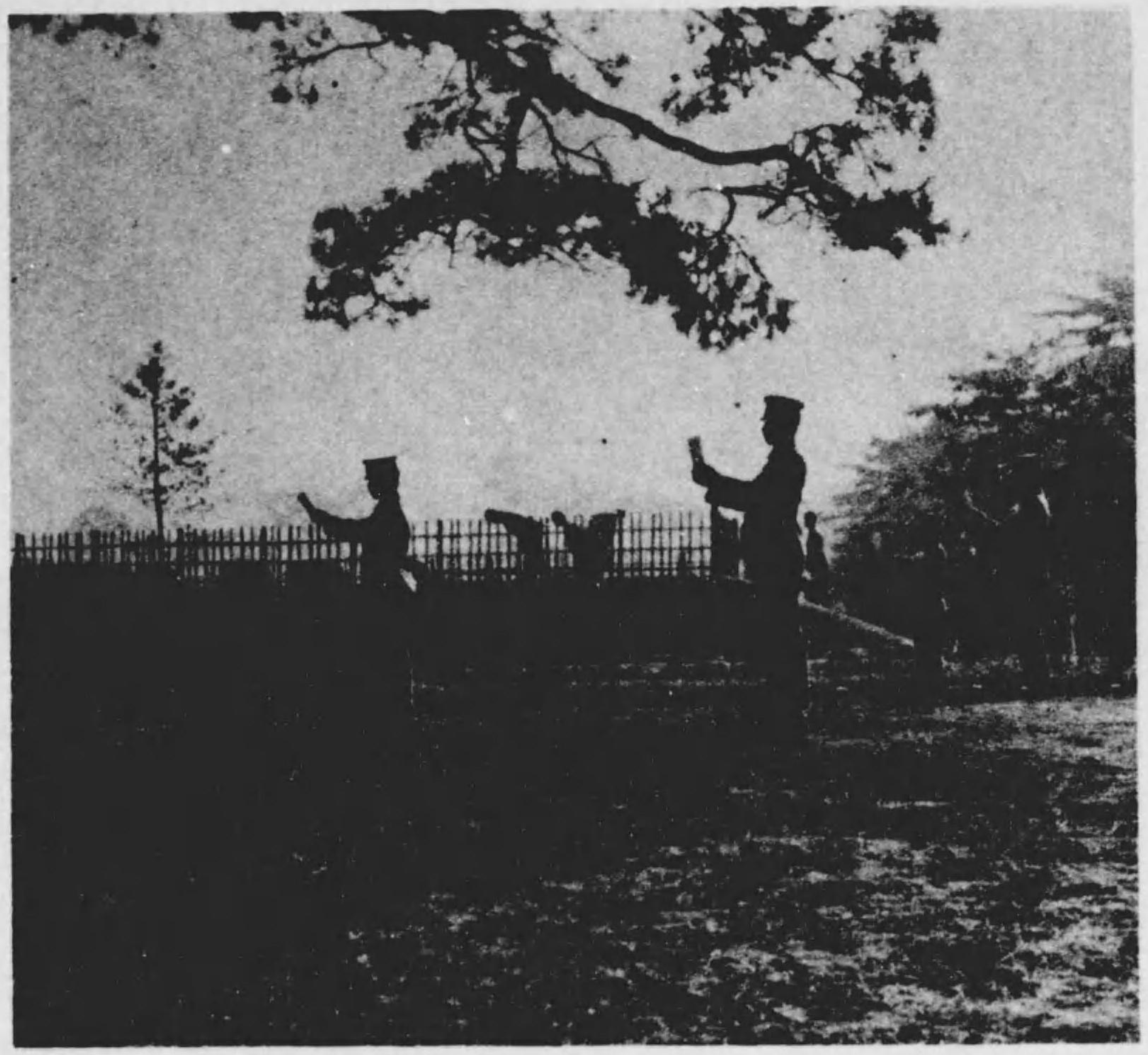
五誓　前に揭げた五箇條の誓は、明治天皇から軍人に賜はつた御勅諭に奉答すべく、生徒一同、日夜に忘れてはならない心の誓だ。

純忠至誠、進んで難に赴き、義のためには生命を喜んで捨てる。これが幼年學校の創立の時から、今につゞいてゐる傳統の魂である。

義に生きよ。高く潔い精神を日常生活のうちに鍛へるのだ。このために、生徒一同は常に校規を守る。

軍紀と校規　全軍を一貫してゐる嚴正な規律が軍紀だ。『將校生徒』は將來、全軍

肅然として遙拜



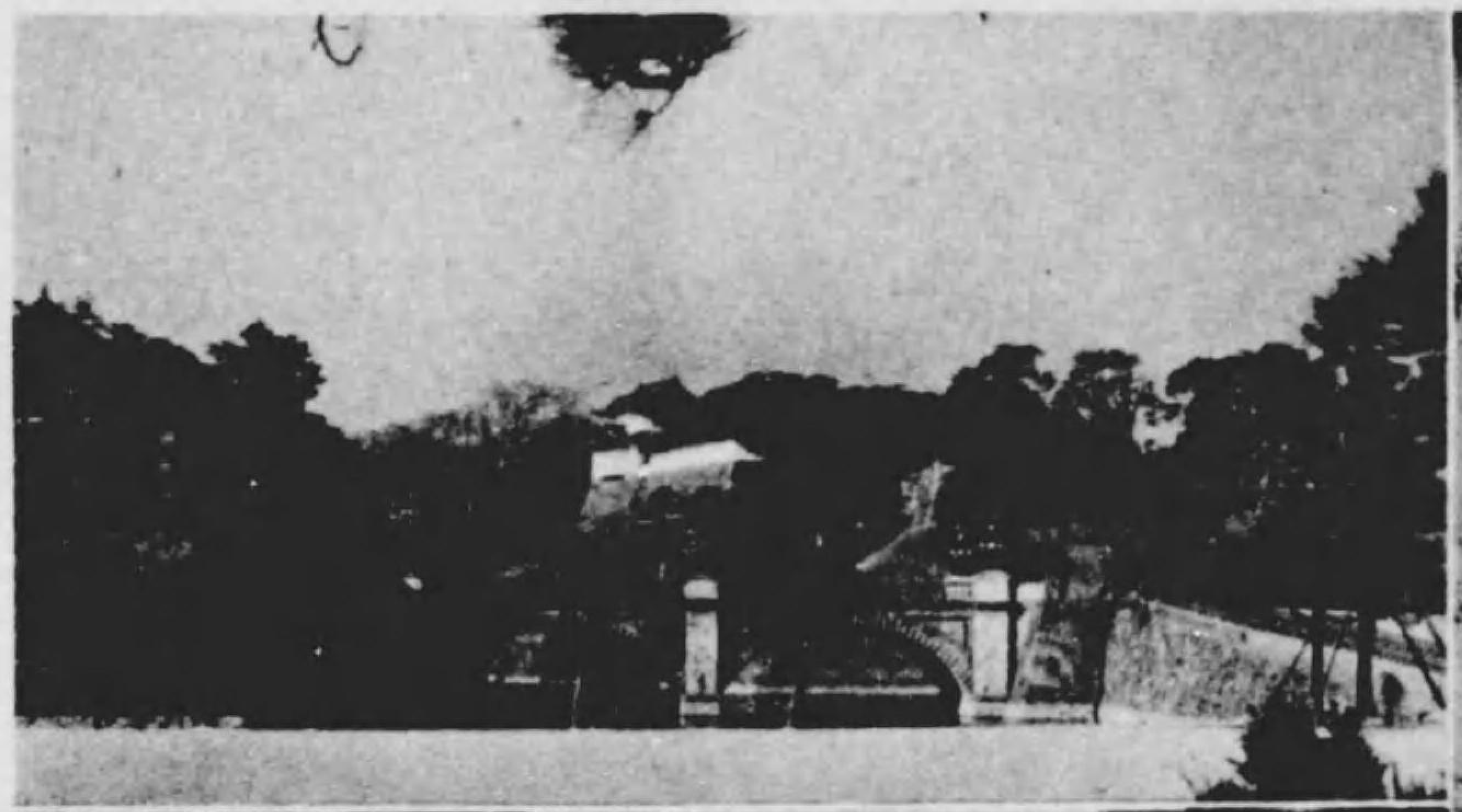
の中心となつて軍紀を嚴しく守り、部下の士氣を發揚させなければならぬ。模範になるのだ。だから、少年時代から校規を重んじて嚴肅に守る。

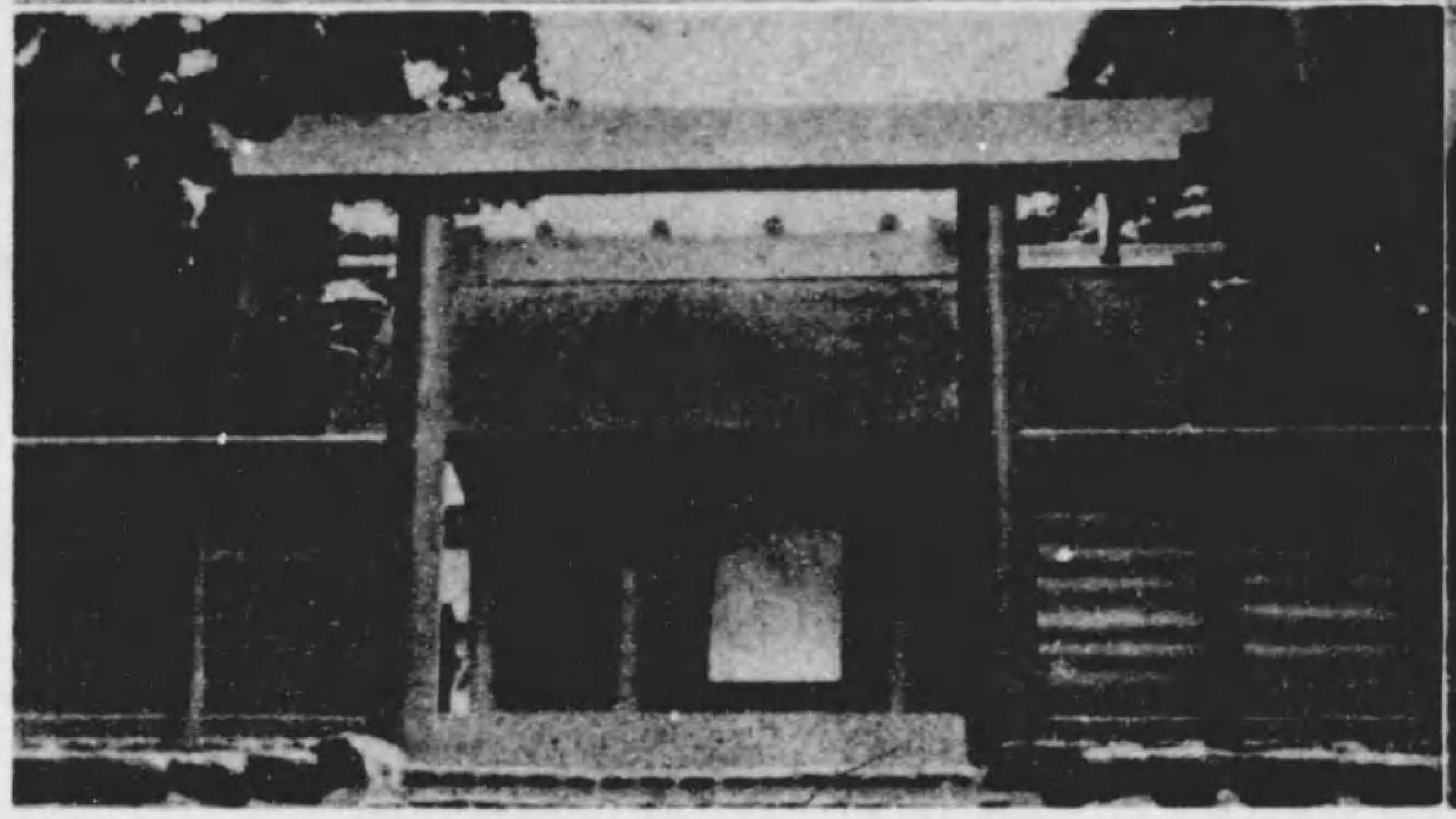
意志の鍛錬　將校は平時において、皇軍を教育し訓練する。しかも、一朝、事ある時は、戰場において彈丸雨飛の中に指揮官となり、いかなる大敵にも必ず勝たなければならぬ。このため平生から堅忍不拔の強い意志を、十分に鍛へておくのだ。

凄い苦戰を乘りきつて最後に敵に勝つのは、堅忍不拔の意志の力だ。更に將來三軍を統率し、戰略戰術をもつて赫々たる勝利を得るのも、堅固なる意志によらなければならぬ。この意志の力を少年時代から、あくまでも鍛へるために、全校の生徒が命ぜられたところを、默々として實行し、自分で苦難を突破するやう、平生から身をもつて努力する。將校生徒は眞劍だ。

この眞劍な努力の道場が毎日の校内生活なのだ。そこで毎日の生活を朝から述べてみると、

起床　喇叭の號音と共に、寢臺から跳起きる。





夏は午前五時三十分、冬は午前六時三十分、太陽が東に昇ると間もなく起床だ。一分間もグヅグヅしてゐられない。寢具を手早くたゝんで整列し、すぐに日朝點呼を受ける。

點呼　といふのは、人員檢査だ。活潑に番號を唱へて點呼が終ると、手拭をひつさげて洗面所へ走る。

水の節約　水道の栓をひねると、ジャー〱と幾らでも水が出る。が、戰場には水が少い。將來の戰場を思つて、誰でも水を大切に使ふ。

遙拜　洗面し終つて、皆が校庭の遙拜所に出る。各生徒が肅然と立つて宮城、伊勢大神宮を、脱帽して遙拜し、忠節を誓ひ奉り、尙、兩親のいます方にも禮をして、孝道を念ずる。

遙拜を終ると軍帽をかぶり、持つてきた御勅諭を兩手にさゝげて、あたりに響き渡るやうな大聲で朗讀する。

一誠五條　御勅諭の五箇條は、軍人精神の眞髓である。

喇叭の號音と共に
寢臺から跳び起きる

清潔

洗面

點呼

一　軍人は忠節を盡すを本分とすへし

一　軍人は禮儀を正くすへし

一　軍人は武勇を尙ふへし

一　軍人は信義を重んすへし

一　軍人は質素を旨とすへし

右の五ヶ條は軍人たらんもの暫も忽にすへからすさて之を行はんには一の誠心こそ大切なれ抑此五ヶ條は我軍人の精神にして一の誠心は又五ヶ條の精神なり

この一誠五條の御精神を、生徒が皆、遙拜と共に魂にきざみこむ。大和魂を養ふのだ。

☆常に凛然たれ

遙拜と奉讀が終ると、

運動　皆が胸から上を裸になつて、芝生に並び、朝の日光を全身に浴びて、グン〳〵と基本體操をやる。深呼吸をやる。乾いた布でゴシ〳〵と裸の上をこする。冬でもやる。はちきれるばかりの元氣だ。

淸潔　運動が終つてすぐに、自習室と寢室を協同して掃除する。塵一つ殘さない。だから、校内はいつも淸潔だ。

起床からこの時まで、わづか四十五分だ。なか〳〵忙しい。新入生の第一學年は、マゴ〳〵する。が、いつのまにか慣れてくると、ゆつくりした氣持で、しかもハキ〳〵と早くやつてしまふ。

朝禮と朝食　掃除してしまふと手を洗つて整列し、食堂へ行つて生徒監殿に朝の敬禮をする。それから朝食だ。

朝食は、月曜日がパン食だ。將來、戰場に出た時、敵を前にして米の飯など食べられないことがある。後から送る糧食が幾日も續かないからだ。前線では持つてゐるパンで間に合はせる。その時の用意に、將校生徒は少年時代から、パン食に慣れておくのだ。

幼年學校生徒は、どんな御馳走を食べてゐるか。これは、後の參觀記のところで見給へ。

姿勢と態度　朝食がすんで食堂を出てくると、暫く休んですぐに服裝檢査がある。毎朝の檢査だ。皇軍を指揮する將校の姿勢、態度、服裝は、大事な部下の手本にならなければならぬ。その手本になる心身の修練を、少年時代から整へておくのだ。

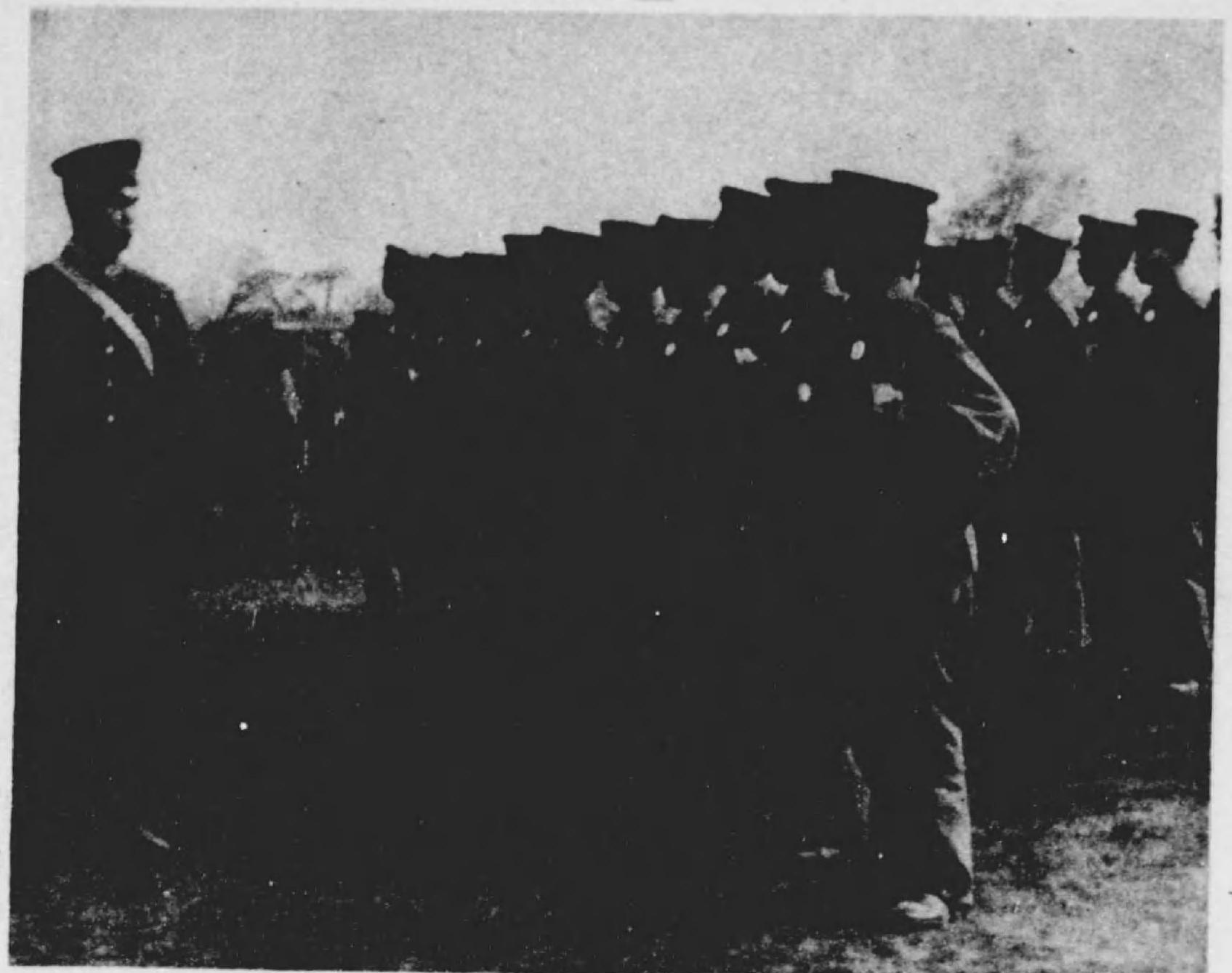
食事

日本全國の少年の中で、服裝が最も正しく、姿勢も態度も常に凛然としてゐるのは、幼年學校生徒だといはれる。

學科　服裝檢査を終ると、それから晝食まで學科の教授を受ける。

その五十分づつの間に十分の休憩や、十五分の休憩、運動があるのは、他の學校と違はない。倫理、國漢文、外國語、地理、歷史、數學、博物、理化、圖畫、習字なぞ、科目も中學校と同じだが、程度は中學校の同じ學年に比べて高くしてある。殊に外國語は、幼年學校によつて科目が違ふが、英、佛、獨、露の中の一箇國語を教へられる。

自習室で音讀の時間になると、向かふの方でスラスラと流れるやうなフランス語、何だか怒つてゐるやうな強い獨逸語、或はとつ〳〵と田舍の言葉のやうなロシヤ語や、ベラ〳〵と早い英語が、窓から朗々と聞える。第三學年になると、大概の會話を自由にこなし、外國の雜誌も書物も讀めるやうになるから、幼年學校生徒の外國語の力は、すばらしいものだ。



正しい服装、正しい精神——服装検査

☆陣中勤務と少年達人

午後には、**訓育**がある。

訓育は生徒監殿の將校が、親しく授けて下さる。校長は少將閣下、訓育部長は大佐殿、生徒監主事は中佐殿か少佐殿、生徒監は少佐殿か大尉殿、助手に下士官殿がゐられ、その大勢が全力をあげて、生徒の心身を訓育される。精神訓話によつて高潔なる武人の性格を養ひ、軍事學を教へられ、教練も、武技も、訓育の中に入つてゐる。

敬禮　禮儀を正しくする軍人の本分として、敬禮が三年を通じて十分に教へられる。

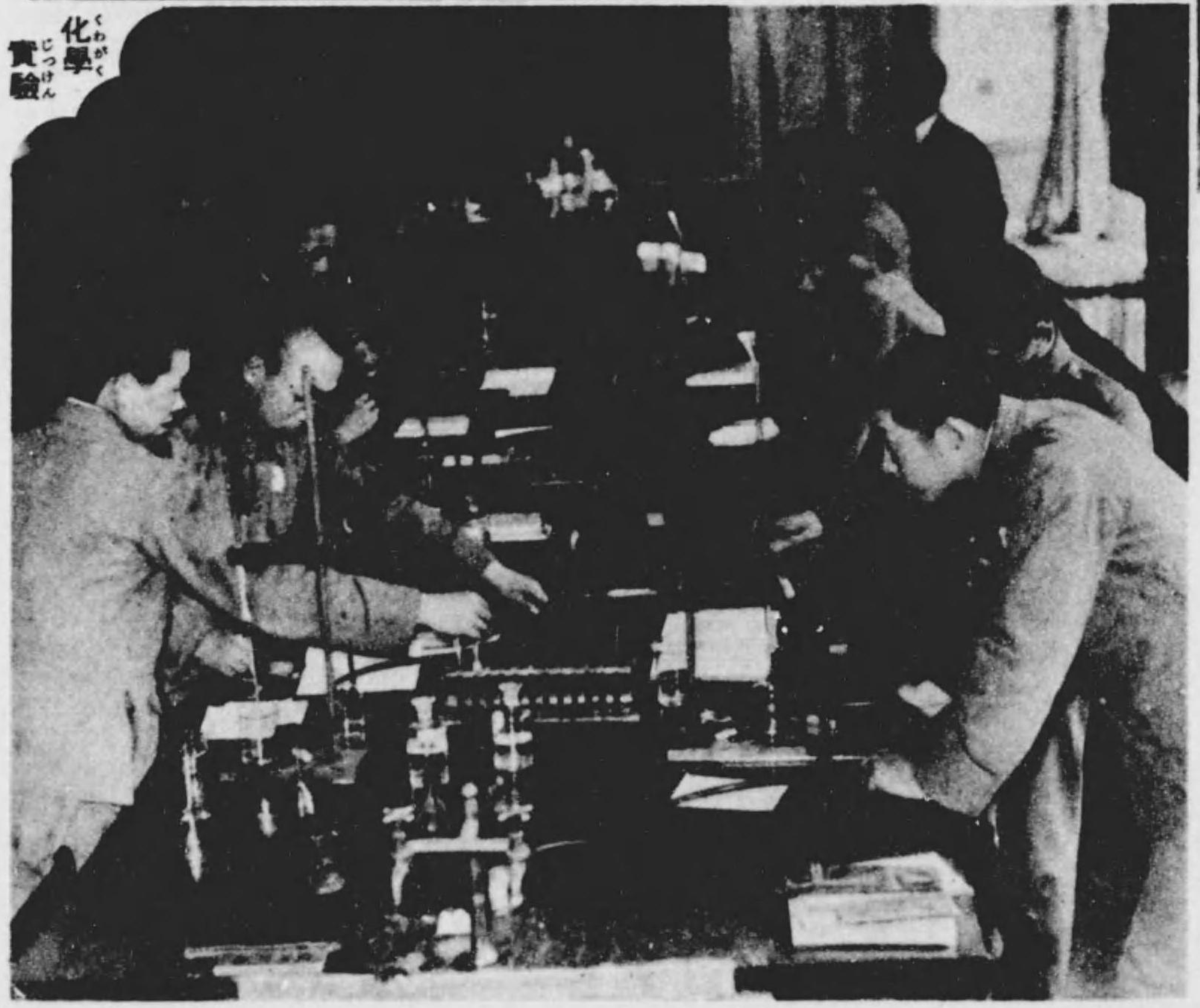
教練　徒手、執銃は無論、戰闘教練をやる。兵を教へる方法も、指揮法も習ふ。射撃も無論やるのだ。

陣中勤務　これが最も愉快だ。斥候の搜索、歩哨の警戒、夜の宿營、野外で飯をたく給養、それから行軍、通信の傳達、連絡など、痛快に猛烈に訓練される。

旗信號　手旗を振り、或はモールス信號によつて、どんな長い命令でも、報告でも、傳へられるや

文庫

化學實驗



うに練習する。とても面白い。

距離測量　『歩測』歩いて距離を測る。『目測』目で見て測る。それから『器械測量』『音響測量』などを習ふ。これまた愉快だ。

測圖　軍用地圖の見方をまづ教へられて、その描き方を習ふ。第三學年になると、簡單な軍用地圖が、現地を見て描けるやうになる。

劍術　兩手軍刀術だ。立派な道場があつて、基本から教へられ、猛烈な試合をやる。

柔道　第二學年から始めて、これも基本から教へられ、亂捕や試合をやる。

劍術も柔道も、武道專門の先生が來られて、熱心眞劍に教へて下さる。生徒も熱心眞劍に習ふから、自分でも驚くほど早く上達する。中には少年達人が出來る。

體操　基本、應用、器械、團體競技、いろんな體操をやる。手榴彈の投げ方も教はる。體操も武技の中の一つだ。

☆和やかな夕、靜肅な夜

遊戲　訓育の各科目で心身を鍛へ、その後は隨意運動の時間が五十分あつて、駈歩をする者、ボールを追ふ者、或は鐵棒上で得意の大車輪をやる者、逆立もやる。蹴球もやる。自轉車にも乘る。とても樂しい時間だ。

手入　武器、服など、自分で手入するのは無論だ。武器は昔から武士の魂としたところ、日本獨特の美しい風習である。將校生徒は銃や劍を殊に大切にする。休暇で家へ歸つても、自分の劍を床の間に置いて尊ぶ。昔の武士と同じことだ。

入浴　一日の汗を流して、體を清潔にする。大元帥陛下にさゝげたてまつつた體である。衞生に十分注意し、毎日入浴する。大きな長方形の湯槽の中に、戰友同士が入つて、ワイ〳〵言ひながら體を洗ふのは、とても愉快だ。

號令調整　夕食の後に四十分の休憩がある。夕空の下、芝生や雜草の上を健兒が濶歩しながら、朗々と號令を練習する。

語らひ　この夕方の休憩に、ある者は草の上にかたまり、ある者は集會所へ行つて、將來の希望を語る。歩兵にならうか、騎兵にならうか、航空兵もすばらしい。ある者は故郷の山遊を話し、ある者は自分の生立を語り合ふ。樂しく親しい和やかな夕である。

自習　夜、四十分から一時間づつ三回の自習がある。煌々とかゞやく電燈の下に、豫習、復習、孜々として研學に努める。自習室は大きい。一室に凡そ五十人が各自の席によつて、

實戰さながらの戰鬪教練

わき目もふらず一心に學習する。咳をする者もなく、椅子を動かす者もない。まるで誰も居ないやうに靜肅だ。

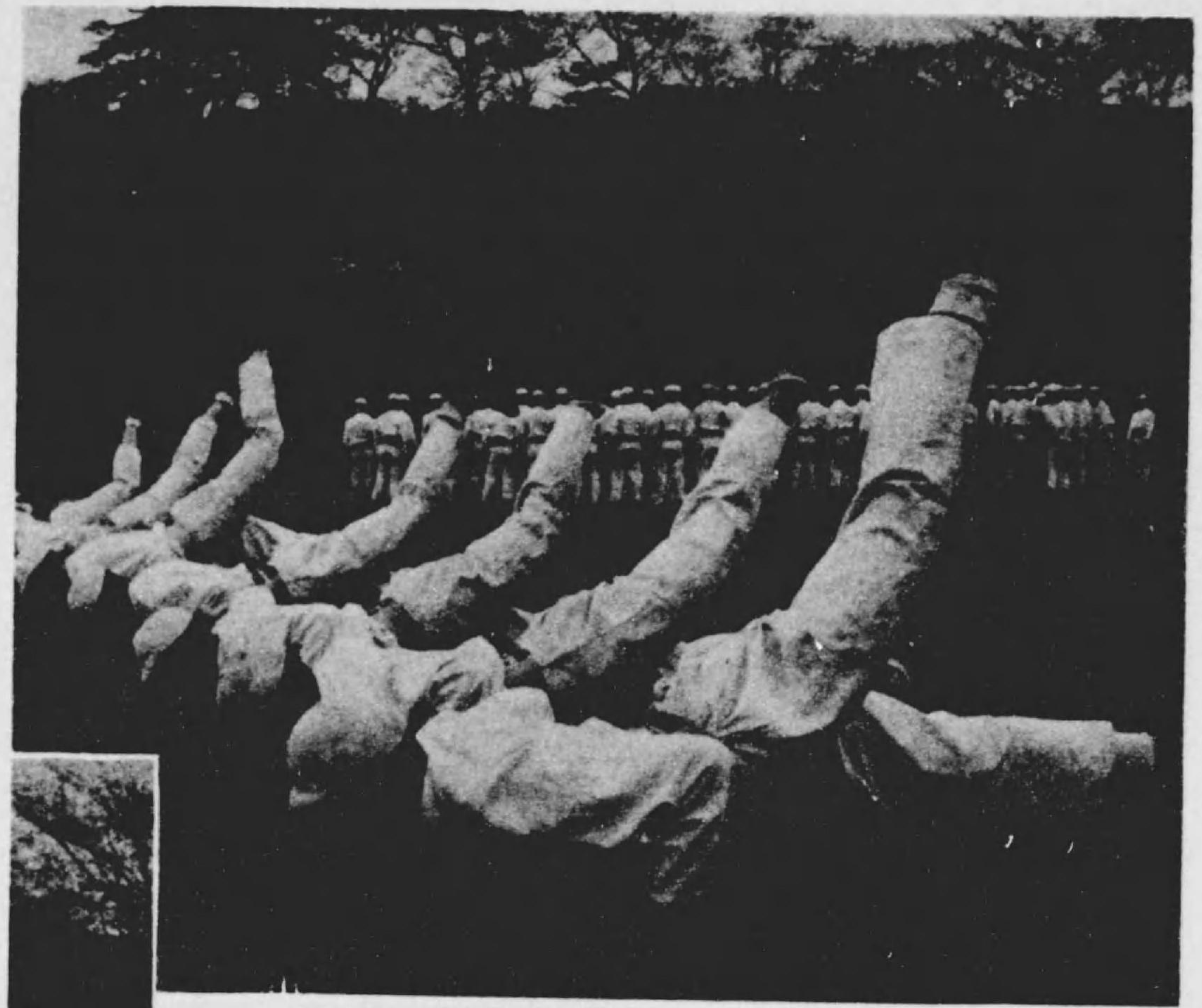
就寢　第三回の自習が終ると、日夕點呼、すなはち毎夜の人員檢査があつて、三十分すると消燈だ。夏は午後九時三十分、冬は午後十時、消燈の時は皆か寢室で毛布を狀袋のやうに卷いた寢臺の中へもぐりこむ。

一日を元氣に愉快に終つた將校生徒は、夢も見ずにグツスリと眠つてしまふ。

☆食ふ、語る、歌ふ

酒保　夕食後の休憩に、三軍を統率する氣慨をもつて號令調整が終ると、酒保へ駈けこむ。販賣所に、餅菓子、果物、汁粉、饂飩もあれば、ビスケツトもある。日用品も揃つてゐる。生徒はドツと駈けこんでくるけれども、禮儀を正しくして先を爭ふことなどしない。思ひ〳〵のものを靜かに買つて、隣の集會所の娛樂室へニコ〳〵しながら入つて行く。

娛樂室　三つの大廣間がある。一方の棚の上に、

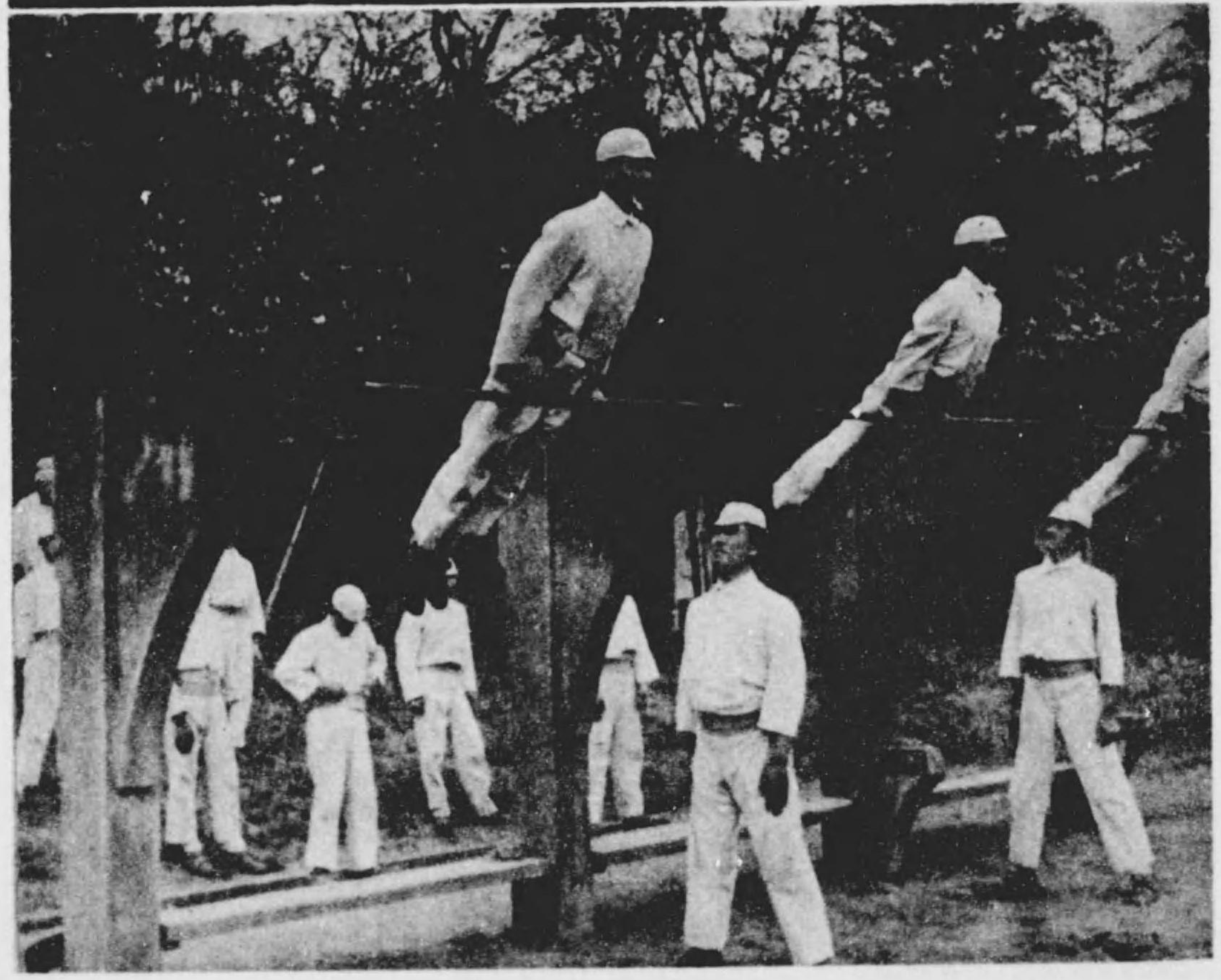


右　武器の手入——武器は武士の魂だ

左　鐵棒で姿勢よくし、身體をつくる

右　體操——丈夫な身體になる

左　立派な身體、見事な跳躍



手旗信號

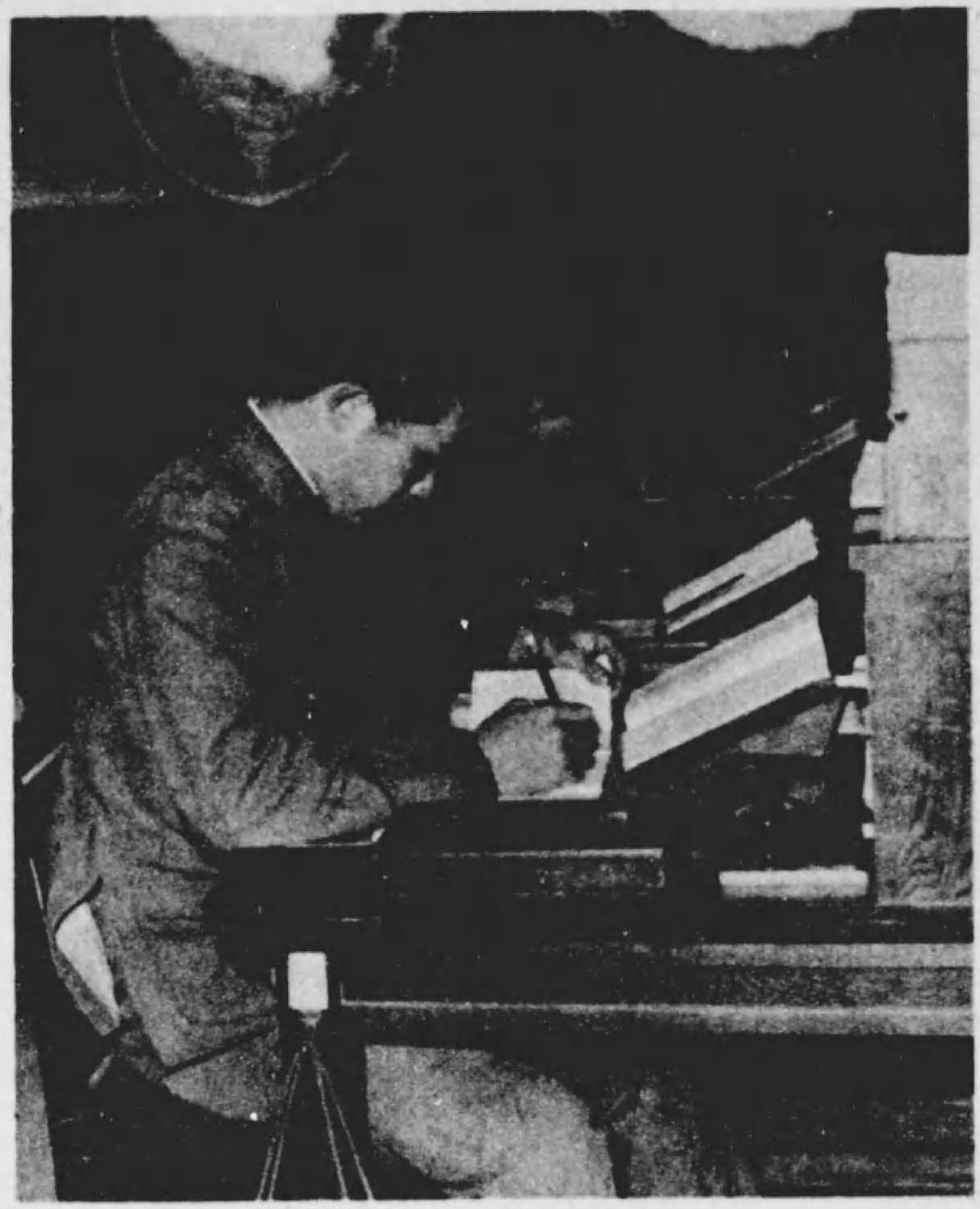
いろんな毎月の雜誌や畫報や書物がギッシリと積んである。

ラヂオを兼ねた立派な電氣蓄音機があり、東西の名曲をかけて聽き入り、勇壯な詩吟や軍歌に血を湧かす。ニュースや講演に耳を傾け、野球や相撲の實況放送に力こぶを入れる。

一方の部室では、皆が車座になつて爽快に談笑してゐる。集會所の中は、どの部室も疊だ。あぐらを組んでくつろぎ、菓子や果物を頰ばりながら、好きな雜誌を讀み、ラヂオやレコードを聽き、盛んに話しあふ。親睦そのものだ。

理髪　酒保の隣に理髪所がある。凛然たる將校生徒は、髮を伸ばしてゐてはならない。いつもキリッと丸刈だ。月曜は第三學年、火曜は第二學年、水曜は第一學年といふ風に、日がきまつてゐる。髮が伸びかけてきた者は、午後四時、一日の課業が終ると、理髪所へ飛んで行く。をぢさんがゐてグルグル刈つて、ゴシ〳〵と洗つてくれる。短く刈つた丸頭を入浴場でピシャ〳〵とたゝきあつて笑ふのも一興だ。

書簡　午前の學科が終つて、晝食に行く時、生徒舍の廊下に、書簡の來てゐる者の姓名が書いてある。それが來てゐると、晝食もそこ〳〵に、班長室へ印をもつて飛びこんで行く。受領の印を帳面におして、班長殿から受取る。手紙の時も葉書の時もある。それを自習室へ持つて歸つて讀む時の氣持は、

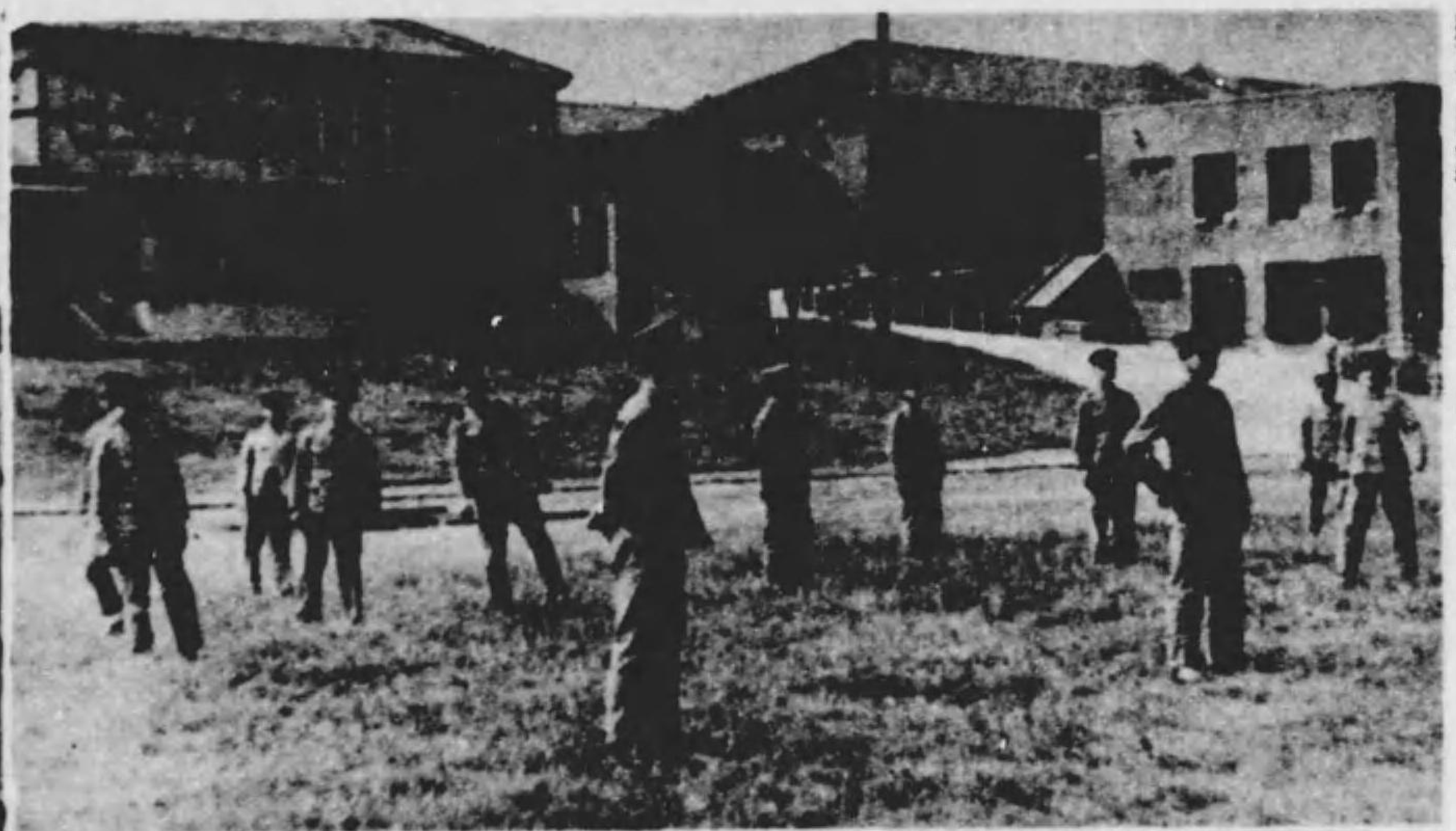


自習——短い時間にうんと勉強する

もう嬉しくて夢中だ。手紙の時などは、封を切つてすぐ讀んでしまふのが惜しいくらゐ、故鄕の父母兄弟からの懷かしい音づれ、舊師舊友からの激勵や近況を知らせて來たのなど、幾度も〳〵讀みかへす。大事に机の引出へしまつておいて、また出して讀む。夕食後から入校した時には、同じ訓育班の者が集つて、いろんな氣焰をあげる。終ると凛々と生徒舍に歸つて行く。

☆大家庭と錬膽會

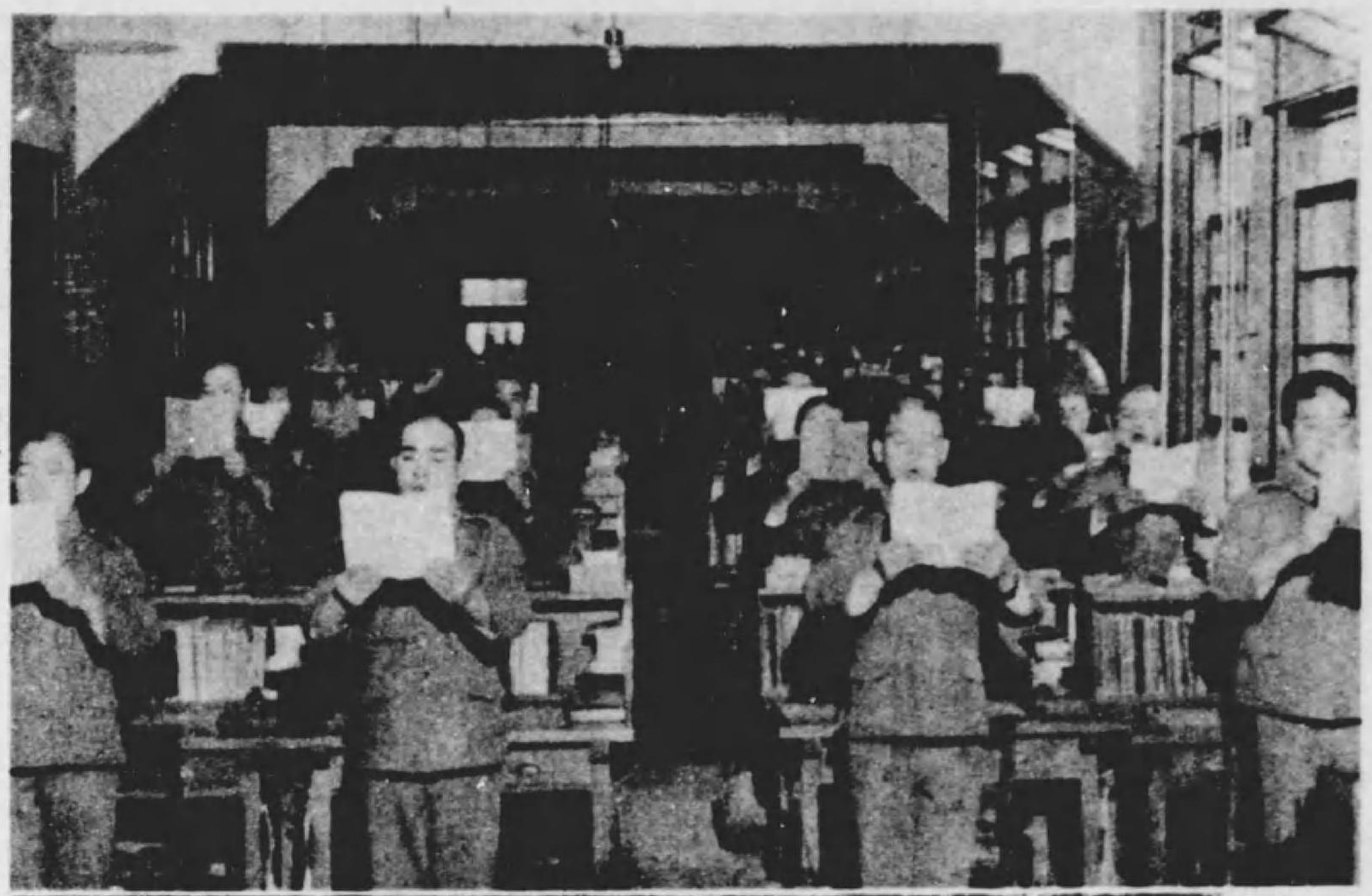
外出　日曜日、その他の休日、祭日、記念日には外出だ。正門を出て行く顏は皆輝いてゐる。市内に家のある者は家へ歸つて、兩親や兄弟姉妹に將校生徒の生活を、得意になつて話す。同期生を家へ連れて行つて、うんと食ふ。市内に家のない者は、戰友同士が郊外に出て、山野を歩きまはつてくる。先輩や上官を訪問して、有益なお話を聞く。明治神宮、靖國神社を參拜に行く。そして皆、夕食の時間までに、大家庭である學校へ欣々と歸つて來る。嬉しい外出、樂しい歸校だ。



號令調練—やがて三軍を叱咤する聲だ

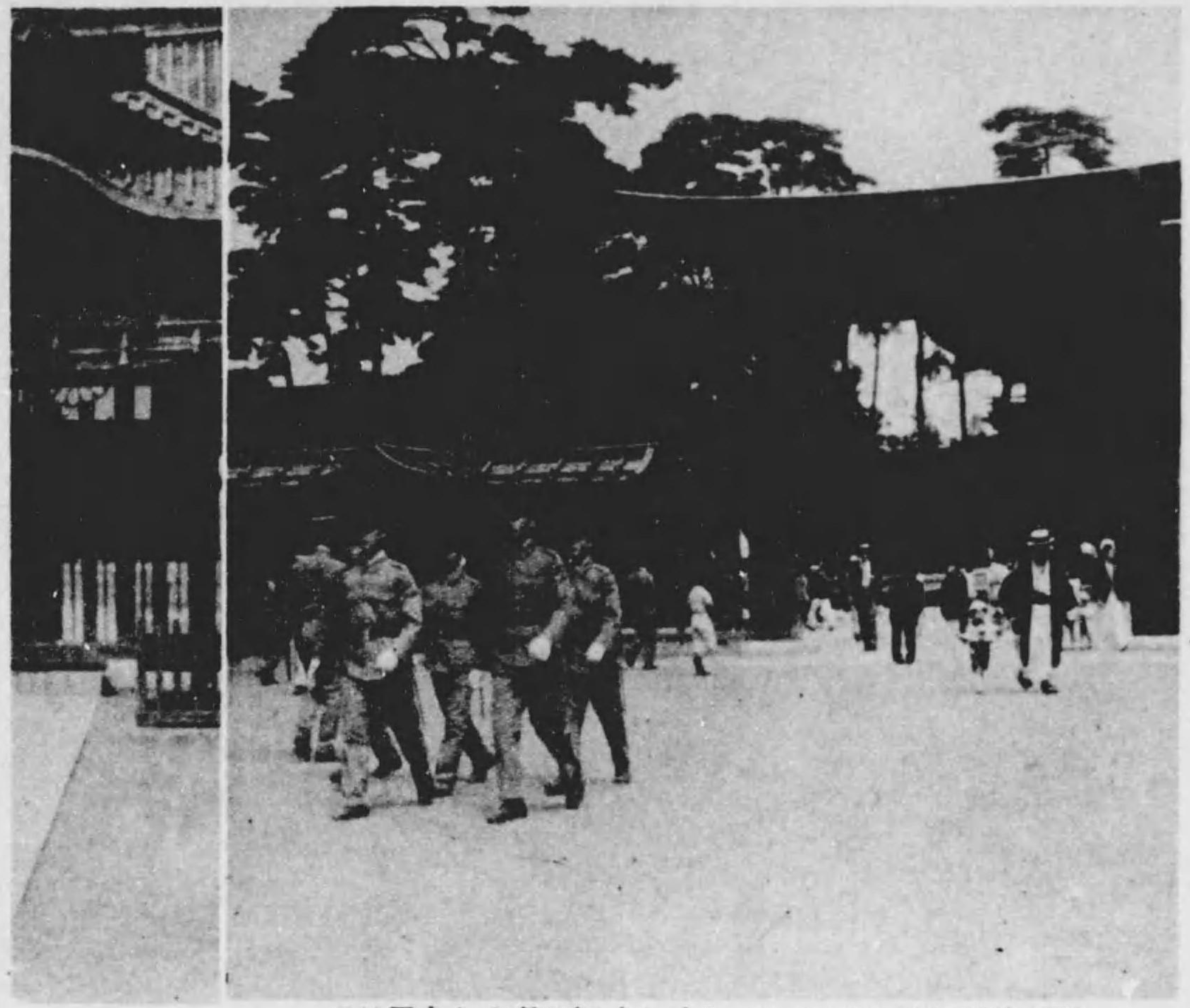
酒保—おしるこ、餡パン

娯樂室—戦友同士が友情を温める



皆姿勢を正して御勅諭奉讀

皆揃つて嬉しい外出



明治神宮に参拝していよいよ忠節の心を固める

誕生祝　學校は大家庭だ。皆が校長閣下を家長とする親愛な大家族である。だから皆の誕生日を祝ふ。ところが、何しろ大勢だから、一年三百六十五日、誰かの誕生日でない日はない。そこで一月を一日と見なして、その月に生まれた者の祝を、月に一度いつしよにして祝ふ。食堂でやるのだ。

校長閣下を始め訓育部の武官、教授部の文官、そのほか、すべての上官が列席される。誕生を祝はれる者の席は、校長閣下の前にある正面だ。それが第一學年から立つて、自分の姓名と誕生日を述べる。上官の誕生日は、正面の紙に書いて貼り出してある。校長閣下が立上つて祝辭を述べられ、全員起立、乾杯する。茶の乾杯だ。

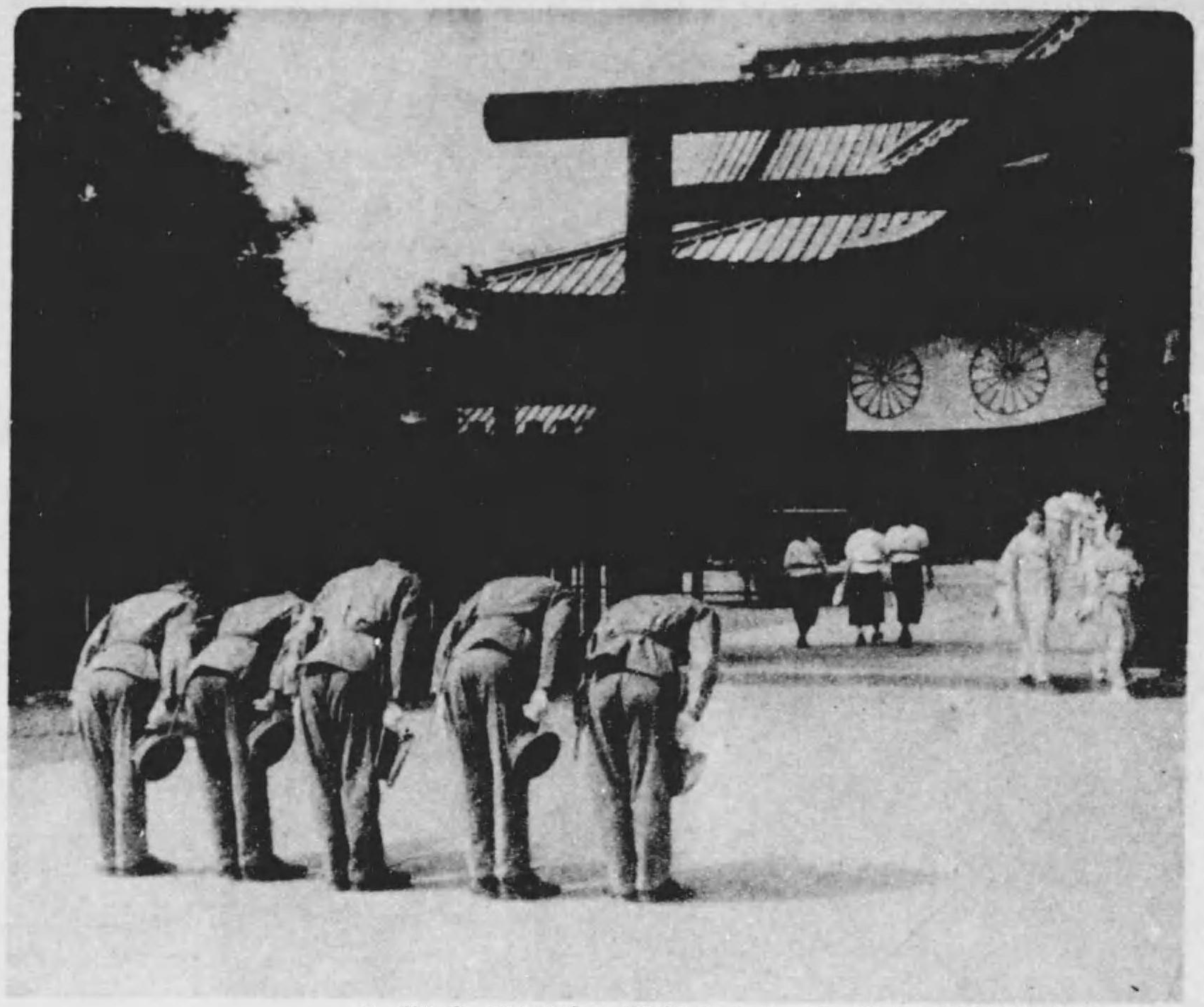
赤飯、鯛、吸物、菓子、果物などで、食卓の上がいつぱいだ。皆がニコ〳〵して食ふ。話す。うんと食つて、大いに談じて、最後に校長閣下から家庭茶の間の訓話ともいふべきお話があつて、楽しい誕生會を終るのだ。

野營演習　十月頃に一週間、全校の生徒が富士の裾野へ行つて駒門の廠舎に泊り朝な夕な富士の靈峰を仰ぎつゝ、茫漠たる原野で演習する。體を鍛へるのと同時に浩然の氣を養ふのだ。

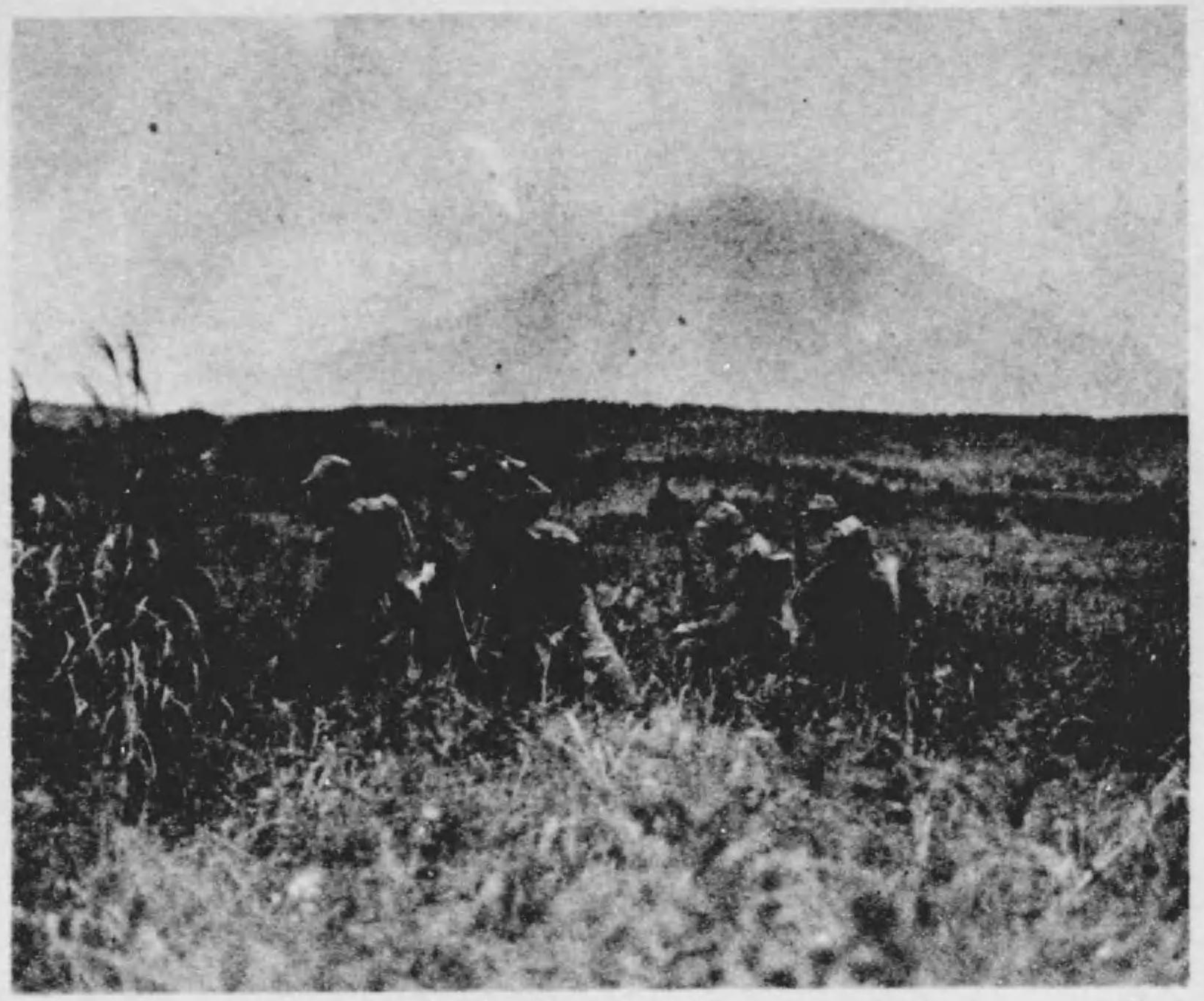
生徒が一時間づつ交代して、夜の不寢番をやる。毛布をぬいで寢てゐる者には、ソッと掛けてやる。廠舎の内外を警戒する。そのうちに夜が明けてくる。十月といつても高原の朝は寒い。ひし〳〵と冷氣が身にしみる。眞白な靄が煙のやうに廠舎を包んで流れてゐる。

東の空が薄紫に燦いてくるのは、太陽が昇つてきたのだ。すると、靄の上に巍然と聳えてゐる富士山の全體が、まさに金色に映える。頂上の白雪の氣高さ莊嚴さこそ、宛ら日本精神の姿だ。生徒は仰いで見とれながら萬歳を叫ぶ。

爽やかな高原の大氣の中に、戰鬪教練をやる。天幕で家を建てる『幕舎構築』も習ふ。『飯盒炊爨』をやつて熱い飯をフウ〳〵いひながら食ふ。夜に傳令をやるのは『鍊膽會』だ。廠舎から約千五百米もはなれたところにゐられる生徒監殿へ、報告に行くのだ。『本日十六時十分（午



靖國神社に参拝して先輩の武勳を慕ふ



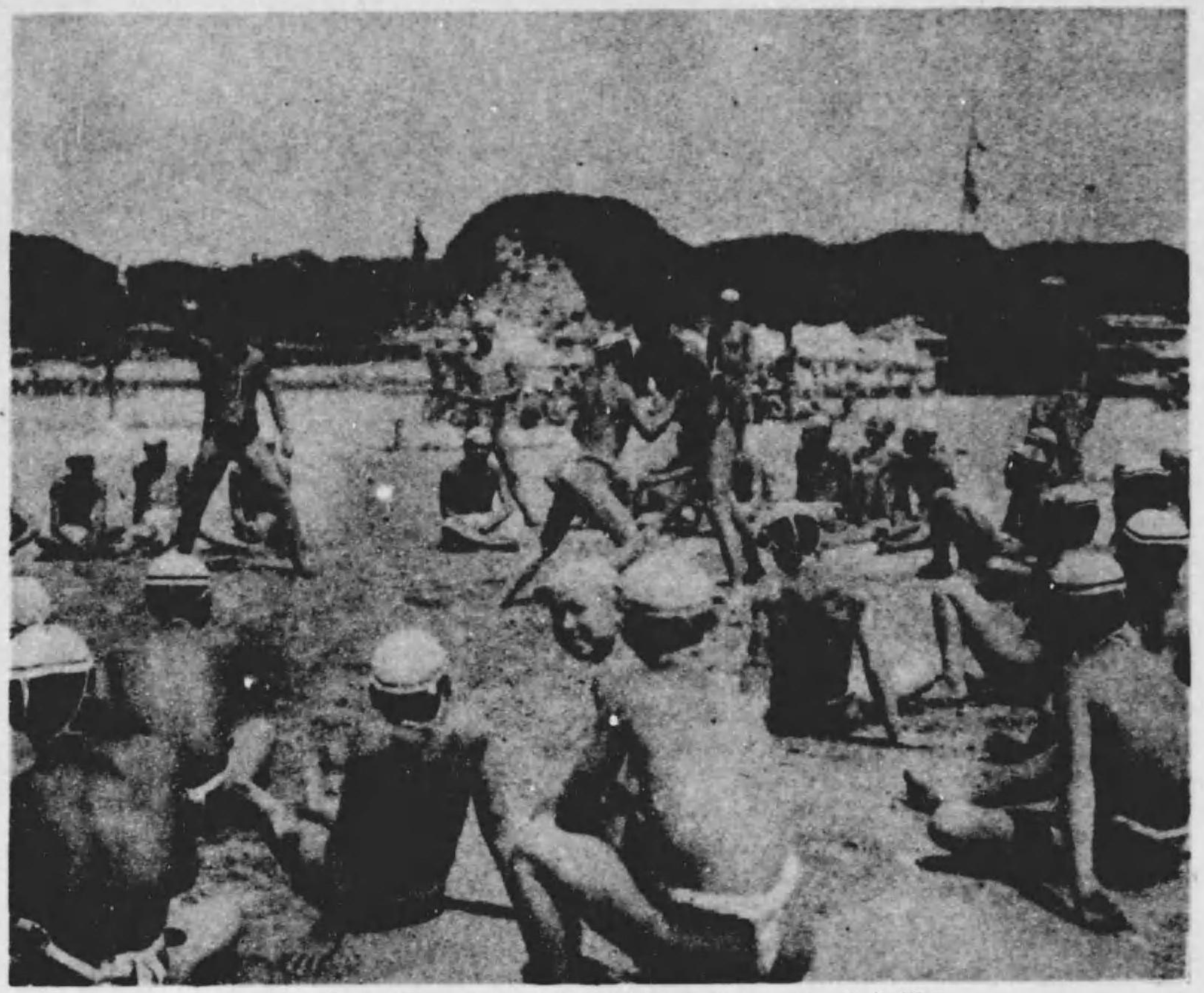
富士の靈峰を仰ぎつゝ壯快な野營演習

後四時十分）、敵兵約三百、駒門廠舍に侵入せり。我斥候は目下、東南より偵察中』と、班長殿に言ひわたされて、復誦すると出發、暗い空に星を仰ぎながら方向を考へ〳〵走つて行く。

どこか遠くの方で牛の啼く聲がする。サッと急に明るく道を照らして、ギラリと空へ廻つて行つた光は、箱根十國峠に立つてゐる照空燈だ。後はまた眞暗になる。走りつゞけて八百米ほど來ると、暗の中に白いものが流れて來た。霧だ。サク〳〵と踏んで行く土は火山灰だ。道の分れ目へ行つて、ジッと足もとを見ると、ありがたい。石灰で自分の行く方向が示されてゐる。近くの谷間に水の流の音が、サラサラと聞える。この邊は晝間來たことのあるところだ、と、元氣百倍して行くと、突然、暗の中からパッと懷中電燈で顔を照らされる。生徒監殿だ。報告を述べて、後に並んでゐる戰友の列へ入ると、やつと安心する。

野營演習の壯快な思出はなか〳〵盡きないのだ。

☆海でも健兒



愉快な游泳演習は夏一番の行事

游泳演習 これまた愉快な思出になる。炎熱灼くが如き七月下旬から八月上旬へかけて、游泳演習に全校が海岸へ出張する。眞夏だから、朝は五時前から明るい。起床後、元氣潑剌たる皆が、海岸へ出て歩き廻る。爽やかな大氣を胸の底まで吸ひ、波の音を聞きつゝ戰友と語りながら歩く。大音を張りあげて號令調聲をやる。これだけでも朝から愉快だ。

游泳にきてゐても、遙拜と御勅諭奉讀は、一日も缺かさない。學科もある。人工呼吸法を教はつて、戰友同士が實習する。無線通信用の『合調音語』といふのを、これも教はつて練習する。

游泳は、午前に二回、午後に一回だ。游泳帽をかぶり、游泳衣袴をつけ、下駄ばきで濱邊に整列する。衣袴をぬぐと、揃ひの褌一つの筋肉隆々たる少年猛者だ。準備體操、それから號音一聲、爭ふやうに波の中へ飛びこんで行く。

速泳、平泳、横泳、潛泳など、手を取つて教へられ、熱心に習ふから、全く泳げなかつた者も、すぐ泳げるやうになつてどん〳〵上達する。午後には、第三學年が漕舟を練習する。和船を櫓で漕ぐのだ。

和船の漕舟演習だ

すぐうまくなる。

兎の糞 午睡の時間もある。これも樂しい一つだ。皆が枕を並べてグッスリと眠る。午後の游泳が終ると、飴湯を呑む。これも旨くて樂しみの一つだ。

『兎の糞』と言つてゐる黑い丸藥を、皆が渡されて毎食後に呑む。本當の名は『クレオソート丸』といふので、食あたりを防ぐのだ。

夕食後の時間こそ更に樂しい。うんと夕食を食つた上に、酒保へ出かける。葛湯、西瓜、煎餅、羊羹、饅頭、キャラメル、チョコレート、ビーズなど、食ひすぎたぞと思ふと、『兎の糞』をまた呑んで、大いに散歩するのだ。この時間に映畫もある。

釣の興 二週間の游泳演習の間に、終日の休が一回、半日づつの休が二回ある。この時は、大概の者が釣に出かける。岩にくだける波をあびながら、ジツと糸を垂れてゐるうちに、いろんな小魚が引つかゝるから愉快だ。『鯨を釣るぞ』と言つて、十糎ほどの河豚を釣り上げて喜ぶ者もゐる。

遠泳と競技會 歸校する二三日前に、遠泳が行はれる。四千米あまり泳いで行くのだ。多くの傳馬船が付いて、校長閣下を始め幹部が乘つてゆかれ、中には生徒といつしよに泳いで行かれる教官もある。舟の上から氷砂糖や飴湯を、波の上で渡されて、泳ぎながら食つたり呑んだりして行く。とても愉快だ。中途で弱つて舟へ上ると笑はれるから、始から大いに力んで泳ぎとほすのだ。

最後の日は、競技會だ。平泳、横泳、潛泳、速泳の競爭を始め、飛込、桃拾など、何しろ將校生徒だから、勇壯活潑、力のあるかぎりやる。岸では氷砂糖をなめながら、聲のある

晴の遠泳、皆一生懸命だ

限り應援する。濱ぢう沸きかへるやうな騷だ。

始から終まで愉快な游泳演習を終り、眞黑になつて學校へ歸ると、待つてゐるものは、更に愉快な夏季休暇である。

☆歸省の喜び

兩親の膝下に 休暇に家へ歸るのは、夏だけに限らない。冬にも歸り、春にも歸る。年に三度だ。軍服を着、劍を吊つて、兩親の膝下に歸り、兄弟姉妹に會ひ、故鄕の友人と語る。山も河も畑も森も、皆、懷かしい。この歸省の大きな喜びこそ、とても筆に書けるものでない。

前の夜は、皆が殆ど眠らない。嬉しくて眠れないのだ。寢室の中で、自分の故鄕のことを、戰友たちが話しあふ。心が兩親の膝下へ、すでに飛んでゐるのだ。夜が明ける。起床の號音が鳴る。さあ休暇の第一日だ。誰も彼もニコ〳〵して跳び起きる。

朝食をつめこんで、服裝檢査も終ると、軍裝凜々しく校門を出て行く。左手にさげてゐる鞄の中には、みやげ物がどつさり入つてゐる。重いことなど平氣なものだ。

近づく故鄕、汽車がおそくて、前の驛から立上つて窓の外を見る。着く。いよ〳〵飛ぶやうに歸る。家の人に迎へられて、兩親の前に手をつき、『只今』と言ふ時の氣持は、一生、忘れられないであらう。

疊も懷かし 久しぶりで着る和服が、ゆるやかで何だか變な氣がする。袖があるのは、ちよつと邪魔のやうにも思ふ。幼年學校生活の話が、それからそれへと盡きない。お母様の心づくしの御馳走に、舌鼓を打ちながら、ありがたいことが胸に深くしみる。

夏休でも、遙拜と御勅諭奉讀とは決して缺かすやうなことはない

これから休暇の間、寢ても起きても疊の上、これまた懷かしい。

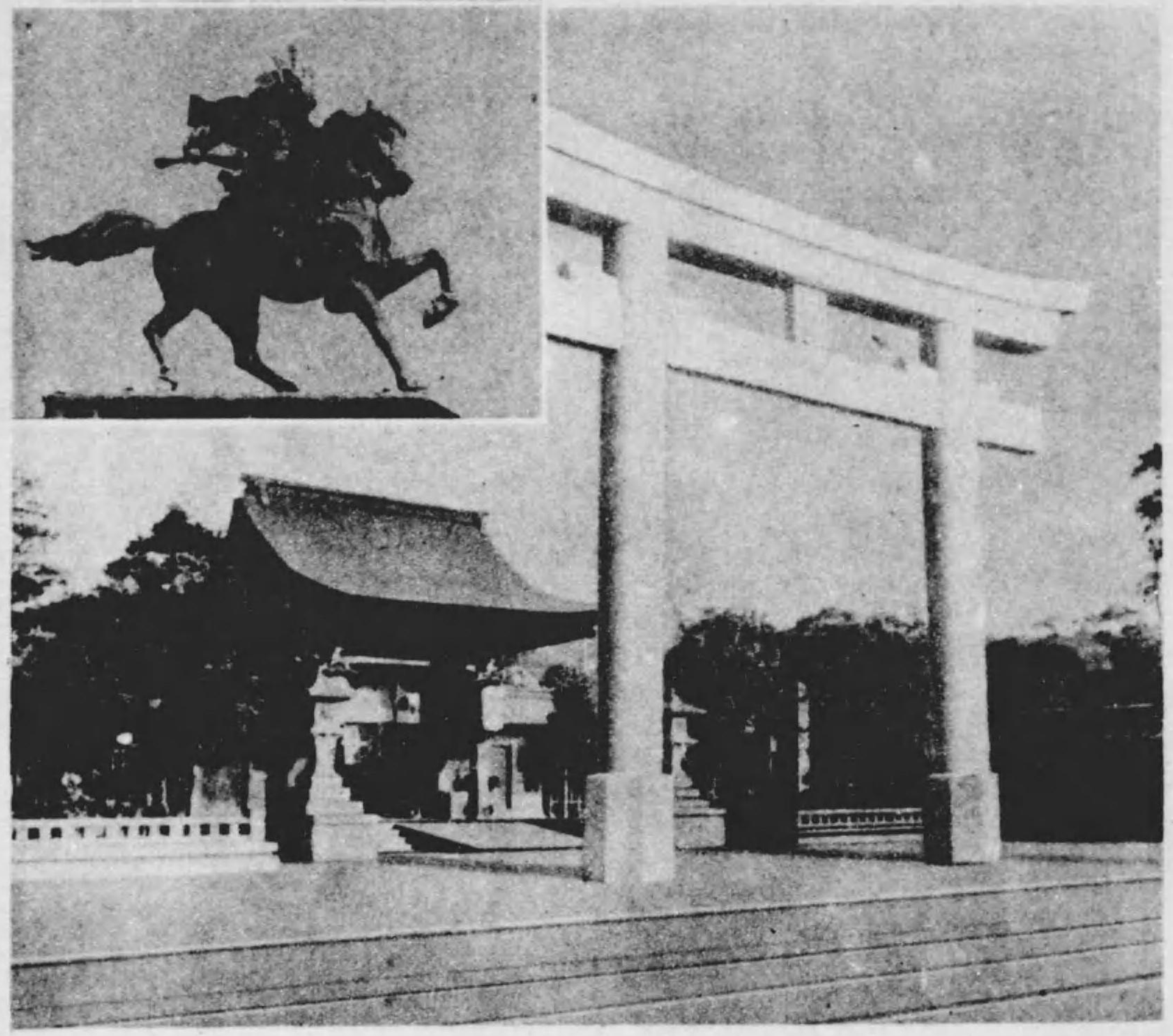
翌朝、疊の上の床に馴れないから、意外に早く目がさめる。しかし、起床號音に起されないのは、何だか氣合が拔ける。起きると洗面、家の外へ出て、休暇の間も缺かさず遙拜と御勅諭奉讀をする。

小學校や中學校の恩師を訪ねる。親戚を廻る。友だちがやつてくる。誰も皆懷かしく、將校生徒の生活を皆が聞きたがる。山へ行く。森を歩く。夜は學科の復習もやる。樂しい休暇のうちに、そろ〳〵學校が戀ひしくなる。戰友の手紙にも、早く學校で會ひたいなどと書いてくる。

惜別の情　いよ〳〵休暇も終つて、勇ましく家を出る。凛々として『行つてまゐります』と敬禮しながら、いかにも別れが惜しい。驛へ見送られて、列車の窓から別れる時、しつかりやりますと心に誓ふ。列車が出て暫くすると、學校の門や自習室や戰友の顏を思ひだして、また愉快になるのだ。

冬の休暇には、家で正月を迎へる樂しみ、春の休暇には、新學年進級の喜び、この思出の泉は汲めども盡きない。

湊川神社と大楠公銅像



☆楠　公　會

永遠に輝く　楠木正成公の生涯は、言ふまでもなく忠節の本分を盡くされた無上の模範である。その『七生報國』の大精神は、燦として永遠に輝いてゐる。

五月二十五日は、楠公が湊川に於て戰死された御命日なのだ。毎年、その日に生徒一同が集會所に、『楠公會』を開いて、萬古を照らす遺烈を慕ひ、ます〳〵盡忠報國の誠心を磨く。

修養の三大日　特に名士を招待して、楠公の精神と事蹟に關する講話に耳をかたむけ、校長閣下或は訓育部長殿の訓話を聞く。この五月二十五日の楠公會は、生徒一同にとつて、乃木會、義士會と共に、精神修養の三大日と言つてよい。

☆乃　木　會

高德を偲ぶ　九月十三日、週番士官殿の指揮の下に、全校生徒が乃木神社に參拜する。早朝だが參詣の人がいつぱいだ。乃木坂の近くは、電車も動けないほどの群衆が、皆、敬虔な顏をしてお詣りしてゐる。初秋の朝のすが〳〵しい大氣の中に、將校生徒一同、社前に整列、脫帽

乃木邸と乃木神社

して肅然と敬禮し、乃木大將閣下の高德を偲び、われ等もまた、必ずや大將の如く德操を磨き、盡忠報國の誠を捧げんと誓ふ。

參拜の後、記念の乃木邸を參觀する。質素、高潔、剛健そのものであつた大將の御生活を目の前に拜して、更に青山墓地のお墓に詣でる。

歸校すると午後は、大將と關係の深かつた方の講話を拜聽して、乃木大將の崇高偉大な人格を猶更に偲ぶのである。

☆義　士　會

午前二時すぎ、深夜の靜けさを破る『警急集合の號音』に、すはこそと跳起き、服を着るなり劍を吊つて、集合場へ駈けつける。十二月半ばの凜冽たる夜風が肌を刺して全身を引きしめる。

駈足急行　週番士官殿が、整列してゐる皆の前に立つて、嚴かに申し渡される。『今日は十二月十四日、彼の淺野四十七人の義士が、白雪の中に主君の讐を報じた日である。烈々たる忠節、堅忍不拔の義魂は、われ等の範として學ぶべきものがある。その壯擧を偲ぶべく、只今から泉岳寺に急行、義士の墓に參詣する』

泉岳寺義士の墓

校庭から直ちに駈足、長蛇の如き縱隊をもつて、サク〳〵と霜を踏む皆の靴音も壯快だ。夜はまだ明けてゐない。人影なき都大路を突いて走る。いつしか體が溫つて、血が熱く沸いて來ると、青山墓地で十分間の休憩、更に駈足を續けて、夜が明けかかる頃、有名な泉岳寺の門前に着く。

日本精神の共鳴　境内に入つて、四十七士の累々たる墓前に額づく。この古い小さな墓に籠つてゐる忠魂義膽が、千載の後も國民の精神を奮ひ興させる、偉大な感化に、皆が參拜しつゝ胸を打たれる。日本精神が共鳴するのだ。

夜明に早くも、さゝげられた線香の煙が、ゆら〳〵と立昇つてゐる。墓石の前を廻り、再び門前へ出て整列、義士追懷の無量の感慨を抱きつゝ駈足をつゞけて、學校へ歸つて來るのだ。

討入蕎麥　午後には四十七士に關する講演があり、夕食には、討入蕎麥を食べる。壯擧の前後、義士が皆、蕎麥をすゝつた時の覺悟を偲んで、われ等もまた盡忠報國の覺悟を堅くする。義士會のある十二月十四日は、永く忘れ得ない修養の記念日だ。

☆訓　練　旅　行

毎年五月に、各學年が分かれて訓練旅行に出る。健脚に山野を突破して、祖國の史蹟を探り、地理、地文を實地に見學し、同時に行軍力を增進するのだ。その年によつて行先も違ふから、旅行記はこゝに略する。

☆運動會と學藝會

六つの運動班　春は午後の小運動會、秋は終日の大運動會が、壯快に行はれる。全校の生徒が六つの運動班に分かれて、勝敗を爭ふのだ。

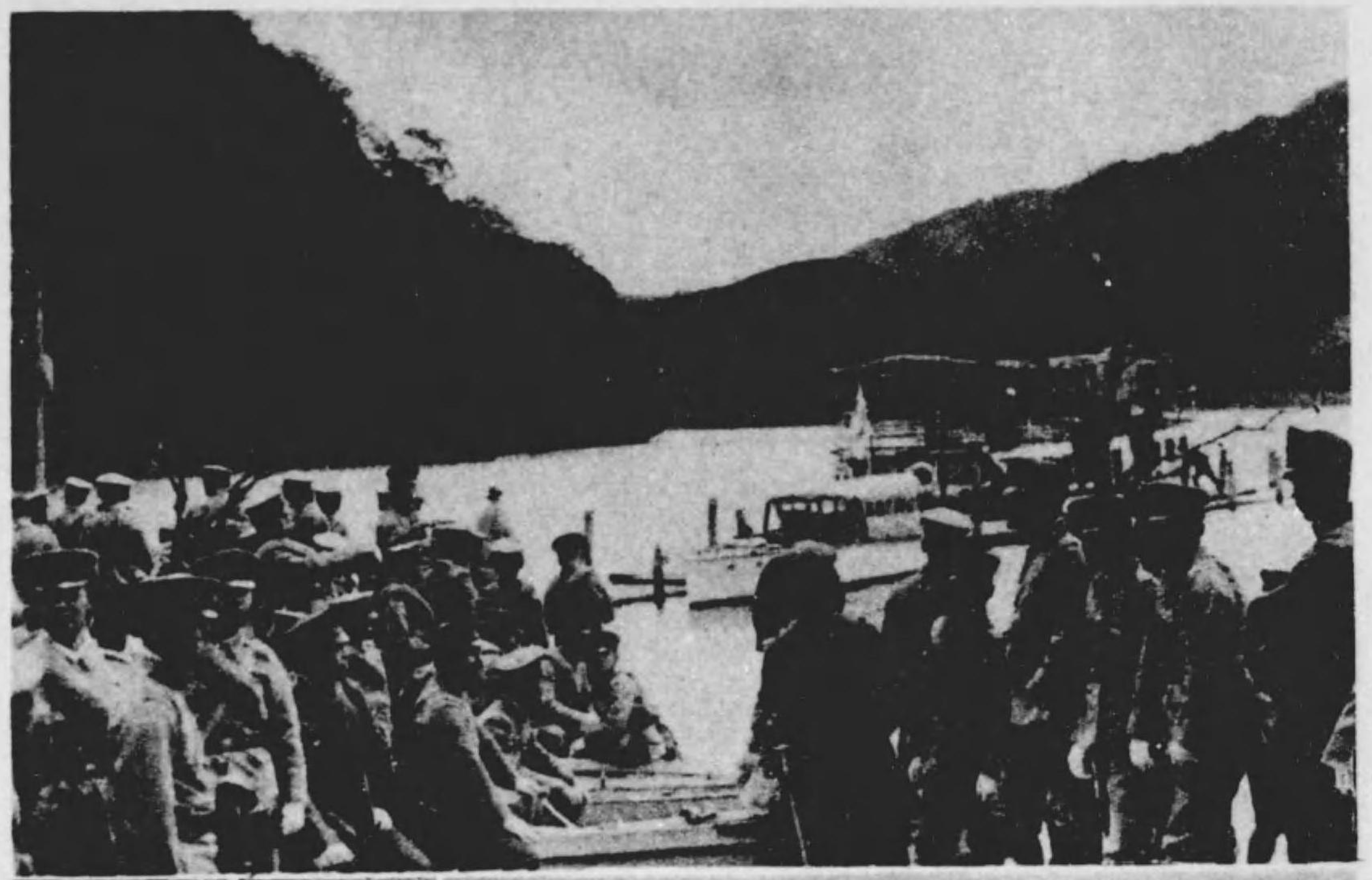
各運動班に、班長一名、副班長三名、いづれも第三學年の生徒が任命されて、班の者を指揮する。運動帽の天邊に、班別の毛糸が、六つの色わけで付いてゐて、優勝旗の爭奪戰をやるのだ。

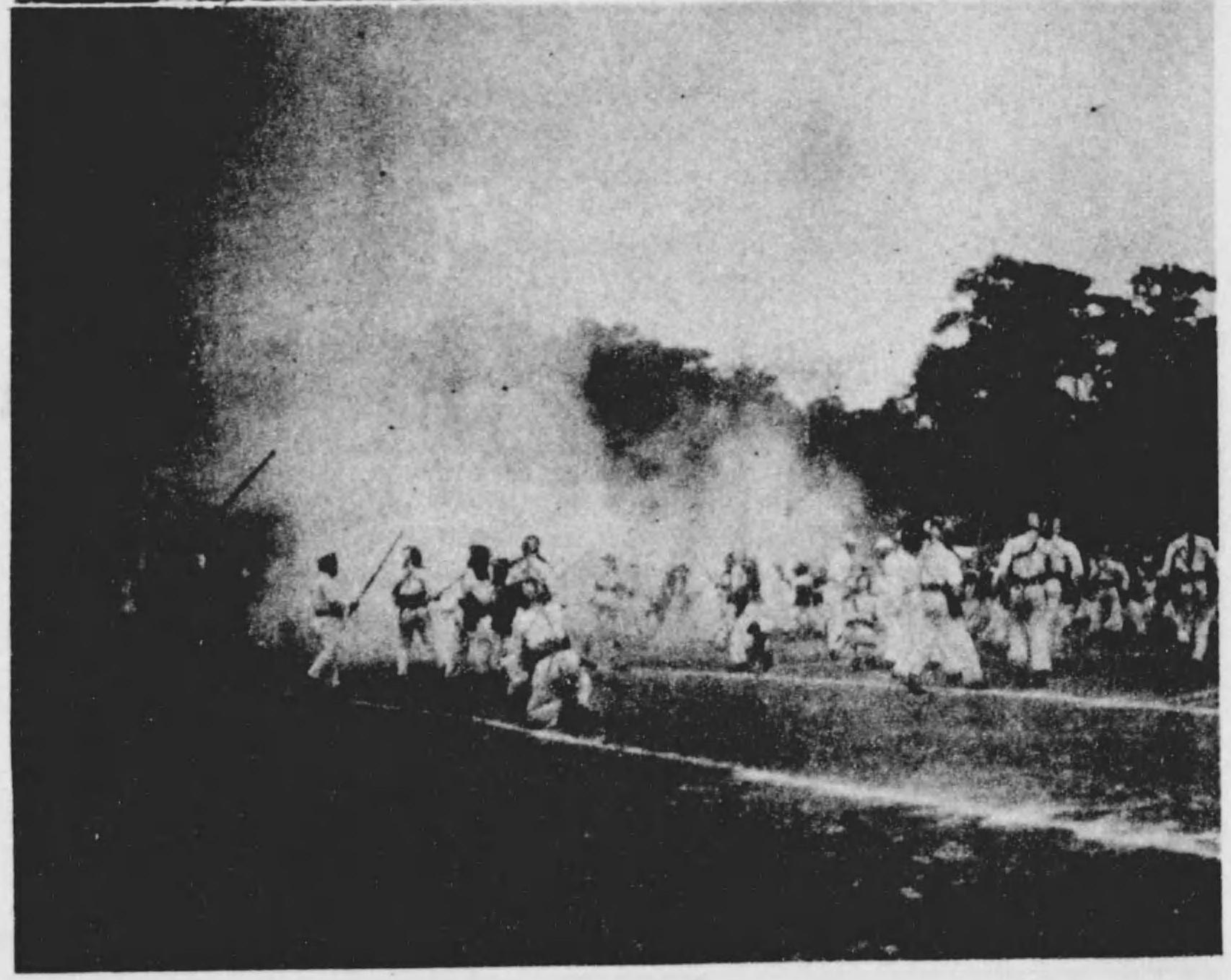
秋の大運動會には、御卒業の宮殿下が台臨あらせられる。將軍閣下も大勢臨席せられ、父兄、知人も參觀する。爽やかな秋の空に、日

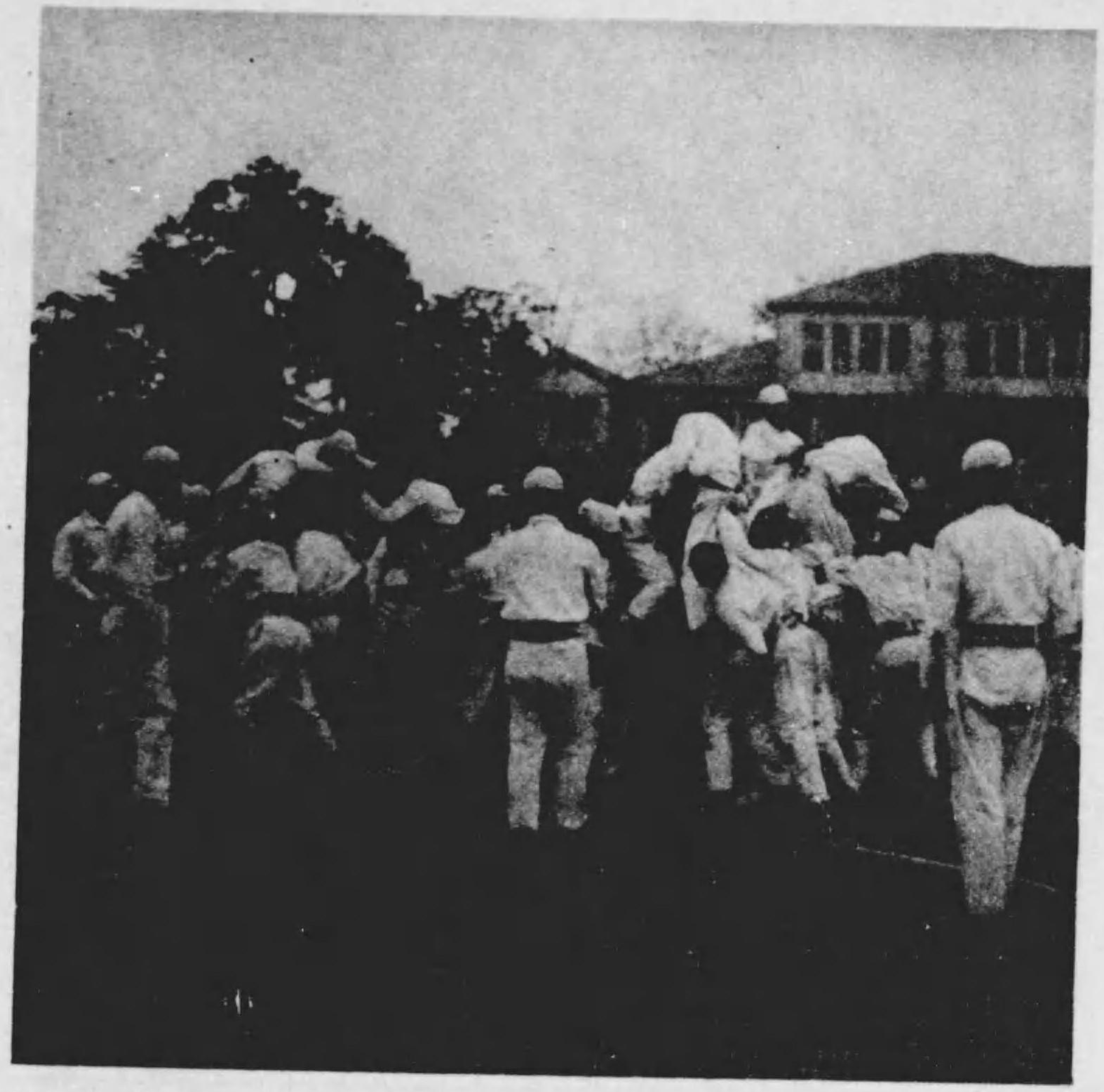
運動會——壯快な劍術野試合

右、左、訓練旅行

實地の見學は尊い







運動會——痛快な騎馬戰

章旗を始め萬國旗がひるがへり、戸山學校の軍樂隊が來て勇壯な曲を伴奏し、全校の生徒がこゝを先途と競技に熱中する。

榮ある優勝旗　基本體操から始つて、各種の短距離競走、繼走、われ等の一日、通信競争、土嚢爭奪、球戰、騎馬戰、海戰、障碍物競走、旗奪ひ、模擬戰、綱引、幕舍構築など、さまぐ〜な競技に點數がきまつて、各運動班の得點がつけられる。終るのは夕方だ。燃ゆる如き緋に星章の燦然たる優勝旗が、校長閣下から優勝班に授けられる。

藹々たる和氣　競技に士氣を鼓舞し、膽力を練り、體育を向上させる。秋の運動會の後、職員と生徒が交りあつて會食が開かれ、汁粉、うどんなどをうんと食つて快談する、爽快にして和氣藹々たる會合だ。

學藝會　は概ね各期一回行ふ。朗讀、暗誦、外國語による對話、習字、圖畫、理化實驗など、午後半日を費して、校長閣下以下臨席の下に、平素の勉强を示すのである。

氣合の掛聲は道場を搖がせる劍術の猛練習

☆寒稽古

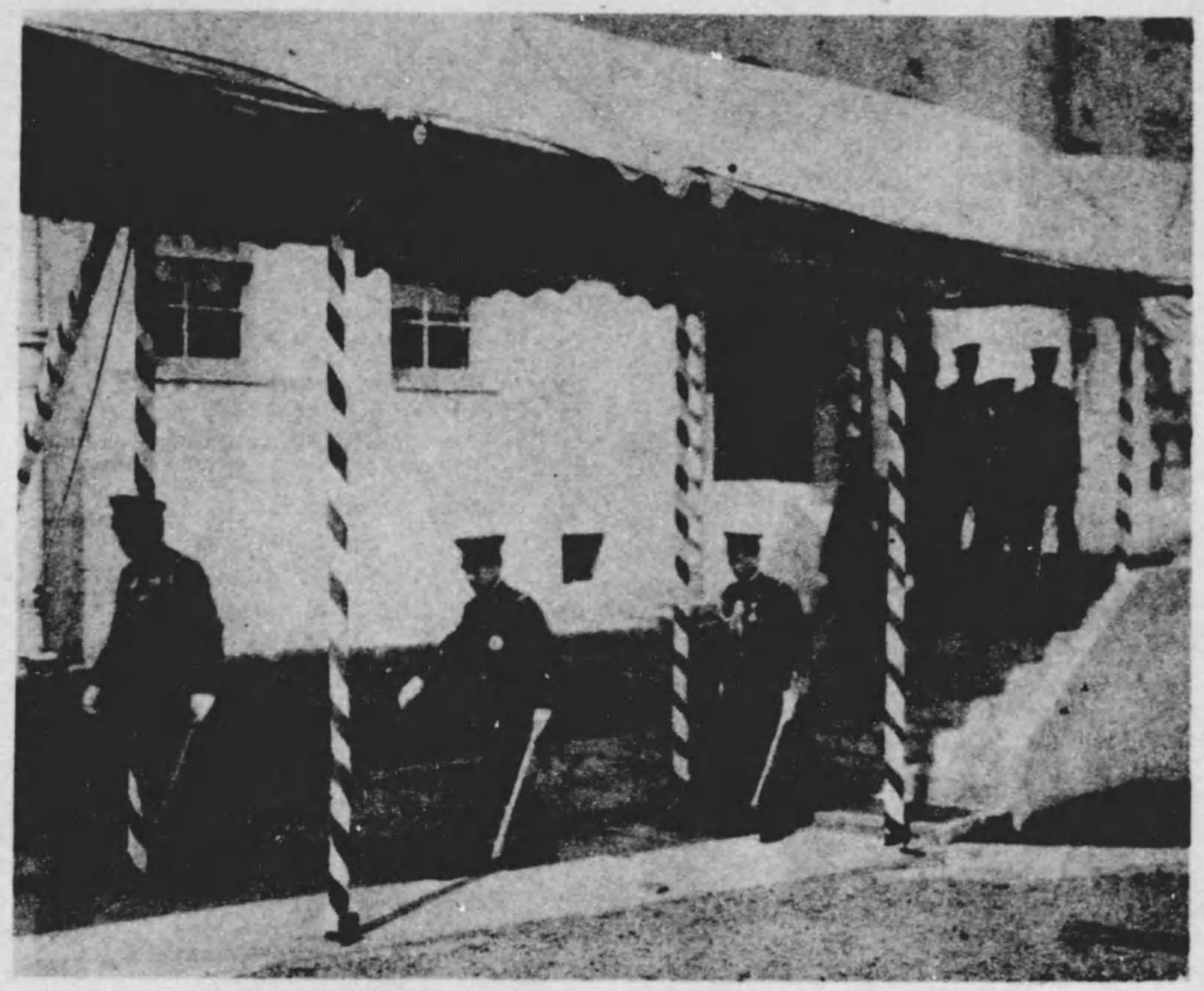
嚴寒の朝、起床前に鳴る號音に、それとばかり跳び起きる。寒稽古だ。

始から早業　寢衣を脱ぎすて、急いで劍術衣袴に着かへ、整頓棚の上から防具を取つて身につける。始から早業だ。面と籠手を抱へ、竹刀片手に、靴をはくのも一瞬の間に、劍道場へ向かつて長い廊下を飛んで行く。

あたりはまだ暗い。道場に煌々と電燈が燦いてゐる。窓から骨を刺すやうな風が、烈しく吹き込んで來る。何をつと皆が駈足をやる。一列になつて道場を廻るのだ。起床から五分と過ぎてゐない。とても早業だ。駈足を終つて、生徒監殿の前に整列、この日の勤務生徒が番號をつけて、人員を報告する。寒風の中に聲が凜々とひゞく。

猛習と默念　生徒監殿の號令によつて、神前に恭しく敬禮の後、準備運動、間もなく『面着け、試合敎習始め』の號令で、面を手早く確實に着け、敎官殿や助敎殿に烈しく打込んでゆく。嚴寒も何のその、竹刀の音がいよ〜冴えて、三十分の寒稽古が熱そのもので終る。

面を取つて再び集合し、終末運動の後、板の間に靜坐、竹



卒業式には畏くも宮殿下の台臨を仰ぎたてまつる
御高賓は朝香宮鳩彦王殿下の台臨

刀を傍において、默念する。兩手を下腹の前に組み、靜かに呼吸しつゞける。教官殿もされる。道場がしいんとして咳一つする者もない。體ぢうボカボカとして、實に爽やかだ。

默念が終り、拜神、教官殿へ敬禮、解散して寢室へ跣足で歸る。衣袴をぬいで玉のやうな汗をふきながら窓の外を見ると、東天漸く白く、夜が今や明けかけてゐる。

☆卒業式

入學したのは、ついこの間だと思つてゐるうちに、第二學年に進み、第三學年となり、前の弟分が兄分に上つて、指導の位置に立つ。いつしか三年修學の功成つて、榮ある卒業式が擧行される。思へば早いものだ。

畏くも、宮殿下の台臨を仰ぎたてまつる、光榮の卒業式の朝、父兄がぞく／＼と校門を入つて來られる。わが子が三年の修學を經て、こゝに將校生徒の第一段を終了した。光榮と喜びの式に列席すべく、遠い地方から來られる父上も少くない。

「仰げば尊し わが師の恩」
校庭に整列して生徒監主事殿から卒業證書を頂く

實に親思ふ心にまさる親心である。

宮殿下の御着を、校長閣下を始め職員、來賓の方々が、校門に奉迎し、生徒は自習室に儀式の服裝をして起立、遙拜したてまつる。

殿下には、校長より種々の報告を聞召され、次に卒業生徒の肄業、成績品を台覽あらせられる。肄業といふのは、劍術、柔道、體操等である。

卒業式は、大講堂で擧行される。戸山學校軍樂隊の奏樂する君が代と共に、校長閣下の御先導にて、殿下には隨員を隨へさせられ台臨、一同の最敬禮を受けさせられる。校長閣下が御前に進んで、式を行ふ旨を言上、次に生徒監殿が校長閣下から卒業證書を拜受、軍樂隊は莊嚴靜肅な曲を奏しつづける。次に、名譽ある優等生徒が一人づつ御前に進み、御附武官から御賜品を拜受する。終つて、殿下には退場あらせられ、來賓、職員、生徒一同は、直ちに正門の内側に整列して、お見送り申し上げる。全員が生涯、忘れ得ない大いなる光榮である。

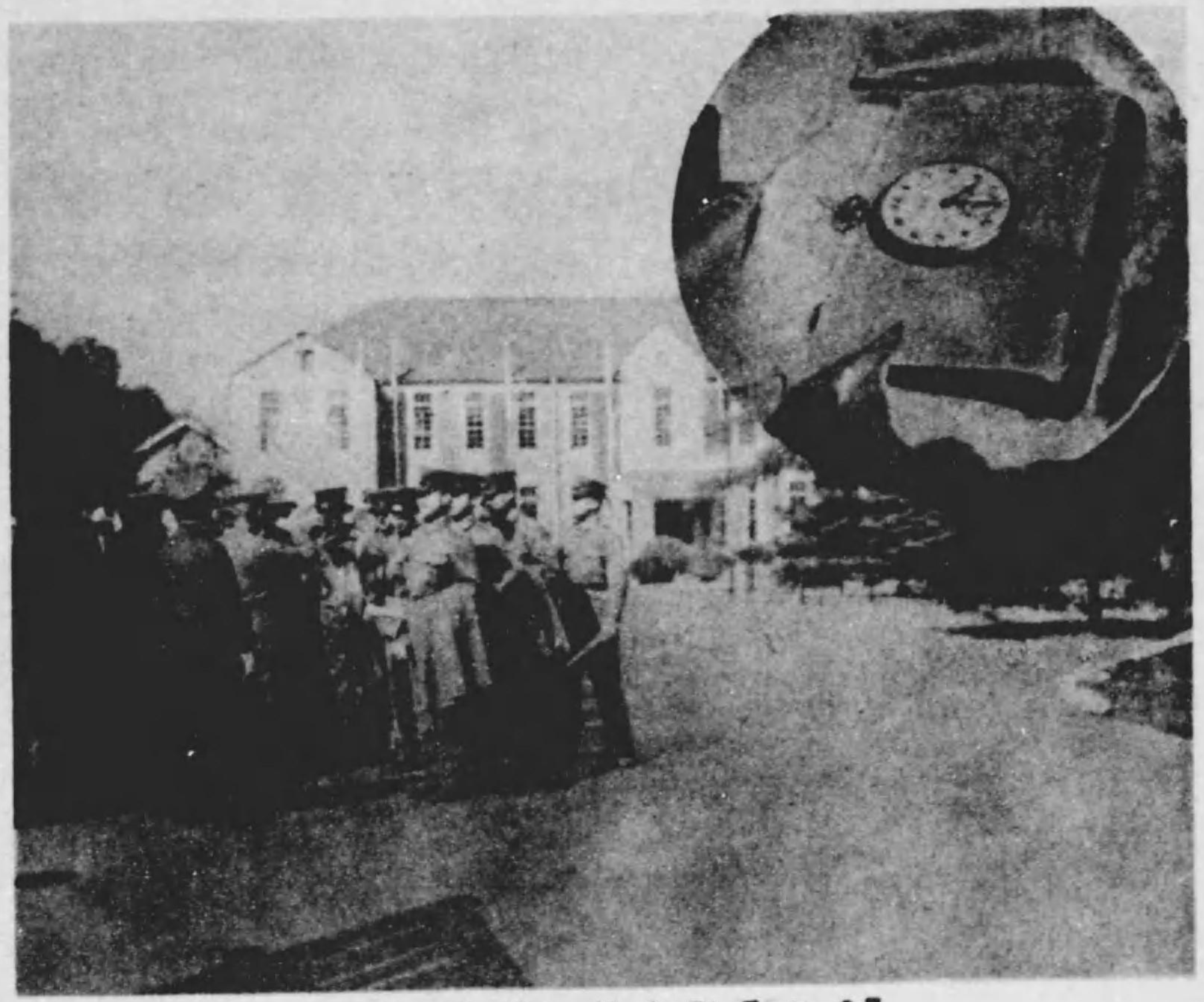
晝食は卒業生にとつて、校内最後の食事だ。來

賓、職員、生徒、全部が會食する。校長閣下の送別の辭、來賓の祝辭、卒業生徒總代の明快な答辭があつて、校歌を合唱する。卒業生の中には唄ひながら感激に涙ぐんでゐる者もゐる。

食事が終り、來賓の方々が歸られると、運動場に集合して、卒業生徒と在校生徒の別れの挨拶をする。卒業生徒の代表が、今後の校風振興について申し送り、將來の希望を述べると、在校生徒代表が、卒業の祝を述べ、今後の覺悟と抱負を告げる。これは儀式ではなく、衷心からの告別なのだ、兄が別れて行くのを、弟が送る。惜別の美しい場面が展開される。

卒業生は告別の後、生徒舍で歸省の準備を整へ、いよ〳〵懐かしい校門を出て行く。在校生は校門の内側まで見送る。實に名殘が惜しい。苦樂寢食を共にし、兄弟と同じ友情が、永く結ばれてゐるのだ。

以上『尚武剛健に伸び行く生活』の一篇は、東京幼年學校について書いたものだが、仙臺も、名古屋も、大阪も、廣島も、熊本も、殆ど變りないものと思つて頂きたい。



「今こそ別れめいざさらば」
右上、優等卒業生徒に賜はる御賜の御時計

東京陸軍幼年學校參觀記

☆皆すべて軍事的

全國の少年の多くがあこがれの、幼年學校生活を實地に見て、『將校生徒』を志願の少年諸君に紹介しようと、風薫る五月の初、東京陸軍幼年學校を參觀に行つた。

品位ある校舍　帝都の西北、武藏野の面影を今尚殘してゐる戸山ヶ原の東、こんもりと茂つてゐる深い木立の間に、赤瓦の宏壯な建物が、幾棟となくつゞいてゐる。大きな林間學校のやうだ。しかも校舍そのものが淸らかな品位を保つてゐるのが、東京陸軍幼年學校の外觀である。

校門の東側には、巨大な榎と椎の相生樹が、亭々とそびえて天を摩し、あたり一帶に綠の影を投げてゐる。その前の坂を、昔は『椎の實坂』と言つたさうだ。この威風堂々たる巨木を仰いで校門の中へ入ると、左側に門衛の小舍がある。

黑の詰襟服も嚴めしい門衛氏の指圖を受けて、サク〳〵と砂利石を踏んで行き、正面玄關に着く。仰ぐと菊花の御紋章が燦然として、襟を正さしめる。堂々たる表玄關だ。すぐ前には枝ぶり見事な、常磐の松が綠を競ひ、左右には風雅な木が肅然と植込まれてゐる。この玄關の石段を上つて行くと、左側に受附がある。そこで名刺を出して、參觀の來意を告げると、豫め打合はせてあつたので、すぐ二階の校長室へ案内された。

軍人精神の教育　二階の東南の一室に、校長閣下が、椅子を記者にすゝめて、

『將校生徒は、將來、國軍の重責を擔ふものでありますから、尊皇愛國の大精神を養ひ、世界の文化に一歩も遲れないやう、十分に確實な知識を授けておく必要があります。こゝに本校

東京陸軍幼年學校長
陸軍少將牛島敬二郎閣下

教頭殿の修身講話

の教育綱領がありますから、御覽ください』

と、靜かに話しだされて、一枚の紙を示された。

それを拜見すると、

一、國體ヲ明徵ニシ尊皇愛國ノ心情ヲ養成ス

一、軍人精神ヲ涵養シ軍紀ニ習熟シ高潔ナル品性ト正順ニシテ剛健ナル思想ヲ陶冶ス

一、心身ヲ開暢發達セシメ健全ナル身體ト鞏固ナル意志トヲ養成ス

一、陸軍豫科士官學校生徒ニ必要ナル識量技能ヲ附與ス

これが幼年學校生徒教育の根本精神である。そこで校長室から一人の教官殿に案內されて、修身の講堂に導かれた。修身は教頭殿が擔任されて、今しも講話の最中であつた。

この日の講話の題は、『大行と細瑾』、教頭殿が壇の上から、諄々と說いてゐられる。生徒は第二學年、姿勢を正して肅然と聽き入つてゐる。水を打つたやうな靜けさだ。さすがは天下の秀才少年が選ばれてゐるだけあつて、どの顏も凛々しく賢さうに、無論、わき見する者もなく、咳一つする者もない。教官殿の一言一句が、膽に銘じて、嚴肅そのものの授業である。

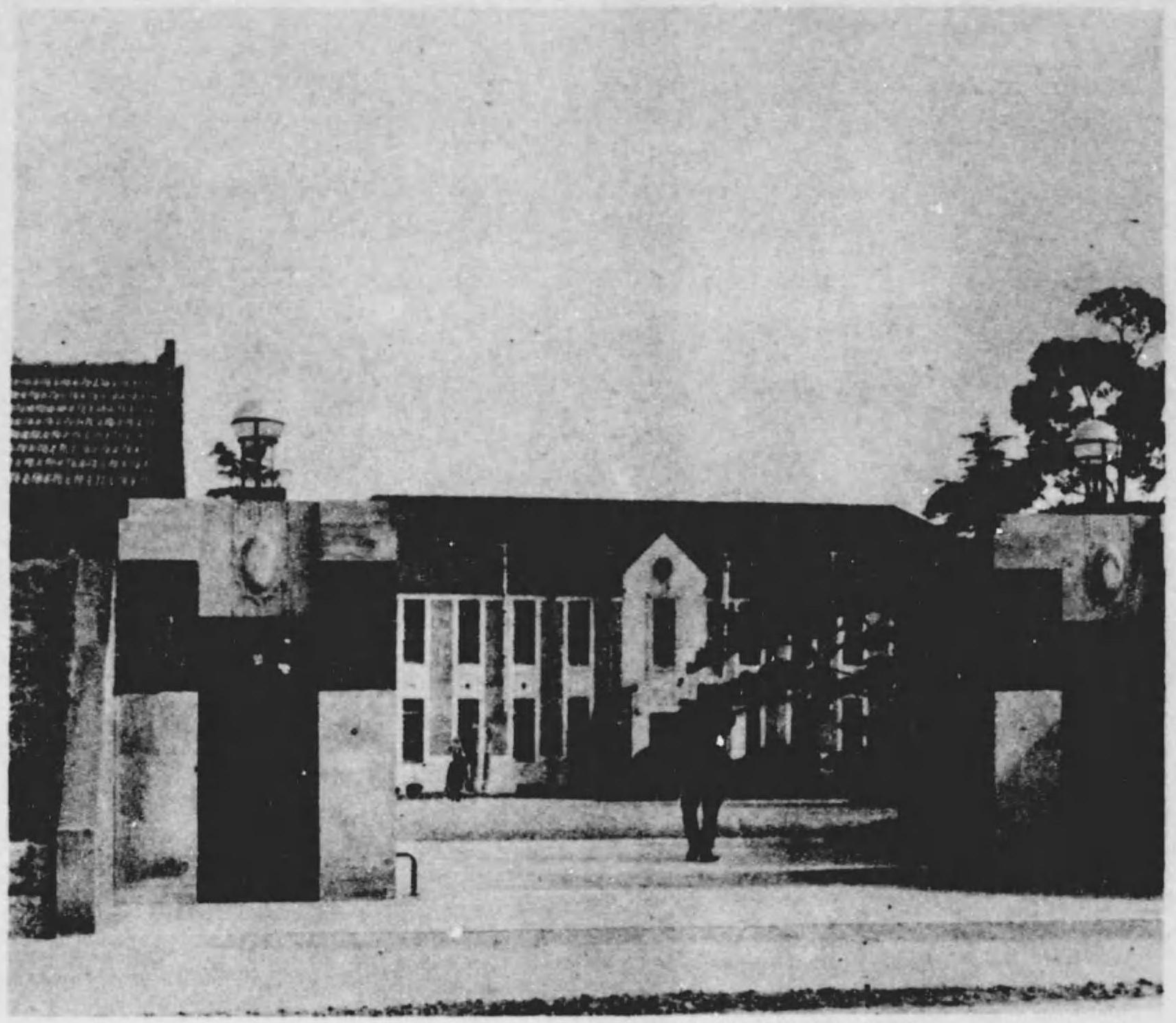
近代戰と理化學　修身の講堂を辭して、長い長い廊下を步き、第三線校舍の階下にある理化教室へ行く。案內の教官殿が、步きながら言はれた。

『本校の授業の特長は、あらゆる學科を軍事に關係をもたせて、生徒の理解と應用力を軍事的に向上させることです』

いかにも將校生徒の智育として、さうでなければならないと思ひながら、理化教室に入つて授業を參觀すると、更に成程と思はせられた。

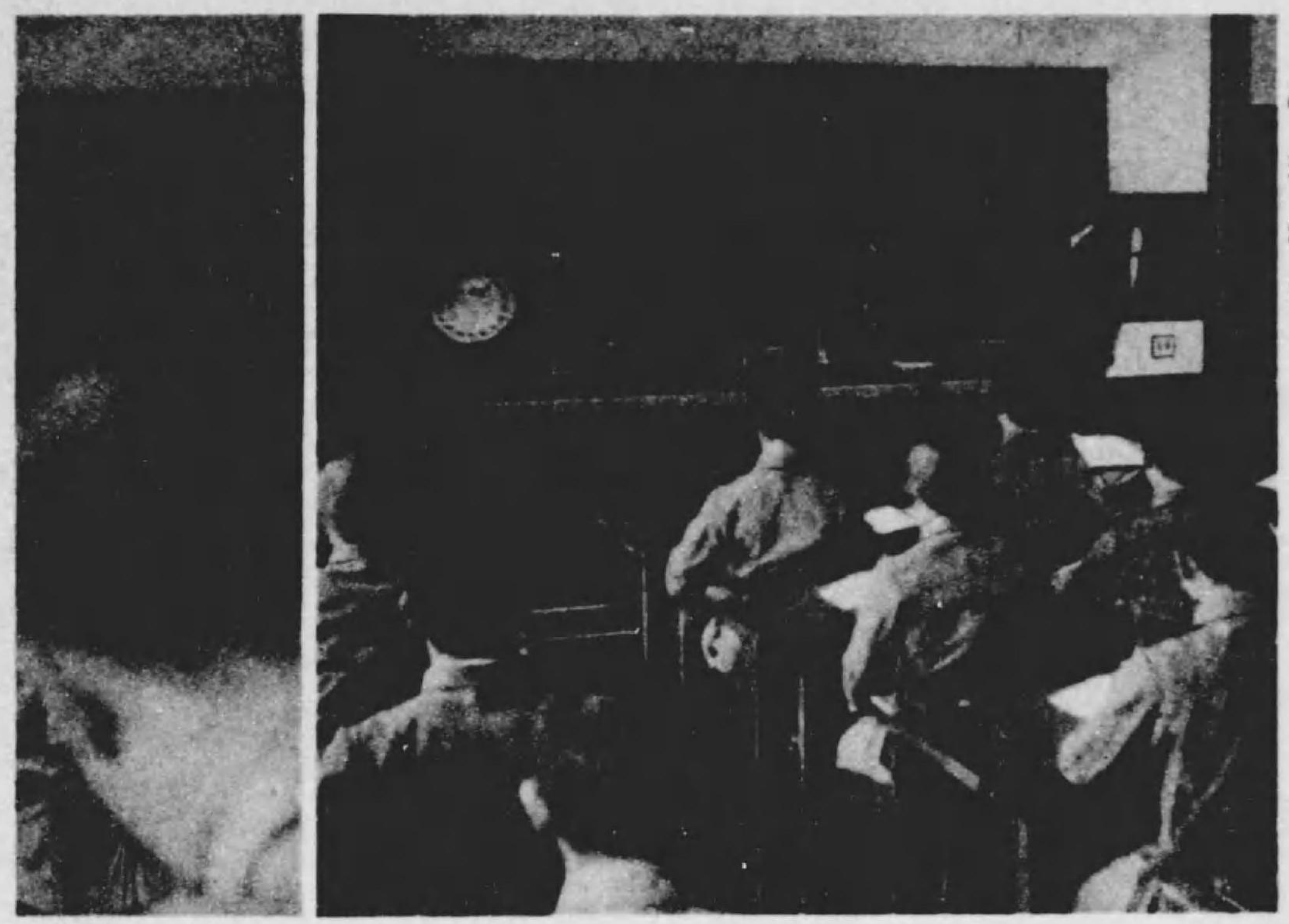
物理で壓力の强さの說明には、戰車のやうな重量の大なる物體が、軟かい地面を前進しながら土に埋まらずに行動し得るのは、體重の大きな人間がスキーを穿けば、軟かな雪の上を滑走し得るのと同じ理てある。卽ち重量が廣い面積によつて地面に接し、壓力が一點に集らないからである、といふ風に說かれる。

またX線の利用については、航空器材の如き大事なものは、僅かな傷が隱れてゐても、重大な故障を引き起すことがある。だから、檢



東京陸軍幼年學校正門前の景

物理教室



査は細微をきはめなければならない。ところが、多數の材料を細微にしらべることは、到底、人の眼の力の及ぶところではない。そこで、肉眼では透きとほして見られない物をも透きとほすX線を、最近には航空器材などの細微な檢査に利用する、といふ風に、すべて軍事に關係して敎へられる。

生徒は皆、實に熱心に注意を集中して、授業を受けてゐる。米國やソビエト聯邦など、近代科學戰の研究と進歩は、目ざましいものがある。わが國も無論、科學戰について十分以上の準備を整へてゐなければならぬ。將校生徒は皆、この覺悟をもつて理化學の授業を熱心に受けてゐる。だから、參觀してゐても氣が引きしまるやうな思がした。

☆實に幸福な生活

作文、圖畫、この二つの敎室を、次に參觀した。

戰場のために 激戰、苦戰、勝敗未だ決しない時、一分一秒を爭ふ一片の報告が、全線の勝敗に大きな影響を與へることが決して少くない。だから簡單で要を得た文章を、迅速に書くことが大切だ。幼年學校の作文の時間には、毎週一回づつ特に迅速に要領を得た文章を、皆が作る。この作文の練習が、將來の戰場で、どれほど役にたつか知れないのだ。

數學敎室

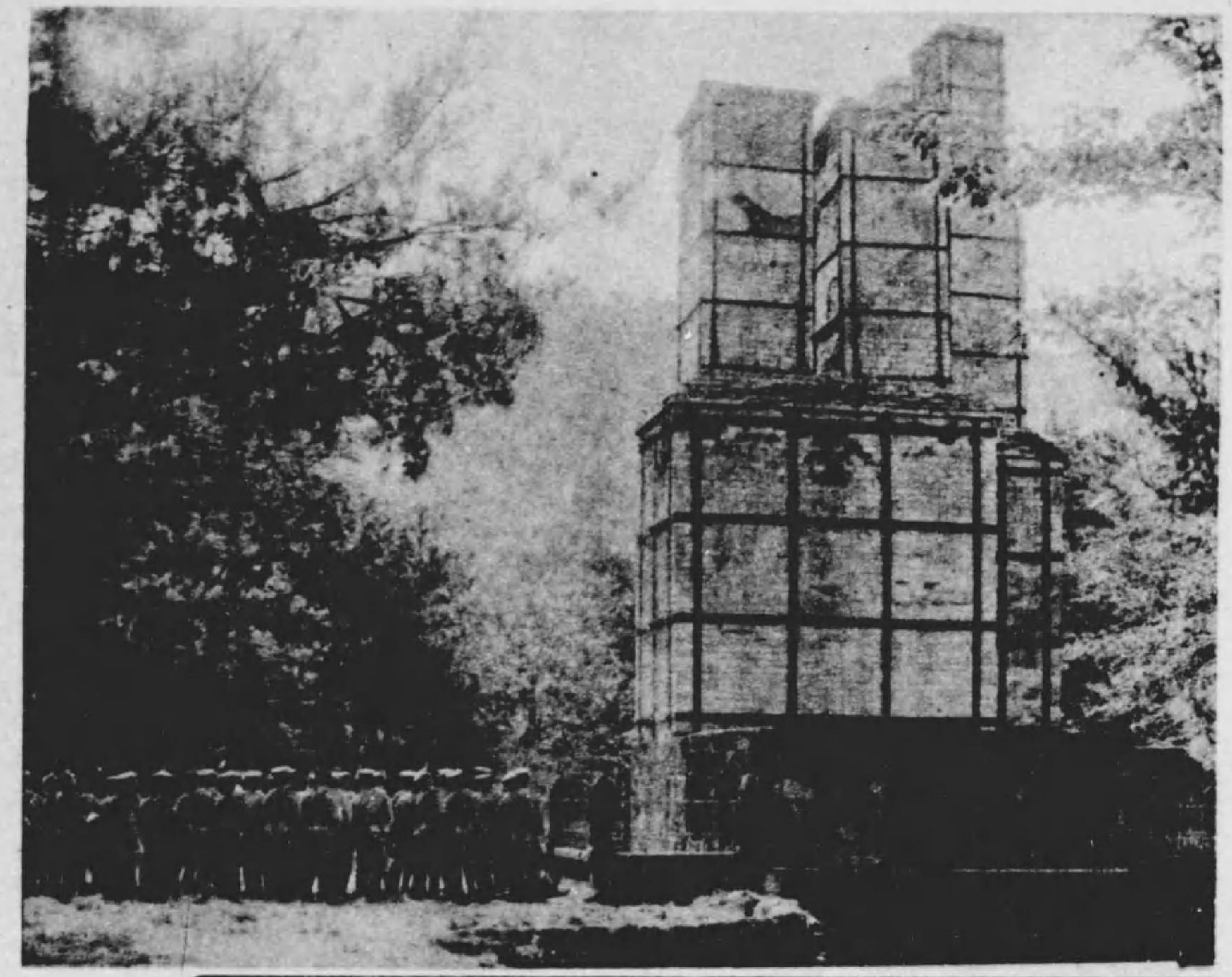
將校になつた後は、地形圖、築城圖、機械圖など、圖の研究が、ます〳〵必要になる。だから、圖を讀む力ばかりでなく、製圖の技能を、幼年學校の生徒のうちから、十分に養成する。そのために、幾何畫法、投影畫法の一般を、第二學年から敎はる。それから兵の敎育や敵地偵察の時、見取圖、寫景圖などを、早く正しく描く將校になるために、各學年を通じて寫生圖に重きをおき、特に早い寫生を練習する。一方には、社會に出てから立派な敎養をもつてゐなければならない。美術眼、美的情操を、今のうちから圖畫敎育によつて養ふ。

授業のすべてが、かうした軍事的方針によつて行はれる。多くの敎室を皆參觀してゐると、時間がなくなるから、次に生徒舍を、今度は武官の生徒監殿に案内された。

羊羹を重ねたやう 第一、第二、第三生徒舍と、長い三棟が南向に並んで、日光がよくあたつて、風とほしも良く、煖房の裝置まで、理想的に設計されてゐる。

部室は訓育班によつて分けられて、南側が自習室、北側が寢室だ。將校生徒はどんな所に寢るのかと思つて、まづ寢室を參觀した。

五つの寢臺が、一方にキチンと並んで、毛布が藁布團を三方から包み、まるで狀袋のやうに見える。寢臺に姓名札がな



狹窄射擊

訓練旅行

寫生圖畫

教練

きちんと整頓された寢室

かつたら、誰が寢るのか分からないだらうと思はれるほど、どの寢臺の狀袋も同じやうだ。寢臺の向かふの上に、棚が上中下三段になつて、そこに服が幾着もたゝまれ、雜嚢、水筒、靴などが、棚の下に吊るされてゐる。これまた姓名札がなかつたら、誰のか分からないほど同じやうに整頓されてゐる。服をたゝんで積んであるのなど、まるで羊羹を重ねたやうに、キチンと重ねられてゐる。

白と黒の窓掛　『一絲亂れず』といふ言葉の通りの整頓ぶりに、さすがは將校生徒の寢室だと感心させられた。ところが、不思議なことは、窓に白と黒のカーテンが、二重になつて下つてゐる。これは何のためですかと、生徒監殿にたづねてみると、

『白の方の窓掛は、日除に使ひますが、黒の方は、生徒が寢たあとに月の光がさしたり、起床前に朝日の直射するのを、さへぎるためであります。熟睡して元氣を養はなければならないのに、月の光が顔にさして、深く眠れなかつたり、朝日がキラ〳〵して、早く目が醒めることは、生徒の熟睡のためによくありませんから、この黒の窓掛を用意してあります。それに二重に掛けますと冬の北風も防げます』

これほど衞生に注意されてゐる寄宿舍を、記者は今まで見たことがない。

將校生徒は幸福だと、いよ〳〵感心して次に自習室を見せて頂く。

☆大家庭の獻立

書物も整列　自習室は勉强室だ。澤山の書物箱がズラリと並んでゐる。上の電燈の高さ、机の下に入れてある椅子、キチンと同じく一定してゐて、見臺も硯も文鎭も、一糎と違はない同じ位置におかれてゐる。實に規則正しい勉强室である。これでは勉强するなと言はれても、せずにはゐられないだらう。

教程（敎科書）手簿（ノート）を始め、さま〴〵の參考書、字典等、書物箱の中と上に、すぐ手に取られるやうに整列してある。書物の整列だ。いかにも嚴肅な勉强室だから、記者も思はず靴音を靜かにして、感心しながら廊下へ出ると、生徒一人に要する一月の費用を、案內の生徒監殿にたづねてみた。その答に、

『服も靴も靴下も、書籍も、鉛筆から紙まで、一切の物が官給品で、自分で買ふのは日用品の一部のみで、父兄から學校へ食費として、一月二十圓を送られる。それだけです』

授業料はと質問すると、

『いらないのです』

記者は驚いた。これだけの大きな設備を見ると、月に二十圓の費用は申譯のやうなものである。これといふのも、國家が將校生徒を大切にして、かくまで優遇されるのだ。感歎のほかはない。それから食堂に導かれた。

とても御馳走　すつかり磨かれてゐる大きなガラス窓がつづいて、明るい食堂だ。淸潔な食卓、長い腰掛、壁には大きな洋畫の額が、ズラリと掛つてゐる。大勢が並んで愉快に食事する。將校生徒は、とても食べるさうだ。そこで獻立を見せて頂くと、とても御馳走がある。

この日の朝がパンにバタ、紅茶に砂糖、澤庵。晝が、燒魚に筍、煮豆、コンニヤク、チクワなどの旨煮に漬物。夜が、筍飯に豆腐の味噌汁と漬物。その次の日の朝は、モヤシ味つけ汁、海苔と澤庵。晝は、魚の天ぷら、靑菜の浸しと漬物。夜は、燒豆腐に豚肉、葱、蓮根、切昆布などの旨煮と漬物。そのまた次の日を見ると、朝が小蕪の味つけ汁、煮豆、澤庵。

將校生徒は澤山食べる。この大釜を見給へ

晝は、豚肉の煮つけと野菜に漬物。夜は、小豆飯に口取と燒魚。

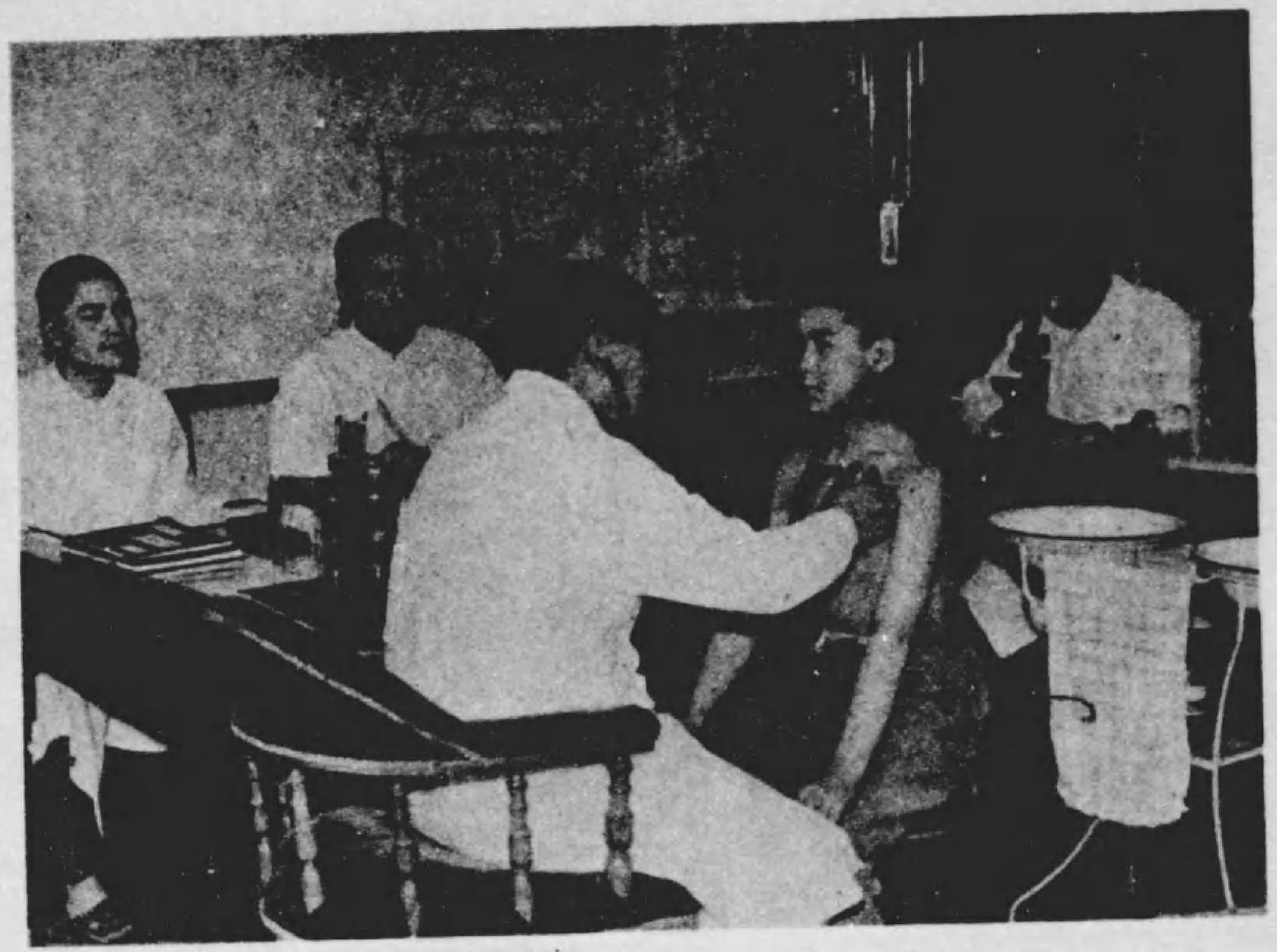
炊事主任の大尉殿と二名の軍醫殿が、熱心に相談されて、毎週の獻立をきめられる。だから榮養たつぷりにできてゐる。季節々々に栗飯や松茸飯、筍飯、五目飯など、いかにも學校全體が大家族だと、この獻立を見ても頷かれる。

生徒は鍛錬と榮養と衞生によつて、すこぶる強健だ。皆潑剌と明るい顔をしてゐる。だが、どこまでも強くならなければならない。そこで『健康十則』を守つてゐる。

☆旺盛なる攻撃精神

健康十則 これを守ると、誰でも丈夫になれるといふ十則だ。

一（運動） 外デ運動朗カニ。
二（榮養） 何デモ食ヘヨ良ク嚙ンデ。
三（日光） 光ニ當レ日ニ當レ。
四（休養） 程良ク休ンデ力ヲ養ヘ。
五（睡眠） 良ク眠レ。
六（空氣） 淸イ空氣ヲ何時モ吸ヘ。
七（姿勢） 正シイ自然ノ姿勢ヲ保テ。



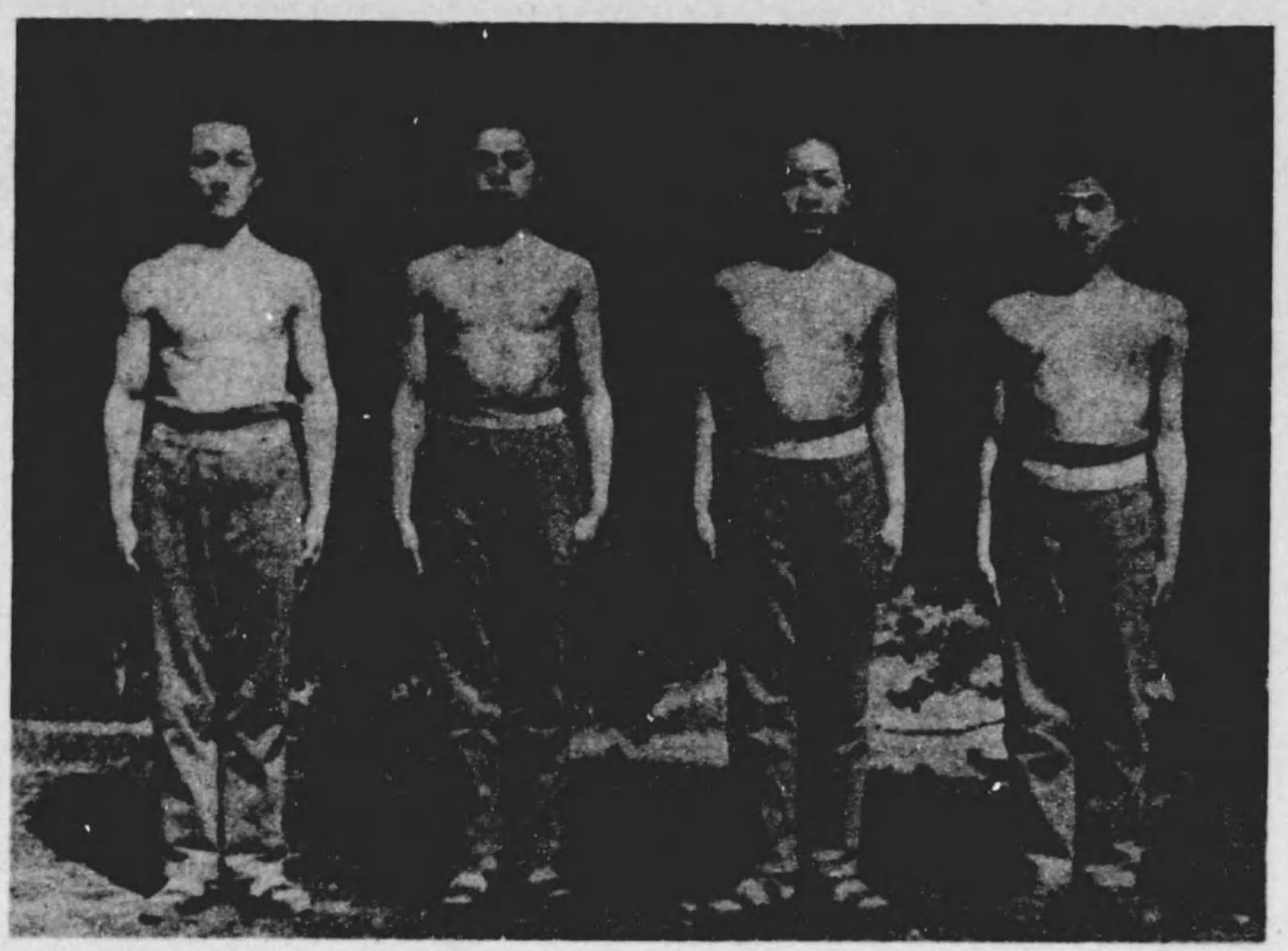
毎月一回、全校生徒の診断がある

八（豫防） 病ヲ防ゲ身ヲ護レ。
九（保淸） 身體ヲ何時モ淸潔ニ。
十（衣服） 肌着キレイニ厚着セズ。

毎月一回、全校生徒の健康診斷が、醫務室で行はれる。臨時の診斷が、時々行はれて、生徒一人づつの健康狀態が、表の中に記入される。これほど衞生に注意することは、普通の家庭にはないであらう。その醫務室へ案内されて行くと、東に一帶の森林を望んで、校舎と離れてゐる平屋の淸潔な建物だ。白い寢臺の並んでゐる休養室もあるが、入つてゐる生徒は一人もゐなかつた。

菊田軍醫大尉殿が試みに作られた、幼年學校生徒と一般中學校生徒の『體力比較表』を、見せて頂くと、身長、體重、胸圍、肺活量、背筋力、發育率等、同じ年齢でも將校生徒の方が、さすがに強くて大きい。

嚴重な體力檢査を經て入校するからだが、入校後の衞生と體力向上が、普通の學校や家庭では眞似の出來ないほど、十分に注意されてゐるからに違ひない。將校生徒は全く幸福だと、醫務室で更に感心して、今度は校庭へ出てみると、向かふの森に向かつて百坪ほどの高臺がある。



幼年學校生徒發育率概況表

	身長	體重	胸圍
入校時	一・五四七米	四五・五二九瓩	〇・七四六米
第二學年始	一・五九三米 增加〇・〇四六	五二・〇一六瓩 增加六・四八七	〇・八〇三米 增加〇・〇五七
第三學年始	一・六二九米 增加〇・〇三六	五五・七三七瓩 增加三・七二一	〇・八二五米 增加〇・〇二二
卒業時	一・六四六米 增加〇・〇一七	五八・四七六瓩 增加二・七三九	〇・八四九米 增加〇・〇二四

お手植の記念樹、綠も濃く繁りに繁つてゐる

遙拜所と記念樹　この高臺は、以前の訓育部長殿が生徒を指揮して築かれたもので、生徒が毎朝、こゝへ來て、伊勢大神宮、宮城及び靖國神社を遙拜し故郷の兩親に敬禮し、御勅諭を奉讀する、神聖な場所である。

臺へ上る階段の左右には、御卒業の各宮殿下のお手植の記念樹が、綠も濃く繁つてゐる。かういふ尊い記念樹の並んでゐる學校は、おそらく他にないであらう。

遙拜所と記念樹に敬禮して、記者は更に道場を參觀した。劍道場と柔道場だ。

捨身攻勢　劍道場の正面には、神棚が高く安置せられてあり、左右には『武　揚　德　昌』、『養正』と二つの大きな額が、墨痕あざやかに揭げられ、柔道場には、『柔能制剛』の橫額が仰がれる。技術を磨く鍛錬と同時に、武德を養ふのだ。

『捨身攻勢といふのが、技術練磨の標語になつてゐます』と生徒監殿が廣い道場に立つて說明された。

戰場に於て、必勝の信念と共に身を捨てて攻勢を取る。皇軍特有の旺盛なる攻擊精神が、この道場の中から養はれるのだ。

『捨身攻勢』、肉を斬らせて骨を斬る、戰場に於ける突擊魂

尊き記念室。入室者は、身を正して敬禮

の精髓だな、と、記者も武者振ひの出る氣持で今度は生徒集會所へ案内された。

☆尊き記念室

歷史畫の感激　集會所の階下は百二十帖もある。三室に分かれてゐて、第一室の床の間を見ると、『忠孝』の巨大な二字が莊重な掛軸になり、古代の甲冑が嚴しく飾られてゐる。一方には、楠公父子櫻井驛訣別の圖、青木新兵衞が余吳の湖で血にまみれた鎗を洗つてゐる圖など、いづれも武士道の眞髓を現した歷史的場面が、鮮やかに描かれてゐる。

眞中の第二室に入つてみると、『元寇覆沒』、生きて還る者僅かに三人の歷史畫、吉岡大佐奮戰の實況、首山堡に於ける橘中佐の最期、村上義光が藏王堂上の忠戰など、將校生徒の熱血を沸かす繪畫が、方々に揭げられてゐる。

第三室には、ラヂオあり電氣蓄音機あり、廣い廊下へ出てみると、數個のピンポン臺が並んでゐて、和やかな氣分が流れてゐる。

畏き品々　二階へ上つてみると、記念室が設けられてゐる。こゝへ入つた記者は尊嚴の念に打たれた。

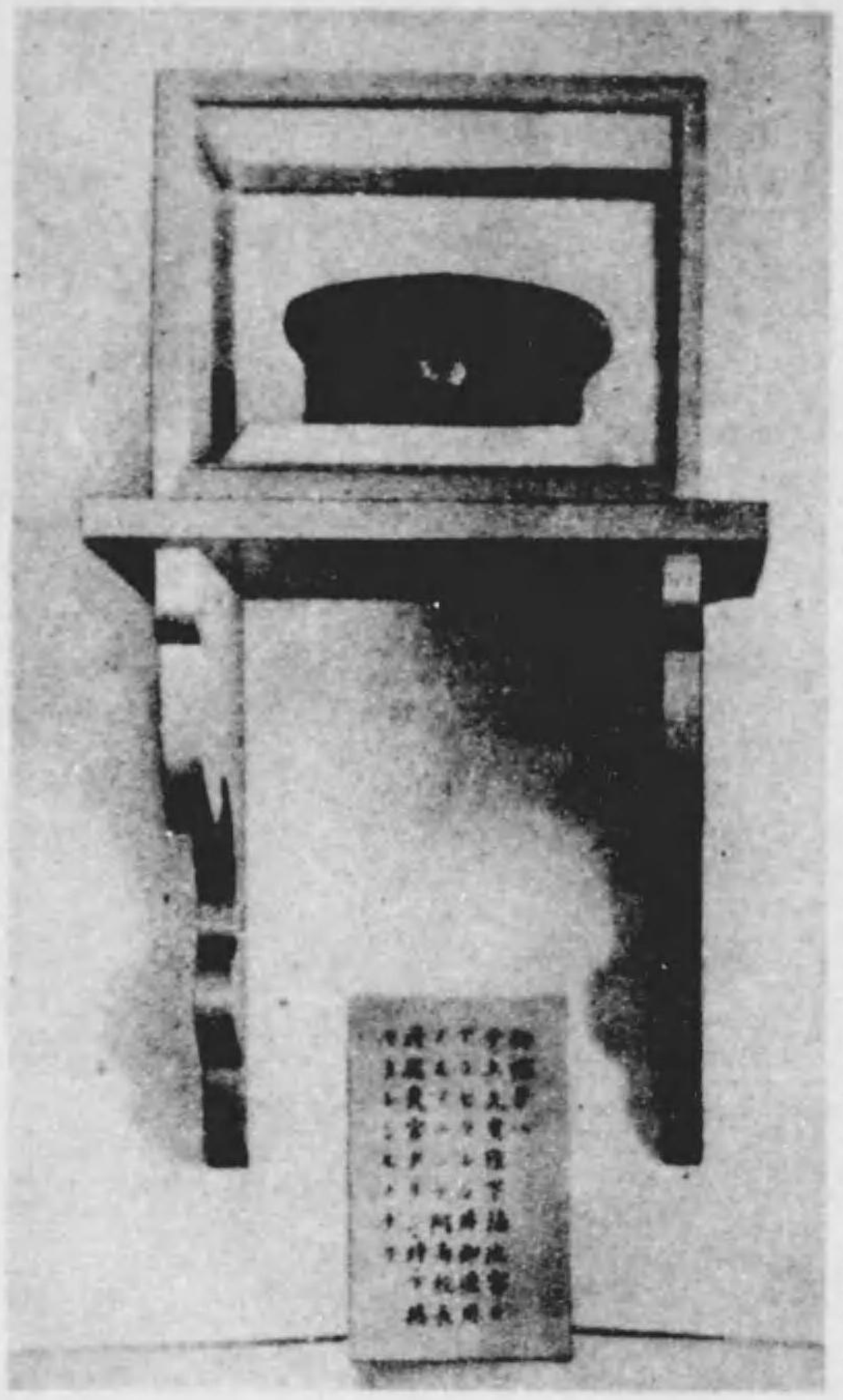
第十九期生として御卒業あそばされた、秩父宮雍仁親王殿下を始めたてまつり、本校御卒業の宮殿下御十五方の御寫眞が、高くかゝげられ、各宮殿下の御英姿を仰ぐ者の光榮と感激は言ふまでもない。

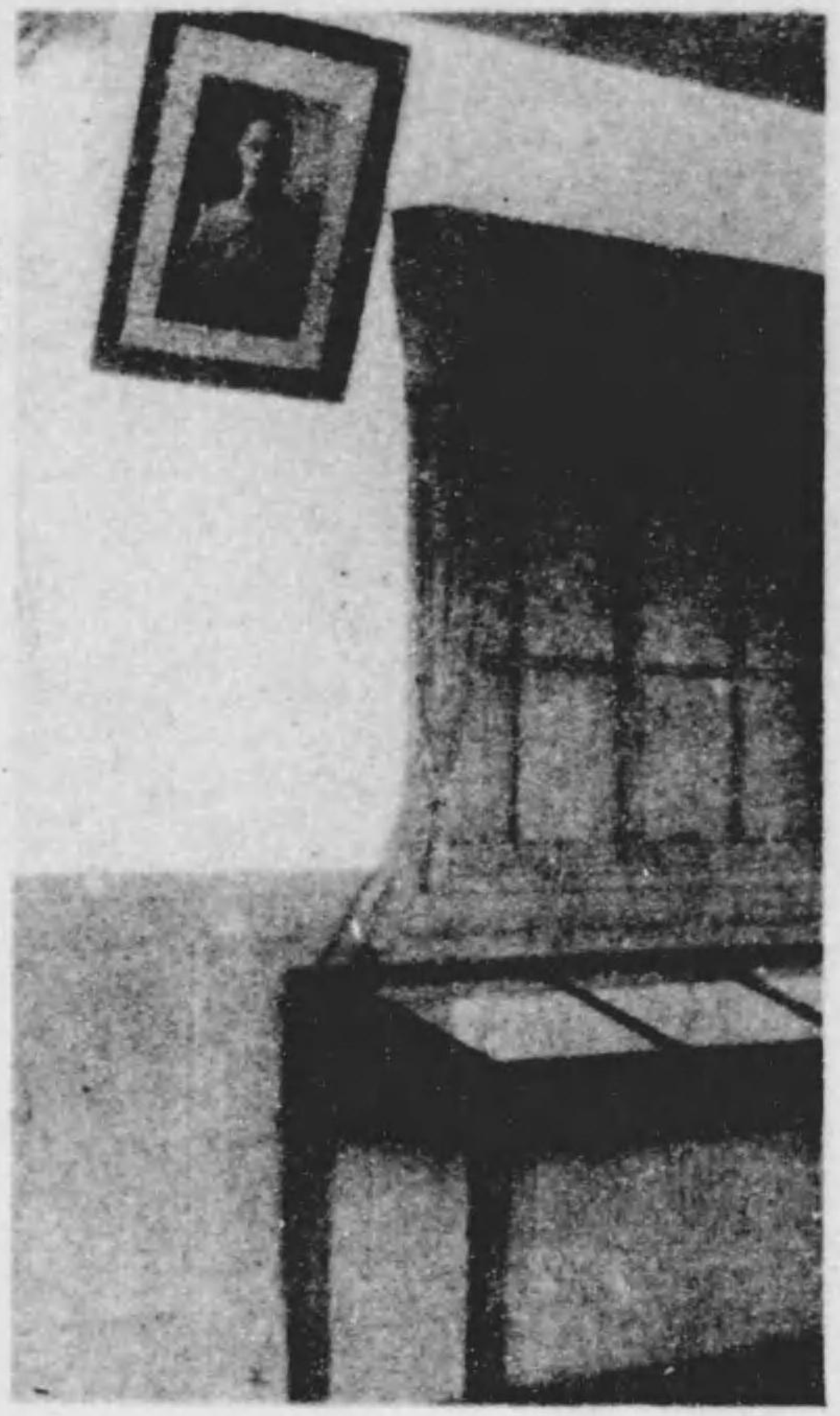
正面を拜すと、一個の軍帽が嚴かに安置されてある。畏くも、今上陛下が攝政宮にあらせられた御時、御使用あそばされた御軍帽である。以前の校長阿南少將閣下が侍從武官として奉仕の際、特に御下賜あらせられたものを、本校へ寄附せられたといふ。さらに、秩父宮殿下が御在學中の御記念品として御使用の銃劍が永久に保存せられてゐる。

かゝる尊き御品を安置し奉ることは、實に本校なればこそ浴し得る大きな光榮である。

出身將校の壯烈な戰死を偲ぶに足る遺品、或は書簡その他が、數多く陳列されてゐる。これらの戰死將校は皆、現在生徒の先輩なのだ。この陳列品によつて、後輩の將校生徒が無言のうちに激勵される。

文庫と酒保　記念室の隣が、文庫になつてゐる。眞中の書棚には、皇室、修養、戰記、傳記などに分類さ





今上陛下が攝政宮であらせられた御時、御使用遊はされた御軍帽である

植物園に花を愛する床しい一時

れて、大小の書物がギッシリと詰まつてゐる。兩方の書棚には、新刊書あり雜誌あり、畫報あり、修養に、娯樂に、將校生徒の讀物は實に豐富だ。

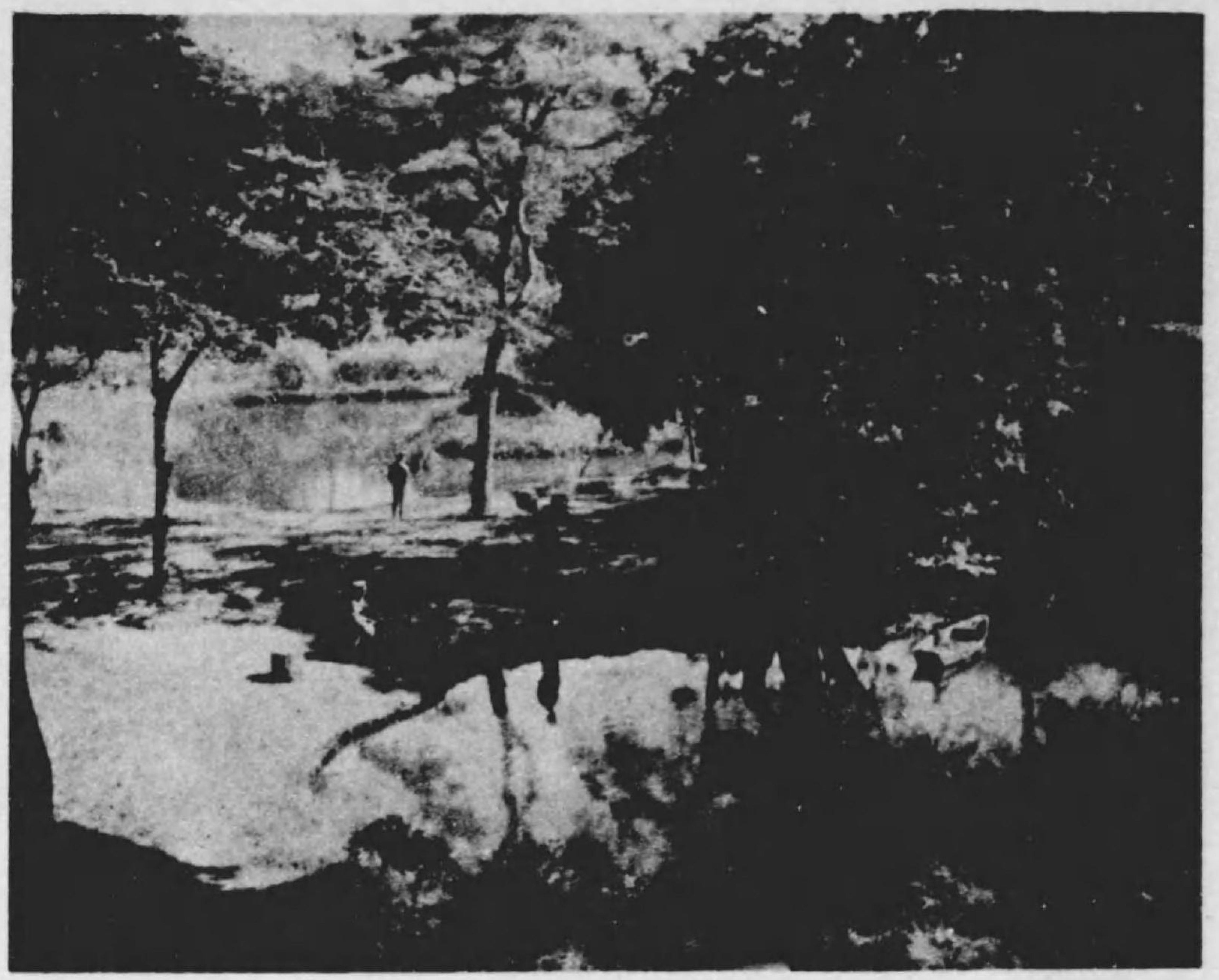
階段を下りて、西北の隅へ行つてみると、酒保がある。目の下に一面の廣い運動場を見わたしながら、菓子や果物その他を食べつゝ談笑する健兒の樣子は、想像するさへ愉快だ。

☆將校生徒になりたい

皇族舍　校庭の東南、ゆるやかな斜面の上に、淸潔質素な二階家建の建物が、綠濃き立木の中に仰がれるのは、皇族舍であると伺つて、記者はその前に立ち脱帽敬禮した。

御在校の殿下には、御食事の如きも常に生徒の食堂に成らせられ、一般生徒と同じものを召上る。夜は生徒の自習室へお越しになつて、御勉强に勤まれ、授業も敎練も、演習も訓練旅行も嚴冬の朝の寒稽古まで一切、生徒として日夜に御精勵と伺つて記者は、感激のあまり熱涙を禁じ得なかつた。

皇族舍を拜して、校庭の方々を案内された。丘あり



こんな素晴しい大自然境で學ぶ將校生徒は幸福だと思つた

池あり谷あり、巨木そびえてゐる下に熊笹が茂り、谷には苔さへ蒸してゐる。池さへあつて、大きな緋鯉が悠々と泳いでゐる。

こんなすばらしい大自然境で學ぶ『將校生徒』は幸福だと思つた。

草むらにカサリと音がした。

『雉です』

と、生徒監殿が微笑して言はれた。

これが都の中にある校庭の一部だとは思へない、さながら深山幽谷である。

『すばらしい環境ですな』

と、記者は思はず言つた。

さて參觀はこれで一先づ終つた。

校長閣下を始めお世話になつた方々に、厚くお禮を申し上げ、玄關の正面に輝いてゐる御紋章を、幾度か仰ぎつゝ、記者は校門を出ながら心の底から思つた。『將校生徒』の光榮と幸福は、實に限りないものがある。記者も、もう一度少年時代にかへれるものなら、必ず『將校生徒』を志願して、選拔試驗の難關を突破し、この校門を入り、あの校舍の中で生活したいものだと。

仙臺陸軍幼年學校參觀記

☆雄大剛健の大自然

仙臺、名古屋、大阪、廣島、熊本の陸軍幼年學校は、おのおの所在地によつて特長をもつてゐる。記者が各校を訪れた印象記を、こゝに書いておかう。

仙臺市の郊外に、市街の雜沓を離れて、大氣爽やかなる丘の上、こんもりと茂つてゐる綠の中に、新築されてゐる校舍の正面は、廣やかな園庭になつてゐる。正面の學校本部に高く燦然たる菊花の御紋章に禮拜して、記者は暫く四邊を見まはした。

仙臺陸軍幼年學校長　大佐　大熊貞雄

雄大なる印象　四方の風光、實に雄大だ。南を望むと、深い綠にかこまれてゐる三神山がそびえ、東へ視線を轉ずると、四周小山に包まれてゐる下に平かな校庭が、日光をあびてひろがり、その北の端に建つてゐるのは、東北第一の大劍道場だ。本部に並行して講堂と生徒舍の棟が、幾列にもつゞいてゐる。

これらの巨大な校舍が、しかし、學校全體の風景から見ると、まるで隅の方に小さく、ちよこんと並べられたやうな印象を受ける。それ程雄大な仙臺陸軍幼年學校である。

大自然を庭に　本部の前から北の方へ、常綠したゝる深い森の中を登つて行くと、深い山の奥へ入つて來た氣がする。路を登りきると森の外へ出て、突然、青々として明るい芝生の臺上に立つ。今までとちがつて俄かに別天地へ來たかのやうな、明朗な頂上だ。こゝが卽ち、染井櫻が咲きはじめて、八重櫻が散つてしまふまで、前後一月も花を絶やさないといふ三神山なのだ。

四方の眺望更に雄大だ。遙かに遠く空と水平線の連なる太

仙臺陸軍幼年學校本部玄關前の景

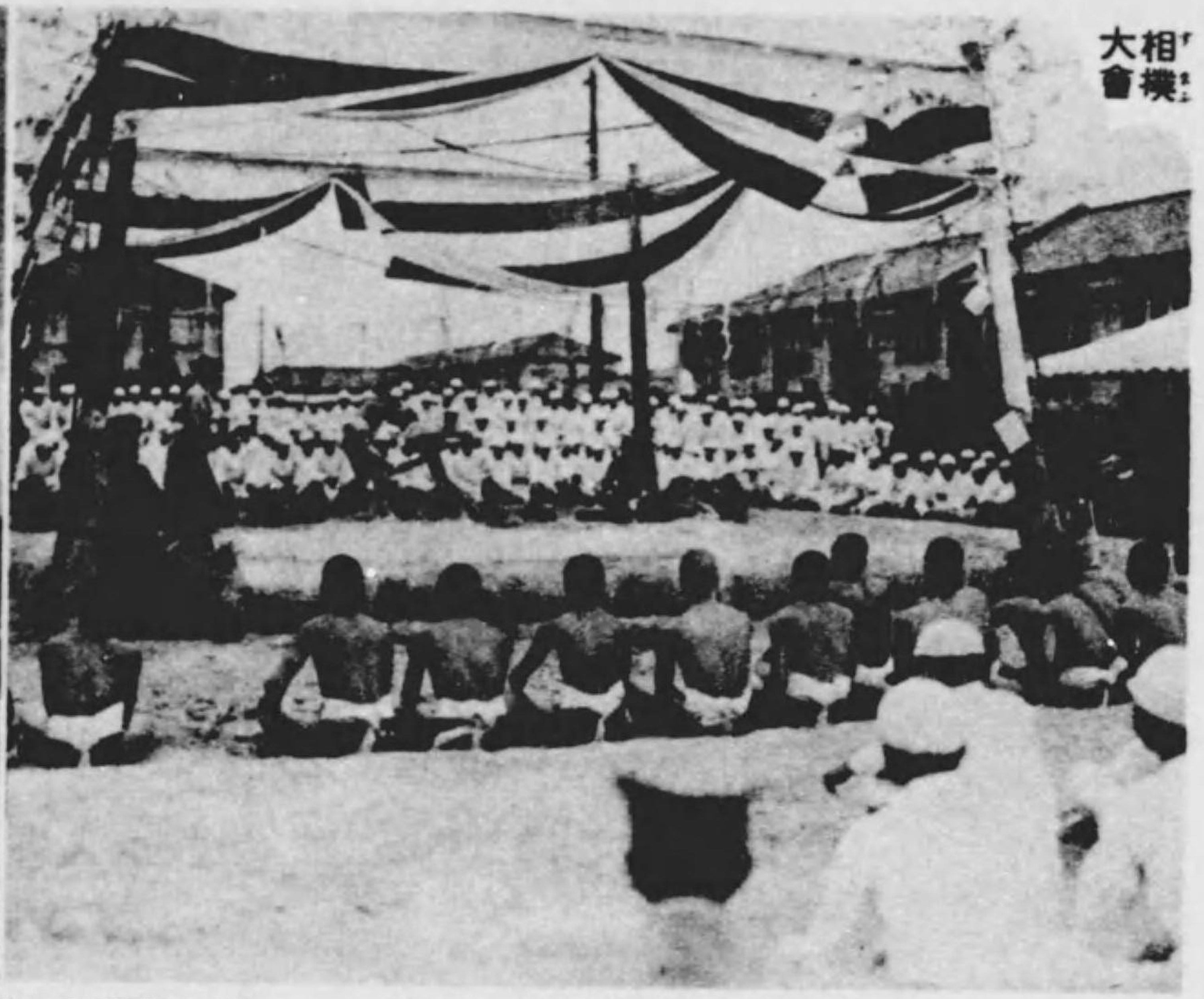
平洋を東に望み、西には大空にそびえ立つ雪の藏王山を仰ぐ。しかも、沃々たる仙臺平野は目の下にひろがつてゐる。

かゝる大自然の風光を、自分の庭のやうにしてゐる學校は、およそ他にないだらう。この臺上に立ち、雄大剛健の大自然に親しむ生徒は、おのづから浩然の氣を養つて、將來、三軍を統帥する德性を、少年時代から體得するのではないか、と思ふと記者は、この仙臺陸軍幼年學校の生徒が、實に羨ましくなつたのである。

先輩の遺烈　三神山には、閑院宮殿下の御野立所が、かしこき記念地として光榮に輝き、戰死者の英靈を祀れる雄健神社、生徒の遙拜所などがあつて、實に校內の聖地である。

更に、眞新しい生徒集會所が、三神山に建つてゐる。入つてみると、一面の青疊だ。壁には學校出身の先輩から贈られた立派な額が、後進を激勵して堂々と掲げられてゐる。未來の將軍をきほふ小戰術家たちが、大福餅を頰ばり肩を怒らして、大いに激論を鬪はしたり、汁粉に舌鼓を打ちつゝ仙臺平野を眼下に見渡し、互に胸襟を開いて語りあふ、この青疊の上の集會は、皆の一生の思出に殘ることだらう。

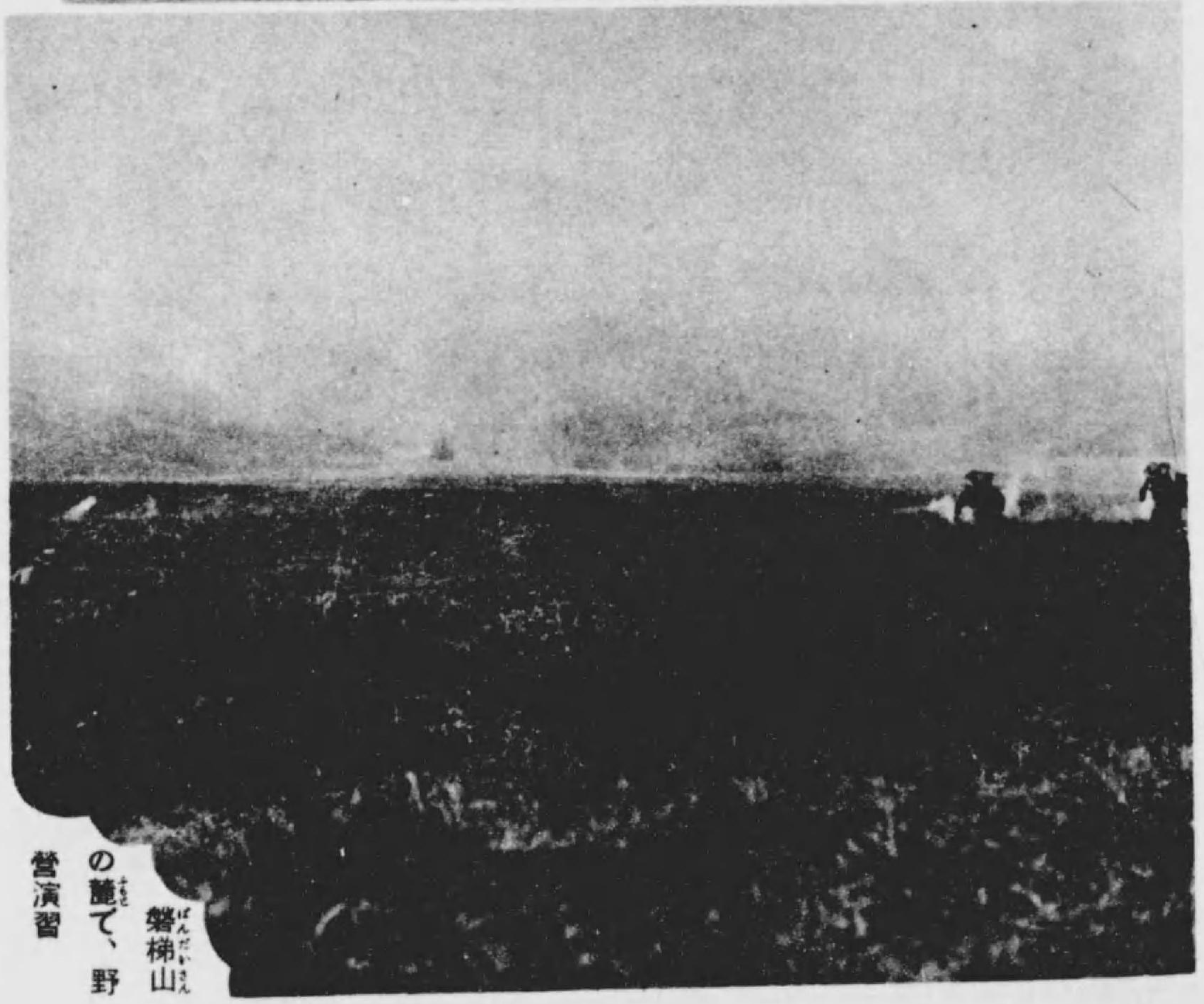
二階へ上つてみると、廣い記念室になつてゐた。高貴の方々の御品を始め、本校出身の殉國者の遺品が、數多く收



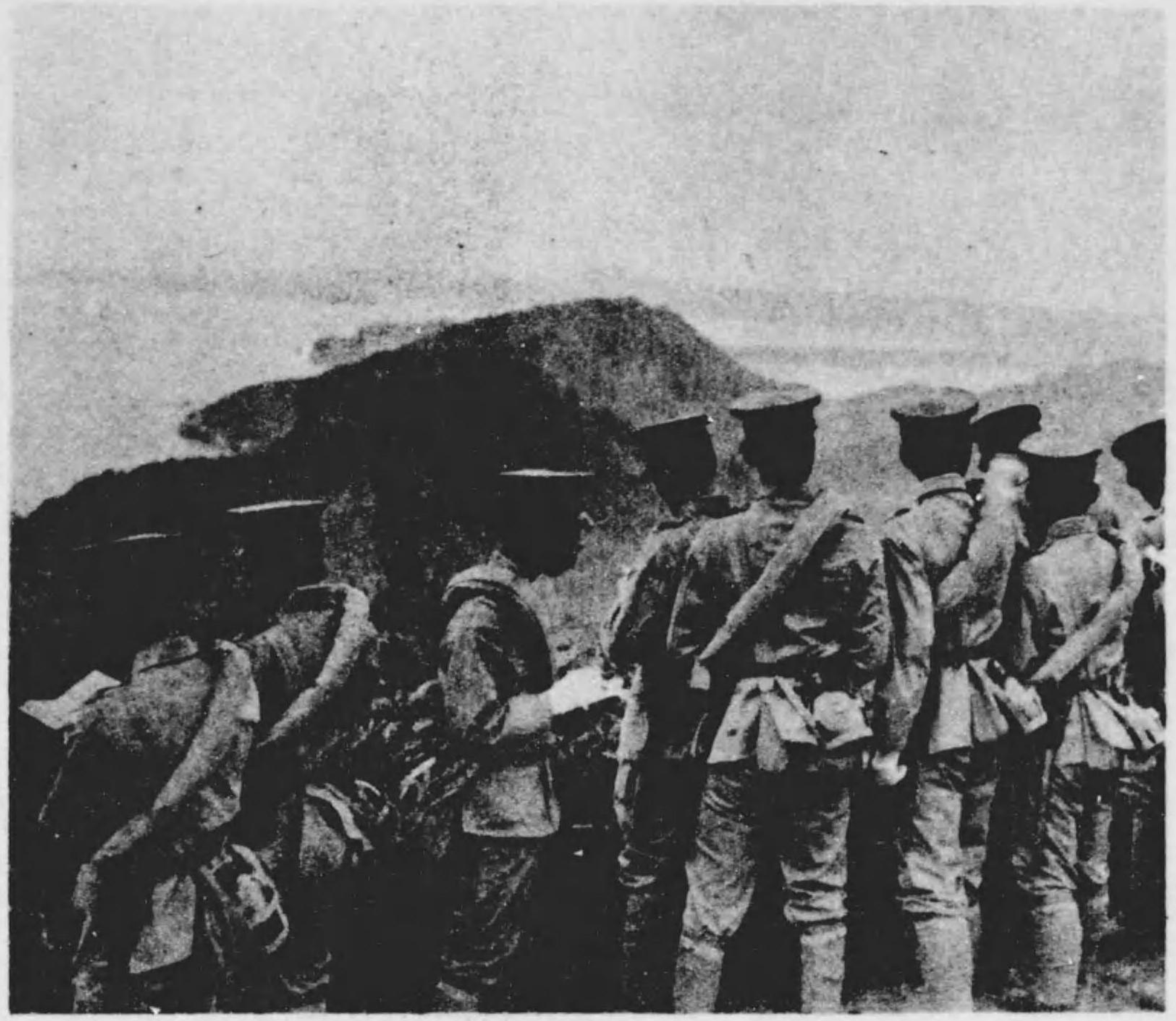
相撲大會

兎狩

學校附近でスケートの練習



磐梯山の麓で、野營演習



樂しい校外訓育旅行

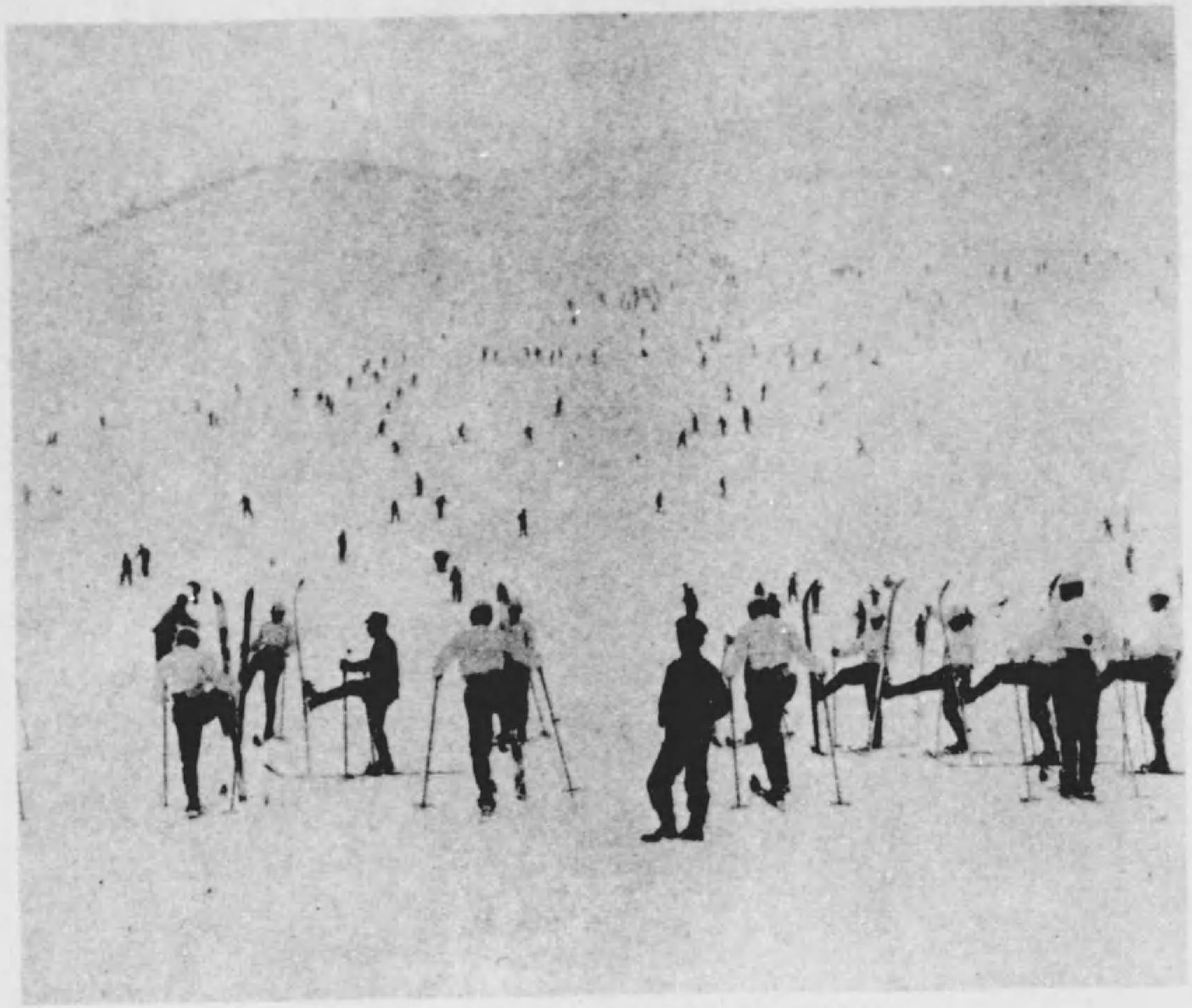
められてゐて、見る者の襟を正させる。生徒にとつて深い精神修養になるのだ。

廊下にある油繪を見た時、記者の血は躍つた。支那事變における空軍の華と言はれてゐる、敵中に着陸した部隊長救出の放れ業が、生々と鮮やかに描かれてゐる。

群がる敵中へ不時着陸し、眼に負傷してゐる能登部隊長を、部下の者が肩に扶けて自分の飛行機へ、今しも移し乘せようとしてゐる。すぐ上の低空には、戰友の飛行機が旋回しつつ、敵を射撃して、上から部隊長を護つてゐる。見るからに涙が出るほど感激の情景だ。

この部隊長能登大尉は、本校第二十二期の出身であり、また、日露戰役の際に軍歌に唱はれた軍神大越中佐も、嘗て本校の生徒監であり、今度の支那事變に赫々たる殊勳を現した先輩を數へると、十指に餘る。それ等の後進として生徒は皆、朝夕を精勵してゐるのだ。

春夏秋冬の行事　春は訓練旅行に、各學年が分かれて、水戸、福島、岩手、秋田、山形、



學校のすぐ近くで猛烈にスキーの練習をする

北海道、關西方面へも出かける。樂しい行事の一つだ。

夏は游泳演習に、秋田縣の象潟へ行く。緑燃ゆる鳥海山を背景に、日本海の松島と呼ばれる麗しい海を泳ぎ廻つて、心身を鍛へる。

秋は野營を、福島縣の翁島で演習する。磐梯山の麓だ。猪苗代湖の深い碧水を友にして、漠々たる山麓に實戰的訓練を積む。

このほか、月に二回づつの校外訓育に、名所松島を始め、多賀城の碑、伊達政宗の遺跡、或は飛行場、理化學研究所などを、端から見學して廻る。

冬になつて雪深く、池の水が凍ると、本校特有のスキーとスケートを、近くの斜面や池へ出かけて、猛烈に練習する。何しろ將校生徒だから、すぐに上達してスキーもスケートも、すばらしい選手になれる者が多くゐるのだ。仙臺幼年學校生徒たる者の得意、思ふべしてあると、記者は微笑しながら參觀を終つたのである。

名古屋陸軍幼年學校參觀記

☆軍神橘精神

名古屋市の北方、約十二粁の郊外に、新築された本校の校舍が、いかにも武學寮らしく嚴然と立つてゐる。米豐かに實のる濃尾平野の一角だ。稻畑、麥畑、松林、桃林、夏の綠の茂る中に、木の香もまだ新しい本校を、記者は汗をぬぐひつゝ參觀して來た。

名古屋陸軍幼年學校長
毛利末廣大佐

傳統の橘精神　日露戰役に最も有名なる軍神橘中佐は、明治三十五年から出征前の明治三十七年まで、校長として本校にゐられた。崇高純忠なる橘中佐から、親しく訓育せられた當時の生徒が、今や中將や少將になつて各方面の重要な職についてゐる。いづれも軍神の薰高い教育を受けた人であり、軍神の偉大なる感化は、現在後進の生徒にも永く傳はつてゐる。本校の傳統精神は、卽ち橘精神なのだ。

軍神の遺德を偲んで每年九月、橘會を催す。生徒は皆、崇高純忠なる橘中佐を敬慕して、自分たちもまた、第二第三の橘中佐たらんことを固く誓ふのだ。

城と山を望む　校舍の前に、水淸き池が見る者の心を澄まし、左右には松林が千古かはらぬ綠に茂り、全校の背景には、標高八十二米の篠岡山が不動の精神を現して、どつしりと立つてゐる。生徒は每朝、この篠岡山に上つて遙拜し、軍人勅諭を奉讀して後、山上から濃尾平野に朗々と響きわたる號令調整をやるのだ。

敵の陣地に攻擊前進する戰場を想像し、篠岡山上から號令する將校生徒は、豆將軍だ。皆が意氣軒昂として朗々と叫ぶ姿は、凜として實に賴もしい。四方を見渡すと、南の綠濃き平野の向かふに、名古屋の大市街が遙かにかすんで、金の鯱

遙拜と御勅諭奉讀

の輝く名古屋城の天守閣は、これこそ豆の如く見える。西の空にはすぐ前に圓い小山が、平地に一つ浮いてゐるやうだ。小さな山だが、日本國史に有名な古戰場、秀吉と家康が、智謀を盡くして戰つた小牧山である。遙かなる西方に、空をくぎつて峰つゞきの山がそびえてゐるのは、これまた有名な伊吹山だ。

城と山を望んで史上の名將を偲ぶ。本校の生徒は朝夕、三軍に將たる偉大な素質を養はれてゐるのだ。

面目と本領　濃尾平地は、古來、日本の中原である。天下分目の戰が、この地に勝敗を決したのだ。學校のすぐ西にある小牧山の合戰に、秀吉方の智將池田信輝が、家康の手兵と激戰した長久手の史蹟は、學校の南約十六粁にある。さらに雄心勃々たる青年大將織田信長が、今川義元を奇襲して一躍まさに天下に乘出す基をなした桶狹間も、程遠くない。

學校の近くを步きまはると、一木一草に英雄興亡の跡が、歷々と偲ばれて、將校生徒の夢は、古來の武將の上に飛ぶ。

『本校生徒は克く聖諭を奉體し純直剛健宏量濶達の校風振作に勗むべし』

と生徒心得に明記されてゐる。

立派な敬禮

純直、剛健、宏量、濶達、いづれも英雄的性格だ。これに加ふるに、忠烈なる橘精神をもつてする。かくして本校生徒の面目と本領が、いよ〳〵發揮されるのだ。

出てよ大人物　日本の中原である附近の平地は、特に豐富な果物の產地である。桃、苺、梨、葡萄、蜜柑など、四季を通じて累々と實のる。生徒は日曜に外出すると、新鮮な果物に舌鼓を打つて、快哉を叫ぶ。

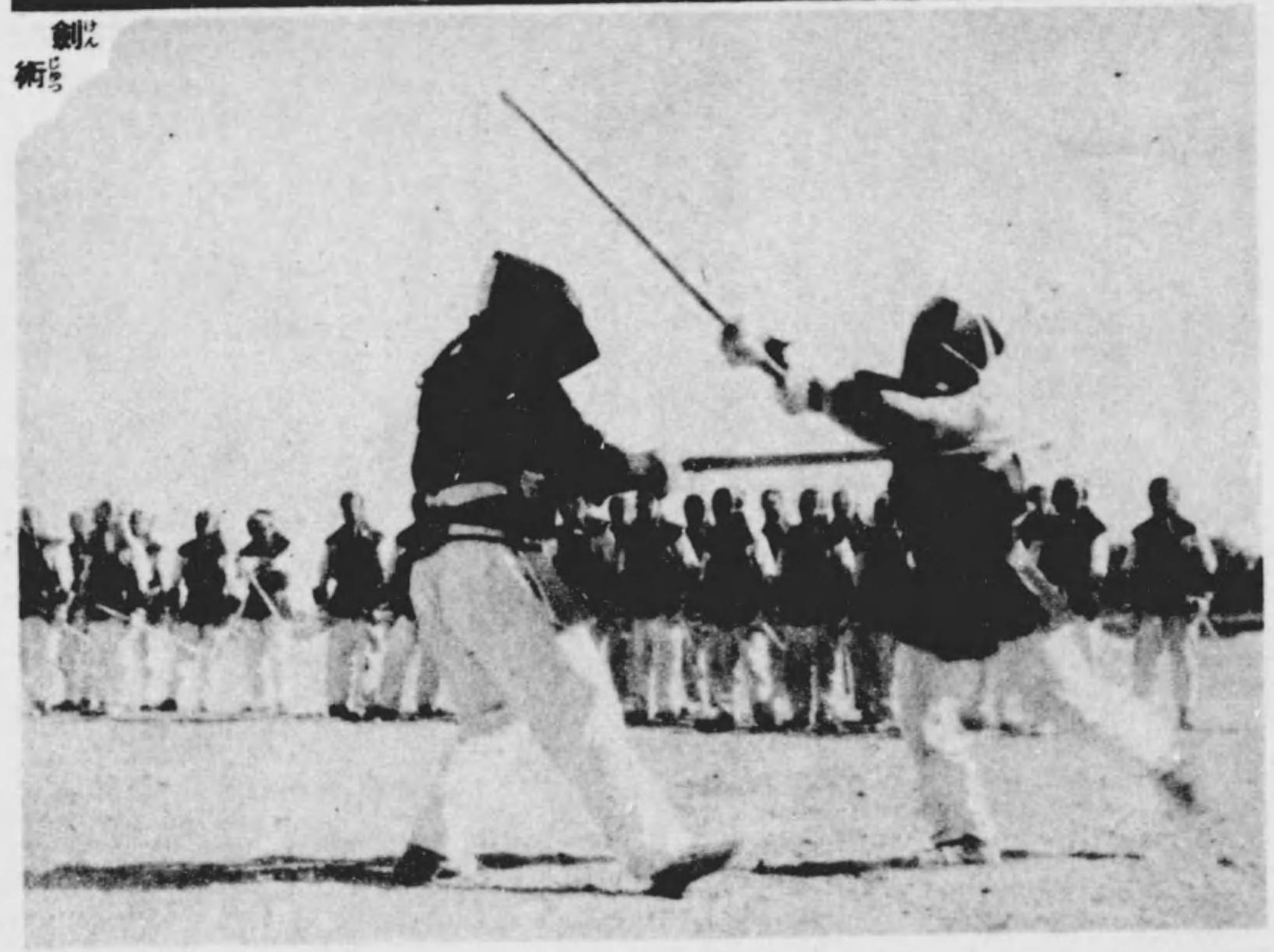
前記の古戰場を訪ねて、飯盒をさげて歩きまはるのも、休日の樂しみの一つだ。濃尾平地も爲に所狹しの感があると、生徒の意氣が上つてゐる。何しろ北は木曾川、南は庄内川にわたる廣い地域が、豆將軍の散步區域に示されてゐる。

氣候は春夏秋冬ともによく、交通も便利だから、生徒監殿に引率されて行く校外訓育の地も多い。犬山城下の急流木曾川、淸洲、各務ヶ原、岐阜城、到る所を見學する。

春の訓練旅行は、これまた史蹟の多い近畿地方を廻り、更に中國地方へ健脚を伸ばす。夏の游泳演習は、風光麗かな知多半島の海邊へ出て行くのだ。秋の野營は、長久手古戰場の本地ケ原で武を練る。

本校の豆將軍の中から、將來、大ものが出るらしいぞと、記者は心賴もしく參觀を終つた。

樂しい食事



劍術

大阪陸軍幼年學校參觀記

☆大楠公の精神は生きてゐる

大阪から南海電車の高野線に乗つて約四十分、千代田驛に下車、櫻の並木がつゞいてゐる新道を、三百米ほど行くと、靑々たる畑と綠の深い松林の間に、眞新しい校舍の甍が、浮き出てくるやうに見える。卽ち本校だ。

大阪陸軍幼年學校長
陸軍少將林芳太郎閣下

金剛山を仰いで　雜然たる騒音と黑い煤煙の大阪市街を離れること約二十四粁、本校の在る所もまた都會の塵を知らず、しかも、大楠公に由緒の深い金剛山の麓に新築された武學寮である。

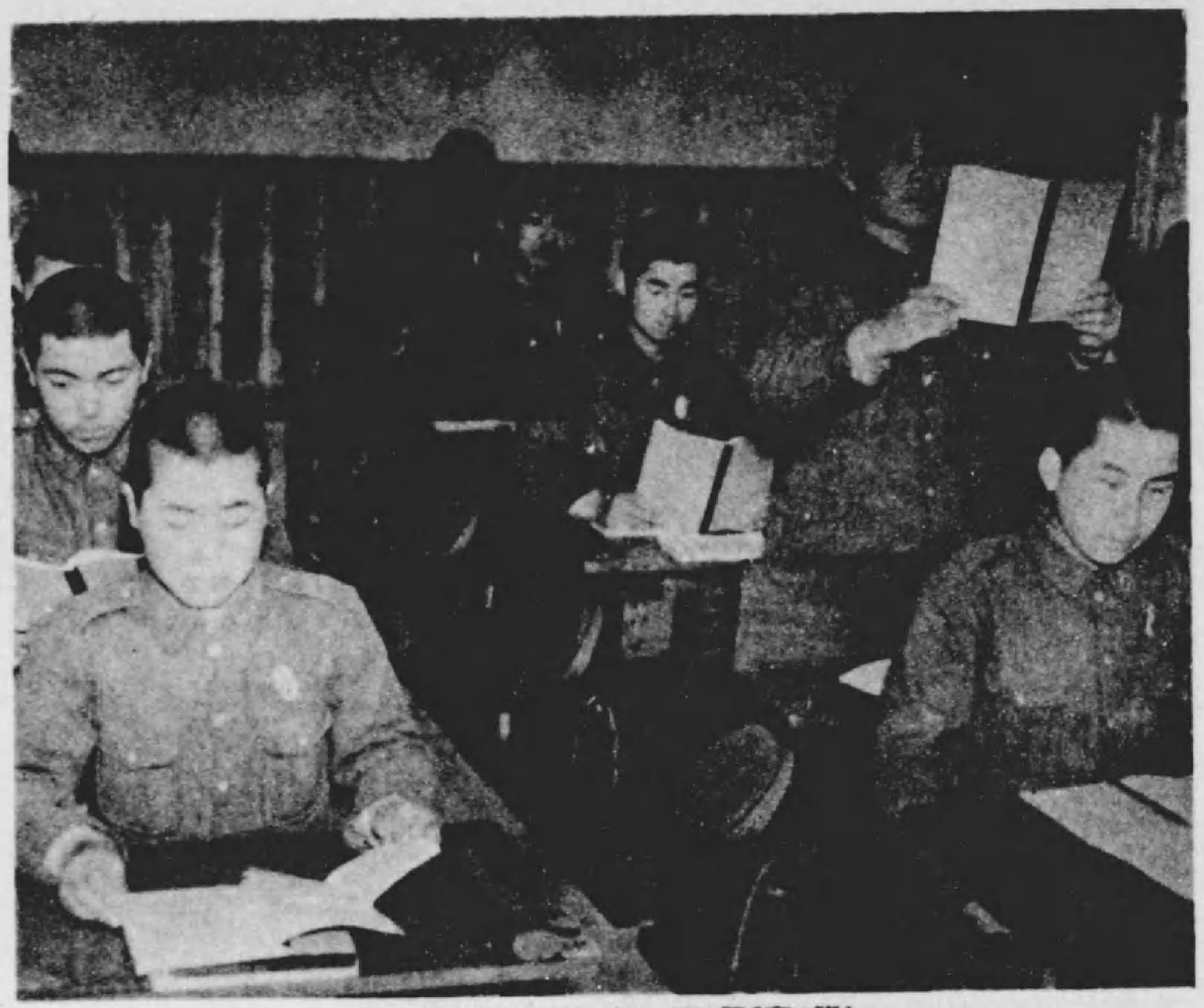
國史に憶起す建武の頃、大楠公が勤王の義軍を擧げて、數十倍の北條勢と合戰し、到る所に敵を惱ました史蹟が、いづれも本校の近くに散在してゐる。

殊に大楠公の根據地であつた最も有名な金剛山が、すぐ東に巍然とそびえてゐる。その山容、いかにも氣高くして、生徒の自習室から、寢室から、敎室から、常に仰がれる。

大楠公と金剛山は離れられない印象をもつてゐる。この聖山を身近く仰いで、忠節の本分に生きる將校生徒は、日夜、大楠公の偉大なる感化を、心身に受けてゐるのだ。

深山幽谷と葡萄畑　校舍の後には、昔ながらの松林が、綠深く茂つてゐる。休憩時間に、生徒はこの松林に入つて腰を下し、將來の抱負を語りあふのだ。颯々として松の梢をわたる風の音に耳をすますと、さらに建武の昔が思はれて、日本精神そのものに奮起せずにゐられないといふ。記者もまた、この松林の中を歩いてみて、實にさもあらうと思つた。

かすかに淸い水の音が聞える。その方へ行つて見ると、松林の向かふが山になつてゐて、深さ十三米ほどの斷崖が足も



態度嚴正、熱心に學科を受ける

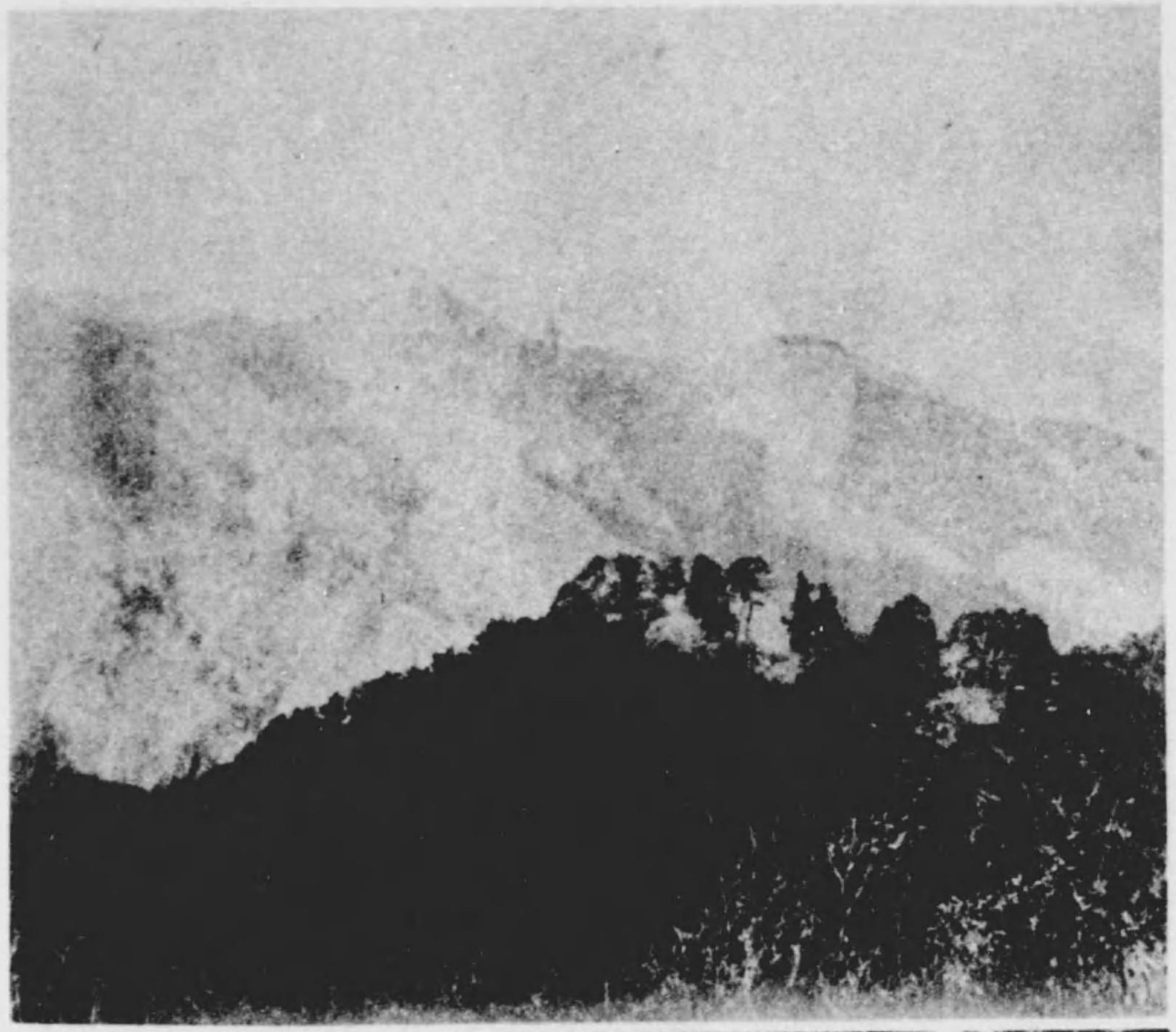
とに開け、底の方に急流が音をたててゐるのだ。まるで深山幽谷に入つてゐるやうに、氣もちが澄みきつて、これが學校の中だとは思へない。

校庭へ出てくると、一面に廣い葡萄畑が、あたかも房々と實を結んでゐた。元來、この地は皆、葡萄畑だつたのを學校の敷地にしたので、現在はその一部分が殘つてゐる。一部分でも廣いものだ。今にこの實が皆、紫いろに熟して來たら、生徒は、うんと食ふのだと樂しんでゐた。

大精神の體得　本校の所在地の河内は、元來、史蹟の多い國である。しかも、日本の誇である大楠公の遺烈香ぐはしき蹟を、近くにもつてゐることは、更に本校の誇なのだ。

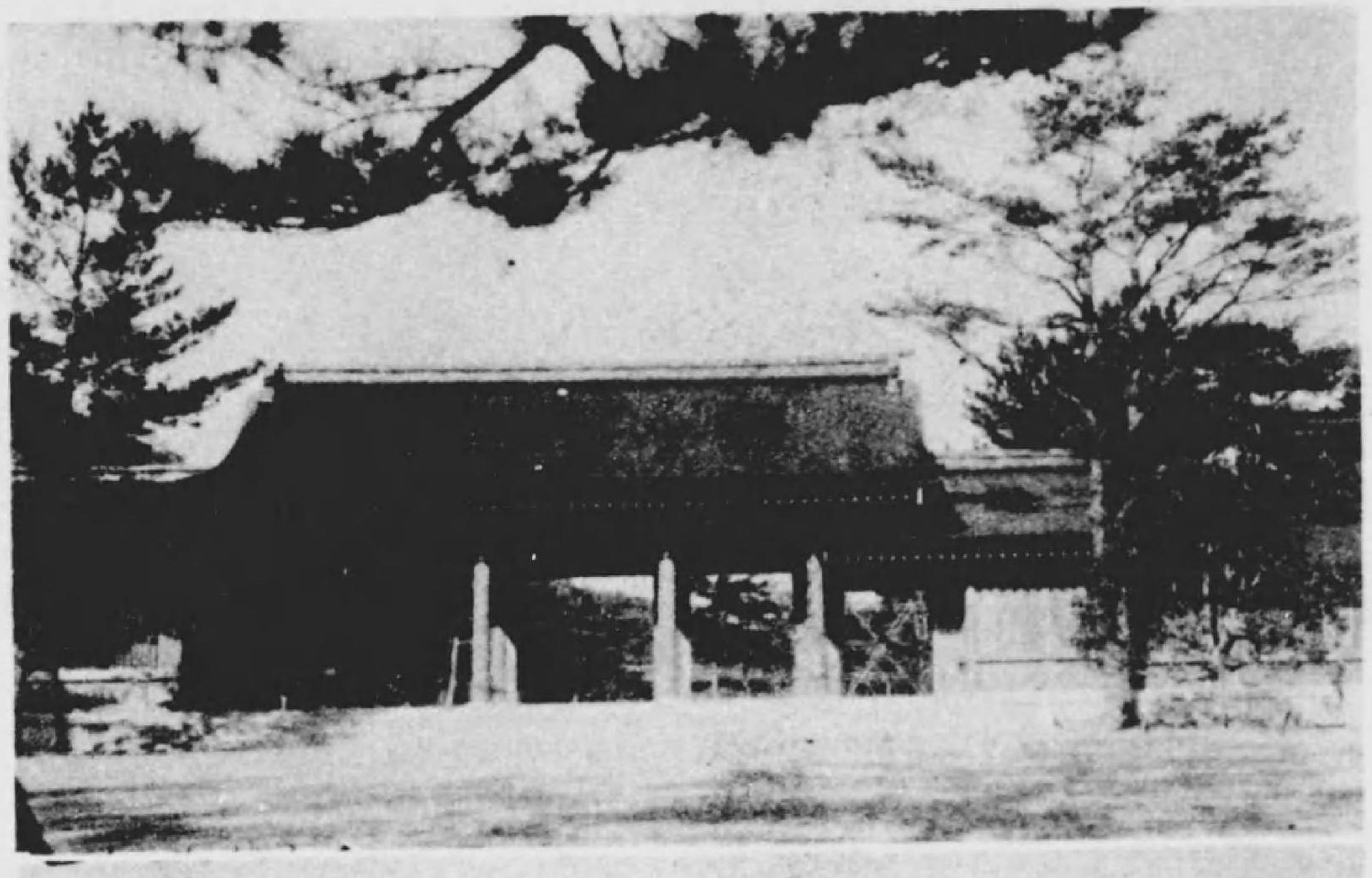
千早城址、赤坂城址、觀心寺、楠妣庵、等、いづれも學校からすぐ近い。生徒は日曜ごとに、親しい同期生と相伴なうて、あらゆる史蹟を探ね歩き、懷古の思に咽んでは、また更に方々へ登山もやる。辨當は無論、自給自足の飯盒炊事だ。

生死を共にする親友同士が、山に登つて薪を拾ひ、皆で炊いた飯盒飯に舌皷を打ちつゝ肚の底から語り



金剛山の遠望

楠公誕生地の碑



橿原神宮

千早城址を望む

あふ樂しさ、目の下にひらけてゐるのは、攝河泉の沃々たる大平野だ。

四月三日の參拜　四月二日には、上級生が二十一時（午後九時）頃から、橿原神宮を參拜に行く。險しい葛城山脈の夜道を、徒歩で踰越えて、先頭の早い者は夜あけ前の四時頃に、神宮の鳥居前に着いてゐる。

明くれば四月三日の神武天皇祭日なのだ。一同謹んで、この佳き日に參拜し、祖國の光榮を心から祝ふ。これまた本校生徒に惠まれてゐる一つである。

春夏秋冬の行事は、他の幼年學校と大差はない。訓練旅行は、名古屋地方、中國地方、更に九州方面へ出て行つて、見聞をひろめる。游泳演習は、和歌山縣の波和やかな湯淺海岸に、野營には、山深い丹波の福知山の長田野へ、武裝して行くのだ。

一年の行事のうちで、特に盛大に開くのは、楠公會である。金剛山を仰ぎつゝ河内の國の武學寮に、三年間を鍛へられる本校の生徒は、大楠公の『七生報國』の大精神を、自分達こそ昭和の御代に體得發揮すべき覺悟を、十二分に養成されるのだ。

見事な跳躍

廣島陸軍幼年學校參觀記

☆鯉城を仰ぐ廣大な武學寮

廣島陸軍幼年學校長
中川留雄大佐

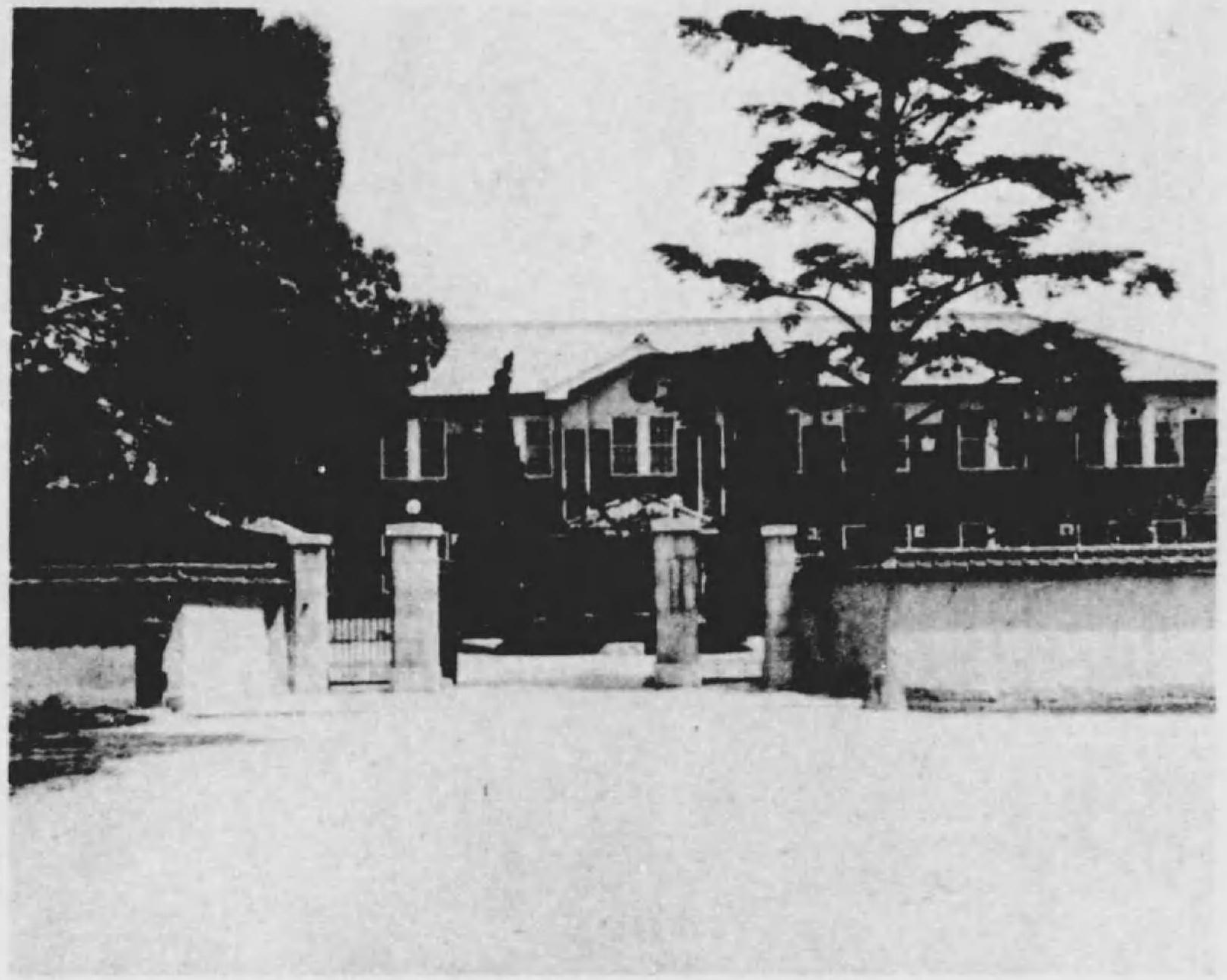
流れ清き大田川の三角洲に在る廣島市は、靜かな水の都だ。その眞中に『鯉城』と呼ばれる古い城が、昔ながらにそびえてゐる。本校は、この鯉城の眞下に建てられて、幅四十米ほどのお濠の向かふに屹立してゐる天守閣と、全校舍が相對立してゐる。卽ち古と今との武門の譽を、こゝに集めた觀があつて、四邊に嚴肅な氣分が溢れてゐる。

しかも、本校の所在地は、前に步兵第七十一聯隊の屯營の在つた跡なのだ。一聯隊の敷地を全部、本校が受けついだのたから、校庭も廣く平かに、見るからに清潔そのものである。幾千名の將兵がゐた一聯隊の跡を、そのまゝ本校の敷地にしたのは、いかに國軍が幼年學校を重く見て、生徒の將來に大きな期待をかけてゐるかを、このこと一つだけでも知り得られるのである。

鯉城の水濠によつて本校の外廓が、きちんと區劃されてゐる。城を左手に見ながら校門を入ると、正面に燦然たる菊花の御紋章を仰ぎ、拜禮して右側を見ると、三列の生徒舍が整然と平行してゐる。左側には、大講堂、高等官集會所などが見えて、その向かふに白い平かな校庭が廣がつてゐる。

英靈五十二柱　廣島特有の眞白な砂が、校庭を掩うてゐて、いかにも淸らかだ。その北側に、これまた淸らかな立派な鳥居が立つてゐて、奧にお社が見える。前を通る生徒が皆、敬禮をして行く。この嚴肅な風景に記者はまづ胸を打たれた。

このお社は、鑒國神社と言はれる。本校出身の先輩將校が主となつて建設し、祭神は畏くも、天照大神、神武天皇、明治天皇の御三神と、猶、本校卒業の戰死將校五十二柱の英



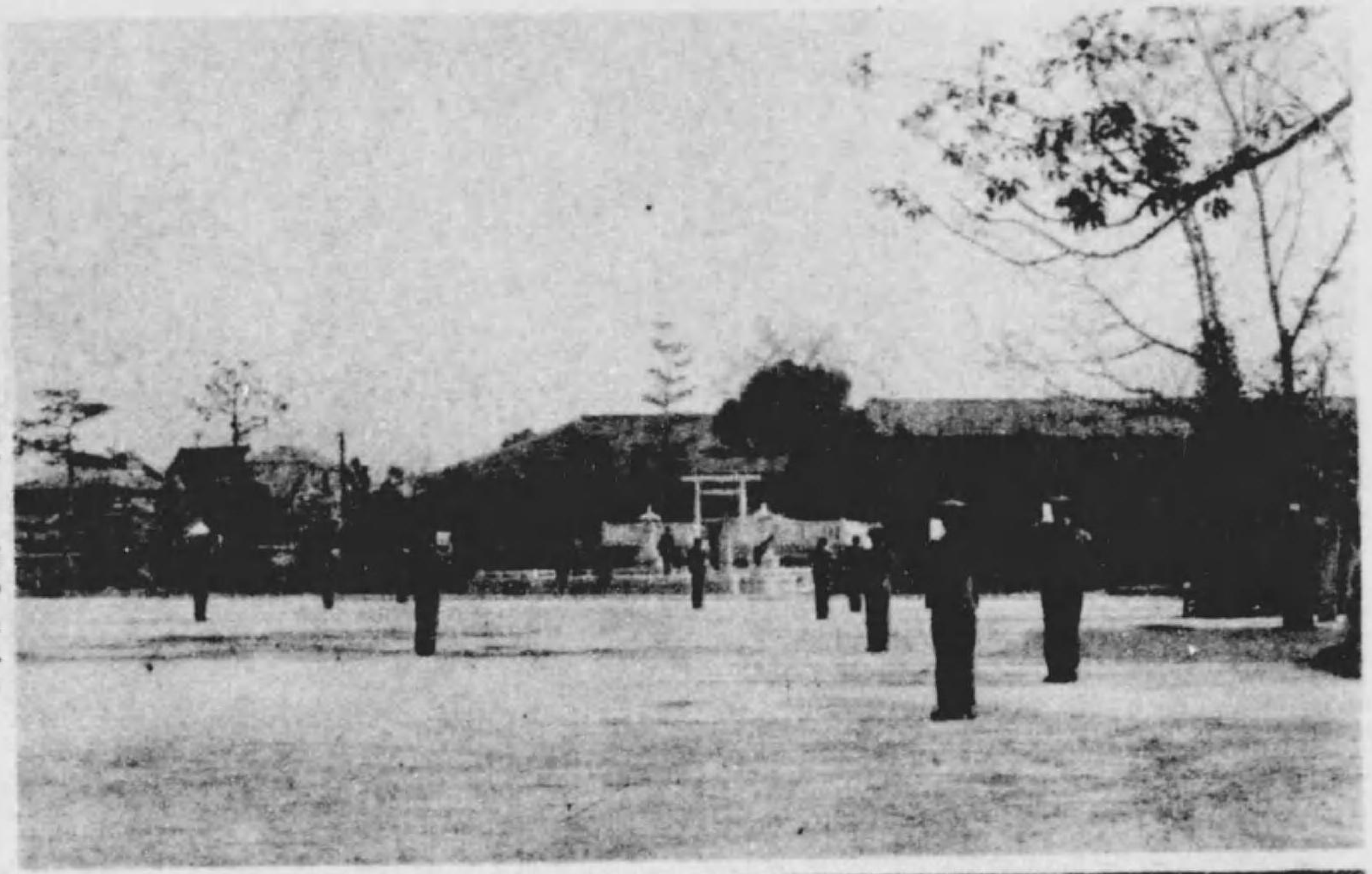
廣島陸軍幼年學校正門前の景

靈を祀り奉り、生徒一同の尊崇の中心とされてゐる。

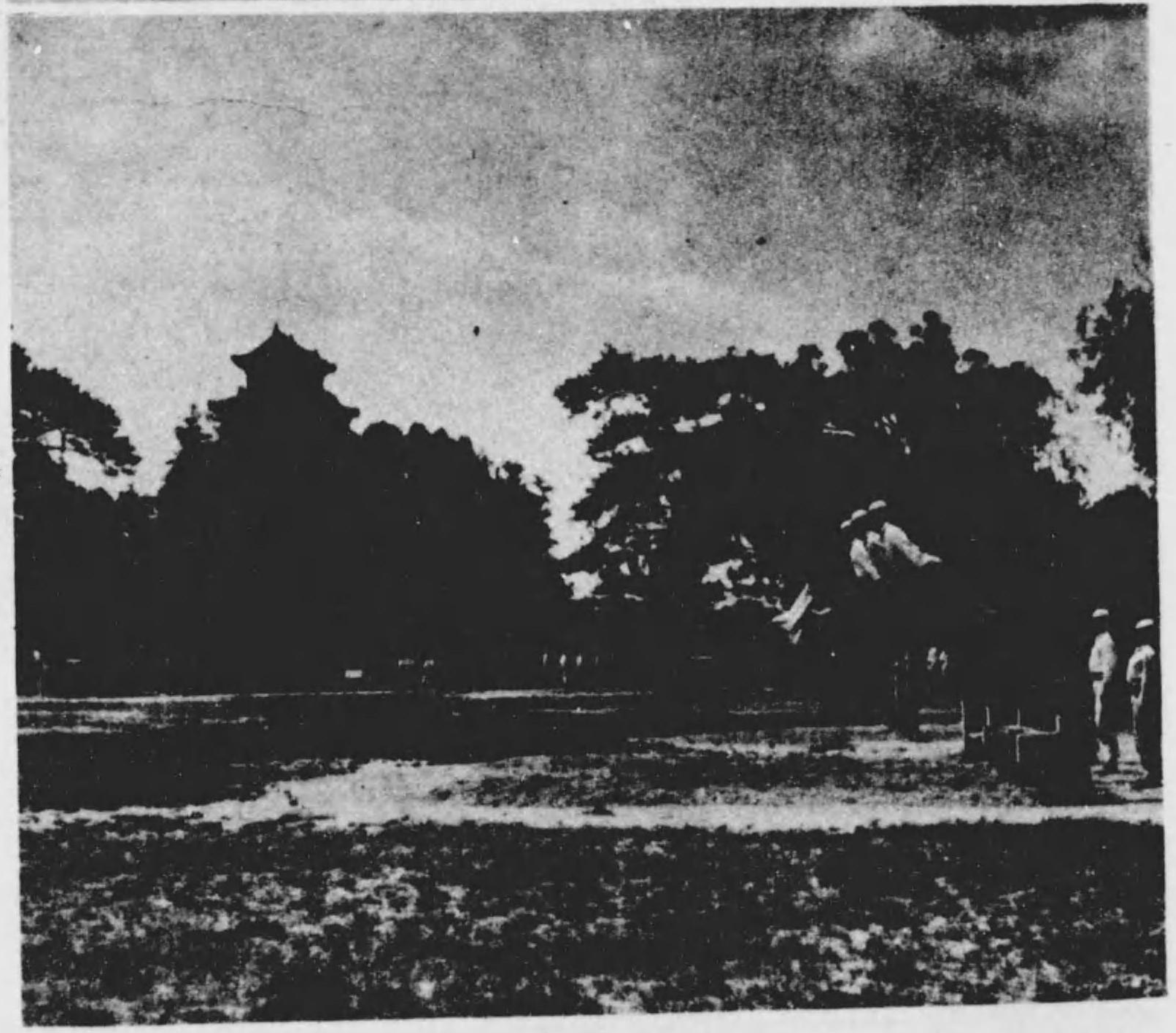
祭神の中には、熱河戰に勇猛決死の髑髏隊長池上大尉、蘭州空襲に華と散つた二井大尉等がゐられる。廣い記念室へ行つて見ると、それら先輩勇士の遺品が保存されてゐて、一死報國の實訓に接する。生徒は皆ここに無言の激勵を受けて、諸先輩の名を辱しめずと、毎日の課業に全力を盡くすのだ。記者もまた、それらの遺品の前に立つた時、肅然と身の引きしまるのを感じたのである。

小島の少年王　廣島市内は、縱横に淸い川が流れてゐて、市の南はすぐに瀨戸内海だ。日本三景の一つである風光麗しい嚴島が、西の海岸にある。その近くの小島へ、夏の游泳演習に行く。島の中に立派な宿舍が建つてゐて、本校の生徒だけが行くのだから、あたかも小島の王樣になつたやうだといふ。大勢の少年王が、この島の海岸で泳いで眞黑に鍛へられる。一米も泳げない全くの金槌でも、二週間の演習に、千米位は平氣で波を突破するやうになるから愉快だ。

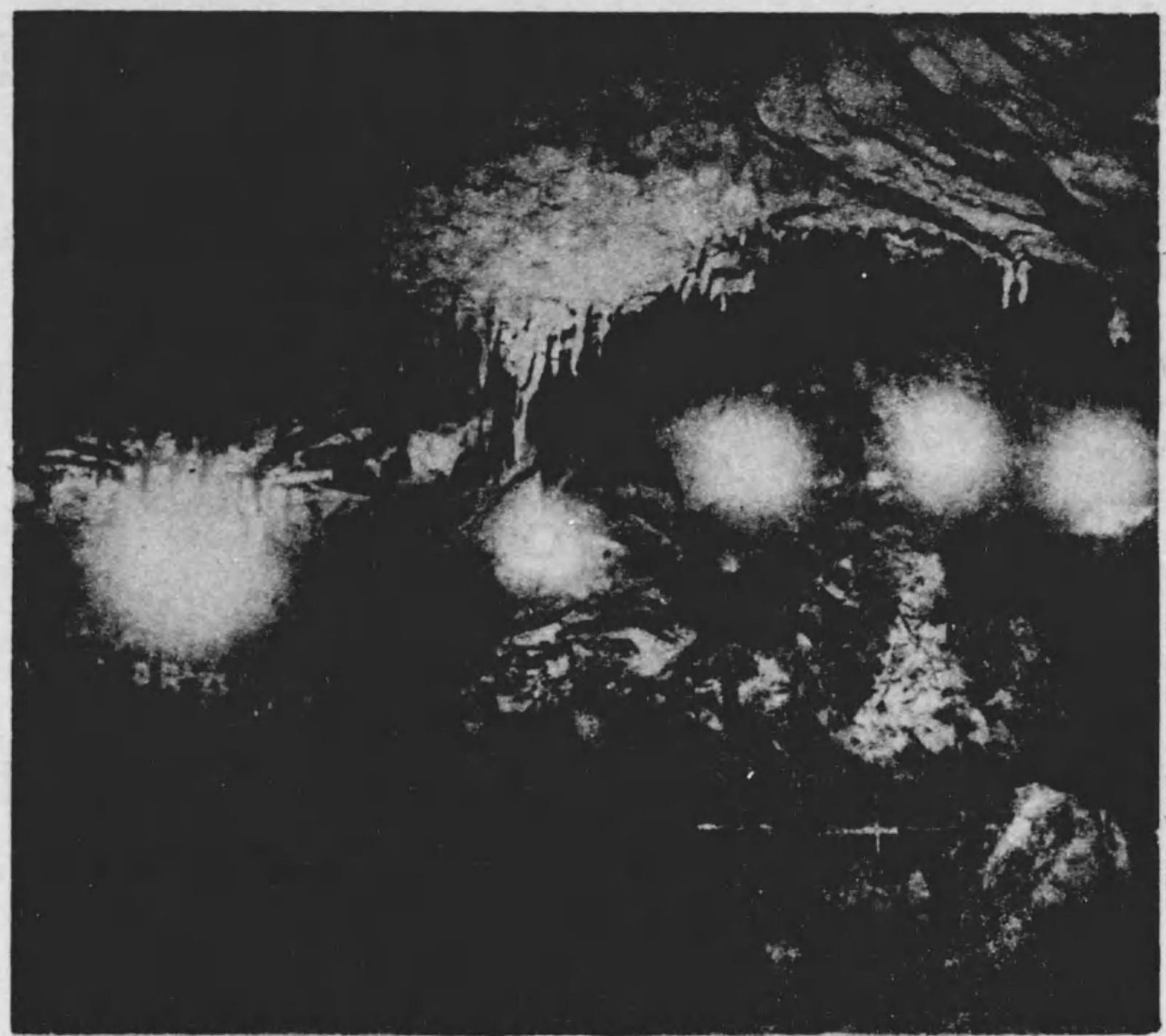
御聖德を偲ぶ　本校には、他の學校にない特別の行事がある。卽ち九月十五日の『進藤記念日』だ。明治



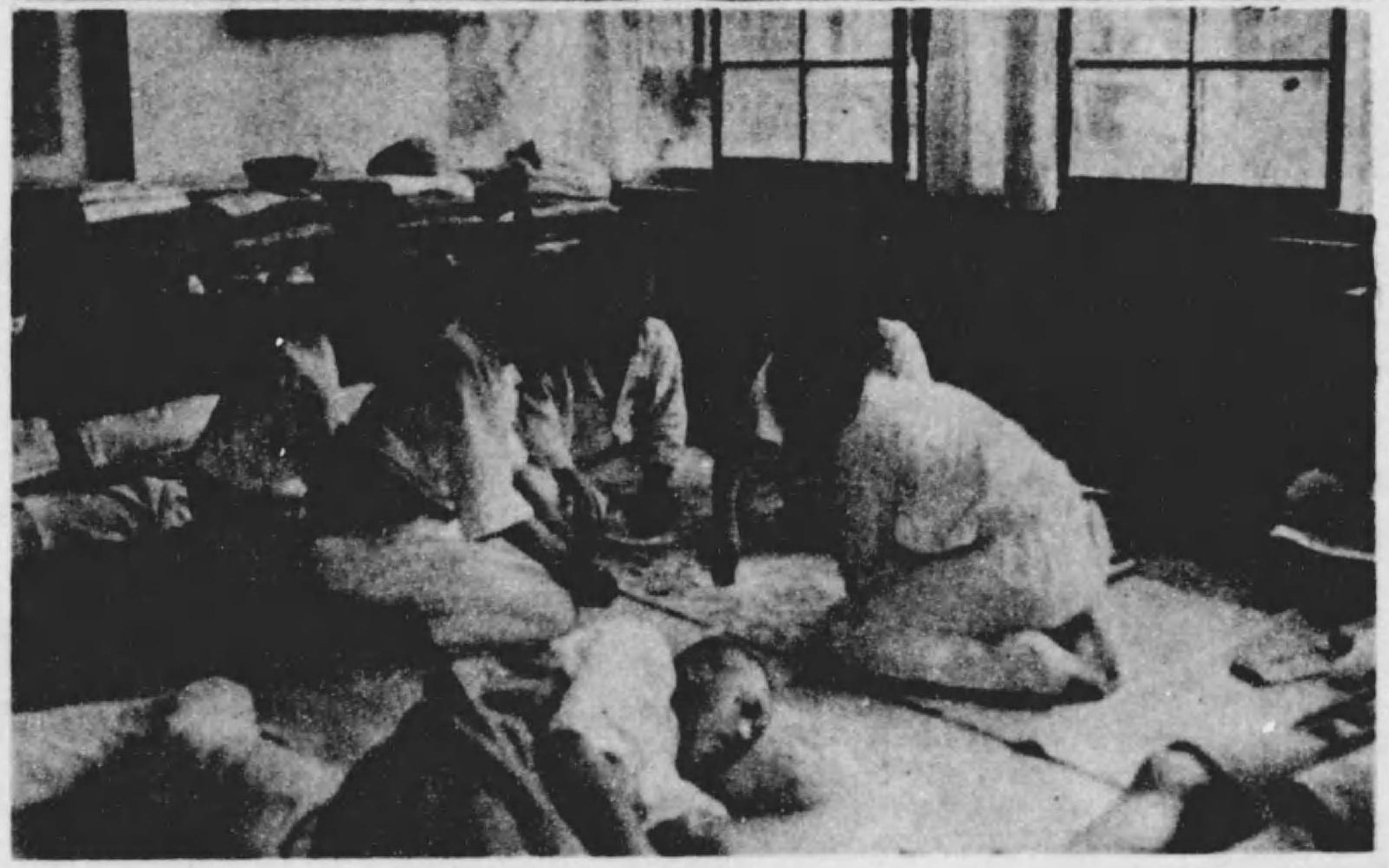
肇國神社参拝及び遙拝と御勅諭奉讀



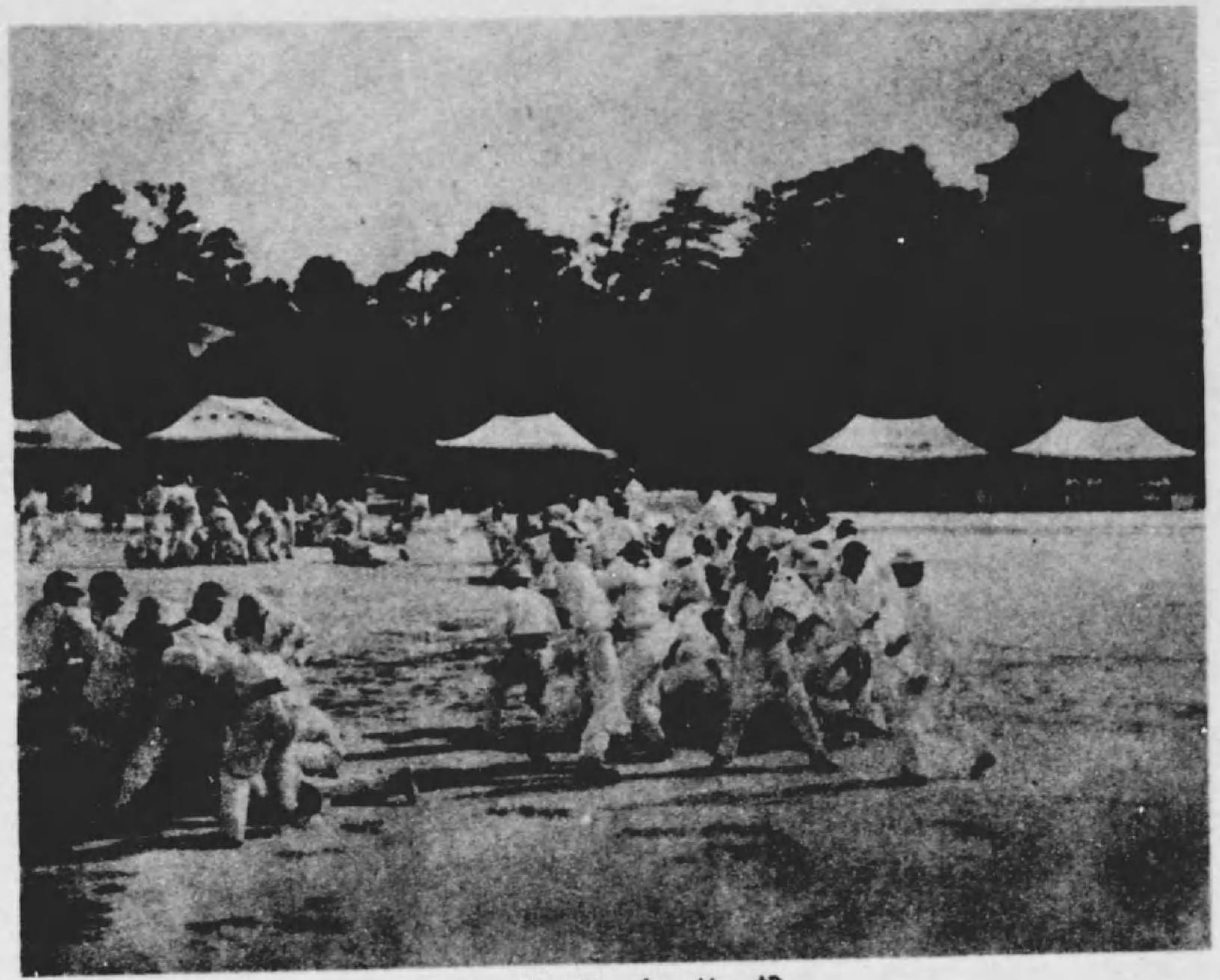
鯉城を仰ぎつゝ、身體を鍛へる



訓練旅行——大いに見聞を廣め、知識を豐富にする（寫眞は鐘乳洞）



游泳演習を終つて晝の休憩



愉快な運動會

二十七年の九月十五日に、畏くも、明治天皇が淸國との開戰に大本營を、東京から廣島へ進めさせられた。これは御親征の意義があつて、廣島市にとつて今なほ最大の記念になつてゐる。その九月十五日、生徒は學校のすぐ南に在る舊大本營を參拜して、明治天皇の御聖德を偲びたてまつる。

陛下が日夜、征戰の軍務をみそなはせられた御室は、眞に御質素きはまるもので、これを拜する生徒は皆、御勅諭の中の、

「一　軍人は質素を旨とすへし」

を心に拜唱して感激に咽ぶのである。

春の訓練旅行は、九州に渡るのが第一學年、山陰地方に第二學年、近畿地方を第三學年が廻つて來る。いづれも見聞をひろめて愉快な旅をつゞけるのだ。

秋の野營は、鐘乳洞で有名な山口縣の秋吉臺へ出て行つて、大いに心身を練る。

日曜の外出には、嚴島へ出かける生徒もある。後の山上へ登り、馴れてゐる鹿へ餌をやり、社殿の廻廊に並んでゐる豐太閤の陣太鼓などを見て、名將の面影を偲ぶといふ。

熊本陸軍幼年學校參觀記

☆無言の教訓を與へる阿蘇山の雄姿

熊本市から菊池電車で北へ行くと、間もなく廣漠たる熊本平地を縫つて進むうちに、やがて本校の前に停車する。そこから、なだらかな坂路を上つて行くと、熊本放送局の上空にそびえてゐるアンテナに並んで、本校校舍の整然たる屋根が見える。

熊本陸軍幼年學校長
陸軍少將鯉登行一閣下

校舍の背景になつてゐるのは龍田山だ。西面して立つてゐる校門を入り、木立の前を左へ廻ると、菊花の御紋章かゞやく本校の正面へ出る。

無言の實教訓　所在地は熊本市だが、平野の郊外に離れてゐて、一段と高い臺地の上を占めてゐる本校は、眺望する風景が遙かに廣く、市街は平野を隔てて遠く霞んで見える。

明治十年西南戰爭に、谷干城少將が死守した有名な熊本城は、市街の少し右よりに、當時の武功を語つて歷然と立つてゐる。なほ右の方に一際高くそびえてゐるのは、金峰山だ。

更に東の方へ視線を轉じると、空の白雲と見ちがふばかりに、白煙を遠くなびかせてゐる雄大な噴火山が、四方を壓する如く屹立してゐる。即ち阿蘇山だ。巍然として動かず、しかも、烈々たる火煙を永遠に噴いて止まない、この阿蘇山の雄姿は、本校の生徒に毎日、無言の教訓を與へてゐるのだ。

本校附近の地形は、熊本平野といへども、方々に起伏せる丘あり、谷あり、田あり、畑あり、これらが演習場として、生徒の練武に適當してゐる。その上に校庭の廣さ約五萬坪、實に廣くて、生徒はあくまでも伸び〳〵と潑剌と育つてゐる。

雄大剛健なる抱負　生徒は勿論、全國から集つてゐる。が、多いのは九州男子だ。鎭西の地に育てられた剛健不屈の氣象が、おのづから校内にみなぎつてゐる。

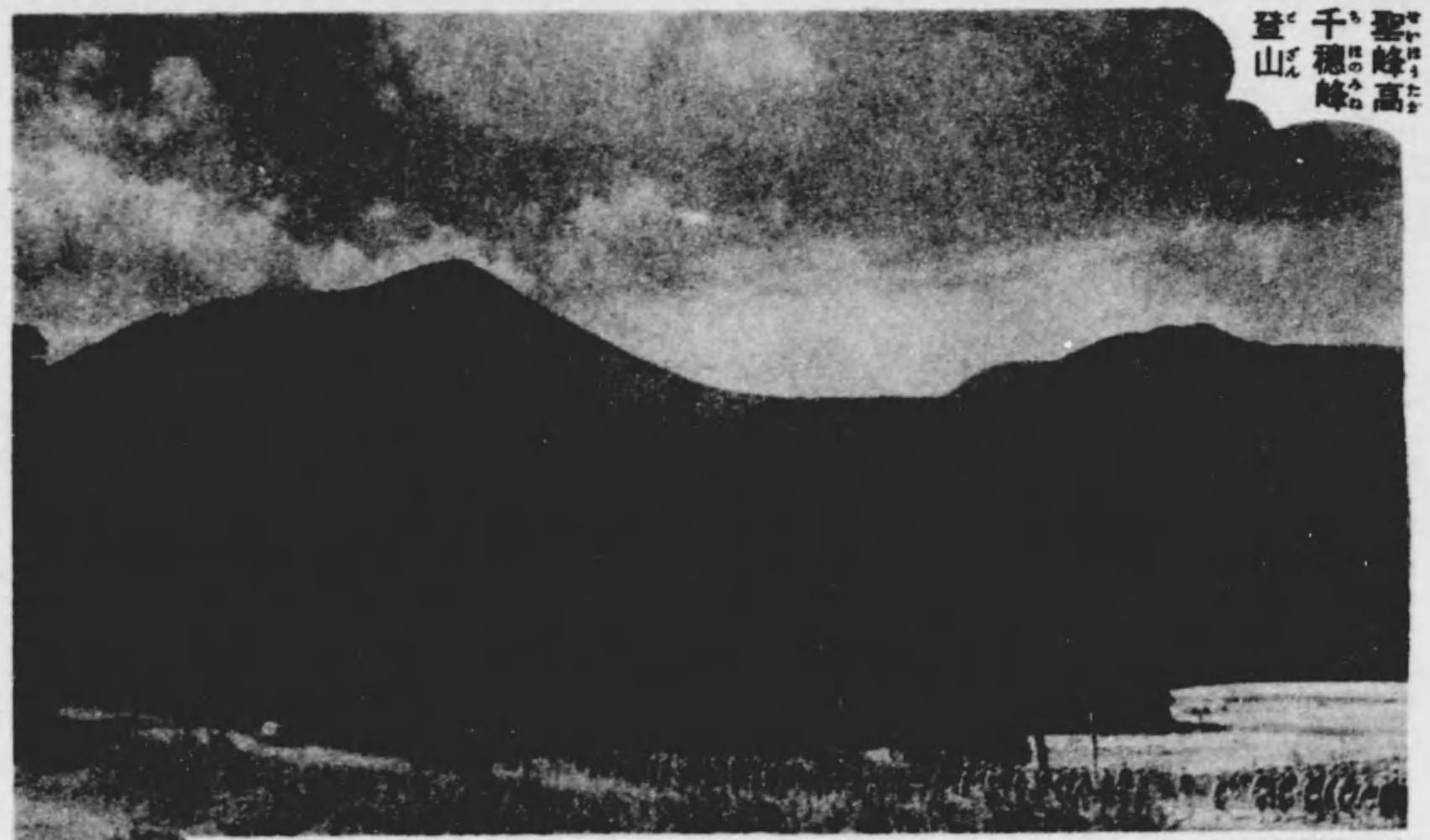
自習室——眞劍に勉強する

勤王忠節を家憲とした菊池氏の時代から、九州には幾多の英傑を出してゐる。西鄕隆盛、大久保利通、明治維新を背負つて立つた二大人物を始め、日露戰役の總軍司令官大山元帥、軍司令官であつた奥元帥と野津元帥等、數へ來れば日本近代史上に有名な人々が實に多い。生徒にとつてこれらは皆、九州出身の大先輩である。

滿洲事變の際、興安嶺の鐵道に驀進し來れる敵列車を目がけて、單身、脫線器をひつさけて進み、身をもつて顚覆させると共に自分も朔北の華と散つた有名な荒木大尉は、本校出身の第二十六期生である。

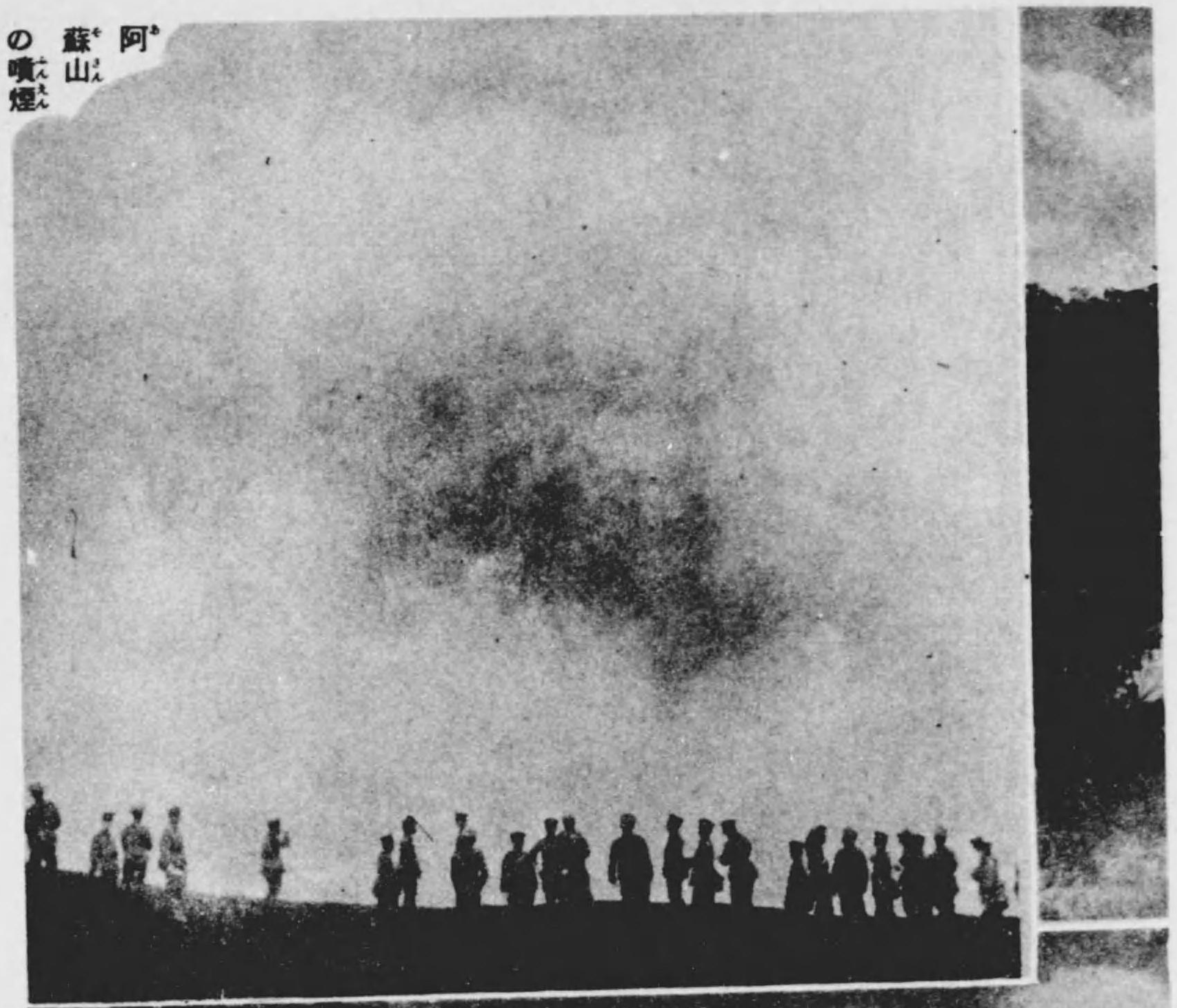
熊本城の雄姿、阿蘇山の噴煙、幾多の英傑と先輩の勇士、これらの感化を日夜に受けつゝある本校生徒は皆、將來に對して剛健雄大な抱負に燃えてゐるのだ。

大矢ケ原の露營　熊本もまた名所と史蹟の多い所である。加藤淸正公の築いた熊本城は、前記の如く西南戰爭に官軍籠城の遺蹟だ。單身傳令の任務を城外に全うした谷村計介の逸話も、實地で聞くと血が沸く。水淸き水前寺に詣でたり、或は江津湖畔に悠々と散歩するのも、日曜の樂しみの一つである。隈府に健脚を伸ばして菊池神社に精忠の一家



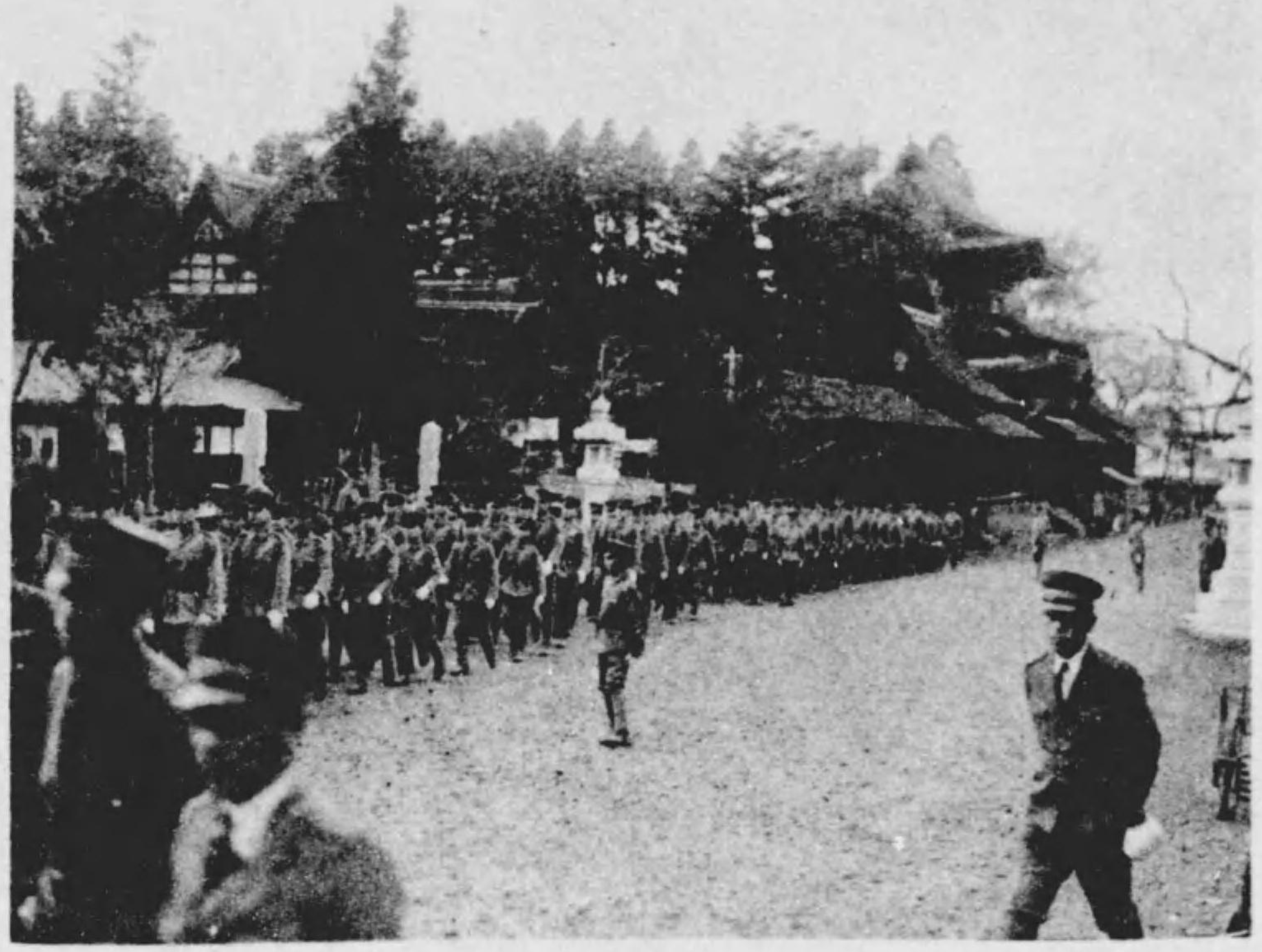
聖峰高千穂峰登山

故荒木大尉の碑

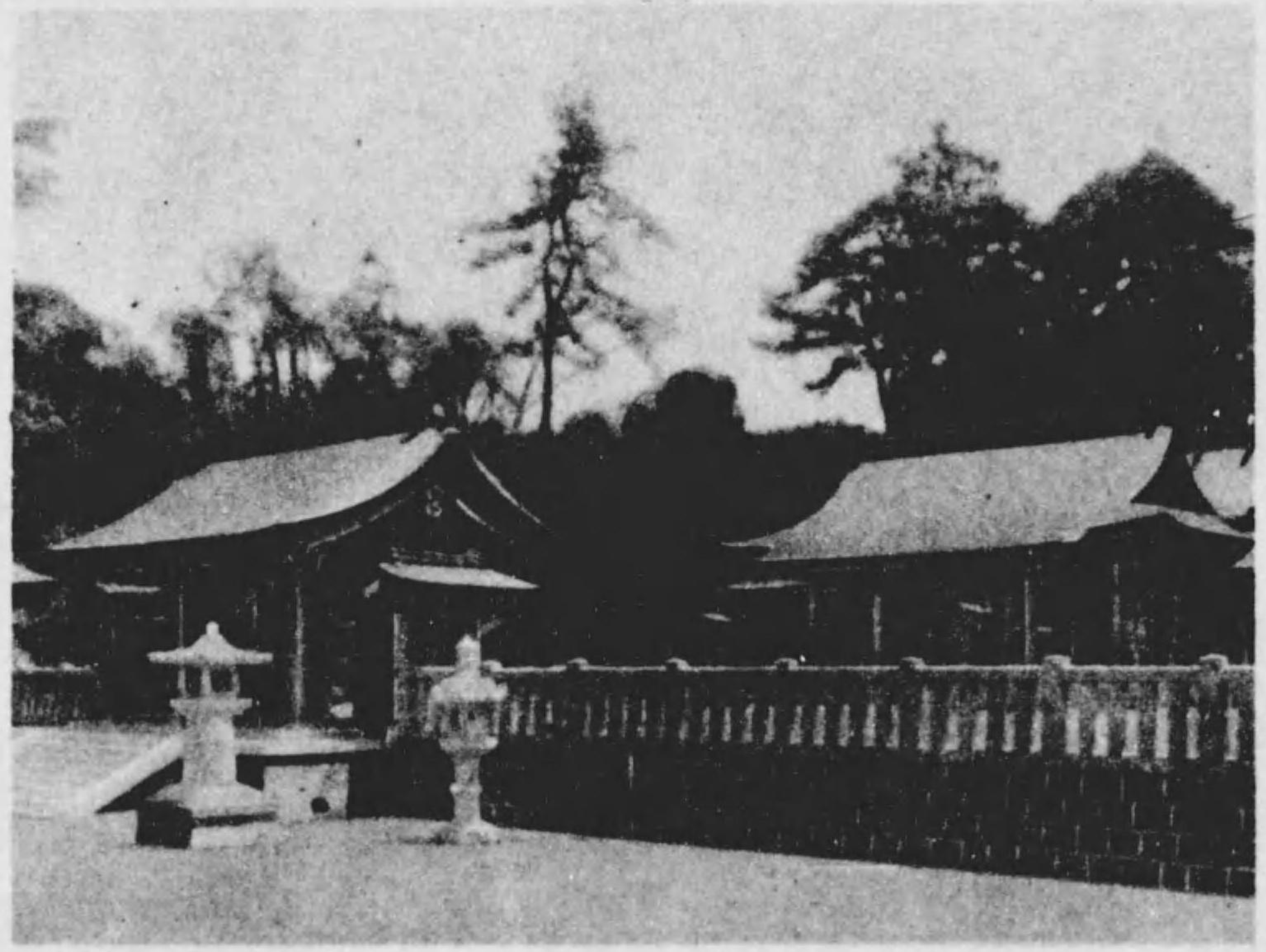


阿蘇山の噴煙

熊本城



阿蘇神社參拜



廣瀬神社

整然たる寢室――寢臺はすべて木造だ

を偲び、或は竹田の廣瀬神社を參拜して、旅順港閉塞の軍神廣瀬中佐を追想するなど、いづれも將校生徒の本懷とするところだ。

春の訓練旅行は、九州一帶は無論、中國地方に、近畿地方に、眞黒な九州健兒が目を光らせて出て行く。游泳演習は、遠く肥前の唐津海岸へ出て行つて、黒潮に鍛へられ猛烈に泳ぐのだ。

秋の野營は、阿蘇山麓で武を練る。その名も豪壯な大矢ケ原に、夜間演習の時は露營して、秋草の中に夜をあかすのだ。朝夕、親しく仰ぐ阿蘇の頂上に登り、眼下の噴火に大自然の威力を眺めては意氣を旺んにして下りて來る。

× × ×

以上、日本全國に六校を設けられてゐる陸軍幼年學校は、それ〴〵環境による特長をもつてゐるが、志すところの精神は元より一つである。即ち忠節を本分とし、禮儀を正しくし、武勇を尙び 信義を重んじ、質素を旨として、貫くに誠をもつてする 勅諭の聖旨を心身に修めて、將來、皇軍の最も有爲なる將校たるべく、日夜、孜々として獻身精勵しつゝあるのである。陸軍幼年學校生徒の實生活こそ、賴もしきかな。

學窓から故郷の後輩へ

☆憧憬の星の生徒

「男兒立志出郷關、學若不成死不還」との固い決心と大なる希望とを持ち、懷かしき故郷を離れ、温かき父母の膝下を去つて我々が憧憬の幼年學校に入つたのは二年前の春だつた。

光陰矢の如く月日の經つのは早いもので、今や三年目の春を戸山臺上に迎へた。嬉々として新しき生活に勵しむ一年生の姿を見るにつけて、我々の入校時が思ひ出され、轉た感慨に堪へない。今、日記を繙き、古き追憶を辿り、自分の受驗より入校、今日にいたる幼年學校生活を語つて諸君の參考にしたい。

自分の陸軍將校への希望は小學時代より決定的のものであつた。天皇陛下の御爲に一命を擲つ日本男子として此程の面目、此程の本懷が又とあらうか。堂々と隊伍を整へ行進する軍隊、馬上より颯爽として指揮する將校、實に自分の最大の感激であつた。

中學に入ると同時に支那事變の勃發を見た。國民の歡呼の聲に送られ勇躍出征する兵士、血湧き肉躍るの感を如何ともする事が出來なかつた。天皇陛下萬歳を絶叫して鬪れる勇士、同じ忠義を盡くすならば、將校となつて御奉公しよう、それには幼年學校に入るのが一番よいと思ひ、誠心をこめて試驗場に臨んだのであつた。

幼年學校を受驗するには、先づ幼年學校とは如何なる處であるかを十分知つてゐなくてはならぬ。自分はこれを學校の配屬將校より承り或は「輝く陸軍將校生徒」などを讀み十分理解した。今簡單に述べて一層的確にしたい。

☆光榮に輝く幼年學校

幼年學校は恐れ多くも明治天皇の聖旨に基き開校されたものである。卽ち明治四十一年侍從武官を陸軍中央幼年學校及び陸軍地方幼年學校に御差遣遊ばされ、

陸軍幼年學校生徒ハ將來國軍ノ楨幹トナルヘキモノナリ故ニ其志操堅確品性高潔學術優秀ナルヲ要ス之ヲ以テ幼年學校生徒ノ性格涵養ニ教育ニ就キテハ陛下ノ常ニ御心ヲ留メサセラルルトコロナリ

との聖旨を傳達せしめられたるのみならず、古くは朝香宮、東久邇宮兩大將宮殿下を始め奉り、近くは賀陽宮邦壽王殿下

が第四十期生として、十五方の皇族殿下、王公族殿下が賤に交りて學びますの光榮に浴したのである。かくの如き立派な學校に學ぶのは日本男子の本懷ではないか。兎に角約半年の努力は報いられ、三月十日陸軍記念日の佳き日には、待望の採用通知を受取つた。私及び父母弟妹の喜は如何ばかりであつたらうか。自分の一生の確乎たる方針は既にきまつた。今後は一途に其の本分に邁進すればよいのだ。合格通知を受けてより上京までは大いに體力を練り精神を鍛へた。軍人勅諭も拜誦した。そして三月末には、恩師及び友達の激勵と羨望とを後に、入校のため上京、四月一日櫻花爛漫の日、菊花の御紋章燦と輝く校門をくゞつたのであつた。

憧憬の星の生徒——立派な敬禮

☆心は躍る入校

學校に入つては先づ指導生徒の世話で軍服に着更へ軍帽をかぶつた。其の時まで緊張してゐた頰は崩れた。皆の顏も微笑んだ。うれしさうな父母の笑顏、自分は親の恩の萬分の一にも報いることが出來たと思つた。

間もなく大講堂にて入校式、第三學年に御在學中の賀陽宮邦壽王殿下に拜謁を賜はり、無上の光榮に感激したのも此の時である。後には母と共に大食堂にて上級生と會食、赤飯に鯛の尾頭付の樂しい食事、校長閣下の御訓示があり、自分の身は最早自分のものでない、國に捧げた尊い身だ、しつかり勉強せねばならぬと固く固く決心した。

午後には父母とも別れ、生徒監殿より幼年學校生活のお話があつた。生徒監殿は直接生徒の訓育の擔當者

であるから、事細かに大小となく喜んでその指導に從ひ、進んでその薫陶に浴さねばならぬ。卽ち我々は生徒監殿を父上、二人の班長殿を母上、上級生を兄、同期生は互に生死を盟ふ兄弟とし、利己的感情を一擲し一國の名譽の爲に各々本分を盡くすのである。從つて同期生を呼ぶのに、君、僕などの呼び方はしない。俺、貴樣と呼ぶ。亂暴のやうではあるが、此の方が親しみが出るのだ。これは學校生活に馴れてくるに從つて分かつてくる。

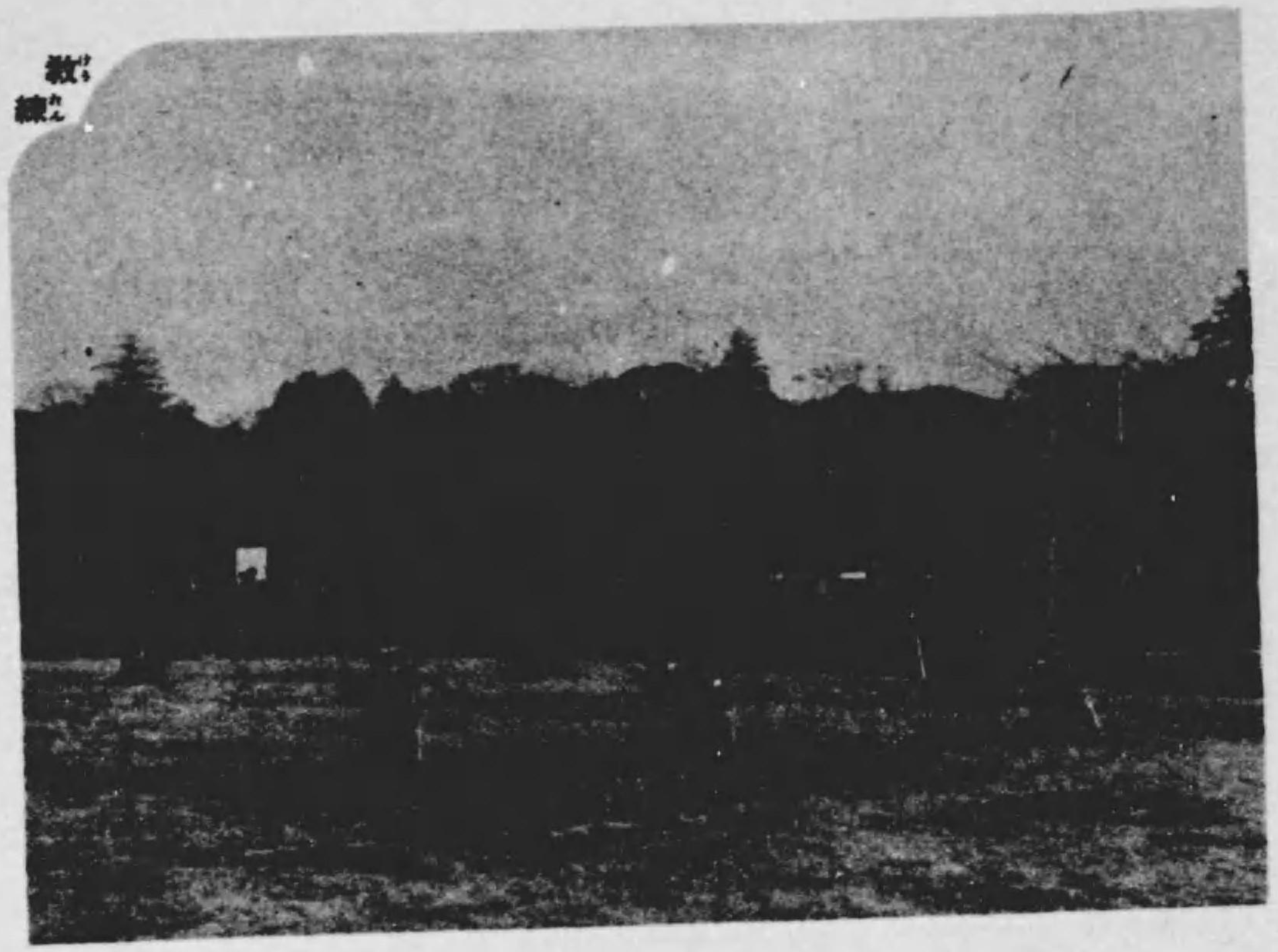
☆日々の生活

軈て入校第一夜が訪れた。自習室の明るい電燈の下で今日の日記を書く。その日記には『朝八時父母と共に旅館を出づ。日本晴なり。空に囀る鳥の聲、自動車の警笛、街の並木、總べてが余の入校を祝ふが如く見え、そして聞えたり』と。又校門を入る時、『燦と輝く菊花御紋章に敬禮、その時の氣持、實に筆舌に盡くす能はず、眞に感激の極みなり』と。かくて九時半消燈喇叭と共に一齊に消燈、昨日までとは違ひ、今夜は寢臺の上に寢るのも何となく嬉しさを感じた。入校第一夜の夢は何であつたか殘念ながら記憶にない。

翌日は六時起床喇叭の號音と共に、床を蹴つて起床、愈々幼年學校生活が始つた。指導生徒から寢室の掃除、洗面、靴の手入まで敎はる。其の後心身を潔齋し遙拜所にて遙拜をする。

およそ至高至大な君恩を思ひ國を愛し分を盡くして鴻恩に報いるのは臣たる者の道である。又慈愛撫育の父母を思ひ身を愼み力を盡くして高恩に報いるのは子たる者の道である。故に我々は、且晨心身を潔齋して宮城、伊勢神宮を拜し、至誠純忠を誓ひ靖國神社を拜しては先輩の名に恥ぢざらんことを祈り、父母のいます故鄕を拜しては今日一日も孝養を盡くさんことを思ふ。其の後勅諭奉讀をする。勅諭は精神敎育の本源である。一字一句腹から聲を出し誠心こめて拜誦する。實に神々しい朝の一時である。

六時四十五分から樂しい朝食だ。朝禮がすんだ後は上級生殿と面白く語りつゝ禮儀正しく食事をとる。八時より授業だ。程度は中學校と大差はない。唯語學だけは中學校と違ひ、東京幼年では獨佛露の三語だ。然し獨語も我々三年生が最後で二年生からは無くなつた。自分は獨語を志望したので獨語班になつた。又アルファベットからやり直しだ。直ぐ英語と交る。自分でも氣が付かない。敎官殿『私は大きいといふことを獨譯せよ』生徒『はい、イヒ　ビン　ビッグ』敎官『ビッグは英語だ』かくの如く授業は面白く且能率的である。午前



教練

四時間あり、午後は一時から授業か、訓育部の術科か、若しくは自習である。二時から四時までは前段後段の二つに分けて敎練、體操、劍術等をやる、柔道は二年生からだ。此等を術科といふ。術科は軍人必須の武道である。これによつて獻身殉國の氣魄が涵養される。四時より一時間は隨意運動、この時間には自分の不得意の武技を練磨する。五時半から夕食、一日中で一番和やかな一時だ。夕食後は軍歌、號令調聲、詩吟等廣き庭にあらん限りの聲を出して剛健の氣を養ふ。自分等が入校して始めて歌つた幼年學校の軍歌、それは今まで歌つた内の何にも比す事の出來ぬ程立派にして且勇壯なものであつた。二、三年生約三百名が一つ心になり聲を張り上げて天に叫ぶとき、そこに新しい勇氣が湧き出るのだ。

火木土の夕食後及び日曜休日には酒保がある。餅菓子、干菓子、果物等うまい物づくしだ。腹を傷めぬやう適度に食ふ。次第に學校生活に馴れてくると姿勢、態度等も嚴正になり言葉遣も正しくなる。『速く立派な將校になりたいな』と寢言に言ふ者まで出て來る。次第に動作も敏捷になる。喇叭號音は校長閣下の命令であるから、嚴守しなければならぬ。我々の日常生活は誠心の二字で盡きる。萬事誠心こめてやるのだ。

四月七日には天皇陛下より御下賜の御紋菓を戴き感泣しつ

跳躍

つ一部を故郷へ送つた。二十九日天長節には代々木練兵場にて觀兵式を陪觀御閲兵を賜はる。玉顔を眼のあたりに拜し奉つた時は無上の光榮に感泣した。

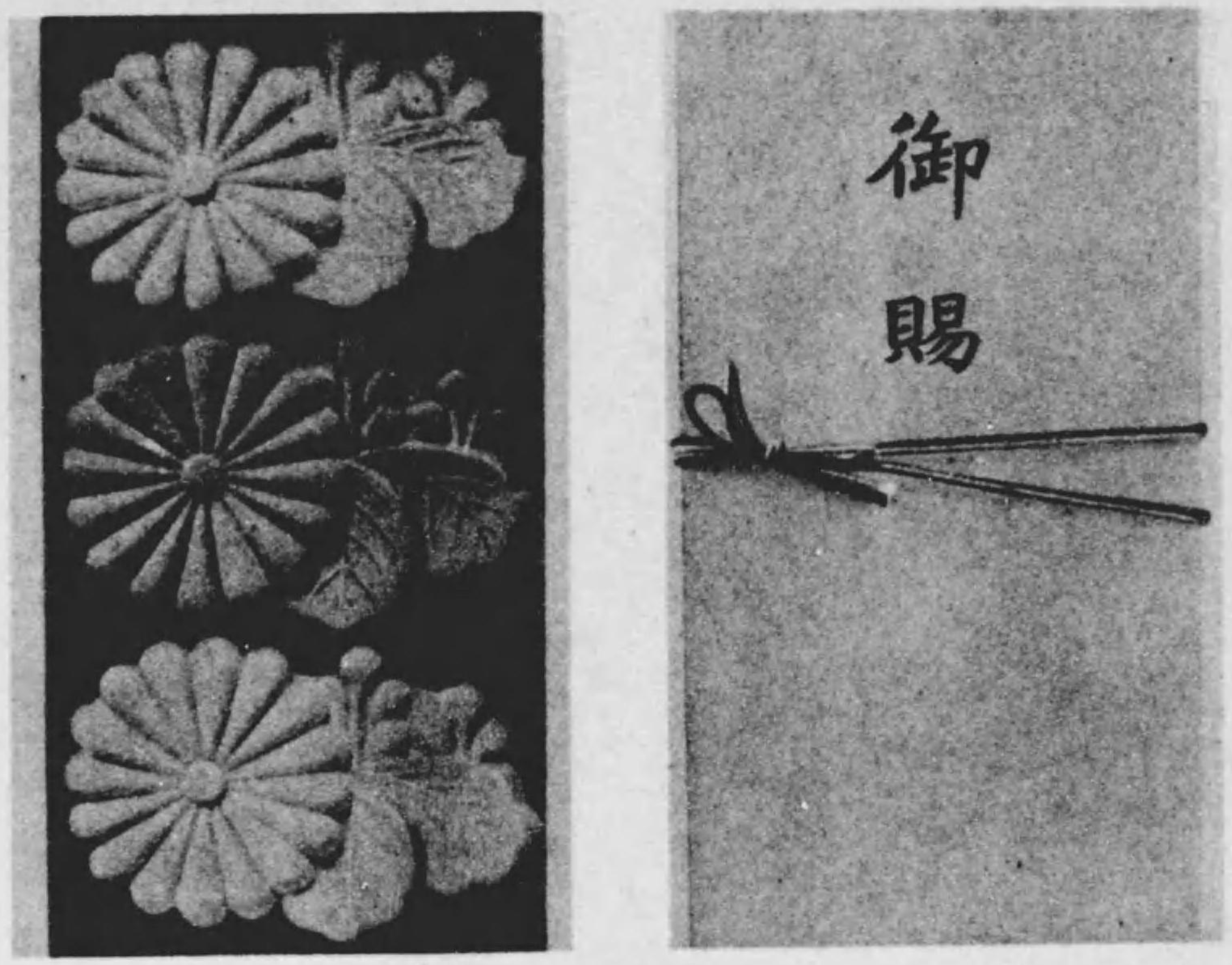
☆樂しい訓練旅行

新綠の五月には十日より訓練旅行だ。一年は箱根方面、第一日は鎌倉史蹟見學、賴朝の墓を訪ね、英雄の末路を惜しみ、鎌倉宮に詣でては、護良親王の盡きせぬ御怨に涙を流す。休憩時には先づ高所に登る。我々は他日三軍を叱咤すべき將となるからである。二日は强羅登山、大涌谷の壯觀を望み、蘆湖の絶景を讃へつゝ身體を練る。三日目は範賴の墓に詣で、最後の日は韮山にて、江川坦庵の反射爐等を見てその苦心努力に感心しつゝ歸途についた。

☆夏季休暇

五月末の中間考査も過ぎ、春の運動會も剛健愉快の裡に終へて、教練體操等に流汗淋漓となる頃は、何時しか期末考査も過ぎて樂しい游泳演習だ。一年の時は外房總の勝浦に行つた。

朝は一時間の啓發錄講義、二時間餘の游泳、午後一時間程泳いだ後は、渚で魚を釣つたり寫生をしたり、十分に潮風に浴



御下賜の御紋菓

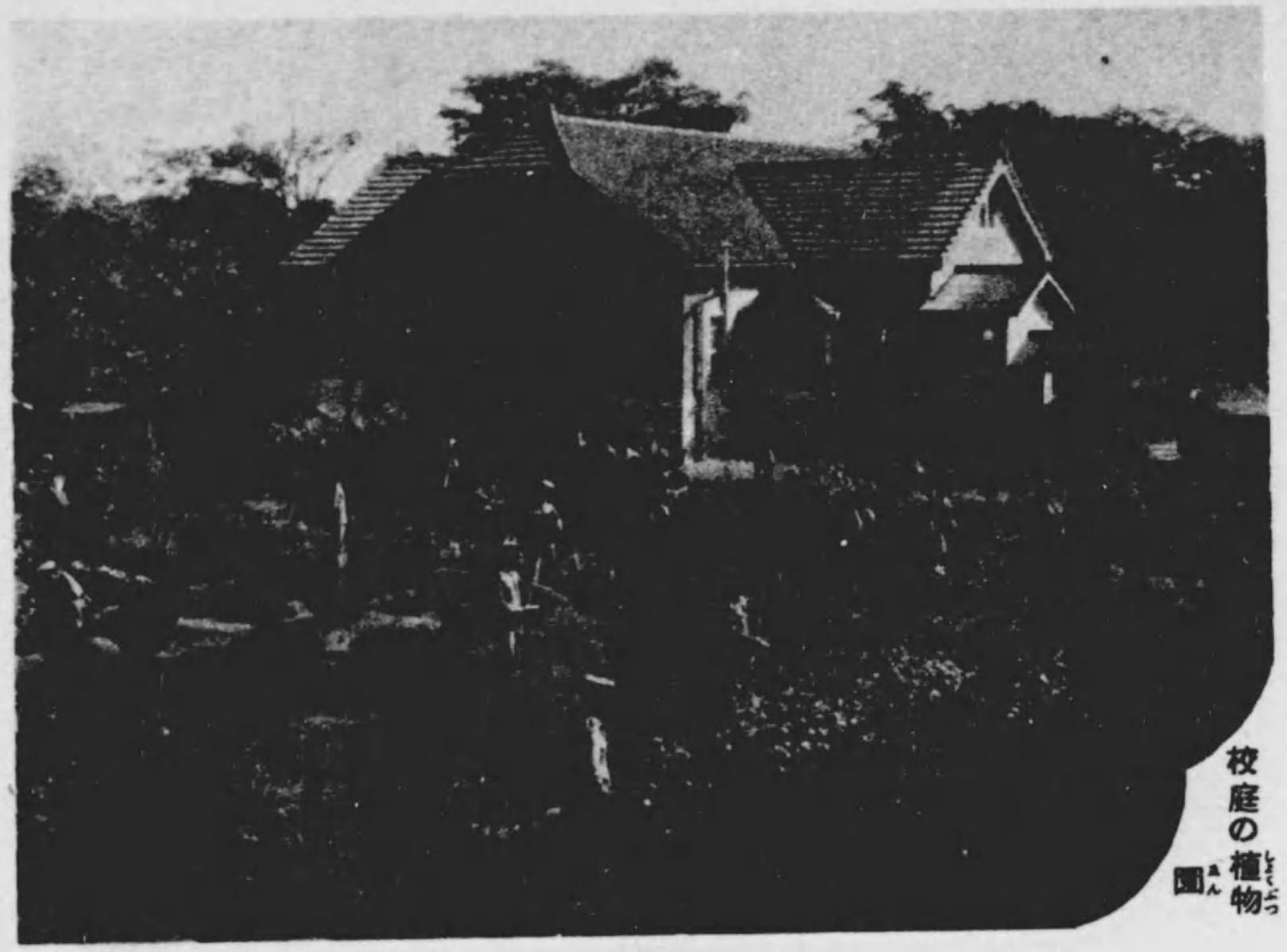
する。太平洋の荒波で二週間程鍛へた身體で愈〻待ちに待つた歸省だ。前夜は嬉しくて睡れない。心は既に故鄕に飛んでゐるのだ。

一學期を完全に終へ、今や歸省せんとする時の喜は何に喩へやうもない。驛頭には父母が待つてゐられる。弟妹が飛んで來る。この喜は東京に家のある者には分からないだらう。

休暇中も學校生活が拔けきらず朝は五時半には必ず眼が醒めるが、喇叭の鳴らぬが物さびしい。ラヂオ體操等は手ぬるくて、鐵棒で大車輪をやりたくて腕がむず〳〵する。家では餘り自分が立派になつたのに驚き喜ぶ。舊友が遊びに來て驚き羨む。約一箇月の間十分に心身を鍛へ、來る二學期に頑張る體力を造つて歸校する。

生徒舍にて再び戰友と顏を合はす時は皆眞黑で見るからに强さうである。新しい元氣と體力で學術科に張り切る時は方に天高く馬肥ゆるの候だ。軈て涼しくなり、琵琶湖に虫が鳴き出す頃には、富士の裾野にて廠營演習、連日富岳を仰ぎつゝ地圖讀解、夜間演習、試膽會、飯盒炊事等一週間の演習を終り、住み馴れた駒門廠舍を後に、懷かしき學校に歸つた。

☆優秀なる諸君を待つてゐる



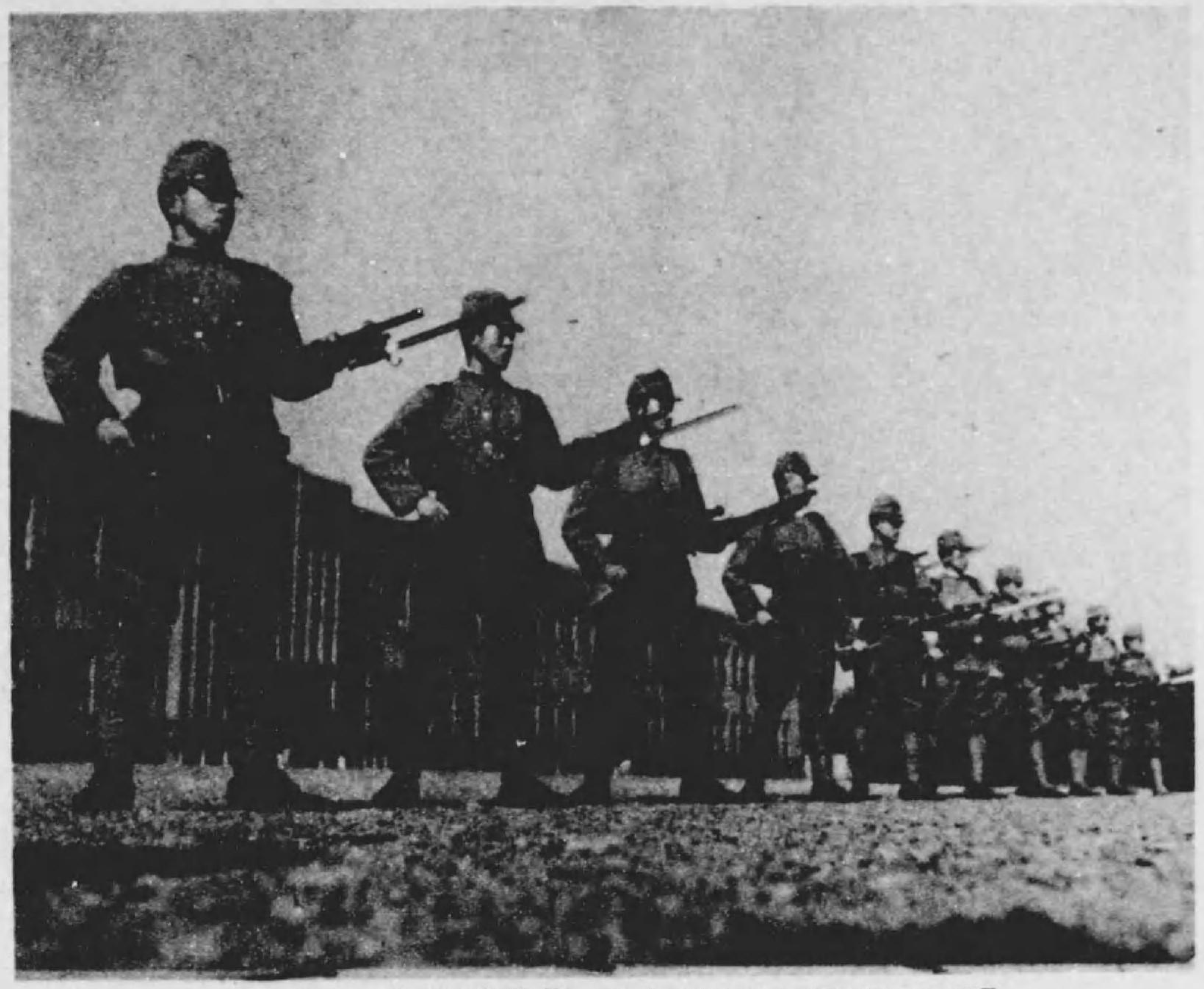
校庭の植物園

三月には三年生の卒業式あり、三人の優等生には辱くも御賜品を下賜あらせらる。冬休暇にて元旦を家に迎へた自分は軈て一月七日歸校、相撲見學、一週間の寒稽古等樂しき或は嚴しき行事を終へ、四月には第二學年に進級、新しい弟を迎へた。二年にもなれば少し鍛錬も激しくなる。

夏休も過ぎ廠營も去つて、四月には又新入生を迎へて、第三學年に進級し最上級生となつた。來年の三月は卒業せねばならぬ。責任の重且大なるを愈々自覺し、今のうちに立派な校風を振作せんものと張り切つてゐる。

扨諸君、我々幼年學校生徒否、全陸軍は諸君の如き優秀な後繼者を待ち望んでゐるのだ。校庭の櫻は諸君等の入校時再び爛漫たる花をつけようとし、琵琶湖は昔ながら變らぬ水を湛へて諸君の面影を寫さんものと待ち望んでゐる。合格の秘訣は努力勉勵することである。勿論身體は頑健であらねばならぬ。正月で弟妹等が樂しく遊んでゐるのを見れば、自分も遊びたくなるのは當然だ。その時には入校した時のことを考へるがよい。軍帽、佩劍、颯爽とした自分は諸君が努力の功成りて輝かしき榮冠を贏ち得られんことを祈つて止まない。願はくば諸君、精神一到何事か成らざらん の固き信念と弛みなき努力を持つて進まれんことを。

陸軍豫科士官學校の巻☆



「君の御へ楯と選ばれて、集り學ぶ身の幸よ」

市谷臺上の武生活

☆在校生

生徒 陸軍豫科士官學校は、卒業すると、各兵科（憲兵科を除く）の士官候補生になる『生徒』を入學させて教育する。

生徒は、陸軍幼年學校を卒業した者と、一般の中學校その他から採用試驗に合格して入學を許された者と、二種類ある。

しかし、その出身如何に關らず、教育と待遇その他に毫も差別のないのは言ふまでもない。

在校期限 生徒は、四月に入校して滿二年の課程を卒り、二年後の三月末に卒業して、『士官候補生』になる。航空兵科の生徒は、すぐ埼玉縣豐岡の陸軍航空士官學校に入る。その他の生徒は、四月以後十一月まで、八箇月を隊に入つて、隊附士官候補生の勤務に服してから、陸軍士官學校に入る。

陸軍豫科士官學校長　陸軍少將　牟田口廉也閣下

☆御皇室の御殊遇

本校は前に、陸軍中央幼年學校本科、次いで、陸軍士官學校豫科、昭和十二年八月、陸軍豫科士官學校と改稱せられたのである。歷史も古く、御出身の宮殿下が多くいらせられる。今まで生徒の卒業式には皇族殿下を御差遣あらせられ、優等生は御賜品拝受の光榮に浴するなど、皇室の御殊遇を忝くしてゐる。御卒業の皇族殿下、王公族殿下を謹記すると、次頁の如くである。

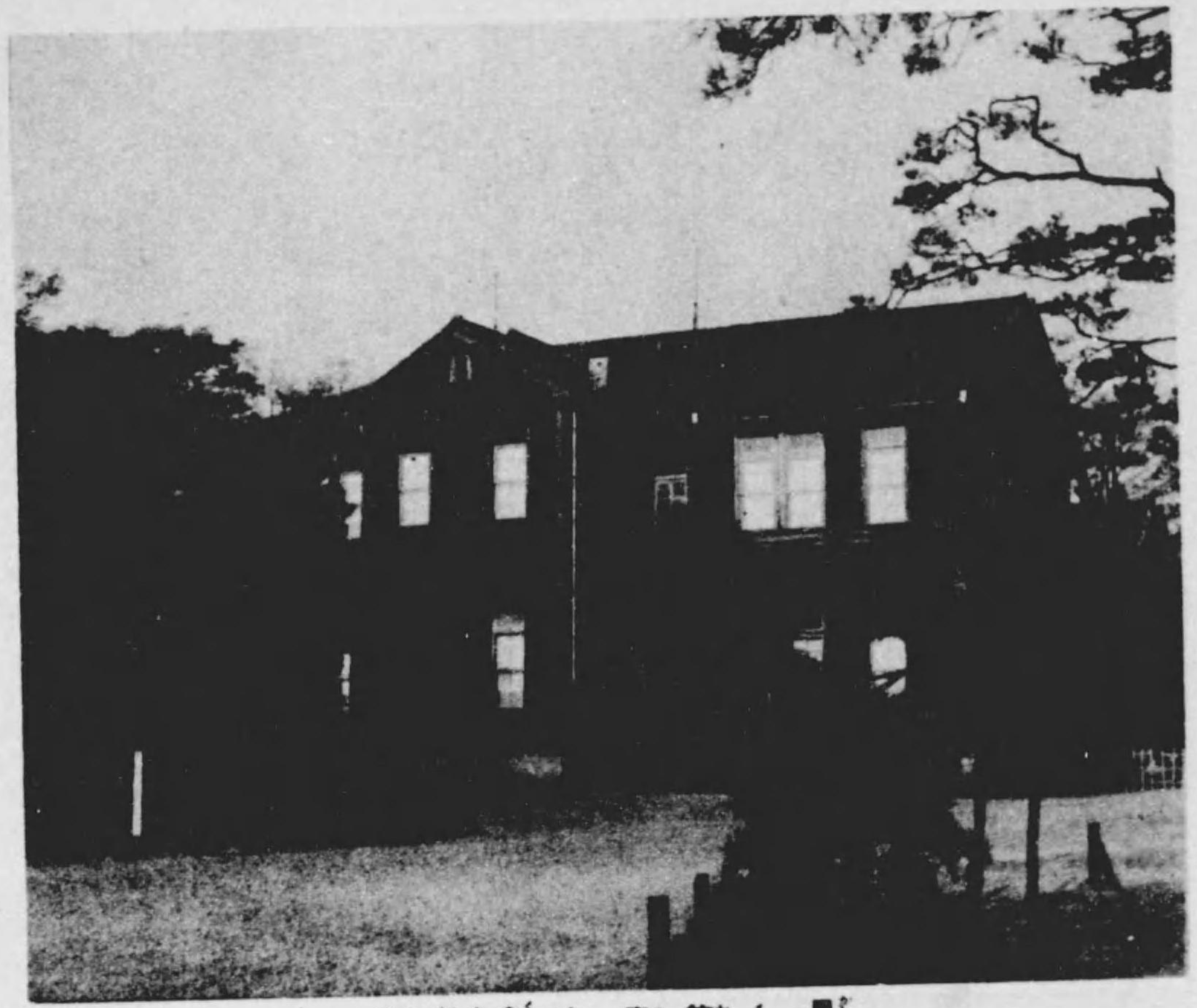
☆充實せる日課

生徒は普通學と軍事學と術科を教へられる。

普通學 科目は、修身、倫理、心理、論理、國語、漢文、作文、外國語、本邦史、外國史、數學、物理、化學、地學、圖畫などで、大體高等學校と同じ程度である。外國語は、英、獨、佛、露、支の五箇國の中で、一箇國語を修めることになつてゐる。

軍事學と術科 軍制學、兵器學、地形學、交通學、馬學、衞生學、その他『操典』とか『作戰要務令』とか『教範』とかの軍事専門の初步を講義される。一方には、教練、陣中勤務、射擊、劍術、柔道、體

故竹田宮恒久王殿下（明治三十五年御卒業）
朝香宮鳩彦王殿下（明治三十九年御卒業）
東久邇宮稔彦王殿下（明治三十九年御卒業）
故北白川宮成久王殿下（明治三十九年御卒業）
李王垠殿下（大正四年御卒業）
賀陽宮恒憲王殿下（大正七年御卒業）
山階宮芳麿王殿下（大正八年御卒業）（現山階芳麿侯爵）
秩父宮雍仁親王殿下（大正九年御卒業）
山階宮茂麿王殿下（昭和二年御卒業）（現葛城茂麿伯爵）
竹田宮恒徳王殿下（昭和三年御卒業）
李鍵公殿下（昭和三年御卒業）
故北白川宮永久王殿下（昭和四年御卒業）
朝香宮孚彦王殿下（昭和六年御卒業）
李鍝公殿下（昭和六年御卒業）
三笠宮崇仁親王殿下（昭和九年御卒業）
東久邇宮盛厚王殿下（昭和十年御卒業）
東久邇宮彰常王殿下（昭和十三年御卒業）
賀陽宮邦壽王殿下（昭和十四年御卒業）



畏し簡素な皇族舍

操は無論、馬術をやる。

屋上の活躍　そこで生徒の毎日の生活を述べると、起床の號音と共に、すはこそと寢臺を跳起きて、窓の開放、着換、瞬くまに終ると、駈歩で各中隊が屋上へ集合する。一個中隊は數個區隊に分かれてゐる。その區隊ごとにズラリと整列、そこに週番士官殿が來られる。

取締生徒（區隊取締の全責任を負ひ、半週交代）の『氣ヲツケ』の號令と共に、『第○區隊、總員○○名、事故○名、現在員○○名、番號』

皆が番號を唱へる。日朝點呼だ。週番士官殿が前を通りながら、兼ねて服裝を檢査される。

日朝點呼は神聖にして重要なものだ。『本日モ立派ニ御奉公致シマス』と、朝の御挨拶を心から申し上げる。終ると直ぐに、そのまゝ屋上で上半身の乾布摩擦、簡單な柔軟體操、竹刀の素振、早朝から勇壯なものだ。嚴冬の曉などは眞白な息を噴いてやる。この時、寢室勤務（二週間交代だ）の四人の當番は、屋内をせつせと掃除する。

屋上の保健體操、屋内の掃除、終るや否やバタ〳〵と地下室の洗面所へ下りて、歯を磨き顔を洗ふ。心身を清めて自習室へ入り、御勅諭の奉讀、舍前の遙拜場へ出て遙拜、寢室へ歸つて武器の手入、更に舍前に整列、取締生徒に引率されて、壯烈な軍歌を合唱しつゝ、校内にある雄健神社にお詣りする。

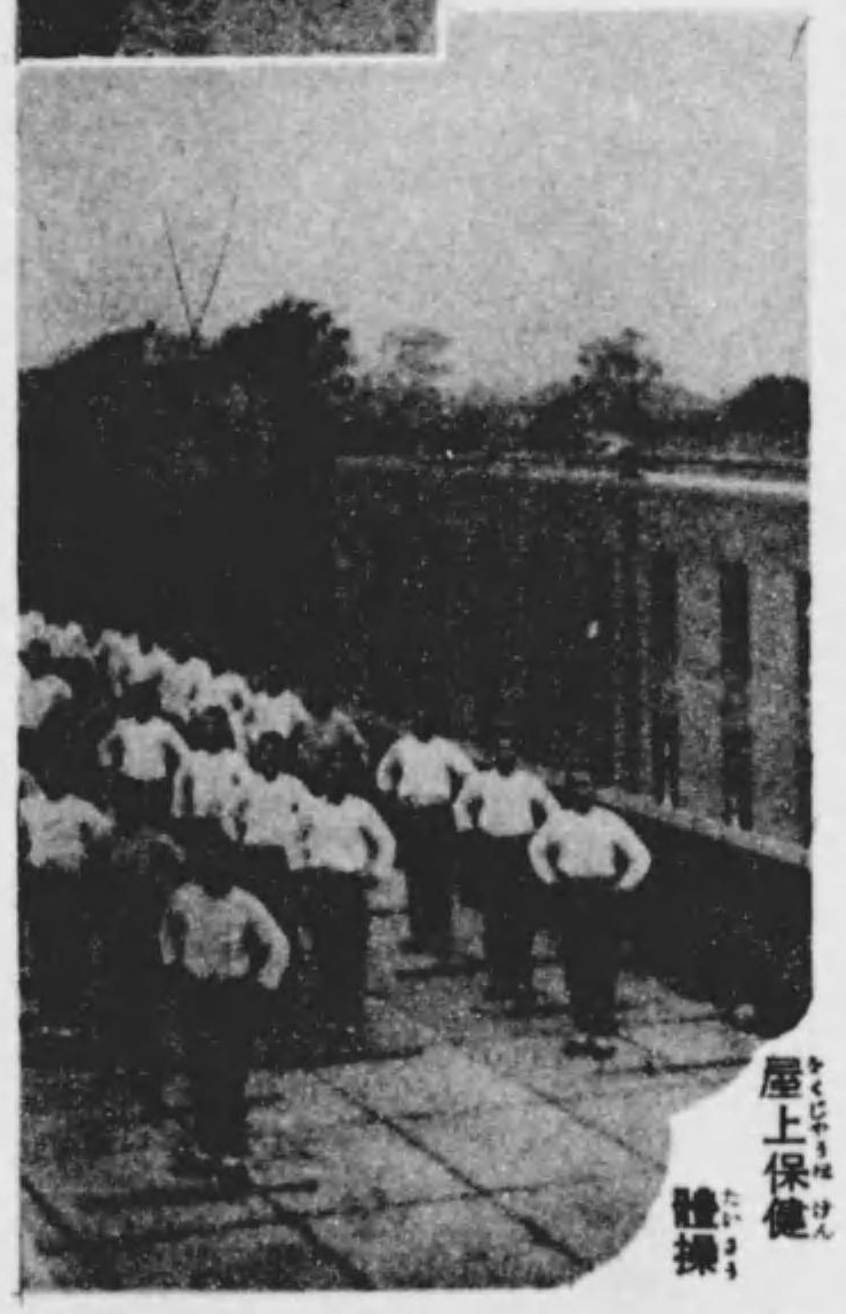
雄健神社　戰死せる先輩千九百十六柱の英魂を祀れる社だ。參拜は各個に玉石を踏んで社前に額づく。皇軍傳統の純日本精神を、われ等將校生徒こそ、ます〳〵發揚せなければならぬ。平生の自覺を、この參拜によつて朝ごとに深めるのだ。

忙しい練習　起床してから今まで一時間だ。一秒といへども空費しない。朝食の號音が鳴る。雄健神社から食堂へ、再び軍歌を唱ひつゝ行く。中隊ごとに衝立で仕切られてゐる食卓に、ズラリと御馳走が並んでゐる。週番士官殿も會食される。若き生徒は元氣逬つて食欲旺盛、飯の追加、汁の追加を炊夫に命じて、歡談、爆笑、愉快に食ひ終つて、自習室へ歸ると、午前七時には自習開始の號音が鳴る。それまでの短い間を利用して、靴や革具の手入をする。實に忙しい朝だ。しかし、この時間利用の練習によつて、あらゆることを短い間に、迅速、周到にやつてしまふ習慣がつく。

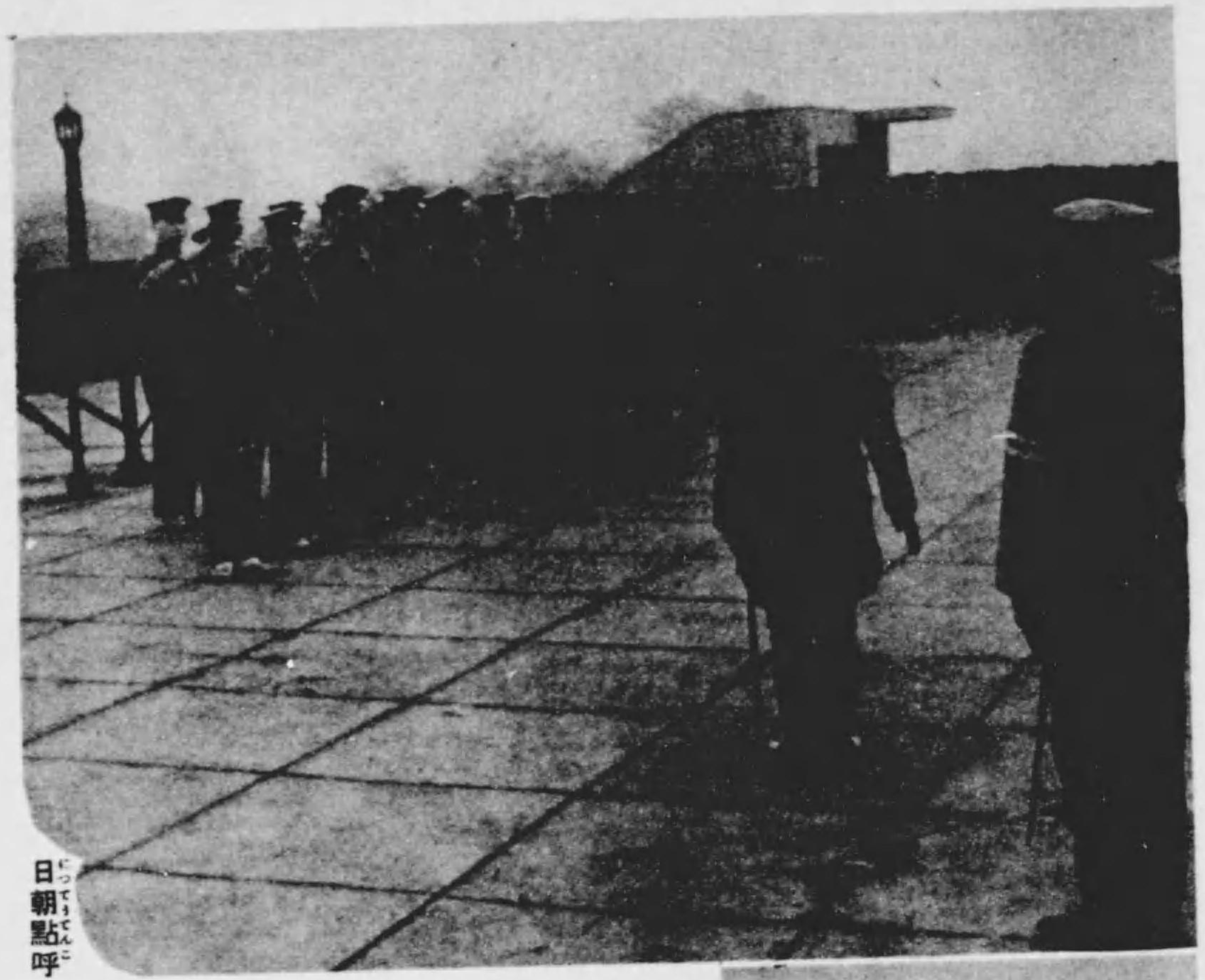
時間の困苦缺乏　午前七時から四十分間、朝の自習が許される。いつでも勉強するといふわけには行かない。朝の四十分と夜の二時間のほかには、自習が出來ないのだ。多くの學科の豫習、復習、宿題、二時間四十分では難しい。だから、自習時間には皆が實に眞劍になる。

いくらでも時間があつて勉強するのは、誰でもする。不足の時間内に多くの勉強をやりとげるところに、一つの貴い修業があるのだ。

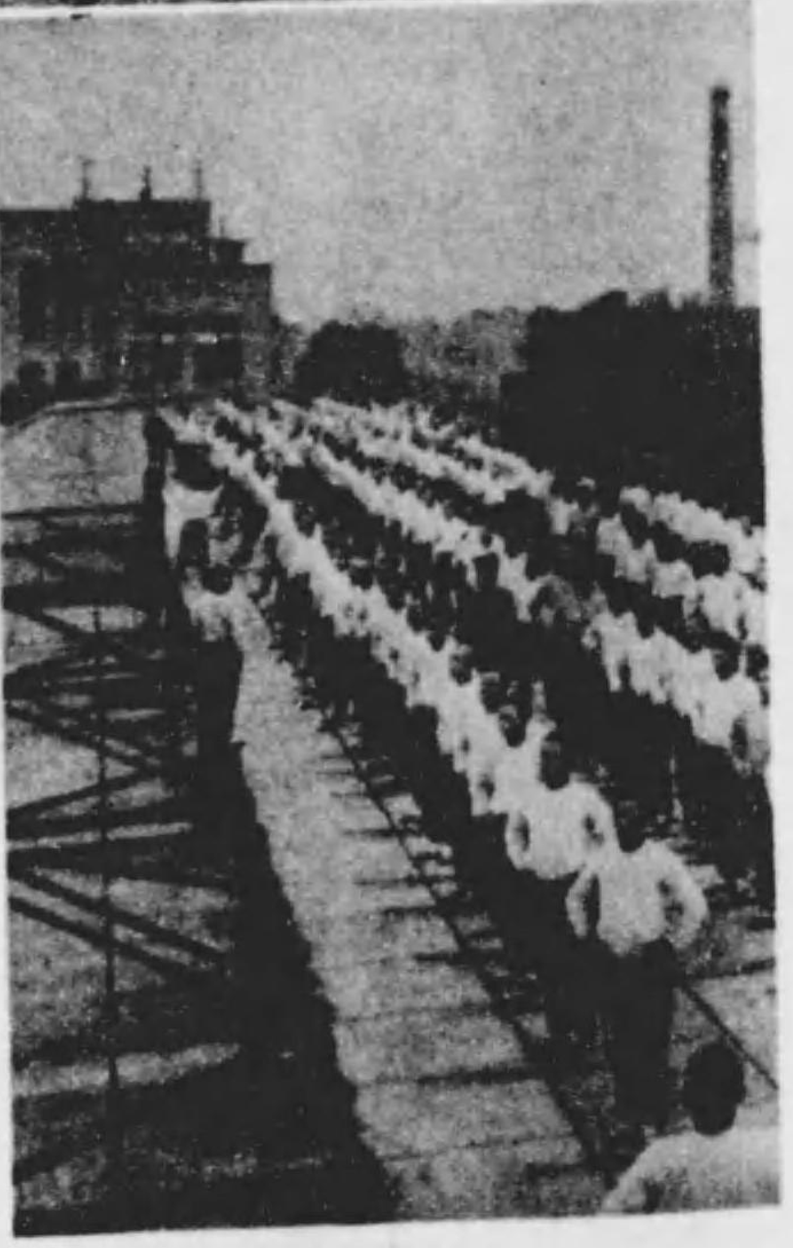
この朝の自習四十分の間に、週番士官殿は、寢室と自習室



屋上保健體操



日朝點呼



の清潔と整頓を檢査される。週番士官殿も忙しいのだ。

講堂は戰場　午前七時五十分、服裝檢査の號音が鳴る。生徒は文具嚢に學科の書籍と手簿を入れて、舍前に整列、週番士官殿から服裝と携行品の檢査を受ける。講堂（教室のこと）は戰場だ。戰場に臨む前には軍裝檢査を受ける。それと同じ意味の檢査を受けて、午前八時、學科始めの號音と共に、生徒は緊張して講堂へ出陣する。すべて眞劍の生活だ。

士官學校は軍人を養成するのだから、軍隊のことばかり教へて、毎日、教練や演習をやつてゐるのだらう、と思ふと、大きな間違だ。學科の科目は前に述べた通りだが、『心理學』などは、將來の指揮統率に密接な

御勅諭奉讀

關係があつて、生徒は目をクリ〳〵させながら講義を聞いてゐる。群衆心理とか、民族心理とか、實驗心理とか、限りない興味がある。

論理も生徒が始めて教はる學科だ。この習得によつて、迅速正確な判斷力を養ふ。千變萬化する戰況に應じて、指揮官は斷乎たる判斷を下さねばならぬ。また、命令や報告その他を書き、或は自分の思ふところを發表するのに、適切な文章を記述する思考力を、論理で練り上げる。

すべての學科が、幼年學校と同じく軍事的に智能を向上させ、しかも、文化的教養を充實させるのが、本校教授の特色だ。だから、教程は特に編纂したものを使ひ、教授も獨特だ。これは入つてみないと解らない。

午前中は、この教授部の時間で、午後零時五分に晝食、一時十分まで休憩だ。午後には訓育部の軍事學と術科、科目は前に述べた通りだが、最も愉快なのは、馬術だ。

☆『軍ノ主トスル所ハ戰闘ナリ』

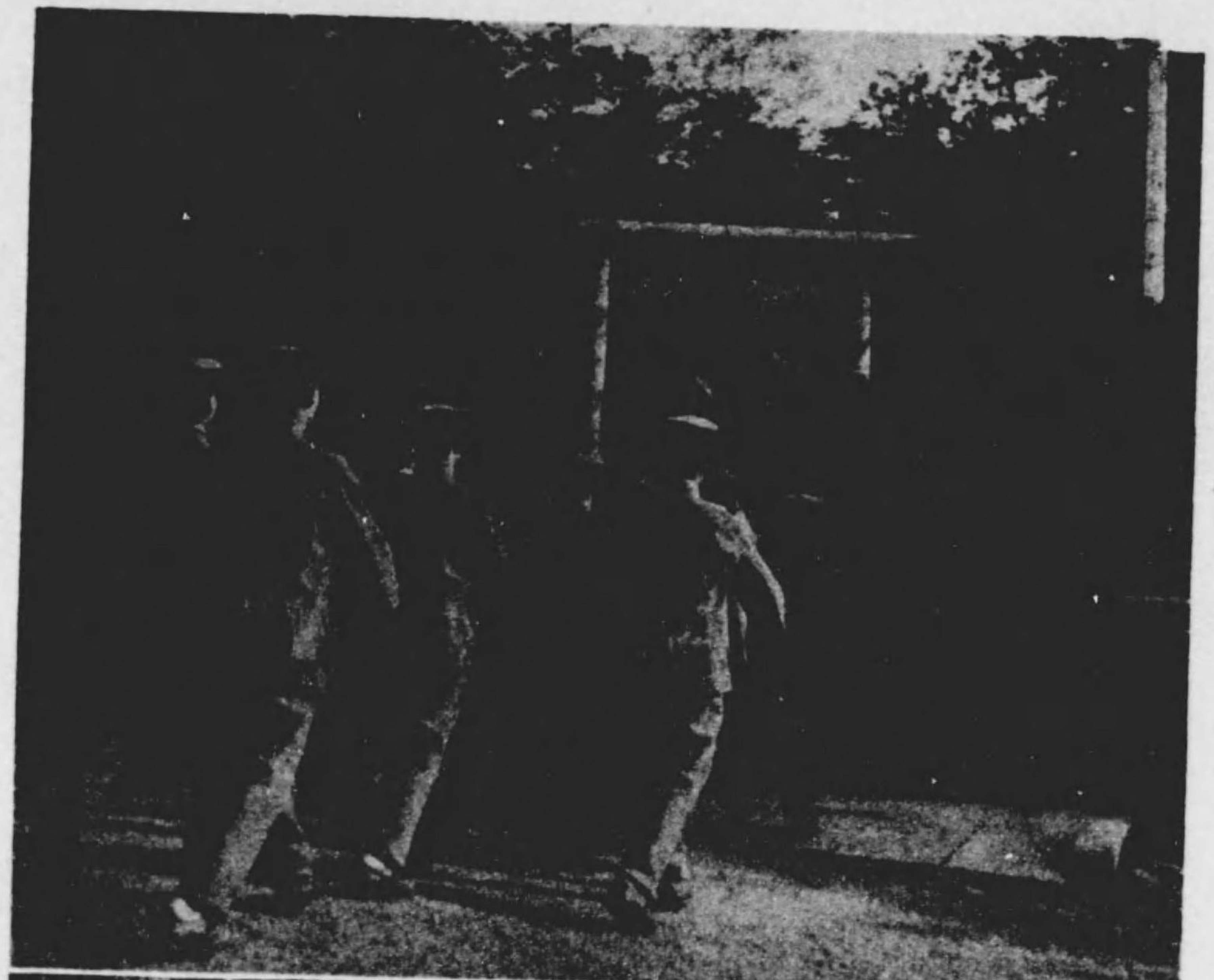
落馬また落馬 馬に乗るのは、始めての者ばかりだ。

遙拜

だから曳馬をやる。それから乗り方を教へられ、基本姿勢を習ひ、一人が乗り一人が曳いて、ボツ〳〵歩き出す。殿様のやうだ。馬は皆良く馴れてゐるが、やがて一人で手綱をとり、常歩から速歩をやるやうになると、あちらでもこちらでも落馬だ。アツと思ふ間に落ちる。馬は傍に立ちどまつて、落ちた生徒を長い顔して優しく見下してゐる。下は砂だから怪我はしない。また乗る。速歩、また落ちる。そのうち進歩して、待望の拍車を靴につける。この時分になると駈歩もやる。障碍物を飛越す。そして落馬だ。第一學年の馬術を見てゐると、落馬の大量生産だ。

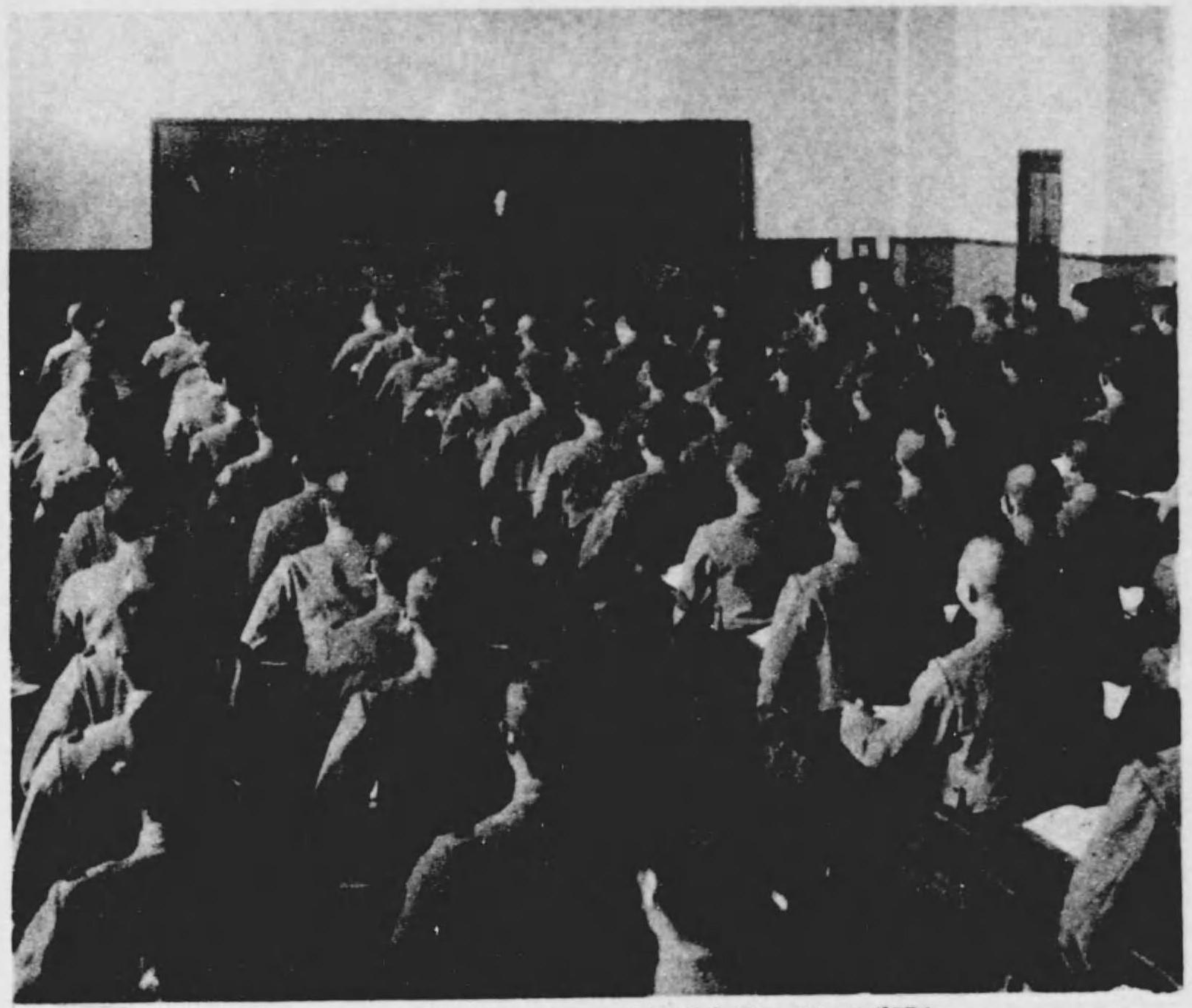
第二學年になると、さすがに上手になつて片手御法もやれば、部隊行進もやる。野外騎乘もやる。もう落ちない。戸山ケ原や代々木の原へ出て、大いに駈歩で乘り廻す。市內を戞々と行進する時は、『馬上の江戸見物』などと愉快がる。卒業する時は一人前の騎手になつてゐる。

百事皆戰闘 器械體操も、入校當時は尻上り一つ出來ずに、鐵棒にぶらさがつたきり、助手の戰友が二人がかりで、やつと押上げたものが、卒業前にはクルリ



雄健神社に參拜

起床と同時に雄健神社の境內を清掃する

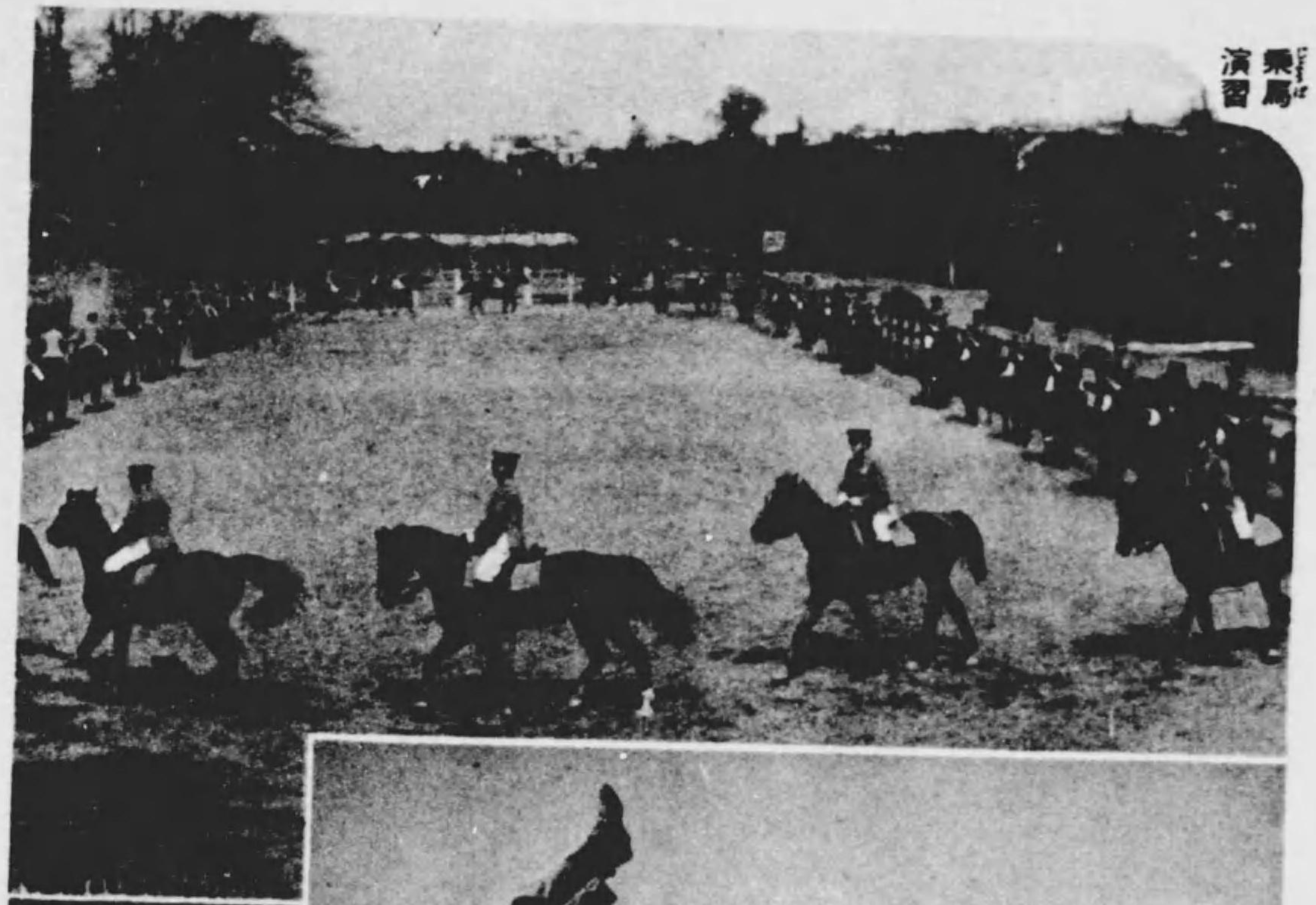


講堂は戰場だ、皆眞劍である

クルリと大車輪をやつたりする。十二階段の飛降に變な顔をしてゐたものが、すぐに巧くなつて、高い梁木の眞上に逆立したりする。技の巧みばかりでは賞められないが、二年間にすばらしく進歩する。

『軍ノ主トスル所ハ戰鬪ナリ。故ニ百事皆戰鬪ヲ以テ基準トスヘシ』と、『作戰要務令』といふ虎の巻の始に揭げられてゐる。まして劍術と柔道は、將來の肉彈戰に軍刀を揮つて、敵陣へ先頭に突擊する時の心身を鍛へるのだ。その基本動作から試合まで、すべて實務的に練習する。發聲（掛聲）まで一般中學校のとは違ふ。正確で猛烈果敢な稽古ぶりは、一度、諸君に見せたいやうだ。

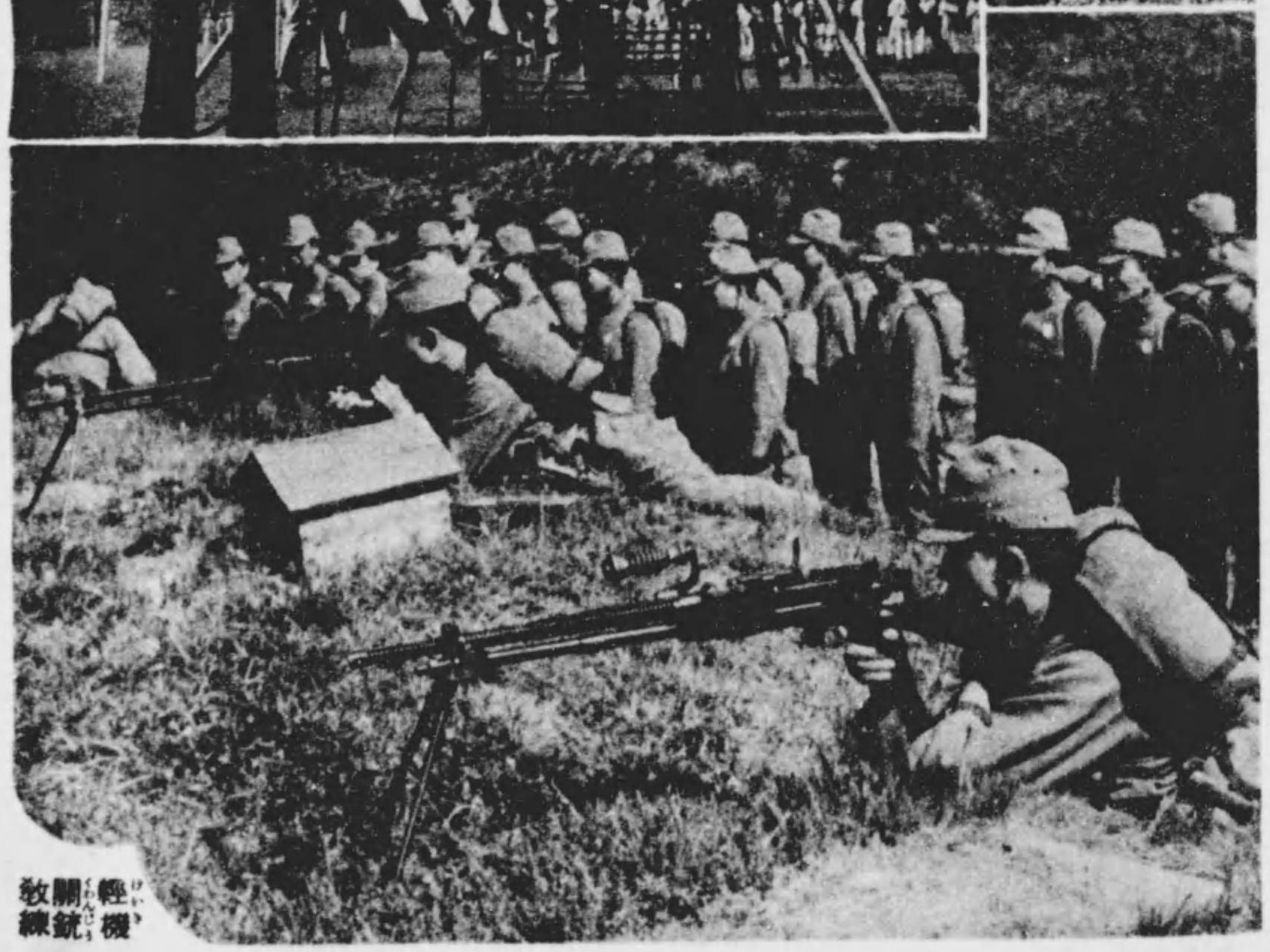
後の日の參考 教練は校內で各種の各個教練から、戰鬪教練、輕機關銃教練、擲彈筒教練など、或時は列兵になり或時は指揮官になつて、教育指導の體驗を積む。野外へ出て終日教練もやる。夜間演習もやる。春には習志野の原に、秋には金丸の原に出張して、實戰同樣の演習をやる。天幕露營や飯盒炊爨、拂曉戰と追擊戰、その體驗を『教



乗馬演習

大車輪

梁木



軽機関銃教練

天幕露營

練手簿』に一々書きつゞつて、後の日の參考にする。後の日とは將校に任官した時だ。

始めて千差萬別　午前と午後の正規の課程が終ると、『隨意運動時間』だ。午後三時五十分から一時間、劍術、體操、競技などが、中隊ごとに工合よく組合はせられてゐて、生徒は毎日、隨意に運動する。競技は球戰が盛んだ。蹴球も籠球もやるが、試合規則は獨特のもので、その猛烈なことも他に見られない位だ。

午後五時から一時間の『隨意時間』、故郷への通信も、この時に書く。兵器の手入もする。書簡を渡されて喜ぶのも、この時間だ。入浴もこの時間にする區隊が多い。こつ〳〵と自習する者もゐる。朝から今まで同じ事をしてゐた戰友同士が、千差萬別に動くのはこの時間だ。午後六時に夕食の號音が鳴る。

整列して、勇壯な軍歌行進と共に食堂へ、一日中の御馳走のあるのは、夕食だ。腹がグー〳〵鳴つてゐる。

☆精神と精力の集中主義

市谷名物　唸る腹に御馳走をつめこんで、食ふこと〳〵、食後の休憩一時間に、廣い校庭を歩き廻り號令を呶鳴り、軍歌を歌ひ、酒保へ突撃する。

市谷臺上、暮れ行く空に將校生徒の號令が高く響いて、市谷名物の一つになつてゐる。校歌の合唱もやれば、詩吟もやる。尾張藩の邸であつた校内には、『琵琶湖』に模つた池がある。廻りの鬱蒼たる木立から中庭へかけて、悠々と濶歩する者、斜面に腰を下して語る者、群をなしてゐる者、これまた千差萬別の愉快な一時間だ。

酒保は、生徒食堂の二階にあつて、物品販賣所と隣りあつてゐる。夜の自習開始まで三十分間、開かれる。この階段を駈上る時の勢ひは、まるで突撃だ。

一米が一圓　廊下へ出ると、まづプーンと鼻をつくのは、珈琲の香だ。間口十四五米、奥行三十米もあらう、廣い部屋の中に、圓テーブルと椅子がギッシリと詰まつてゐる。生徒もいつぱいだ。飲みつ食ひつ、話しつ笑ひつ、牛乳、珈琲、汁粉、うどん、あられ、甘納豆あり栗饅頭あり、羊羹あり林檎あり、どれでも五錢（五錢）だ。一米が一圓のことで、一錢は一錢だ。何しろ賣れることと〳〵、たちまちのう

食堂

數學教室

ちに空箱が數段に重ねられ、三人の小僧が忙しさに息を切つてゐる。

テーブルの廻りには、同縣の者や同じ寢室の戰友が、われ劣らじと氣焔をあげてゐる。

チリ〳〵と備へつけの呼鈴が鳴る。自習開始の五分前、酒保引揚の呼鈴だ。一齊に立上つて、滿腹と愉快に熱つてゐる頰が、今度は研學自習の血に燃える。愉快に騷ぐ時は、騷ぐ。勉強する時は、一心不亂にやる。精神と精力の集中主義が、本校の傳統だ。

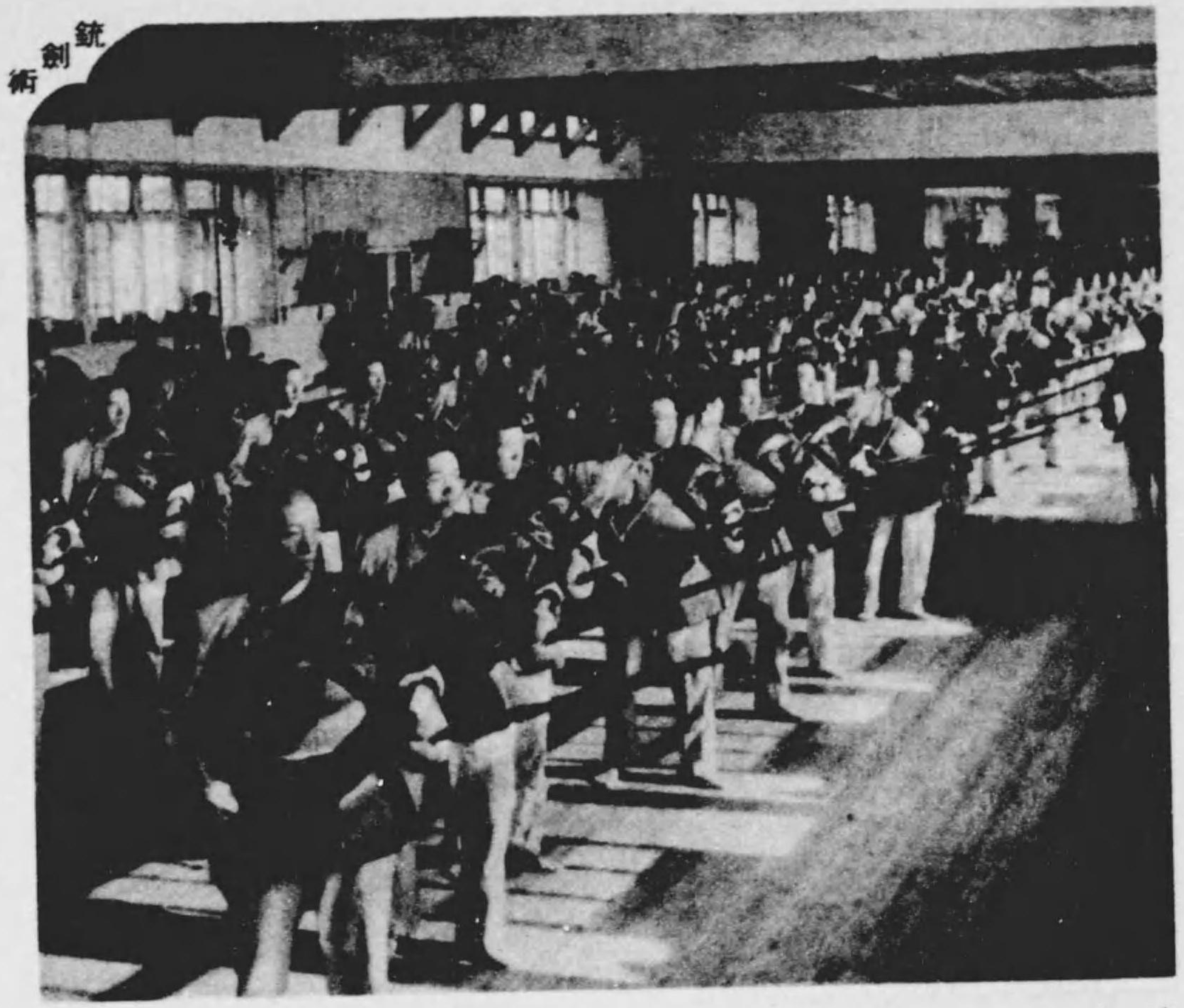
眠るのも早い 午後七時から夜の自習、五十分づつ前後二回で、間に二十分の休憩がある。力勉だ。終ると九時に日夕點呼の號音が鳴る。

嚴粛な點呼の後、御勅諭を奉讀する。終つて今日の一日を反省し、日記をつける。

消燈十分前になると、一齊に寢室へ入り、双肌ぬいでタハシ摩擦をやる。清潔な寢衣に着かへて、寢臺にもぐりこむ。同寢室の戰友が、今日のお互の失敗や功名を、自慢したり冷かしてゐるうちに、

『寢ろ〳〵、皆寢ろよゥ……』

と消燈の號音と共に、室内の電燈がスッと消える。



銃劍術

消燈後はもう誰も話をしない。靜かに眠る。眠るのも早い。すぐに熟睡してしまつて、夢も見ない。

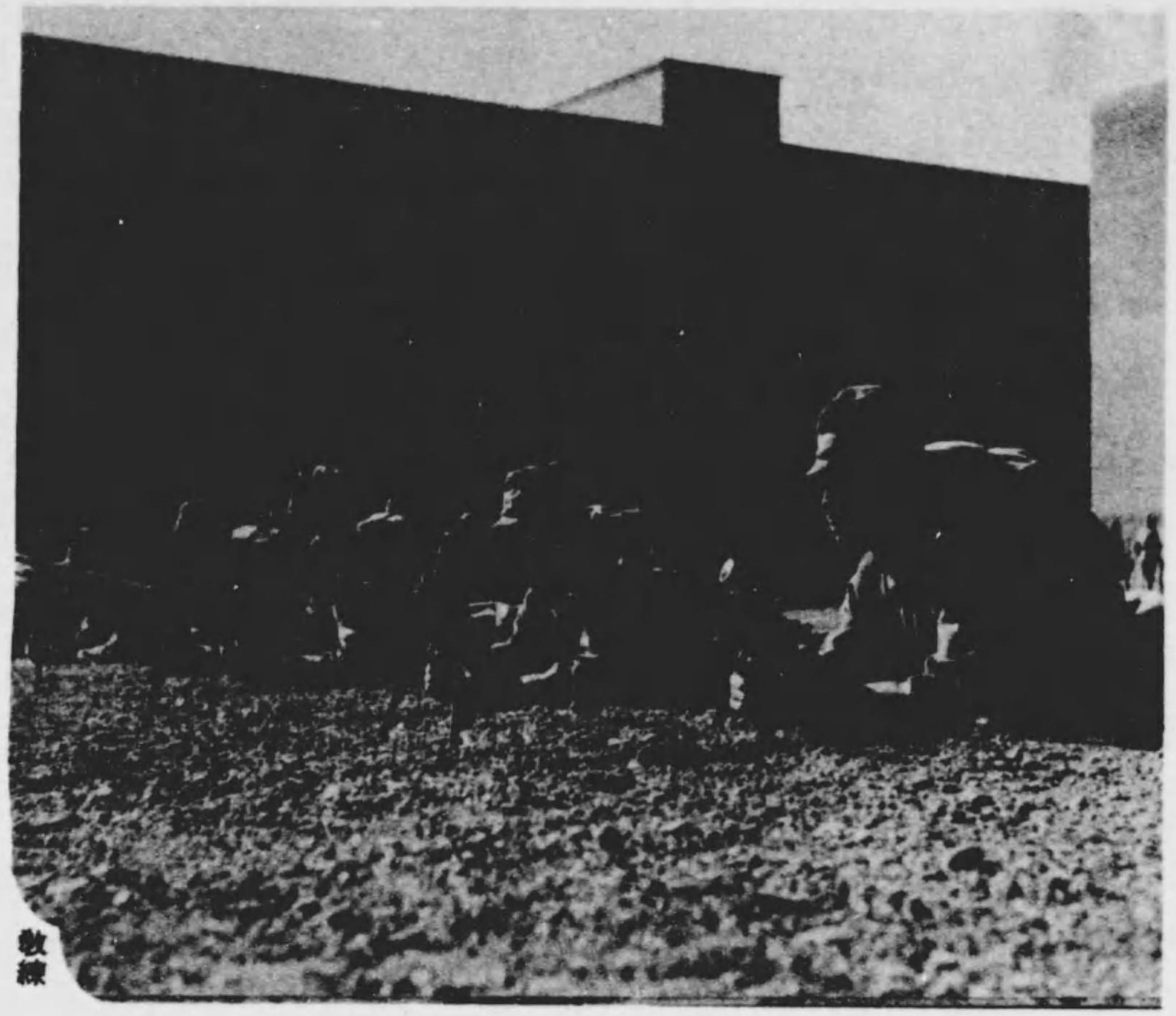
☆武の家に育つ

白くなるな 校外に出てする演習には、毎週土曜日の野外演習を始め、その年によつて或は春に白河の關へ出張してする十日間の測圖演習、習志野原の廠舍に泊つて野營演習、夏には富士の靈峰と三保の松原を望む沼津の濱に游泳演習、秋には那須の茫漠たる原に森に野營演習など、各種の練武に暇がない。かうして皇軍將校たるの素養を、堅實に造りあげて行くのだ。演習間の勇壯痛快な場面など、書けば限りがなく、紙面に限りがあるので惜しいが略する。

最も樂しい一つは、夏季休暇だ。八月五日から九月一日まで、四週間の歸省、皆が游泳演習の後だから、いよ〳〵眞黑な顏をして、目もます〳〵光つてゐる。

『黑い顏を白くして歸るな』と、中隊長殿から訓示される。

鞄片手に校門を飛出す。寸刻も惜しい。東京驛へ、



教練

新宿驛へ、上野驛へ、と思ふのは、將校生徒を知らない人だ。たとへ暫くでも帝都を離れるのだから、宮城の前へ行き皇居を拜したてまつる。その後、歸省の途につくのだ。

兩親の膝下へ歸つても、學校生活の延長である。遙拜、奉讀、保健體操は元より、學校から借りて來た白の運動衣袴に、赤の革脚絆と拍車まで着けて、家の畑を耕す馬を引張り出し、故鄕の山野をポカポカと走らせたりする。號令調聲を河原へ出てやる。名勝古蹟を探る。宿題もやる。それでも家では顏の黑味がさめてくる。何をッと日光浴をやる。四週間がそのうちに過ぎて、次の冬季休暇を樂しみに故鄕と別れ、九月一日の朝に、再び學校へ歸つて來る。自習室と寢室の整頓を終つて、宮城遙拜に行き、午後六時に歸校點呼を受ける。

武の家 薩摩から歸つてきた隼人、北海の故鄕に行つてゐた健兒、皆、みやげ話で哄笑爆笑、やはり學校も家だと思ふ。武の家である。皇軍の中心となるべき、われ等の將校生徒は、かうして武の家に日日育てられてゐる。

眞劍な自習

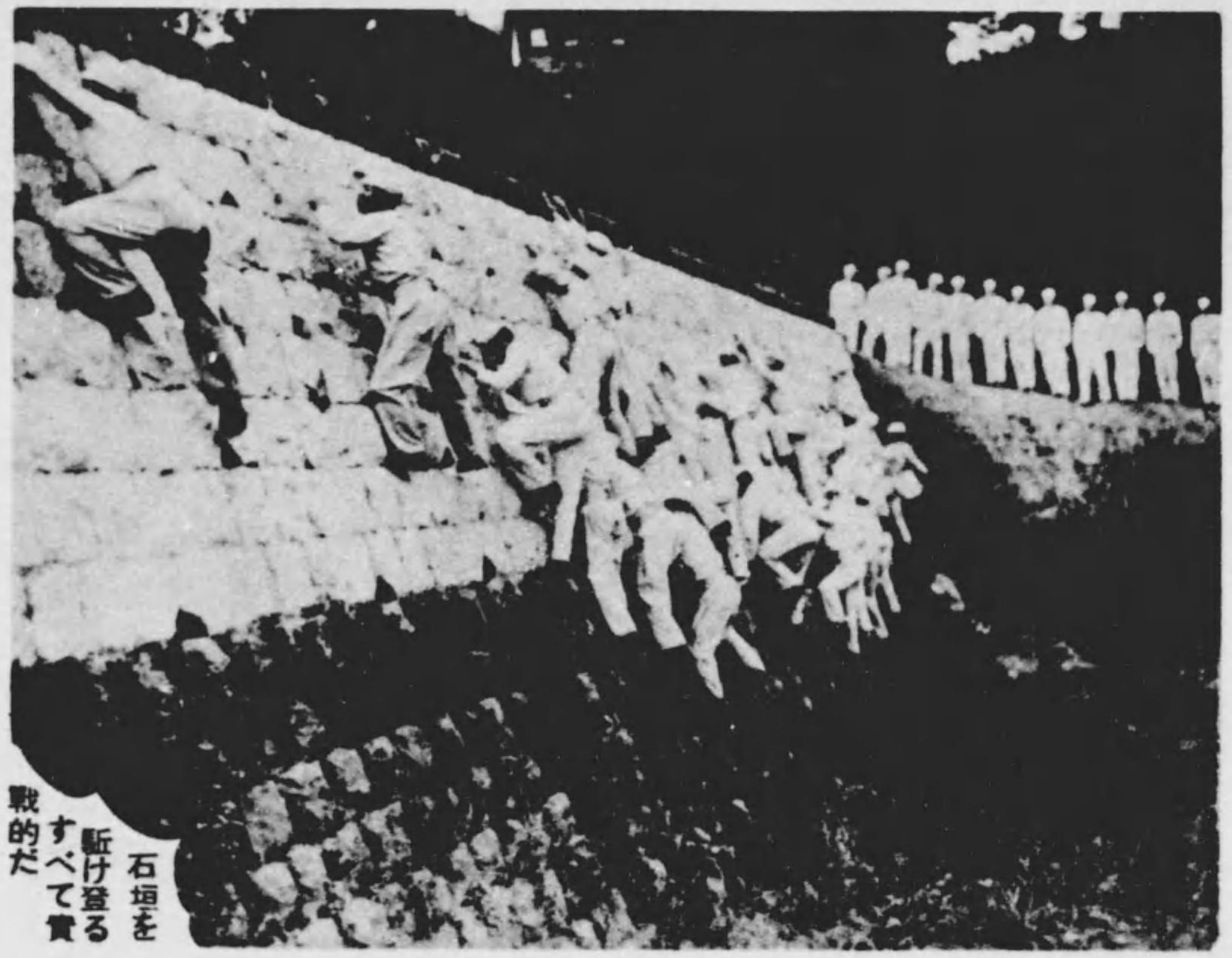
陸軍豫科士官學校參觀記

☆將校の卵が通つた坂

東京省線電車を市谷驛に下車して、市谷見附の橋を渡ると、右の方の高臺に巍然たる甍が大空にそびえてゐる。陸軍豫科士官學校の本部の宏壯な建物なのだ。

歷史的の坂 記者は今日の參觀に胸を躍らせながら、正門の前についた。目の前に廣い長い砂利の坂が、高臺の上へつゞいてゐる。この坂こそ既に過去六十餘年間、幾萬の將校の卵が通つた跡のある歷史的の坂だ。門衞所に名刺を出し、長い歷史的の坂を登つて行くと、曲り角の小高い丘に、雄健神社が祀られてゐる。先輩將校の英靈に記者も心から參拜して、本部の玄關に着いた。

練武の道場 鐵筋コンクリートの宏壯儼然たる建築、白い花崗石の上に全體が卵色の三階で、中央に時計臺が雲の下に屹立してゐる。仰ぐと燦たる菊花の御紋章が正面に照り映えて、將校生徒が護國練武の心身をさゝげる道場であることを、御紋章が示し給ふかと拜される。記者は玄關の受附の人に案內されて、校附大佐殿の部屋へ通された。



石垣を駈け登る すべて實戰的だ

『よろしい。すぐ參觀させてあげよう』
と呼鈴を押し、副官の大尉殿が呼ばれて來た。時間の空費は校内で許されない。すぐ本部の中から觀せて頂く。

畏き御室　玄關の入口、受附の向かひに、週番司令室、週番副官室、その前を通り過ぎると、右側に、經理室、會議室、商人控所、左側には、會報室、生徒面會所など、ズラリと並んでゐる。夏の朝の涼しい風が、この大きな廊下を通り拔けて行く。

二階へ上ると、中央に校長室、幹事室、副官室、こゝが學校の主腦部だ。右の方に行くと、副官も記者も肅然と立ちどまつた。行幸を賜はる時の便殿(陛下の御休所)、その前室、附屬室などがあり、隣に貴賓室、應接室が並んでゐる。畏き御室のある學校の光榮と責任の重大なことは、今さら言ふまでもない。

三階へ上る。教授部長、教頭、學校附將校の三室が中央にあつて、その左右には、武官と文官の教官室が並んでゐる。廊下の窓から中庭が見える。

二階へ下りて廊下傳ひに大講堂と講堂へ行く。大講堂は優に二千人が入れる。中央の正面に、三段の壇が設けられてゐる。

物理の實驗室

『最上段は、臨御の際の玉座にあてられます』
と、副官殿が謹んで説明された。

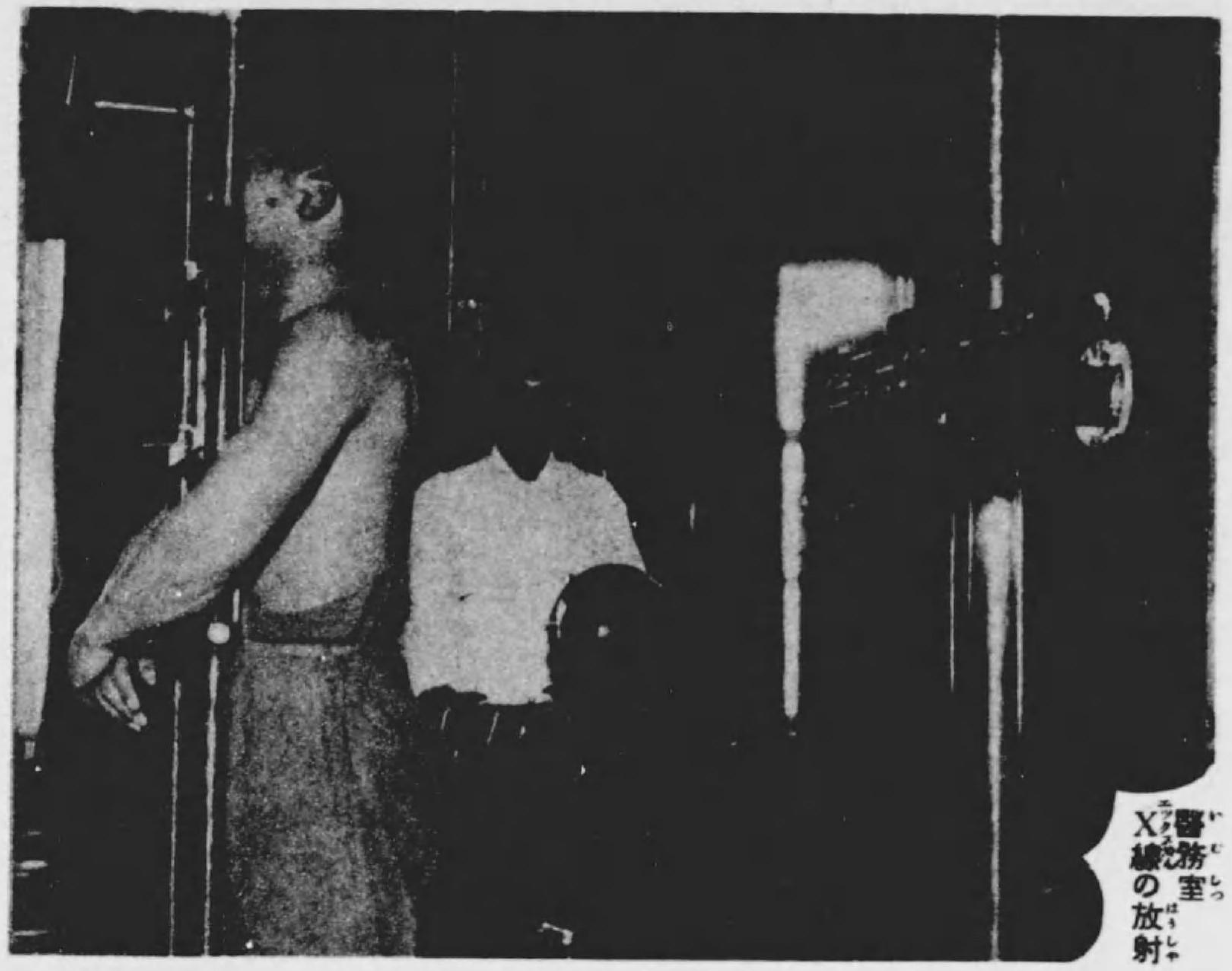
馬も鹿も四足　正面の壇に敬禮して大講堂を出ると、折しも午前の授業時間なので、論理の講堂を參觀させて頂いた。教官殿を仰ぎ見てゐる將校生徒の瞳は、知識吸收の熱情に燃えてゐる。

『有名な鵯越の逆落しに、義經が「鹿も四足、馬も四足、鹿の下りる所を、馬の下りられぬことはない」と、逆落し斷行が歴史に傳へられてゐるが、この論理は矛盾してゐる。鹿と馬は足の性能に差異があるからだ。しかし、義經が戰勝を得たのは、この論理の矛盾にあつたのだ。この點を十分に考へる必要がある』

いかにも面白い授業だ。もつと聞きたいのを、時間の制限があるので、次の講堂へ移つた。

☆すべてに驚く設備と内容

自分と歴史　歴史の講堂で、外國史の授業中だつた。『露西亞の勃興』について、
『ペートル大帝は露西亞勃興の大理想を、先づ海上權の獲得の上に立てた。このために、アゾフ海、バルト海へ進出



醫務室 X線の放射

せんとし、更に遠く日本海、オホーツク海へ伸びんとする意志をもつてゐた。卽ち露西亞の極東侵略政策は、ペートル大帝からの傳統である。「露西亞の運命は極東に於て決せられる」と叫んだ、ソビエト・ロシヤのレーニンの言葉は、傳統の侵略政策を公言したものである。この侵略を目標とするところ、わが日本の國防と直接に關係せざるを得ない』

歷史はすべて現代に關係する。生徒は熱心に筆記してゐる。日本の國防、卽ち生徒自身に關係してゐる歷史なのだ。

見えない光線　物理の講堂に入つてみると、赤外線による警報裝置の實驗中だつた。見えない光線を放射してゐる中を通ると、一方の電鈴が鳴る。敵襲を知り、祕密通信にも利用するのだ。

光學暗室に案內されて、光彈性裝置、X光線、高壓高周波振動電流などの實驗中を、記者は驚きながら參觀した。最新の設備と、將校生徒の科學的知識の深いのに驚く。

寫眞暗室も、あらゆる設備が行屆いてゐて、生徒各自が現像から燒付、引伸しを實習してゐた。作品にはなかなか藝術的な傑作があるのに、これまた驚かされた。

煙幕、地球儀　化學の講堂も、物理と同じやうに階段式の實驗室になつてゐる。準備室あり器械室あり寫眞室あり、巨大な實驗臺あり、自分で造つた火藥を爆發させたり、自分で造つた色々の煙幕をムクムクと張つたりする。

地學の講堂に入つてみると、高さ一米六十糎、直徑八十糎の地球儀によつて、長距離飛行の大圈コースを測定中だつた。それから滿洲國の地形について講義があつて、熱河地方や遼東半島の模型が、壇上に並べてある。それらの地形と軍事行動の關係を、詳しく硏究するのだ。

屋上には氣象臺があつて、將校生徒は天體や氣象を觀測する。實に多技多能だ。

講堂を參觀してゐるうちに、正午になつて晝食を本部で頂き、午後は生徒隊を參觀した。寢室、自習室、術科の實習など、『市谷臺上の武生活』が、前に出てゐるからこゝには省く。

到れり盡くせり　再び本部に歸つて、厚く御禮を申し上げて、雄健神社の長い坂を、記者は夕方に下りてきた。

到れり盡くせりの將校生徒敎育の實況を參觀し、國家のために實に氣强い賴もしい感激と共に正門を出てくると、折しも後の高臺の上から聞えたのは、食堂へ行進する軍歌合唱の聲であつた。

寢具の日光消毒

内務生活の樂しみ

☆一生徒の日記より

十二月一日　金曜日　晴

喇叭の音にガバと跳ね起きる。さうだこゝは今までの家ではない、陸軍豫科士官學校の寢室なのだ。手早く眞新しい軍服に着替へ、屋上に駈け上る。

くつきりと晴れ渡つた大空に、時計臺が屹立し、脚下には朝霧に抱かれた大東京が、漸く朝の眠から醒めようとしてゐる。

週番士官森大尉殿の御指揮で靖國神社遙拜、護國の英靈安かれと祈る。洗面後、雄健神社參拜。身のまはりの整理を行ふ。

十二時半いよ〳〵入校式だ。數千名の戰友、誰の顏にも、喜悅と希望とが燃え立つてゐる。正面の「スピーカー」から校長閣下の御訓示が一語々々我等の胸に食ひ入る。

『諸子の入校を祝す。茲に元氣潑剌たる新生徒を迎ふるは、眞に欣快とする所たり。而して諸子は將校生徒たるの誇を堅持し保健に注意し本務に邁進すべし』と。

嗚呼憧れの將校、長劍を撫し、三軍を叱咤する將校に自分はなれるのだ。夢ではない正に現實だ。「よし！　やるぞ、しつかりやるぞ」

式が終ると短劍をしつかり握り、一歩々々力を入れて生徒舍に歸る。

食堂では、お祝に赤飯が出る。大きな鯛に箸を突刺したのはよいが、なか〳〵拔けないので苦勞する。食べきれない程の御馳走だ。皆平げる。

自習室へ歸つて、ホッと一息つくと、手紙が來てゐる。中學時代非常にお世話になつた懷かしい先生からだ。入學した時、どんなに喜んで下さつたことか……。突然東校庭から元氣な校歌が聞えて來た。

十二月二十四日　日曜日　晴

入校以來最初の外出だ。引率外出ではなくて、自由外出なのだ。晴着の服に着替へ、名札を裏返して外出する。何だか今までの學生生活よりずつとレベルが高くなつたやうな氣がする。否、氣ばかりではない。正に陛下の股肱となるべき自分なのだ。一箇月世俗と離れて暮し、久方ぶりに見る世間は、實に俗臭芬芬たる感がする。

兄の家に向かふ。途中行き交ふ人の中には自分の肩章を見て、はてどこの學校かしら、といふやうに首をかしげる者や、普通の軍人ではないな等と、聞えるやうに言ふ者もゐる。略

愉快な馬術――愛馬を思ふ存分乘り廻す

次に入つた途端、數人の子供に失敬とやられたのには、流石に困つた。思ひがけなく國の母がゐた。炬燵でいろ〳〵校内の有樣や、愉快な話を聞かせてやる。寢臺から轉げ落ちたことや、酒保で蜜柑二十と、饅頭十五食つたことを話したら、めつたに笑はない兄も、笑つてしまつた。姉は、坊やもいまに叔父さんのやうに、軍人になるんだね。一生懸命勉強して、叔父さんに負けないやうな、將校になるんだよ。とまだ二歲の英坊を、高く差し上げた。

二月十日　土曜日　雨

起きてみると雨だ。『今日こそ鐵棒で、一日暮さうと思つてたのに』と、巨漢小林が呻いてゐる。自分もめつきり頑丈になつた腕のやり場に困り、寢臺から飛出して行つて、竹刀を力いつぱい振り廻した。

晴ならば、多摩の聖蹟記念館へ行くのだが中止、代りに生徒集會所で、中隊會を催す。週番士官殿の呼出しで、いろ〳〵と珍奇珍藝が飛出す。自分は無藝だが、食ふ方は、我々武人として必勝しなければならないと思ひ、手あたり次第詰めこむ。

會は詩吟からお國自慢へと進み、精神訓話と來て、爆笑は最高潮に達する。中隊長殿は、精神訓話と聞いて『顏負けだ』とばかりに後の方へ引き下られる。十六時半（午後四時半）

になり、中隊長殿の音頭で、奉天會戰の軍歌を蠻聲をはり上げて歌ふ。戸棚の書籍が落ちはしないかと心配する。中隊長殿が、音譜で歌はれたのには驚いた。

二月十四日　水曜日　晴

毎日きまつた學科と術科に、ぎゆう〳〵言つてゐる自分等にも、こんな愉快なこともある、といふことを、國の兄に知らせてやりたい。それは馬術だ。今日も戸山ヶ原で、愛馬大英を思ふ存分に乗り廻し、大いに鋭氣を養つた。樹々の間を縫うて走るのは實に面白い。思へば入校し、始めて厩に行き、ベロリと馬になめられ、二米も飛びさがつた頃から三箇月も經つた。「豫科にゐると、實に月日の經つのが早いなあ、中學では今頃試驗勉强で本氣だらう。一體自分は、毎日々々張りきつた、愉快な生活をつゞけてよいのだらうか、皆に濟まないではないか」ふとこんな考へが胸に浮かんだとき、「集合」と班長殿が叫んだ。

明日は鎌倉行だ、と取締生徒殿から言はれ、一同思はず快哉を叫んで床に入る。

三月九日　土曜日　雨

伯父さんから入學のお祝が届いた、と母から知らせて來た。何だか中學時代には、自分を子供扱ひにしてゐたし、自分も亦どうも威厳があつて、恐いので敬遠してゐたが、入校して挨拶に行つたら、非常に喜んで、取扱ひがまるで違つた。「家の親戚には、遺憾ながら軍人が一人もゐなくて、時局柄肩身が狭かつたが、お前がなつてくれたので俺も鼻が高い。もう三四年も經てば少尉になり、兵隊を教育しなければならぬのだから、しつかり修養しろよ」と言つてゐた。

三月十日　陸軍記念日　晴

三時半起床。校長閣下を先頭に靜寂そのものの大東京を、我等數千名の健兒は宮城、靖國神社へと向かふ。空晴れて滿天の星は降るやうだ。壯嚴と言はうか、幽玄とでも言はうか、一種何とも言へない感に打たれる。

朝霧にしつとり濡れた玉砂利を踏みしめて宮城前に到着、恐れ多くも萬機を聞し召される天皇陛下が、紫雲たなびく九重の奥にいらせ給ふと思へば、恐懼の極み、自ら緊張の度を深くす。嗚呼こんなにも樂しく、そして高潔に、何等卑俗に災されることなく、一日々々を暮して行けるのは、一體誰のお蔭であらう。言ふも恐れ多き極みながら、偏に陛下の御仁慈の然らしめるところだ。そして背後に於て國民の軍人に對する深き理解があるからだ。我等將校生徒は、何と幸福なことであらう。我等は層一層奮勵努力せねばならぬ。

幼年學校受驗突破記

☆私の志願の動機

（こゝに載せる一篇の記錄は、現に陸軍幼年學校へ入つてゐる將校生徒が、自分の經驗をそのまゝ書いたものである）

「花は櫻木、人は武士」と、昔から言ひ傳へられてゐるやうに、昔の武士は、男の中の男とされてゐた。しかも、今の皇國軍人は、卽ち武士である。

私は幸ひ、世界無比の皇國の男子として生を享けた。宜しく皇國軍人となり、帝國陸軍の將校となつて、大元帥陛下に忠節を盡くしたてまつり、一死報國の誠をさゝげるこそ、男子生來の本懐といふべきである。

私は幼い時から、友だちと同じやうに兵隊さんが好きであつた。軍人の轡を見ると喜んだ。將軍の馬上颯爽たる英姿を仰いでは、あゝ自分も、あんなになりたいと心をときめかした。小學校へ入つてからも、兵隊ごつこを盛んにやつて喜んでゐた。これは私ばかりではない。日本國中の少年が、誰でもさうであらう。日本は尙武の國である。

學校の往復には、途中に建つてゐる戰死者の記念碑を必ず拜んで、どうか私も立派な軍人になれますやうにと祈つた。大空に銀翼を輝かせ爆音勇ましく雄飛する飛行機を見ると、熱血湧いて、じつとしてゐられなかつた。

父は日露戰役に名譽の負傷をして凱旋した。夜寝てから戰爭の實驗談を父に聞くのが、私はまた大好きであつた。そして早く大きくなりたい、立派な軍人になりたいとそればかり考へてゐた。

ちやうど私が小學校一年生の時、兄が中學の二年生から東京陸軍幼年學校へ、幸ひに入校した。兄さんが夏と冬と春の休に、學校から歸省してくるのを、私は待遠しくて堪らなかつた。學校の中の勇壯な生活や、富士の野營演習、夏の游泳演習、秋の訓練旅行の話などを、それからそれへと聞いて、私は飛立つ思がした。弟の自分も、どうしても將校生徒にならう、幼年學校に入らうと、いよ〳〵決心したのである。

軍服凜々しい兄の雄姿が羨ましくて堪らなかつた。

これが、私の將校生徒志願の動機である。

☆各學科の準備

父も母も私の志願を、喜んで許して下さつた。私は合格しないと、兩親にも兄にも、小學校や中學校の先生にもすまないと、深く心の中で覺悟した。中學二年になつて受驗準備を始めたのである。

しかし遊びたいことは遊びたい。恥づかしながら、第一學期の間は遊ぶ方に時間をとられて、受驗準備に眞劍になれなかつた。

すると夏休になり郷里へ歸つてきた士官學校や幼年學校の生徒から、しつかりやれと激勵されて、私は奮然と一生懸命になつた。今までのやうなことで、どうして難關突破が出來るかと夏休以後は、自分でも感心する程よく勉強した。

朝は遲くとも五時には起きた。夜は大抵十一時すぎまでやりとほした。

友達が遊びに來ても、一人でがんばつて勉強した。

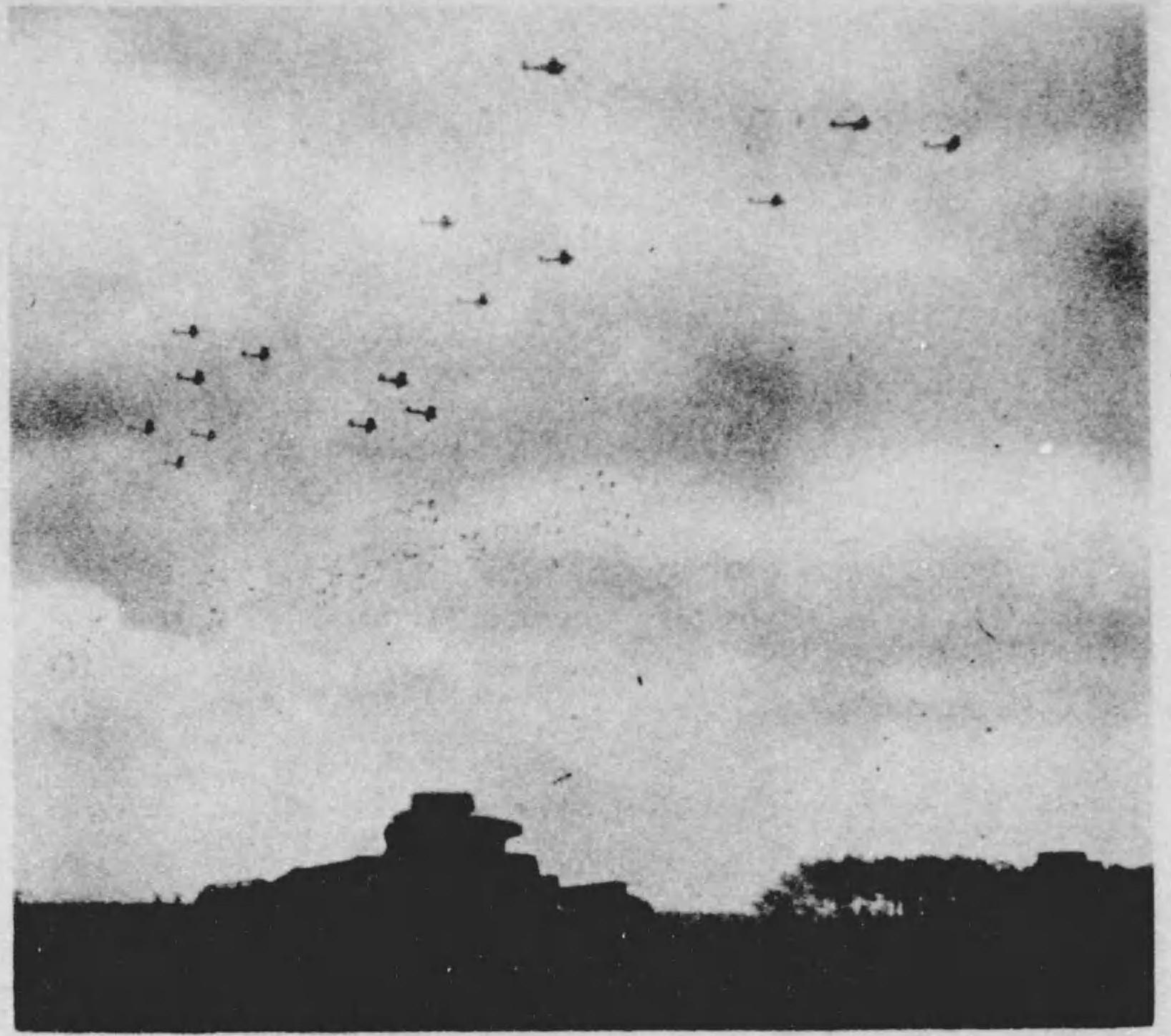
好きな遊を思ひきるのは、ほんたうに辛かつた。が今に見ろ、天下の將校生徒になれるぞと思ふと、一人で嬉しかつた。

算術が大事だと聞いてゐたから、基礎的なものを十分にやつた。例へば、仕事算、植木算、旅人算、鶴龜算など、基礎的な解き方を、自信がつくまで理解し練習した。それから算術問題集によつて、片端からすべての問題にあたつてみた。一題でも中途でやめずに、正しい式と解法と答が出るまで、自分でやつて自信をつけた。これは多くの時間が掛つたが、それだけ實力がついたと、今でも思つてゐる。

しかし、試驗場では時間の制限があるのだから、一定の時間に與へられただけの問題を、完全に解き終る練習を幾度もした。これが實際の試驗場に出て、非常に役に立つた。計算は慌てさへしなければ、大丈夫である。

國語の準備はどうしたらいゝか、私は見當がつかなかつたから、小學校、中學校の讀本にある難しい漢字と熟語を、一一書取つて正確に記憶した。このおかげで、答案に誤字は書かなかつたと思ふ。それから入學試驗問題集によつて、解釋の力をつけた。

地理は、中學校の教科書と參考書により、そして常に地圖と引きくらべた。自分で白紙に地圖を書いてみて、記憶を試した。中學校の授業が、そのまゝ試驗準備なることを、殊に地理で



空に陸に、皇軍いよ〳〵強し

痛切に知つた。

歷史も中學校の教科書と參考書により、一方に入學試驗問題集を良く見て、自分で問題を作り、教科書と參考書によつて完全と思はれる解答を作つた。

理科は私の最も不得手な學科だから初から氣をつけて、殊に細かくやつた。不得手なものほど十分にやつておかないと、失敗の原因になると思つたからである。

博物も中學校の教科書により、物理化學も小學校の理科教科書を、幾度も讀みかへした。

どの學科でも小學校の教科書を輕く見たりすると、根本を忘れることがあつて、答案に大事な所を抜かしたりすると思ふ。

作文は先生に題を出して頂いて、どれくらゐ作つたか覺えてゐないほど多く書いた。そして先生に見て頂いた。作文を輕く思ふのは、大きな誤りである。

代數は無論中學校の教科書によつて、解らない所がないやうに、教場でもしつかりとやつた。

☆その他の經驗

以上の準備は、十二月の初頃までに、大抵やつてしまつた。大いに自信がついてきて、殘りの一月に何回も繰り返したから、必勝の信念が湧いてきた。きつと將校生徒になれるぞと思ふと、愉快で〳〵堪らなかつた。

さて受驗した後で考へてみると、算術は面倒な計算問題が、一題はきつと出るやうだ。應用問題も相當に難しかつた。

國語もなか〳〵難しかつた。書取は漢字そのものは易しいのだが、ちよつと思ひ出しにくいのが、よく出るやうだ。だから、記憶を正確にしておかないと、試驗場では殊に思ひ出せない。私は國語に失敗した。

地理は世界全體からよく出る。たとへば、綿の產地、砂糖の產出國など。それから、小さくても有名な地名が出るから準備の時に注意してゐないと答案に書けない。

歷史は、奈良朝までと明治以後から必ずと言つていゝ位出る。吉野朝時代もよく出るやうだ。

理科は、今までの傾向によると、博物から二題、物理と化學から一題づつ出るやうだ。

しかし、どの學科にかゝはらず、いはゆる山をかけるのは大禁物である。實力のついてゐない者が山をかける。そして必ず失敗する。山が失敗の因である。

學科の準備と同時に、健康を十分に注意しないと、身體檢査で第一に失敗するから、適度の運動が必要である。私は時間をきめて鐵棒をやつた。それから視力に注意して、勉强に疲れた時は遠方を眺めたり、夜は星を見て數へたりした。

正月などは實に辛かつた。弟や友達が樂しく笑つて遊んでゐるのに、自分だけは難關を目の前に控へて、机に向かつてゐるのだから、今から考へてみると、よく辛抱が出來たと思ふ。しかし、遊んだらいけなかつたのだ。試驗がすんでから遊ぶんだ。またその方が、よほど面白いんだ。

かうして身體檢査を無事に通過して、私は死にもの狂ひと言つてもいゝほど、全力を注いだと今でも思ふ。確かに十分の實力を養つて試驗に臨んだものと信じてゐる。

合格の採用通知が來たらどんなに嬉しいだらうと思ふと、自然に一生懸命になれた。また、ならなくてはならない。

全力を注いで眞劍にやらなくては、難關突破は出來ないのだと、いつも思つてゐた。

☆難關第一日

忘れもしない一月十七日から三日間、全國一齊に學科試驗が行はれた。

あゝ難關の三日間だ。

試驗場の庭には、小雪が降つてゐた。集つて來たものは、身體檢査を通過して來て、意氣軒昂としてゐる。皆出來さうな顏をしてゐて、敎科書や參考書をしきりに見てゐる。私は昨日、小學校の敎科書を一通り繰り返して、要點の記憶を十二分に確かめてきたつもりだ。

人事ヲ盡クシテ天命ヲ待ツ。

この覺悟をきめて、試驗場に入る直前には何も讀まずにゐた。あらゆる準備を整へて刻苦精勵したのだ。その實力を今や發揮すべき時、たとへ敗れたとしても、決して恥ぢるところはない。堂々と天命を待たうと覺悟してゐた。しかし、胸は動悸を打つてゐた。やはり心配だ。

そのうちに試驗開始の午前九時になつた。いよ〳〵天命だと思ひながら、試驗官に引率されて受驗場へ入つた時、私は入口で大きな深呼吸を數回して、平靜に、平靜にと祈つた。

國史の試驗である。

答案用紙と問題が分配される時ほど、ゾク〳〵することはない。皆が不安さうな顏をして、口をムッと引きしめてゐる。

「始メ」

試驗官の大きな號令で、皆が一齊に筆をとつた。

私は問題を熟讀して、俄かに筆を下さず、問題の意味を判斷して、いかなる答案を書くべきかと、暫く考へをこらした。

逸る心を抑へて、平靜に、平靜にと念じ、考へがなつて筆をとるや否や、腕も折れよとばかり、六十分の時間が盡きるまで、書きに書いた。讀み返す暇もなかつた。顏が赫々と熱してゐた。休憩所へ歸ると、附添人が心配さうに、受驗者と話しあつてゐる、皆眞劍だ。

『易しかつた』と囁いてゐる受驗者の一方には、『とても難しかつた』と、落膽した聲を出してゐる者もゐる。

部屋中が、ざわ〳〵してゐて、得意な顏をしてゐる者、憂鬱な顏をしてゐる者、私は平氣な顏をしてゐたつもりだが、人が見たら、おそらく嬉しさうにしてゐたらう。

休憩が終つて、次は地理と理科の試驗があり、第一日は早くもすんだ。歸路に考へてみると、國史に年代を間違へ、不足な所もあつたのに氣がついた。しかし最後まで人事を盡くすんだと、勇んで家へ歸つてきた。

☆試驗は運てない

第二日は、數學である。

準備に全力を注ぎ、問題集の練習を積んで、大いに自信があるから、われながら落着いてゐた。

三十分に一問題の割で、始の二時間は算術、最後の一時間は代數である。かなり複雑な計算問題があり、難解な應用問題があつて、非常に苦しんだ。もしも落着いてゐなかつたら、おそらく失敗してしまつたらう。

落着は自信から生まれ、自信は十分な準備から生まれる。完全な準備の大切なことを、しみ〴〵と知らされた。

いよ〳〵最後の日は、國語と作文の試驗である。

國語には、單語の讀み方にも、書取にも、意外に失敗した。不得手の理科ができて、得意の國語に失敗したのは、これまた準備の不十分のいたすところであつた。

試驗は運だなどと思つてゐるやうでは、決して合格し得ない。運は準備の如何にあるのだ。

作文の題は「忠義」といふのであつた。始は何を書いていいか解らなかつたが、日本男子たるもの、忠君愛國の精神のない者はあるまいと、思ふとほりを僞らず飾らず、思ふ存分に書いて出した。

あゝかうして試驗全部を終つた。

國語に失敗したのが、最も殘念で、不安で堪らなかつたが、人事を盡くしたのだ、後は天命を待つのだと、自分で慰めてゐた。

父も母も微笑して、試驗の出來ばえについては、別に何も言はれなかつた。心配しながら微笑してゐられる親の心が、ほんたうに有難かつた。殊に試驗中は神經過敏になつてゐるから、出來ばえなどをそばから尋ねられるのは、愉快なものではない。そつとしておいてもらふに限ると思つた。

合格の採用通知が來るかどうか、こればかりが一日千秋の思で待たれた。

☆電報を拜む

私はその日、散歩に出てゐた。

すると横路から私の家へ入つて行く郵便屋さんの姿が、チラリと見えた。ハッと思つて走り出すや否や、玄關へ飛びこんだ。ところが、來てゐるのは葉書一枚だけである。私はがつかりした。

あゝ採用通知が來るかどうか。私は待ちきれなくなつて、山の方へ目白を獲りに行つた。路で思つたことは、おれは田舍の中學生だ。天下の秀才が受驗する將校生徒には、到底、

合格できないのではないか。いや、そんなことはない筈だ。いくら田舍の中學生でも、あれだけ準備して努力したのだ。きつと入つてゐる。しかし、どうかな、國語の準備が足りなくて失敗したのだ。といろ〳〵に思ひながら、目白を山で一羽獲つて歸ると、籠へ入れてやつた。

あゝ採用通知が來るかどうか。あの颯爽たる將校生徒の軍服姿が、目の前にチラ〳〵する。

晝すぎ、雜誌を讀んでゐると、

「電報ッ」といふ聲が、玄關で聞えた。

「ハイッ」と、答へるのも夢中で、私は玄關へ飛んで出た。

電報用紙をあけて讀むなり、

「ワーッ、通つた〳〵、バンザーイ」

と、夢中で叫んだところへ、母と弟が奥からバタ〳〵と出て來た。二人とも喜びに輝く顔をして、何か言つたが、今は覺えてゐない。私は夢中だつたのだ。

父がゐない。あつ、さうだ。役場だ。私は電報を握つて、いつさんに家から役場へ走つた、早いこと〳〵、途中の人の顔も姿も目に入らない、役場へ飛びこむなり廊下の入口で叫んだ。

「お父さん、來ました〳〵」

父がつか〳〵と出て來た。

「電報ですお父さん」

父はハッとして顔が赤くなり、

「どれ見せろ」

と手にとつて讀むと、電報を兩手で押戴いて拜んで喜ばれ、私の顔を見て、

「よかつたね。ウム、よかつた〳〵」と、言はれた。

役場の人が大勢出て來て、

「おめでたう」

「えらいなあ、いよ〳〵將校になるんだね」

と、口々に言つて喜んで下さつた。

父の顔の明るくなつたこと、あゝ親の心は、當人の私よりも何百倍か心配してゐて下さつたのだ。

おめでたうの聲に送られて、私は凜々と家へ歸つてきた。途中で電報を、幾度讀みかへしたか分からない。本當に合格したのだらうか。本當だ。この電報の採用豫定通知が、かうして來てゐるのだと、讀むたびに思つた。

家の中が何だかソハ〳〵してゐる。誰から聞かれたのか隣の小母さんが來てゐられて、

「おめでたう。よくやりましたねえ、えらい〳〵」

と肩に手をおいて賞められ、何だかきまりが悪くなつて、

「ハイツ、しつかりやります」

と、もう軍人になつたやうに答へた。

母もそは〳〵して、何も手につかないやうであつた。弟は萬歳を叫びまはつてゐた。

電報を、御眞影の前におき、私は心の底から誓つて敬禮した。ありがたうございました。今めでたく希望を達しさせて頂きました。今後ます〳〵、陛下の御爲に盡くします。と、一死報國を改めてお誓ひ申し上げた。

目白が籠の中から、急に聲高く啼き始めた。これも私の合格を祝つてくれるやうだ。

やゝ落着いてくると、受驗の思出が、次から次へと浮いてきた。第一に危んでゐたのは、身體檢査であつた。その時の樣子を、こゝに書いておかう。

☆身體檢査から入校まで

朝七時すぎ、母のこしらへてくれた壽司の辨當を持つて、私は身體檢査所へ急いだ。

集つてくる受驗者を見ると、皆堂々として、もの凄いやうな連中ばかり、胸を張り目を見張つて、皆が私よりも立派な體格をしてゐるやうだ。附添人もぞく〳〵と來る。

やがて檢査官の御注意があつて、いよ〳〵檢査が始つた。大きな體格の者を見ると、自分より年が上だからだらうなど と、勝手に考へてしまつた。

自分の番が廻つて來た。檢査官に姓名を呼ばれて、

「ハイ」と答へてから器臺の上にスックと立つた。

身長、胸圍、體重などを計つて、檢査官が紙に記入する。足りないのではなからうかと、檢査官の一擧一動を見て、ヒヤヒヤした。全身にギュッと力が幾度も入つた。

視力檢査の所へ來た。器械に目をあてて、向かふに掛けてある記號の○の缺けてゐる部分を言ふ。

「右上、左、右下」

次が分からない。目を見張つて一生懸命に見つめてゐると、

「どうも見えにくいねえ」

と檢査官に言はれて、胸がドキンとした。心臟が早鐘を打ち出した。もう一度檢査されて、やつと見ることが出來た時は、體中に冷汗が流れてゐた。

順次に檢査する所を廻つて、やつと終つた。いよ〳〵合格か否かを宣告される時になつた。皆が不安な眞劍な顏をして控へてゐる。こんな緊張を私はまだ見たことがない。私も無論、胸がドキ〳〵してゐた。

係の兵隊さんが姓名を呼びにくる。呼ばれたものは、前の部屋へ入つて行く。自分はどうかなあ、不合格だつたら、どうしよう。今までの受驗準備も水の泡か、と思つてゐると、先に部屋へ入つた者が出て來た。手に寫眞を持つて、落膽した青い顏をして、うなだれながら歸つて行く。また一人出て來た。學科試驗の心得書を持つて、意氣揚々と凱旋將軍のやうに歸つて行く。

不合格者に同情し、合格者を羨み、自分も今どちらかになるのだ、と思つてゐると、姓名を呼ばれた。夢中で返事をして部屋へ入つた。胸はまだ早鐘を打つてゐた。高級檢査官の前へ行くと、姓名を呼ばれて、

「合格」と、厳かに言はれた。

あゝ合格だ、と、血が全身に沸き、印刷物をもらふと夢中で、外へ出てきた。

町は、店も電車も人も、クル〳〵廻つてゐるやうだ。私はワク〳〵する胸をおさへて、家へ急いで歸つてきた。一月の嚴冬だのに、汗をビッショリかいてゐた。

かくて身體檢査に合格し、學科試驗を通過して、希望の將校生徒になり得たのだ。入校の日こそ生涯の記念日である。入校式の時の校長閣下の御訓示を、必ず身をもつて守らなければならない。

「皇軍の精鋭なるは、その中心に立つ將校の優秀なるに歸す。將校の優秀なるは、幼少よりの教育に俟つ所が多い。之が陸軍幼年學校の設立せられた所以である。故に各生徒は、將校の本分と責任に思を致し、居常我は將校生徒であるとの矜持を固くし、本分に邁進して、高潔なる品性と、堅確なる志操の養成に努力しなければならない」

この校長閣下の御訓示と入校當時の樣子を、私は父に詳しく書いて送つた。

幼年學校生徒の父の手記

☆次男の將來と親心

私が二人よりない愛息の一人に、特に陸軍幼年學校を選ばしめ、生涯を軍人として、皇運扶翼護國の第一線に立たしめんとしたこと、これは、父として相當覺悟したことでありま す。こゝに自分の感想と、經驗を率直に述べて、同じく陸軍幼年學校に愛するわが子を送られる父兄各位のため、幾分の

御參考になり得るならば、幸ひと思ふのであります。

次男は小學校の三年以後、卒業まで、殆ど首席でをりました。五年生の時分から、ランニング、デッドボールの選手になり、ある日には先生の目をぬすんで鐵棒をやり、過つて左手の關節を骨折するなど、かなりの腕白者でありました。

私は寺の住職であります。次男を何とかして寺と別に獨立し得るものにしたく、職業の選擇には、次男の性格と趣味に適するものが、本人の將來を伸ばす道だと考へてをりました。ところが、本人は理科を何より好みまして、六年生の新學期から勉强部屋を、まるで模型の工場のやうにし、壁には新聞の科學記事の切拔き、新發明品の寫眞、發明年月、化學記號などを、一面に貼りつけ、ポケットには銅線とナイフを離さず、學校から歸るや否や、トランスをブン〳〵鳴らして、自分で造つた電氣機關車を部屋いつぱいに廻轉させる始末、それは好いとしても、今までの腕白ではなくなり、理科的趣味に夢中になり、だん〳〵食慾さへなくなる樣子、私と妻とは次男が寢た後、彼の健康について、眞劍に相談し始めました。

この儘でゆくと、中學、高等學校、大學と順調に進むことが出來れば、工學士、技師くらゐにはなるであらうが、今のやうでは體がもつまい。來年は中學を受けさせたいが、何とか健康增進の方法はないものかと、夫婦が協議しあつたことが、二度や三度でなかつたのであります。そして次男の讀物にも注意してゐますと『少年倶樂部』に連載されてゐた、山中峯太郎先生の『星の生徒』を、しきりに愛讀してをりました。これを私も讀んでみまして、陸軍幼年學校生徒の生活に、多大の興味を感じたのであります。

☆父の苦心の數々

この頃、市に一つしかない縣立中學校に、あるまじきストライキが起りまして、父兄敬慕の的であつた校長が、不意に退職になりました。長男はその中學の二年生であり、私は市内の某中學に敎鞭をとつてゐる關係上、縣立中學の内情を知つてゐますので、紛爭の犧牲になつた校長に、少からず同情すると同時に、長男を轉校させようかとまで考へてをりました。すると果然、次男がこの縣立中學を忌避して、東京の府立を受けたいと申し出たのであります。

風紀のよくない中學よりも、嚴格優秀の定評ある中學を選びたいといふ、次男の申出には、十分の理由がある。これは親として認めてやらねばならぬと、また〳〵妻と幾度も相談

伸びゆくわが子

しました。わが子の前途良かれと願はない親はない。しかし、世間には、あたら秀才の子を持ちながら、學資のつづかないため、或は不慮の災厄の爲に、愛する自分の子の修學を、中途で餘儀なく止めさせる、悲慘な例は實に多い。

岡山の高校三年生のH君は、父が巡査を奉職して學資を貢いだが、一朝父の死に遭うて廢學の餘儀なきに至り、二年間も流浪した後、自分も巡査を奉職して、前途の希望を諦めてしまつた。

松江高校の理科を卒へた秀才のY君は、東京帝大工科を三回も受驗して果さず、それに父の逝去が彼を一介のルンペンに突落し、遂に世を怨み人を呪つて、左翼思想の群に入つてしまつた。

これらの實例は、子をもつ親の身にとつて、他事でない氣がします。私の寺には定まつた財產とてもなく、住職が仆れると遺族は寺を離れるほかにな

い。學校に勤めてゐても、住職なるが故に囑託である。いつ解傭されるかも知れない。寺の收入だけで子供の教育はできないのであります。中學、高校、大學と、今後少くとも十年間、父の自分の健康、家庭の經濟力を考へますと、前の二つの哀話を聞いても、深刻な不安に襲はれました。

次男は東京の府立中學を、熱心に希望してゐる。しかし、家の經濟、東京へ三十粁の通學、その時間と環境、殊に本人の健康、兄との關係、世間態などを考へますと、親として實に遺憾ながら、本人の當然の希望をも入れてやるわけに行かない。妻も涙を浮かべて本人を呼び、私から懇々と以上の理由をあげて諭しました。

父の平生、父の苦闘、母の不斷の勞苦を知つてゐる次男は、すべてを理解してくれました。そして、行きたがらない縣立中學を受驗しました。席次など氣にしない彼も、二番で入つたことを知らせてやつた時は、さすがにニコ〱してゐましたが、さて、通學するやうになつても、何か氣が進んでゐない。この可憐な様を見て、私の心に閃いたのは、實に「陸軍幼年學校」の六字でありました。

次男自身もまた、「星の生徒」を讀んで以來、幼年學校の生徒に憧れて、「星の生徒になりたいなあ」などと口走つてをりました。

☆登龍の門を志す

愛兒の希望する「陸軍幼年學校」について私は出來るだけ調べてみました。入學試驗は相當の難關、しかし、この登龍の門を一度超えると、七年半の後には、光榮に輝く皇軍の將校に任官し、高等官である。次男がこの道を行き得れば、早くも二十二歳の若さで、以上の位置に到達する。他の方面に比べて段違ひに早く、しかも、幼年學校の教育には、全幅の信頼をもつて愛兒を托し得ることが解りました。

經費の點も無論、調べてみました。幼年學校生徒一人の教養には、一月に八十圓を要する。しかし、家から學校への納金は二十圓、四分の一にすぎない。四分の三は國家が負擔する。本人の小遣は月に五圓、これも學校へ送る。私はこの送金額の少いのに驚いたのであります。しかし、次男はそんなに遣はない。餘る金は學校で積立てて利息を附せられるといふ。

陸軍豫科士官學校へは無試驗で進む。

町の中學に通はせておいても、授業料、學用器具、教科書、服、家の衣食など、毎月二十圓位はかゝる。幼年學校は三年、たとへ私が今急に仆れても、愛兒三年の學資を續け得るだけ

の蓄積はある。愛兒の機械いぢりの不健康な狀態も、幼年學校へ入れば救はれるであらう。否、彼の天性が工科方面に適するとすれば、陸軍に於てその方面へ伸び得るであらう。砲兵科、工兵科、殊に航空兵科、それらの技術方面こそ、今後ます〱有望である。「科學戰」とか「機械化戰術」とかいふ言葉は、近代の流行語でもある。私は妻と眞劍に相談を重ねました。熟議の末、次男を呼びまして、「星の生徒」受驗の希望を許しますと、彼は躍り上つて喜びました。

教育總監部から規則書の送附を頂き、願書を認めた時は、書式が相當面倒な爲、私共夫婦で一々相談しながら書きまして、一通は教育總監部へ、一片は市役所へ送りましたところ、一度で通過したので、前途の吉兆と喜ぶ始末、受驗に必要な寫眞も、私が次男を寫眞屋へ連れていつて撮らせました。

受驗準備にかゝらせる時には、中學校の先生その他に質問しましたが、殆ど皆が口を揃へて、

「幼年學校に入る者は、受驗者五十人以上に一人の割合だ。餘程の秀才でなくては、とても入れない。中學の教科書を、よく勉強するほかはないであらう」

と言ふばかりで、準備の具體的方法については、誰も知らない有様、父たる私もまた、この方面に何等の知識もなく、まことに不安な狀態でありました。

☆一家協力の準備

不安なうちに第一學期が終り、夏休暇も半ばすぎました。八月十五日の盆まで寺は忙しく、家の手傳も相當にさせましたが、もうウカ〱してゐられない。幼年學校の試驗問題集を買つて來ますと、まづこれによつて受驗準備を始めました。

八月十九日から九月五日までの間に、問題集の中の數學を全部、調べてしまひました。中に二題だけは、どうしても解けないといふ。三年の兄が見て、「これは二學期にならないと駄目だ」と教へてゐましたが、一題は本の解答が誤つてゐました。

毎日午前中三時間は、少くともやつてゐました。よく續くと感心しながら、同時に妻が健康に心配し、十分注意してやりました。

食事の時間を正しくし、榮養を出來るだけとらせ、間食をつゝしみ、少くとも七時間以上を眠らせるやうにしました。

九月六日以後、中學校はすでに第二學期に入つてゐます。學校の勉強の餘暇に、國語なら國語、地理なら地理と、一日に一科づつ一心にやつてゐました。

國語は中學校使用の國文法を、特に苦心して調べてゐました。私は質問されても、すでに忘れてゐて、少からず惱まされました。

作文を嫌ひますが、八波則吉先生の著「少年模範文」を精讀しました。

地理は試驗問題が難しく、敎はつた範圍にない「西鄕町」が出てゐるので、兄の中學三年の日本地理を調べてゐました。

國史は元來が得意でなく、そのため中學で筆記したノートを淸書し直して、記憶を新たにし、主として中學の敎科書を精讀してゐました。

理科は最も得意とするところ、小學校の敎科書を始め、兄の物理化學の敎科書まで參照して、今までの試驗問題を丹念に調べてゐました。

以上の準備方法が、果して適切であつたかどうかは、斷言出來ませんが、たゞ一つ今も思つてゐますことは、小學校五年と六年の基礎を、しつかり實力的に固めておくのが、何より大事であると思ふのであります。

第二學期の終になりまして、問題集の二百餘頁を全部、十分に調べ盡くしたやうでした。

冬休になり一月三日までは、親戚の少年が遊びにきてゐまして、大體遊んでしまひました。が、一月四日から、第二回目の數學再復習を始めまして、受驗までに全部を終りました。

試驗場は東京にあるため、親戚に賴んで閑靜な二階を借り、身體檢査の日と共に四日間、私ども兩親が附添つて參りました。懸念した身體檢査も通り、學科試驗の結果は、國語で「兵馬倥偬」が違ひ、作文は思ふことを書いた。數學は十三題のうち十一題は檢算し、後二題も誤りない筈。地理は要港五つを、學校で敎はつた通り四つしか書かず。歷史は誤りなし。理科は筆の續くかぎり書きなぐつて來たなどと申してをりました。この上は最早、採否を靜かに待つ外なしと思ひながら、不安は去り難く、各科の得點を勝手な想像で計算したりしてゐました。

☆伸び行くわが子

忘れ得ない三月十四日、東京幼年學校に採用豫定の電報、一家の無限の喜び、これは筆紙に盡くし得ないところであります。

三月二十八日の身體檢査も合格しまして、三十一日に入校命令を拜受、四月一日午前十時、東京幼年學校の門を連れて入りました。廣々とした運動場に、全校生徒が集合して入校

式が擧行され、御在校の賀陽宮殿下に、一同と共に敬禮申し上げた光榮は、生涯忘れ得ないところ、わが子の軍服姿を始めて見ました時は、思はず落淚しました。

四月五日の日曜には、始めての外出。妻と長男と三人連で上京し、軍服姿の美しく凛々しい次男を迎へまして、明治神宮、宮城、靖國神社に參拜、路行く人々がわれ等を見るのに、今日こそ我が世の春を謳ひたい心地もしました。

その後、私は上京する度に、面會に行きました。生徒監殿にもお會ひしましたが、訓育されること恰も自分の子に對する如く、周到、懇切に、次男の長所も缺點も、すでに深く見てゐられるのに、驚き且感激に堪へませんでした。次男も生徒監殿を心から敬慕してゐまして、私宅を訪ね二度も大饗應をして戴いたなどと喜んでをりました。

幼年學校の訓育について、私は事實、間然するところを知りませぬ。胸圍が狹いといつては、弓を敎へて下さる。ちよつと風を引いたといつては、すぐに醫務室に連れて行つて下さる。面會に行けば、生徒監殿の方から會ひに來て下さる。受驗にも入校後も軍人の子弟が特に待遇されると聞いてゐましたが、それは全くの誤解でありました。

夏休暇に歸省して來た時は、八月五日、一家總動員で驛へ迎へに行きました。あゝわが子、將校生徒になつて歸る。鄕黨近所の羨望、一家の喜び、本人は見違へるやうに濶達な性格になり、剛健そのもののやうな體格と態度、言葉も明晳になり、しかも明朗無邪氣な少年でゐるのを見まして、妻は嬉し淚をこぼしてをりました。

翌六日の朝早く、誰か大聲をあげて裏庭で讀書してゐる。驚いて行つてみますと、次男が白裝束で御勅諭を奉讀してゐるのに、更に一驚しました。遙拜と奉讀は、毎朝缺かさず續けてゐました。

一月の休暇も終つて歸校、十月中旬は訓練旅行があり、十一月三日の明治節には、觀兵式の陪觀を許され、しかも、幼年學校生徒に御下賜あらせられた御菓子を、本人が外出の時に捧げて歸つて來まして、家中一同、勿體なさに感激の外はなかつたのであります。

十二月二十五日から冬休暇、代數の難問題をやり、獨逸語は毎日二時間づつやつてゐました。家の手傳、餠つきもさせましたが、すべて規律正しく從順に最後までやり通すのに、妻は驚嘆してをりました。早朝の遙拜と奉讀は缺かさず、中學入校前後に於ける私どもの心配は、悉く一掃されました。

風呂に入れてみますと、驚くばかり筋骨も伸び、身長も中學

時代より九糎ほど高くなつてゐました。

團欒の正月を家で迎へ、一月七日に勇ましく歸校しました。

☆父も遙拝す

兩國の大相撲見物、寒稽古、兎狩など、愉快な通信が一家を喜ばせ、二月もすぎまして、三月九日には第一學年の授業終了と知らせて來ました。

三月十七日から春休暇、四月から早くも第二學年に進むのであります。省みてこの一年、私は子の父として、陸軍幼年學校に衷心から感謝するものであります。前途に何の不安もなく、皇國にわが子をさゝげた感激と喜びは、思ふたびに深まり、實は父も毎朝、子のゐる學校の輝ける菊花の御紋章を遙拝してゐるのであります。

豫科士官學校受驗突破記

☆いよく開戰

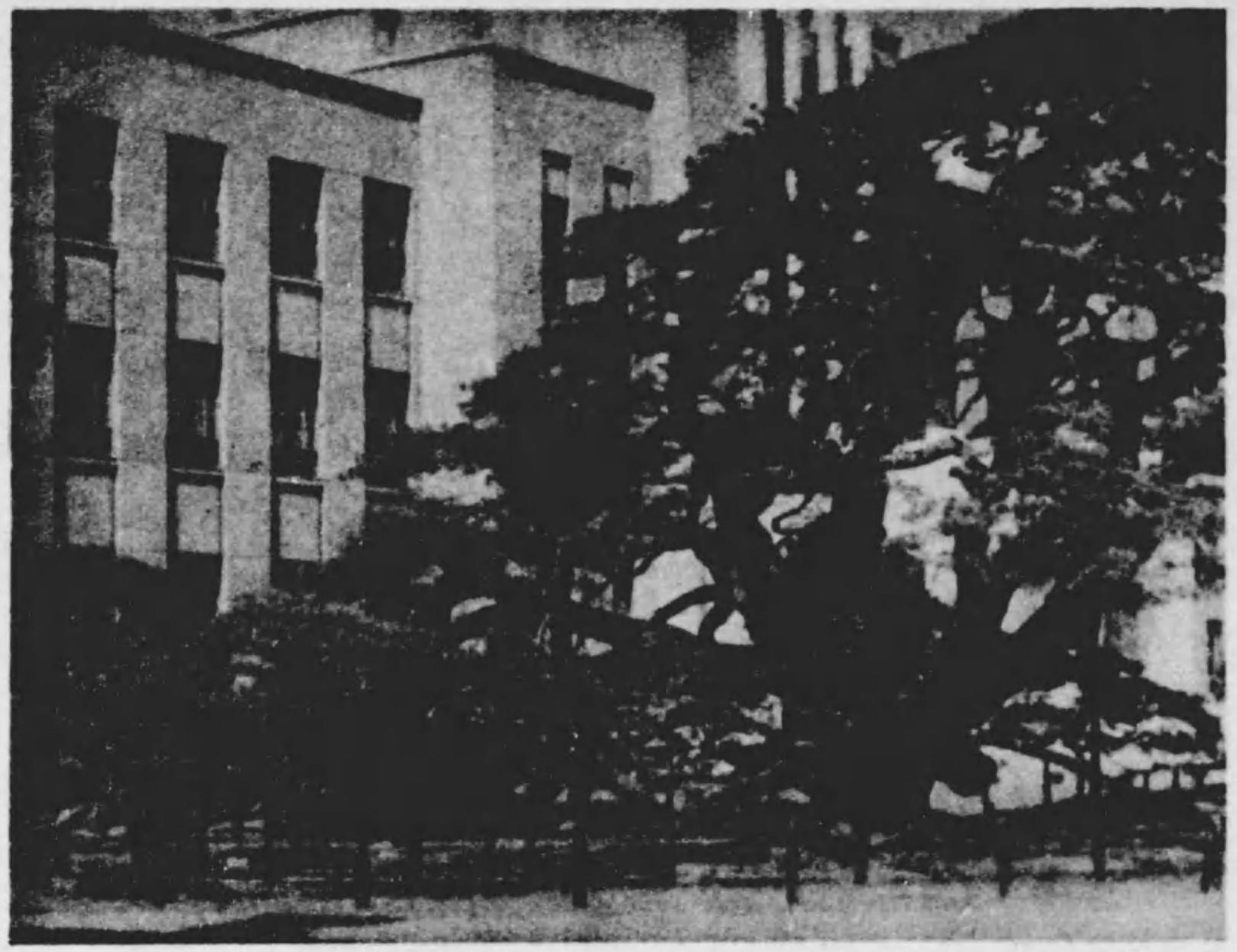
先輩の聲 私が中學校に入つた年の秋九月に、彼の滿洲事變が突發した。毎日の新聞に見る戰況の記事、寫眞、町には號外が飛び、社には、參拜する人が心から皇軍の武運長久を祈つてゐる。私の心に『一死報國』の願が深く刻まれた。が、軍人志願の確固たる志は、この時まだきまつてゐなかつた。

三年生に進級し、四年生になるのも今年といふ正月の拜賀式に出ると、陸軍士官學校にゐる先輩が、冬休暇に歸省してゐて、拜賀式に列席してゐた。式が終つて話を聞きに行くと、『オイ、受けろ』と號令のやうな聲で言はれた。

將校生徒の態度の凛然として立派なこと、しかも、受驗の注意などを聞き、激勵されて、『一死報國』の願が、いよいよ衷心に燃えあがつた。家に歸つて父にまづ相談すると、『お前が志望するならば、實に結構なことだ。しつかり準備して入校し、お上に御奉公してくれるなら、家の名譽だ。私も滿足する』と、顔を輝かして承諾してくれた。

母も贊成してくれた。私はその時、何だかもう自分が將校生徒になつた氣がして、市谷臺上…榮ある星章…自分の軍服姿…などが、チラくと目の前に浮いて來た。が、もしも失敗したら、と思ふと、空想は忽ち消えて、眞劍な受驗準備にかゝり始めた。

あゝ志願票 風薫る青葉の頃、學校の生徒控室に、將校生徒募集の貼札が出た。早速、聯隊區司令部に申し込んで、願書



練武の家を飾るに相應しく、その名も緣の「究松」

用紙を送つてもらふと、受驗心得が同封されてゐる。目を皿のやうにして、讀んだ。募集人員、受驗科目、身體檢査の注意などが、詳しく示されてゐる。『志願票』といふのに記入して提出するのだ。

あゝ『志願票』を見つめた時、私の血は沸いた。これを記入するのが唯一度でありたい。一度で合格したいと、祈るやうな氣持で愼重に記入し、組の擔任先生と配屬將校の方に見て頂いて送附した。するとすぐに、『志願票受理ス』との通知が葉書で來た。

いよく開戰されたのも同然だ。私はその葉書に、一死報國、勉學ニ艷ル、モ亦本望ナリと朱で書いて机の上に貼りつけた。

☆焦躁のうちに過ぎて

大馬力を覺悟 天下の人材を選ぶ大難關の試驗を突破するのだ。問題の傾向などを考へて、好運を期することなどせず、正々堂々と準備を完全に整へ、實力を以て正しく戰ふべしと決意した。この方針によつて、誰もする豫定を立て、時間表を作つてみると、われながら十分に勝算あるものが出來あがつた。

第一學期は右の豫定によつて、教科書を專門に、四年二學期終了程度を目標にして、とにかく進んだが、やつと表面を素通りした位、『これで大丈夫』といふ自信は、毫もつかなかつた。そこで暑中休暇の大馬力を覺悟した。

われながら悲壯　ところが、『暑中休暇』なるものが、意氣ごみだけで實はなか〳〵豫定通りに進まない。晝の炎暑、夜の蚊軍襲來、日に〳〵焦躁してゐるうちに、九月の聲を聞いて愕然とした。見よ、後三箇月しかないのだ。

『俺は今まで何を十分やつたか。こんなことでは、受驗する資格さへないではないか』と、自分を責めて煩悶し、實のところ今年は受驗を斷念しようかとまで、誰にも言はず苦しんだ。しかし、中止する如きは、男子としていかにも殘念だ。今から他人の三倍の馬力をかければ、追ひつかぬことはあるまい、ようし今日から俺は生まれかはつて、眞劍にやるぞと、固く〳〵心に誓つた。われながら悲壯だつた。

誰も皆同じ　學校から歸つてきて、家事を手傳ひながら勉强は、かなりに骨が折れた。家族が多いので、騷々しくもあり、夜になると私は二時間ほど眠つて、夜中に起きてやりつづけた。ほの〴〵と東の白む頃まで燈下にがんばつたこともあつた。不規律不攝生な勉强方法は、長續きがしないと、十分に知つてゐながら、前の怠けただけを取りかへさうと、無理をしつゞけた。緊張してゐた精神力に健康を保ち、遮二無二進んだ。そこへ先輩から手紙がきて、『誰も皆同じ狀態だと思つてがんばれ』と、激勵された。これがグツと力づけてくれた。

受驗者は大概同じ狀態でゐるのに違ひない。こゝが頑張りどころだと、いよ〳〵綜合的復習にかゝつて、豫定に追ひついて行つたが、しかし、自信はまだ少しもつかないうちに、恐るべき身體檢査の日が來た。

過度の勉强に瘦せもしたし、四割は不合格などと前から聞かされてゐたので、實に不安だつた。

☆第一關門を通過

眼、耳、內臟　身體檢査こそ、ありのまゝを檢査されるのだ。要領も祕訣もある筈がない。私は散髮に行き、手足の爪を切り、耳垢も掃除し、受檢場に持參するものを取揃へて、不安なうちに前夜を眠つた。明くればいよ〳〵當日、十一月二十一日、父母に見送られて家を出た。

受檢場に着くと、定刻十分前に人員檢査があり、種々の注意が與へられた。檢査の順序は、一、檢尿。二、身長。三、體重。四、胸圍。五、視力・識色力。六、耳鼻咽喉。七、關節運動・扁平足。八、內臟諸器官。九、陰部・肛門。幸ひに私は何の故障もなく通過したが、自分の健康狀態をよく知らないので、實にビク〳〵してゐた。

不合格者の大部分は、眼、耳、內臟、この何れかの故障のやうに見受けられた。近眼の者は專門醫に矯正してもらひ、眼疾は治療しておかなければならない。辨當を忘れて困つてゐる者もあつた。

飛び立つ嬉しさ　身體檢査が終つて、口頭試問だ。何しろ受檢者が多いので、私の順番が來たのは、夕方の六時頃であつた。試驗官の前へ出て、自分の姓名を言つて着席する。家庭の事情、收入、中學卒業者は卒業後の經路、崇拜人物などを、ハキ〳〵と試問される。私は嚴肅活潑に答へたつもりだ。

『身體檢査に合格。學科試驗にも合格して、目的を達するやうに』と、委員の方から言はれた時は、飛び立つほど嬉しかつた。

學科試驗日割表と、受驗者心得と、在學成績證明書を渡され、欣々と受檢場を出た。急いで家に歸り、父母に報告すると、大いに喜ばれ激勵されたが、あゝこれからがいよ〳〵難關なのだ。

☆亂讀よりも精讀

後は全力發揮　前日は近くの社に參拜して、合格を心から祈り、父母に激勵されて家を出た。定刻より早く受驗場へ行き、人員檢査を受けて着席、試驗委員殿から御注意がある。これを聞きのがすと大變だ。注意を知らずに反則して、受驗を停止されることもあるといふ。いよ〳〵答案用紙が配られ、『始メ』の號令で一齊にペンを執つた。後は全力發揮だ。

朝の九時半に始り、晝食時の休憩があつて、午後三時まで、私は三日間に頭がフラ〳〵になつた。不能の問題は幸ひになかつたが、全體に於てよい成績だとは、どうしても思へなかつた。

たゞ額くばかり　家へ歸つて父母に訊かれても、『相當にやつて來ました』といふほかはない。不合格だと覺悟してゐながら、もしかしたら入つてゐるぞと、各科目について自分の點數を判斷し、幾度も〳〵合計してみた。採用通知が來るのは、二月十一日だ。しかし、不合格だと何の通知も來ない。

待ちに待たれた二月十一日が、遂に來た。胸さわぎするうちに午前が過ぎた。何も來ない。晝飯も喉を通らず、遂に日が暮れて來た。あゝ遂に自分は落ちたのだ。正々堂々と準備

して鬪ふべく、豫定だけは十分に立てたが、努力が足りなかつた。否、努力はしたが俄か勉强だつた。無理な俄か勉强で、陸士の難關は決して突破出來ないのだ、と始めて氣がつきながら、机にしがみついて涙がポロ〳〵落ちた。父母がそばへ來て、「なあに、來年やればいゝのだ。五年から行く人が多いのだから、少しも落膽することはない」と、力づけ慰めてくれたが、本人の私は、悲痛な感じが胸に溢れて、たゞ頷いてゐるばかりだつた。

苦戰すべし　徒らに歎いてゐるばかりでも、事實、仕方がない。私は試驗委員殿のお言葉を思ひ出した。

「苟も軍人を志願する者は、假令不合格となるとも、斷じて失望せず、努力更に努力、最後の勝利を獲得すべきである」

私は實にさうだと思つた。一度の失敗に落膽する位なら、軍人を志願しないがいゝ。私は斷然「最後の勝利」を目ざして再び準備にかゝつた。

今度こそ敎科書中心に、參考書各一册ときめて、豫定も實行可能の程度に立直し、一日の豫定を必ずやり拔いた。「精讀」を注意した。前は「亂讀」だつた。

今度こそ充實　暗記學科は、要點を書き拔いて表を作つて行つた。かうしてやつてみると、前の亂讀の缺點が、痛いほど自覺されて、不合格は當然だつたと、しみ〴〵氣がついた。

第一學期、夏休、第二學期、過ぎてみると早い。しかも、敎科書中心に、參考書一册、精讀を重ねた結果は、前に比較にならないほど自信がついた。

再び身體檢査、去年合格したから今年も合格とは限らない。攝生に注意し、殊に眼を大事にした。幸ひに合格して第一關門を通過し、大難關の學科試驗こそ、今度こそ充實した準備で出て行つた。

☆怨るべからずとの確信

齒ぎしりする思　必勝の信念が胸いつぱいに燃えてゐた。「力の限り、しつかりやつてこい」と、父が眞劍な顏をして激勵した。「神さまに合格を祈つてゐますからね」と、母に言はれた時は、涙が出さうになつた。あゝどうしても合格しなければならない。齒ぎしりする思で受驗場に行つた。

試驗第一日、十二月四日だ。神に念じて着席した。去年の經驗で萬年筆を二本用意して來た。第二日、第三日、確かに去年の成績を拔いた。

一致した意見　數學……中學の敎科書をこなしておけば、それだけで十分だと思つた。

輕機關銃手の匍匐進入

國漢文……一見して容易のやうだが、なか〳〵の難物だ。これまた實力をつけるほかはない。

作文……題意を正確に理解することが、第一要件である。

地理……ごまかしは斷じてきかない。結局、敎科書と最新の地圖を精讀のほかはない。『支那本部の地圖、鐵道の名稱』などは、ごまかしのきかない一例だ。

歷史……日本を中心にする西洋史の理解が必要だと思つた。

物理化學……敎科書を十分にやつて、定理公式も具體的な例から類推し得るやうになつてゐればいゝ。

以上は無論、私一個の所感だが、結局、どの學科も敎科書を縱横に精讀し、徹底的に理解してゐるならば、恐るべきではないといふのが多くの合格者の一致した意見である。

☆陸士へ來れ

喜びの泉　多分、大丈夫と思つても、『多分』だから安心は出來ない。私はやはり焦慮した。中學校の先生も、『もしも落ちてゐたら大變だから、高校へ願書を』と、親切に勸めて下さつた。が私の目的は陸士のほかにはない。不安と焦慮のうちに、二月十一日が來た。紀元節である。夜明に起きて冷水をかぶり、門に國旗を出した。もう何ともならないと思

陸軍士官學校參觀記☆

ひながら、電報が來るのを祈りに祈つた。居ても立つてもゐられないうちに、晝前になつて、

「電報ッ」玄關へ走り出て受けとると、お丶「官報」と朱書されてゐる。慄へる手であけてみると、

「リクシサイヨゥヨテイ……」また讀みかへすうちに、字が曇つてきた。泣いてゐるんぢやないが、涙が出てくる。

「合格だね、オイ、合格だね」と、父が玄關へ出てこられた。

二人で奥へ入つて行くと、母が神棚に燈をあげて、ジッと拜んでゐられた。

家中が喜びの泉のやうだつた。喜びあふれて盡きないのだ。

去年の思出　教育總監部へ採用受諾の返電を打ちに、局へ行くと、窓口から、『おめでたう』と、局員に言はれた。學校へ行くと、先生と配屬將校の方々から、將來を祝はれた。が、この湧きたつ歡喜の中に、私は去年の苦い涙を思ひ出した。俺はかうして將校生徒たるの光榮を得たが、方に今日、去年の俺と同じく失敗の涙に咽んでゐる青年が、全國にゐるのだ。と思ふと、心から祈らずにゐられなかつた。努力更に努力、不屈の意氣をもつて必ず捲土重來せられんことを、と。

正式の合格　喜びのうちに、記念すべき三月二十七日が、いよ〳〵明日に迫つた。私は父に伴なはれて氏神樣に參拜し、祖先の墓にも詣り、母と親戚と友人たちに驛まで見送られて、故鄕の町に暫くの別れを告げた。翌朝、東京に着いて、宮城前に額づき、省線電車に乘つて、市谷驛に下車、歩いて行くと、お丶見よ、前面の高臺の上に宏壯なる大建物が、綠深き松の間に仰がれる。憧れの陸軍豫科士官學校が、これなのだ。私は胸高鳴つて、幾度か萬歳を心の中で叫んだ。

菊花の御紋章輝く本部の前に集合し、やがて身體檢査が行はれた。前に一度行はれたのだから、胸部の診察のほかは大體の檢査だ。これを通過して始めて、『採用豫定』でなく正式に『合格』と決定するのだ。

日夜の體得　軍服を生まれて始めて着た時の、嚴肅、敬虔、緊張、そして矜を含む氣持は、到底、筆に書き現せない。しかも、劍を吊つて、晴ある入校式に列し、こ丶にいよ〳〵皇軍の將校生徒になり得たと、自覺した時の感激こそ、實に生涯忘れ得ないものである。

起床から消燈まで　市谷臺上、武寮の新生活は、われ等將校生徒の心身を鍛錬して一絲亂れず、壯快そのものである。あ丶憧れの陸軍豫科士官學校、こ丶に新入の同期生と共に、皇軍の將校たるべき訓育と敎授を、日夜、體得しつ丶あるのだ。

滿天下の青年よ、陸士へ來れ！

陸軍士官學校玄關前

輝く歴史

☆聖慮を畏みて

開校の詔勅　參觀記を述べる前に、本校の歴史について書いてみる。

明治元年に、明治政府が成立した時、『兵學校』が京都に創立された。これが陸軍士官學校の前身である。だから、本校の歴史は古く、明治元年から始つてゐる。

『陸軍士官學校』と改稱されたのは、明治七年で、東京市牛込區の市谷にある舊尾張侯の下屋敷に、校舍が新築された。現在の陸軍豫科士官學校の位置が、さうなのだ。明治十一年に校舍が出來あがつて、六月十日に開校式が擧げられた。この時、畏くも明治天皇には臨御あらせられる御豫定のところ、御都合のために、有栖川宮熾仁親王殿下が御名代として臨ませられ、次の御詔勅を賜はつた。

陸軍士官學校長　陸軍中將　山室宗武閣下

朕惟フニ兵ノ強弱ハ士官ノ精否ニ由ル是此校ノ設アル所以ナリ今ヤ建築功竣ルヲ告ク朕親カラ臨テ開校ノ典ヲ擧ク自今亙士官ヲ養成シ以テ我陸軍ノ益進歩スルハ朕ノ殊ニ此校ニ望ム所ナリ

開校式に御詔勅を賜はつた光榮は、今なほ本校職員生徒の感佩おく能はざるところである。しかも、その後、明治天皇が本校に臨幸あらせらるゝこと二十八回、大正天皇は六回、今上陛下には既に十九回、實に本校の光榮は至大、將校生徒の養成に重きをおかせらるゝ、聖慮のほど、畏き極みである。

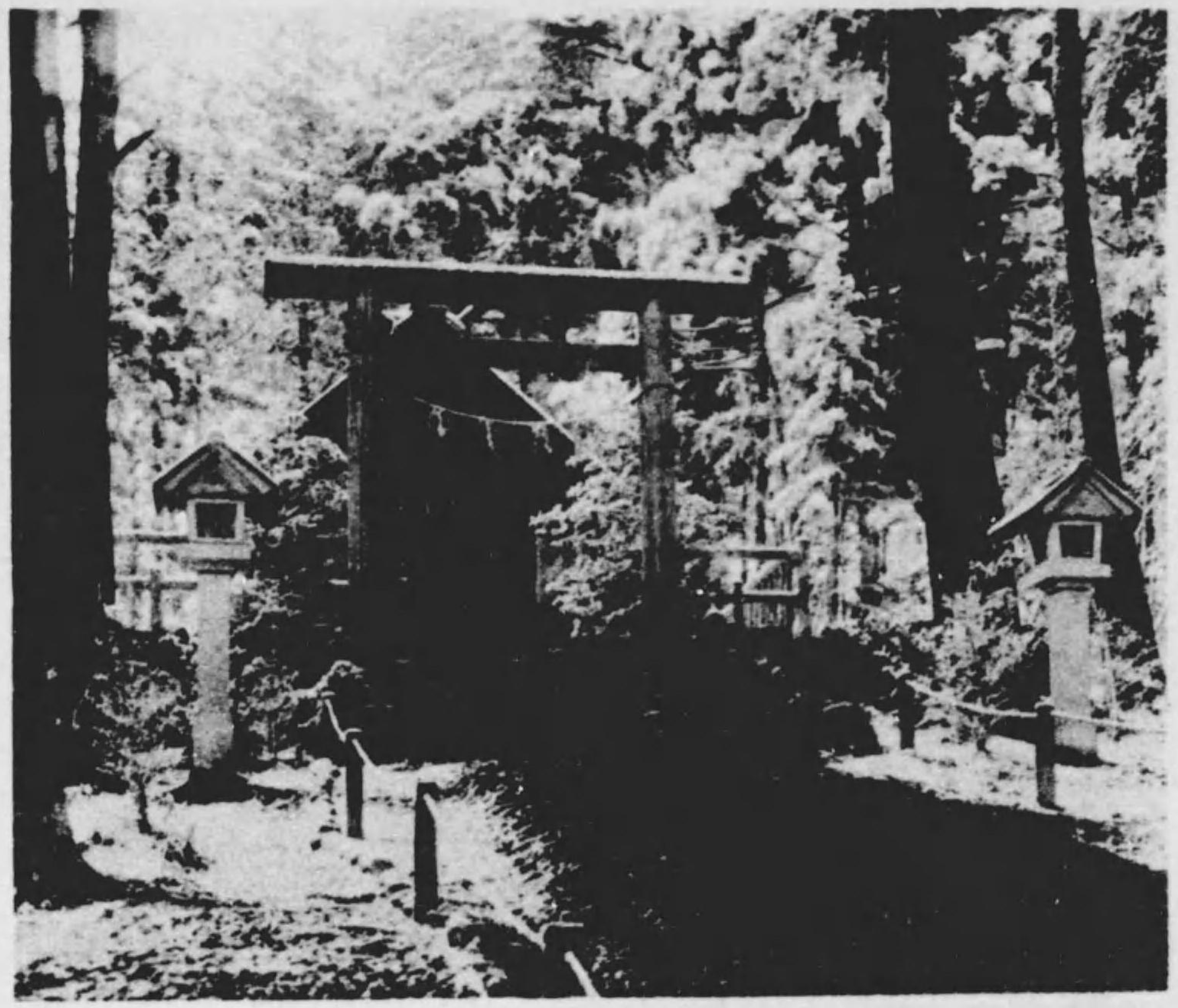
本校生徒は、實に宮殿下御二十三方を同窓の先輩と仰ぎたてまつり、日夜、練武の道に精勵してゐるのである。

御出身の皇王族　本校御出身の皇族殿下、王公族殿下を謹記すると次頁の如くである。

雄健神社　本校の鎭守の宮である。お祭りしてあ

故伏見宮貞愛親王殿下（中尉として御在學）
閑院宮載仁親王殿下（幼年生徒として御在學）
故久邇宮邦彦王殿下（士官候補生第七期）
梨本宮守正王殿下（士官候補生第七期）
故竹田宮恒久王殿下（第十五期）
朝香宮鳩彦王殿下（第二十期）
東久邇宮稔彦王殿下（第二十期）
故北白川宮成久王殿下（第二十期）
李王垠殿下（第二十九期）
賀陽宮恒憲王殿下（第三十二期）
山階宮芳麿王殿下（第三十三期）（現山階芳麿侯爵）

秩父宮雍仁親王殿下（第三十四期）
故久邇宮邦久王殿下（第三十五期）（故久邇邦久侯爵）
閑院宮春仁王殿下（第三十六期）
山階宮茂麿王殿下（第四十一期）（現葛城茂麿伯爵）
竹田宮恒徳王殿下（第四十二期）
李鍵公殿下（第四十二期）
故北白川宮永久王殿下（第四十三期）
朝香宮孚彦王殿下（第四十五期）
李鍝公殿下（第四十五期）
三笠宮崇仁親王殿下（第四十八期）
東久邇宮盛厚王殿下（第四十九期）
東久邇宮彰常王殿下（第五十四期）



雄健神社——崇嚴極まりなし

る神々は、天照皇大御神を始めたてまつり、大國主神、經津主神、武甕槌之男神、大御食津神、そして本校出身の戰病死將校の英靈が奉祀せられ、昭和七年六月十日には、御詔勅下賜五十周年記念として、明治神宮の御分靈を祀りたてまつつた。

『雄健』とは、天照皇大御神が須佐之男命を迎へ給ひし御時のことが、古事記と日本紀に記されてゐる。その中から戴いた二字で、雄壯、猛叫、元氣を發憤し、猛烈あたるべからざる容を現す意味である。

☆最後の練磨

任官するまで　陸軍各兵科（憲兵科を除く）の將校となるべき生徒を養成するので、生徒は『士官候補生』と呼ばれる。憲兵將校になるのは、他の兵科で少尉に任官の後、憲兵に轉科するのだ。

士官候補生は、陸軍豫科士官學校の卒業生で、隊附勤務を八箇月終つた後に、本校へ入校する。

外國の留學生も入校を許可されて、別に教育される。

士官學校を卒業すると、隊に附いて見習士官の勤務に服する。そして、その隊の將校詮衡會議を經ると、いよ

現地戰術——かうして明晳なる頭腦が鍛へられてゆく

いよ少尉に任官するのだ。

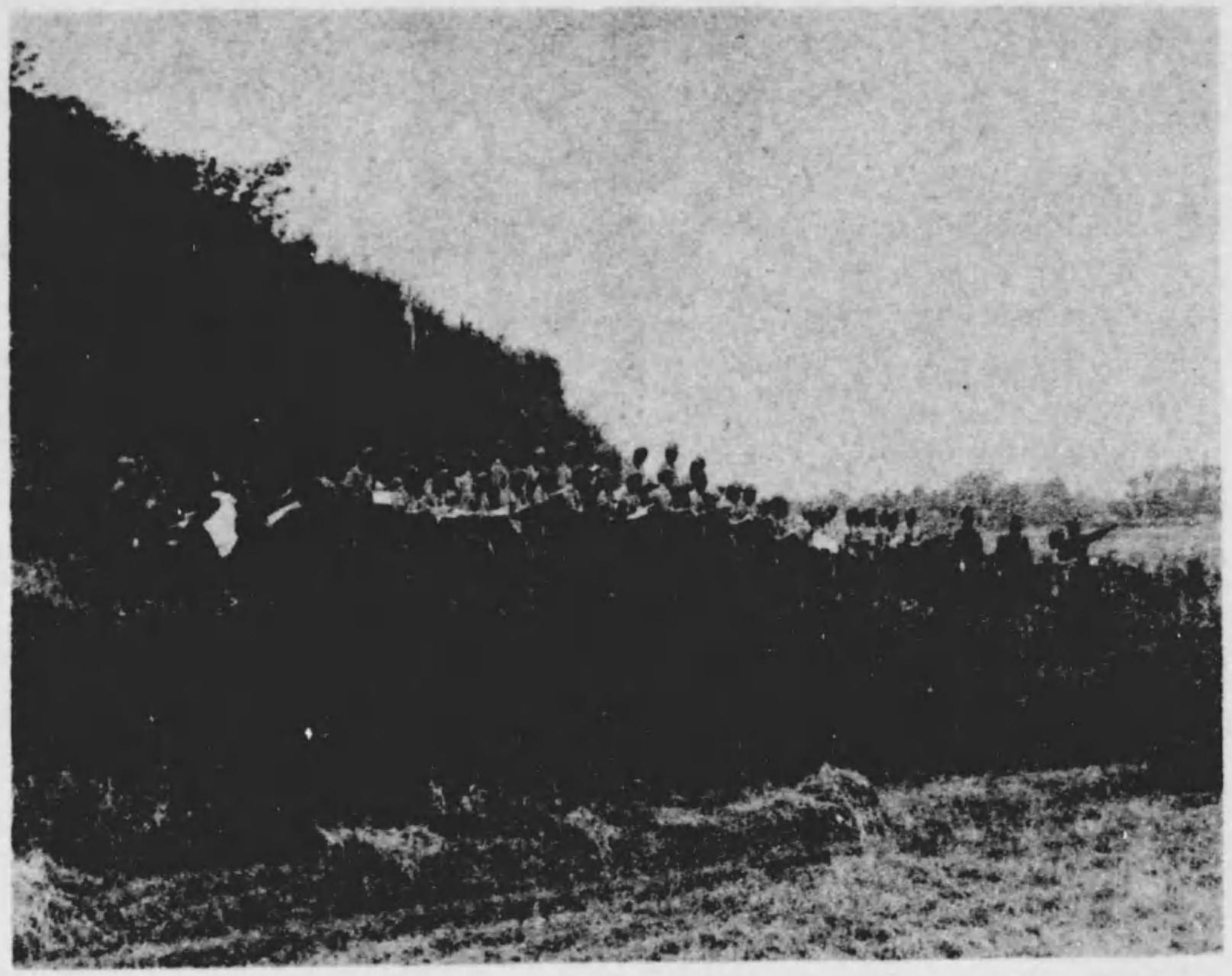
最後の磨 嚴肅な軍紀によつて生活する毎日の起居は、豫科と略ゝ同じだ。が、學術科ともに程度がズッと高くなる。學科の中で主要なものは、無論、軍事學だ。戰術、戰史、軍制、兵器、射擊、航空、築城、交通、測圖、馬學、衞生、この中で時間の最も多いのは、戰術學である。

戰術學は、『原則』と『圖上』と『現地』の三つに分ける。教程でまづ原則を習ひ、圖上で應用を研究し、野外の現地へ出て活用に移るのだ。皇軍の勝敗に關し、多數の生命を左右する軍事學だから、どの學科でも机上の空論は許されない。教官も生徒も實に眞劍に研究する。

軍事學の他に、教育學や語學がある。軍隊教育學と一般教育學を習ひ、語學は、英、獨、佛、露、支のうちの一箇國語が、豫科から續いてグン〳〵向上する。

術科は、校の內外の教練、陣中勤務、射擊、劍術、體操、馬術など、各人の兵科もすでに豫科卒業の時に決定してゐるし、今度は卒業すると直ぐ兵を教育するのだから、訓練はいよ〳〵猛烈になり、それだけに壯快である。將校生徒に最後の磨をかけるのが、本校なのだ。

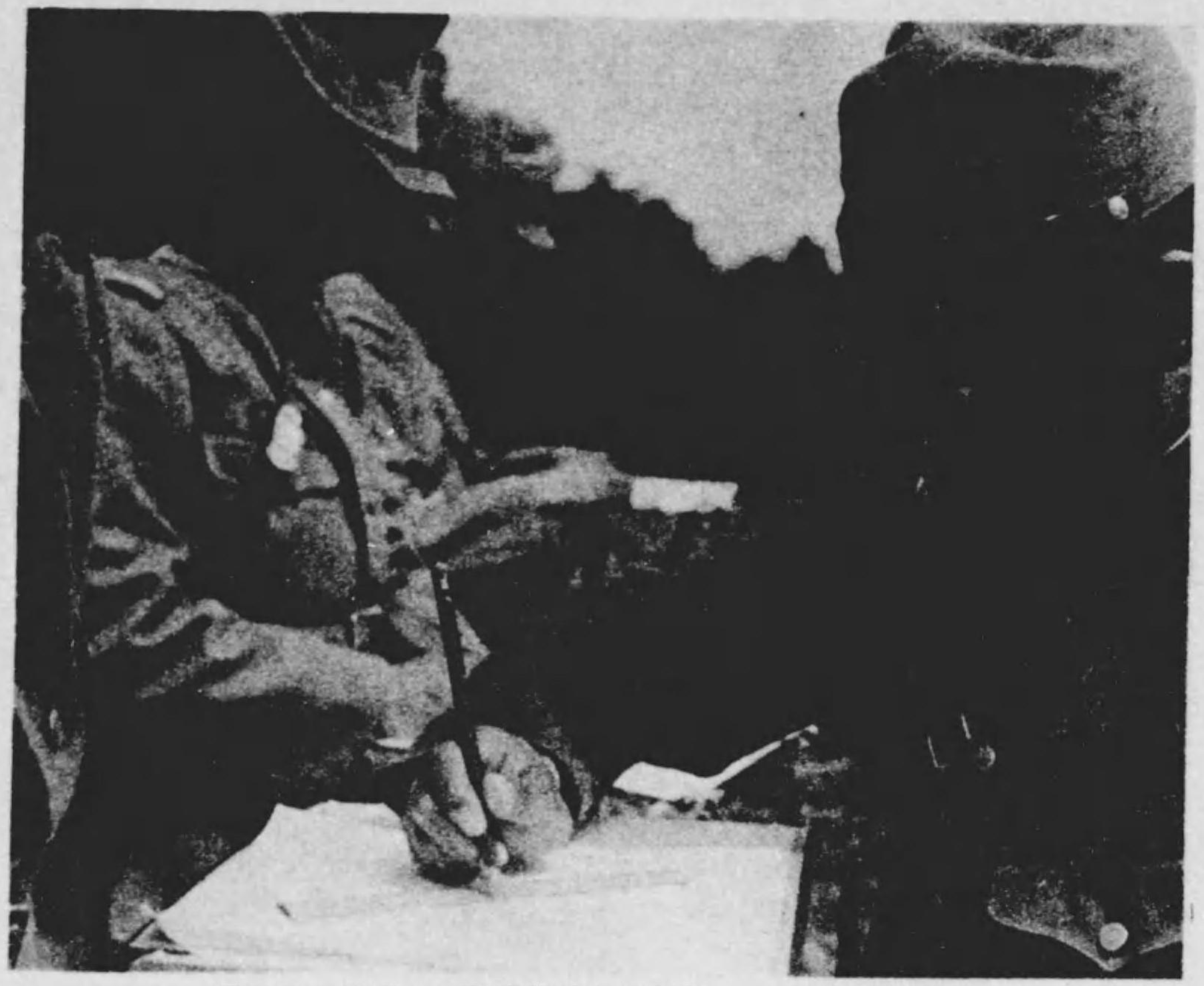
出張・見學 校外の出張も實に多い。現地戰術、測圖演習、野營演習、造兵廠、東京灣要塞、下志津飛行學校、獸醫學校などを、頻々と見學に行く。中にも現地戰術は、聯隊長になつたり、師團長になつたりして、自分の戰術を練るのだから、士官候補生の熱血を沸かす。



☆將校になる土臺石

若き戰術家の群 現地戰術に、われ等の士官候補生は勇躍して、甲府に出張する。原野に地圖をひろげて立てば、新綠燃ゆる自然の景觀に、巍然と聳えてゐる富士の靈峰を仰ぎ、四方の山河を望んで、甲府に覇を成した名將武田信玄を、歷然と思ひ出さずにはゐられない。彼こそ稀代の戰術家だつた。今は靑年戰術家の士官候補生が、夜は甲府聯隊の兵舍に泊り、朝早くからトラックに分乘して、長蛇の如く郊外の山野へ出て行く。意氣軒昂、信玄の戰術何ものぞと氣焰萬丈だ。

三役を兼ねる 教官殿から『想定』が下る。敵狀、我が軍の任務と態勢、それによつて、各自が直後の決心をきめ、現地を視察し廻つて、配備を決する。双眼鏡で前面の地形を見つめる師團長、桑畑に行つて攻擊方向を考へる聯隊長、我が砲兵陣地の選定に首をひねる參謀、一人で二役も三役



測圖演習——懇切な教官殿の指導を受ける

も兼ねる。いづれも死地に部下を前進させる深刻切實な問題だ。

各自が配備を決定し、要圖を書いて、教官殿の前へ持つて行く。問題は同じだが、各人の配備は各別だ。戰術の妙味がこゝにある。その各人の『作業』によつて、教官殿が一々講評を加へつゝ、各人に質問される。一問一答、教官殿を中心にして遂に大議論が展開される。敵の砲兵陣地を大いに制壓する筈の味方の砲兵が、反對に横の高地から敵機關銃の集中火を受けて、教官殿からギュウ〳〵言はされる。

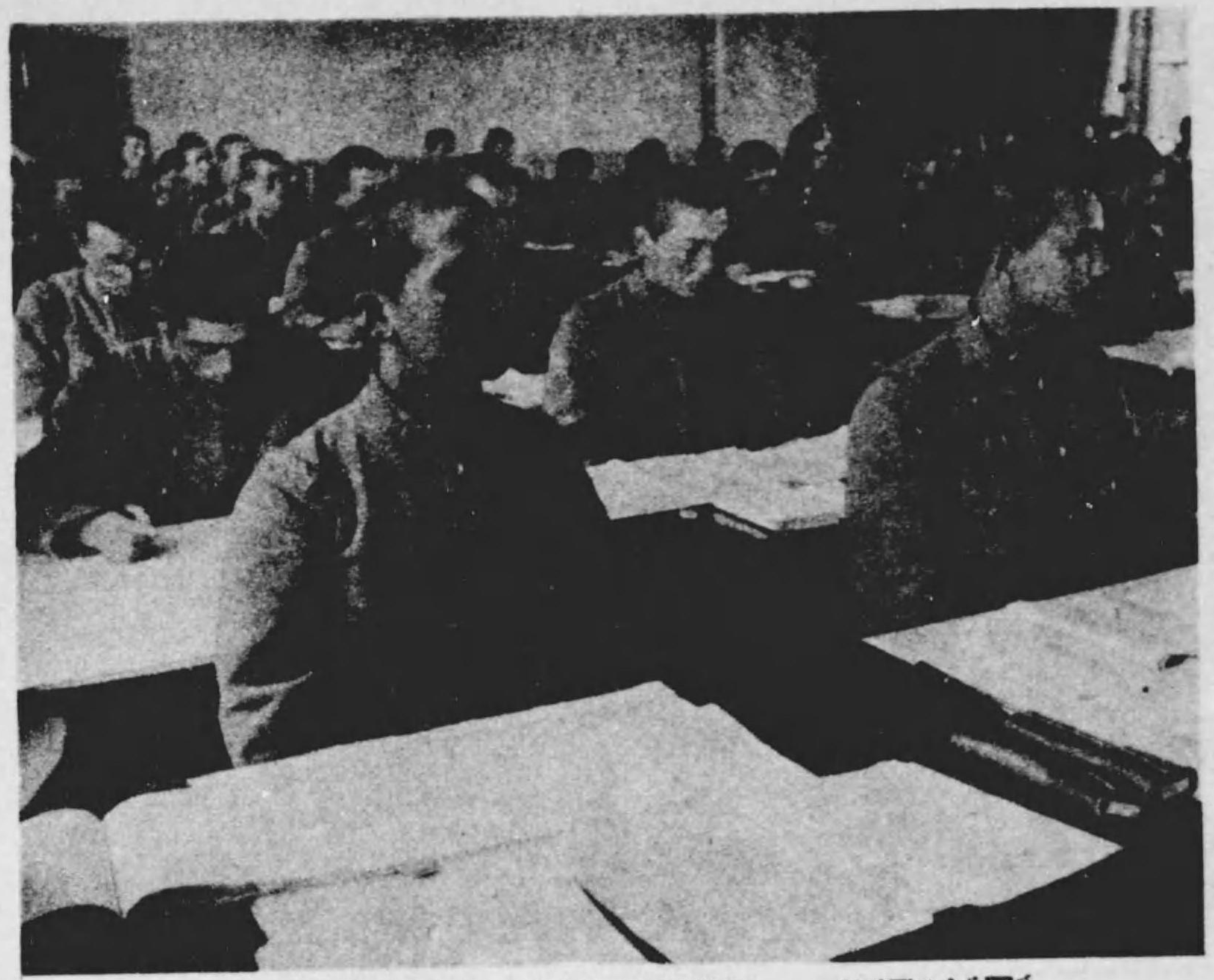
『どうするか』

『ハッ、苦戰します』

『苦戰するだけで處置はないか。砲兵は全滅するぞ』

『………』信玄何するものぞの若き戰術家、グウの音も出ずに立ちすくむ。

千軍萬馬の猛者 各人の一問一答と講評が終ると教官殿は、原則を現地にあてて、古今の戰史に例を取り、問題に明確な判決を與へ、更に原案を模範的に示される。若き戰術家の頭は、成程とばかり釋然として、互に顔を見あはせ微笑し、教官殿の原案に



圖上戰術——眞劍に研究し、熱心に講評を聽く

心から服してしまふ。すると、また戰況が進んで、新たな問題が出される。

今度は前線に狀況が移つて、大隊長や中隊長になつたりする。僅か一中隊の指揮にも、無論、重要な戰術的價値があるのだ。

夕日が遙かなる甲斐駒に沈む時、一日の作業を終つて、再びトラックに分乘、兵舍へ搖られながら歸つて來ると、夜にも問題が出る。

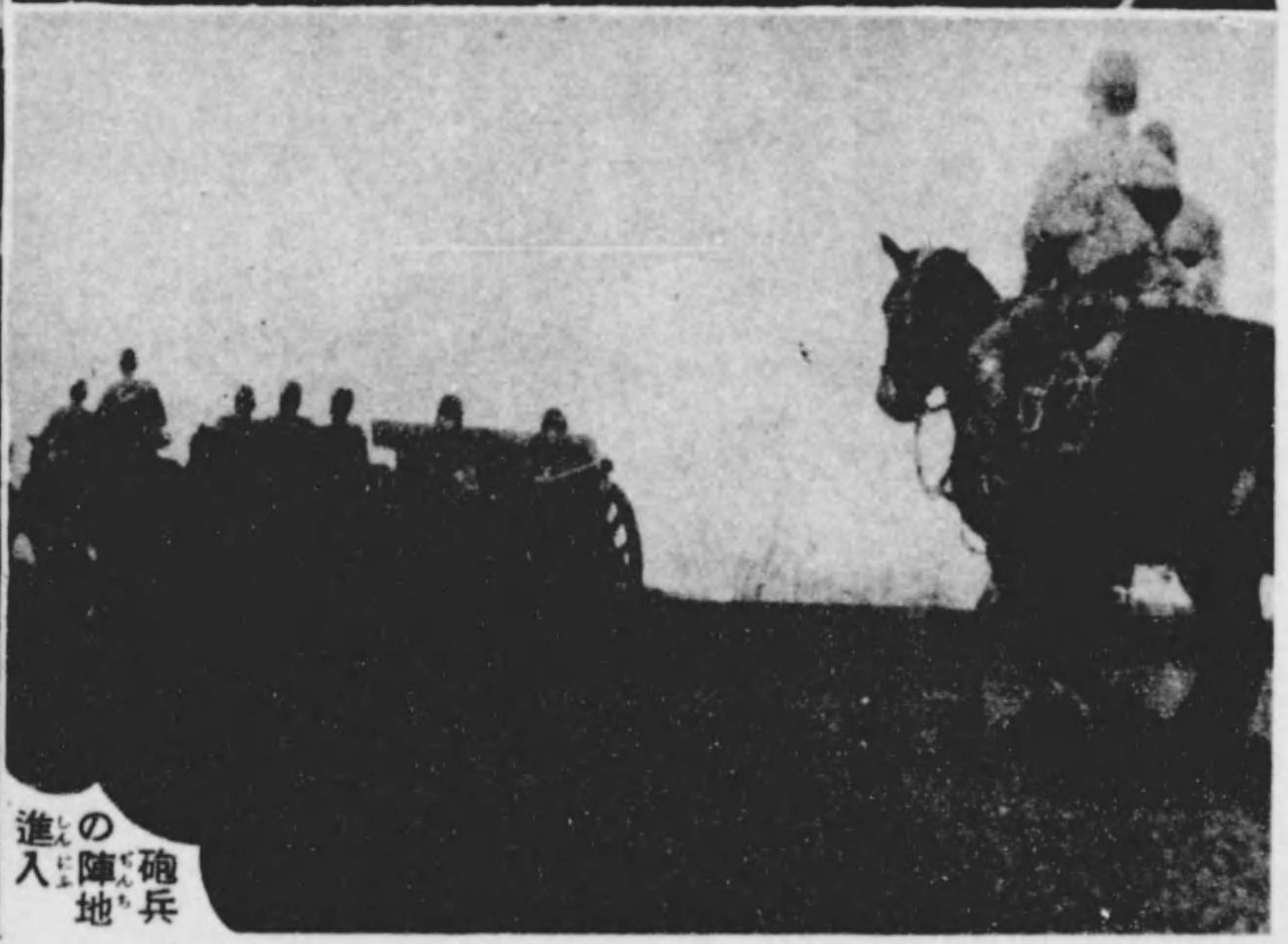
或は攻め、或は防ぐ。遭遇戰もやれば、持久戰もやる。實戰を現地に想像して、戰場心理に馴れるやうに、教官殿が適當に指導されるから、現地戰術を一週間して終る頃になると、銃砲聲こそ聞えないが、まるで千軍萬馬の猛者になつたやうな氣がする。

また事實、この若き戰術家の群の中から、將來、軍司令官も出よう、師團長も出よう、出るのが當然だ。その基礎を今の足もとから築く。その土臺石の一つが、現地戰術なのだ。

☆野營演習

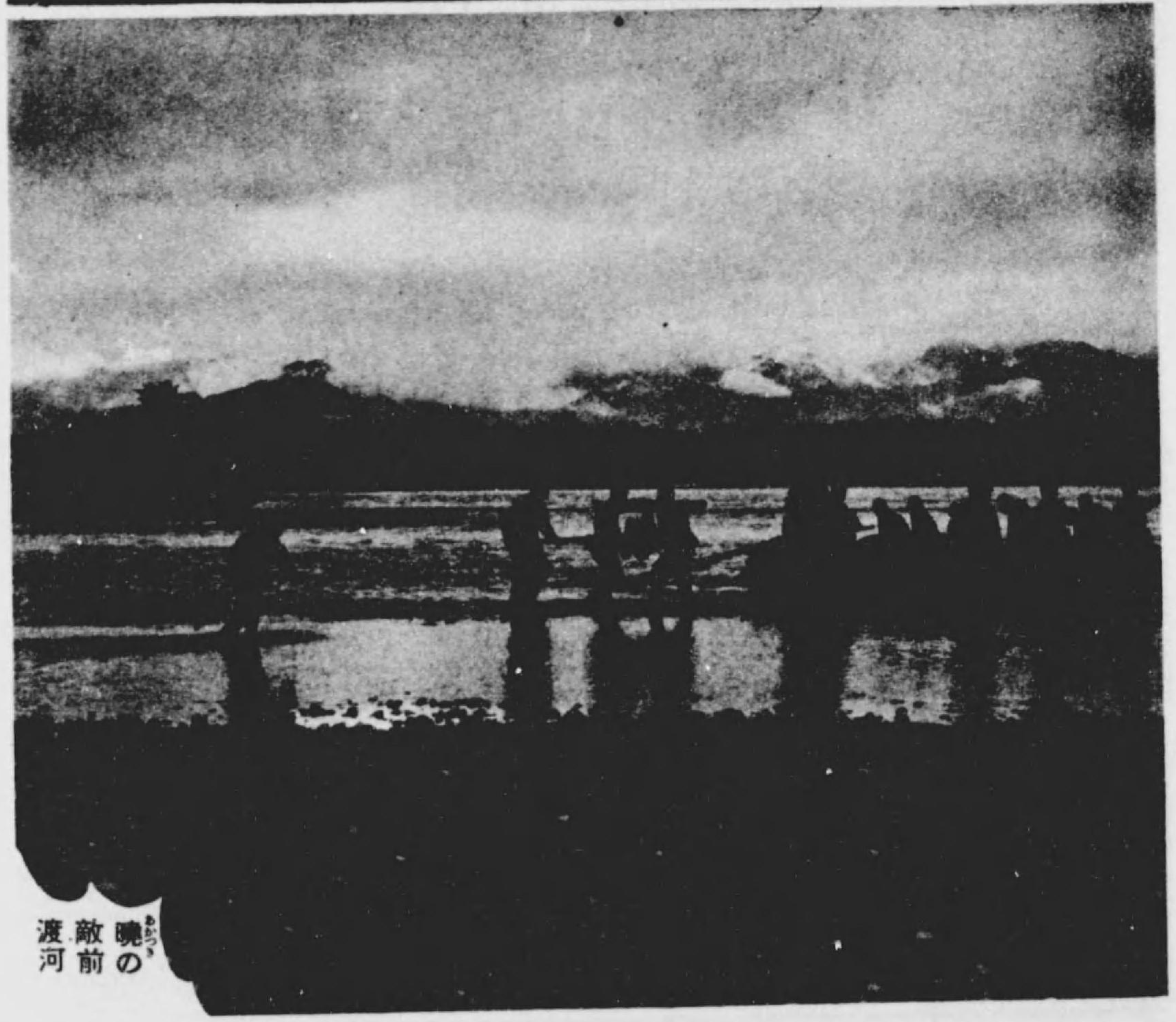
切實な體驗 『正氣の歌』に藤田東湖が歌つた。

将校斥候



砲兵の陣地進入

渡河掩護射撃



暁の敵前渡河

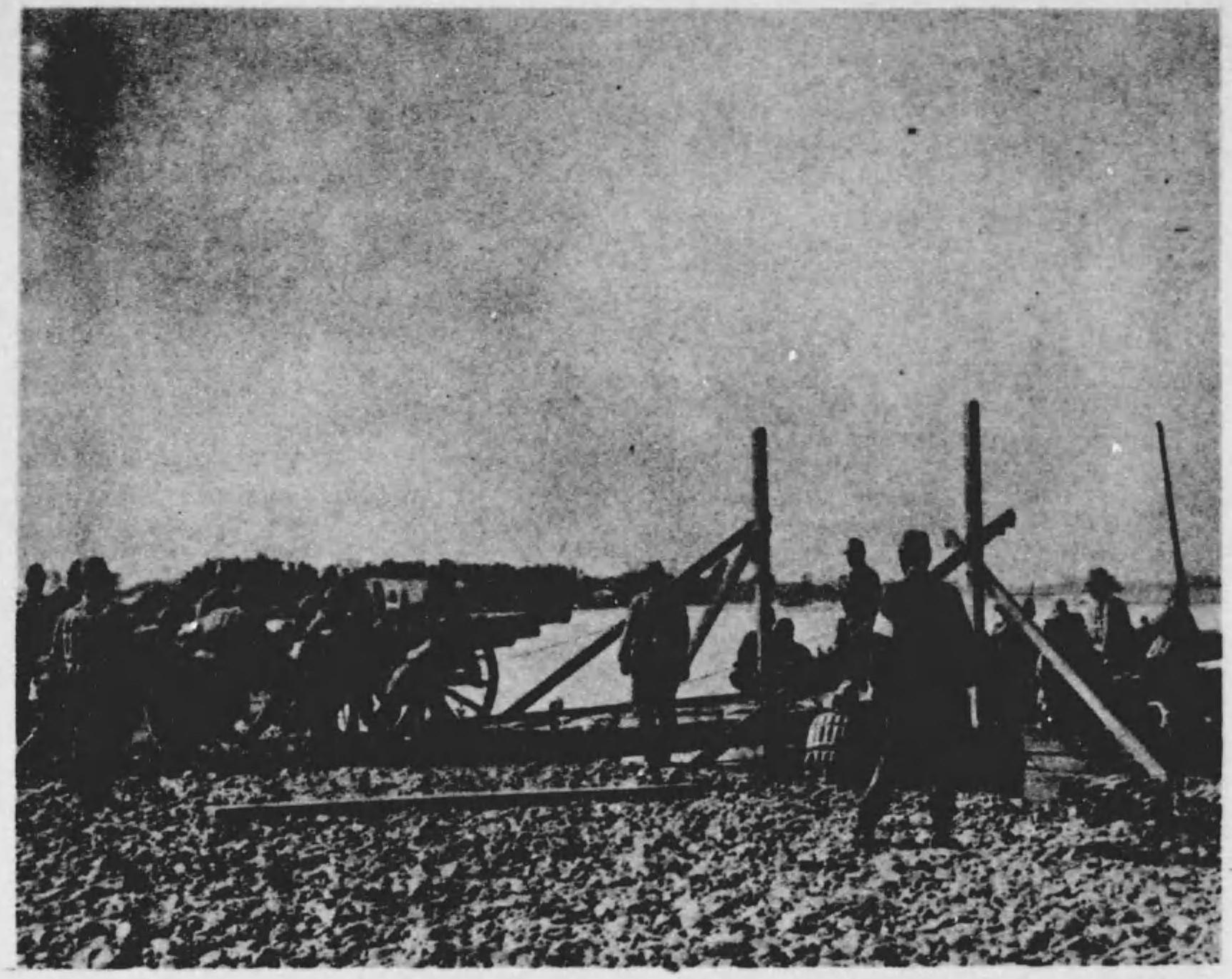
工兵の壮快な爆破作業

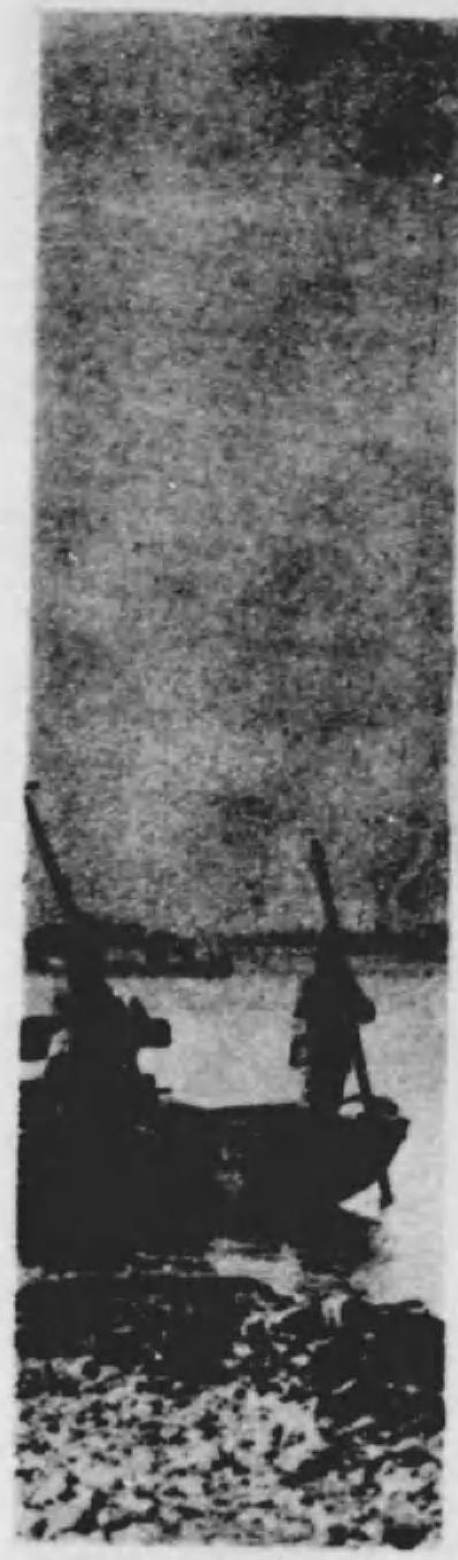
命令受領――隊長の命令を速やかに筆記して本隊に傳へる

「秀でては不二の嶽となり、巍々として千秋に聳ゆ」と、その靈峰の裾野は茫々とひろがつてゐて、滿洲國の原野を想像させる。その廣原の中に在る板妻と瀧ヶ原の二大廠舍に、青年將校生徒が野營して、前後三週間、日夜を分かたず武を練るのだ。

演習の科目は、各兵科によつて差別がある。が、兵の動作を始め、分隊長、小隊長の任務、將校斥候、前哨の警戒など、あらゆる陣中勤務と戰鬪演習を、實地に習得し熟練する。殊に夜襲を決行する時など、壮烈を極めて切實な體驗を得る。

曉の靄を破つて銃聲ひゞく拂曉戰もまた、痛快淋漓





砲工の聯合演習（左）

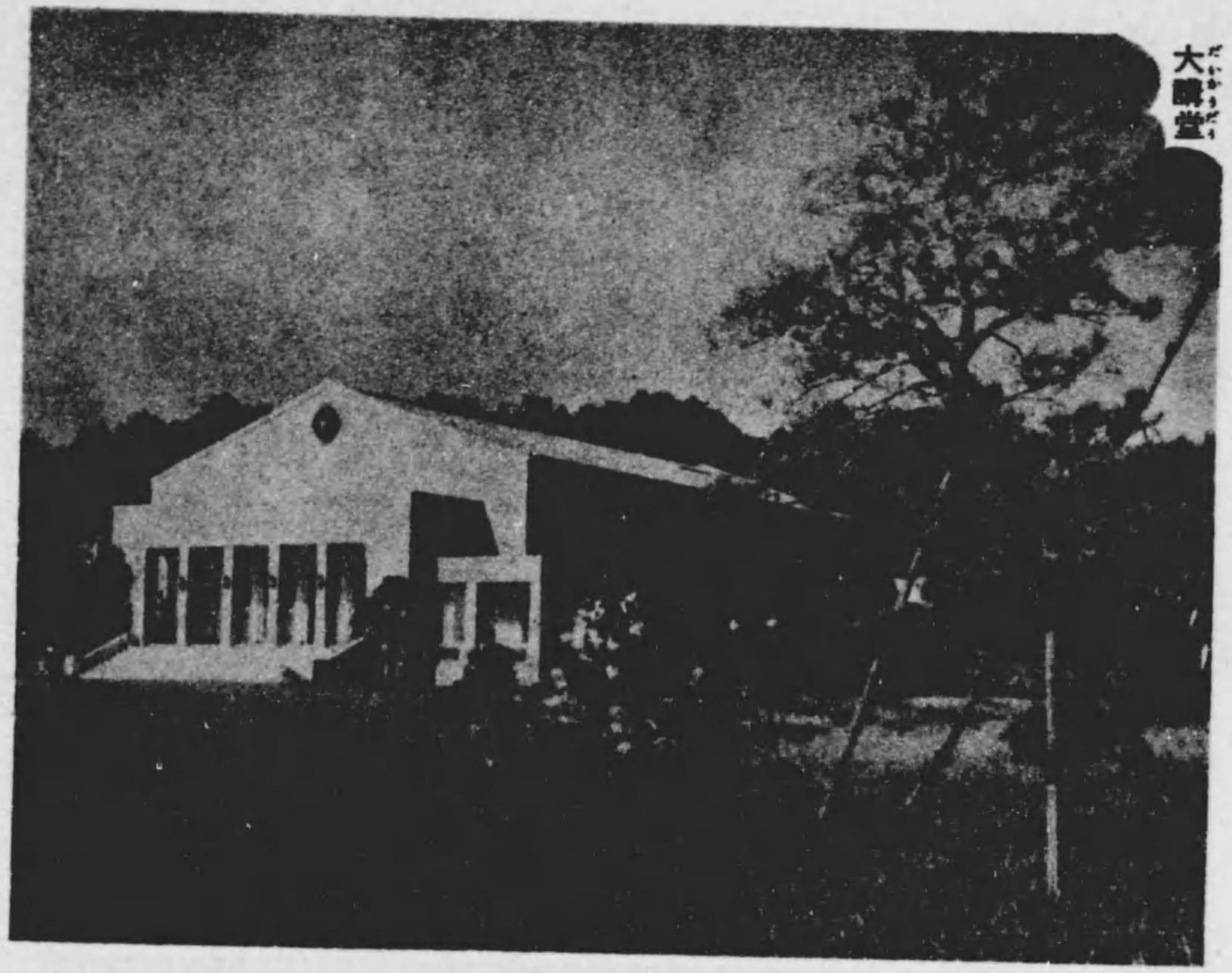
たるものだ。

小隊長も分隊長も兵も、「俺、貴樣」の同期生なのだが、その職を一度命じられると、演習とはいへ上官に部下は絶對服從だ。斥候に出ても、歩哨に立つても、獻身一意、任務を遂行する。

演習が終ると必ず講評される。頭から鐵槌を打たれる如き痛烈な批判を受けて、その時は呆然とするが、後で考へてみると、身に沁みて有難い訓戒であることが解る。これが將來どれほど役に立つか知れないのだ。

養ふ鋭氣　背に靈峰を負ひ、前面に箱根、愛鷹の山山、駿河灣の海光を臨んで、一日の演習を終り、夕暮の廠舍へ歸る時の氣持は、また格別だ。裾野には鳴く鳥が多い。鶯、時鳥など、空に草むらに時ならぬ聲をかはして、練武の將校生徒を驚かす。夕食後は酒保に團欒して氣焔を上げ、或は曠野を濶歩して吟誦、鋭氣を養ふ。

歩兵砲兵の聯合演習、裝甲騎兵演習、砲兵の實彈射撃、工兵の爆破作業、煙幕演習、坑道作業など、その他、近代科學戰の各方面に、實習を積んで精進する内容は、一々書き盡くせない。次に參觀記を述べる。



大講堂

☆敷地二十餘萬坪

國家鎭護の神　省線の新宿驛から小田原急行の電車に乘つて、凡そ一時間、郊外沿線の風光に都會の氣分を洗ひ去り、相模川畔の士官學校前驛に下りたのが、午前九時すぎであつた。

小田の蛙鳴く山ぞひの道を行くこと、約一粁半、山の端を出ると、右手一面の平地に、整然と列をなしてゐる堂々の新建築こそ、陸軍士官學校である。二十米程もあらう道路を前の廣場にして、正門が儼然と立つてゐる。

傳統の市谷臺を去つて、本校がこゝに建て始められたのが、昭和十一年九月、鋭意、工を急いで、今や全部が落成してゐるのを參觀させて頂いた。

甲州信濃の山地に源を發する桂川、道志川の二流を合はせて、東南へ悠々と流れる相模川が、流域の平野に灑いで一段と大きく屈曲し、南へ轉回するところ、左岸の高地に太古の姿を想はせるやうな素朴な一部落が、卽ち座間町である。この町が今や、わが陸軍士官學校の所在地として、廣く世に知られるやうになつた。座間は元來、『座摩郷』と言ひ、座摩とは皇居鎭護の神を代表する御名であるといふ。

生徒集會所の庭園

今や實際に、この座摩の郷に、搖るぎなき皇運の御榮を護りたてまつる、陸軍士官學校が建てられたのだ。地名の歷史を考へても、記者は衷心から祝福せずにはゐられなかつた。

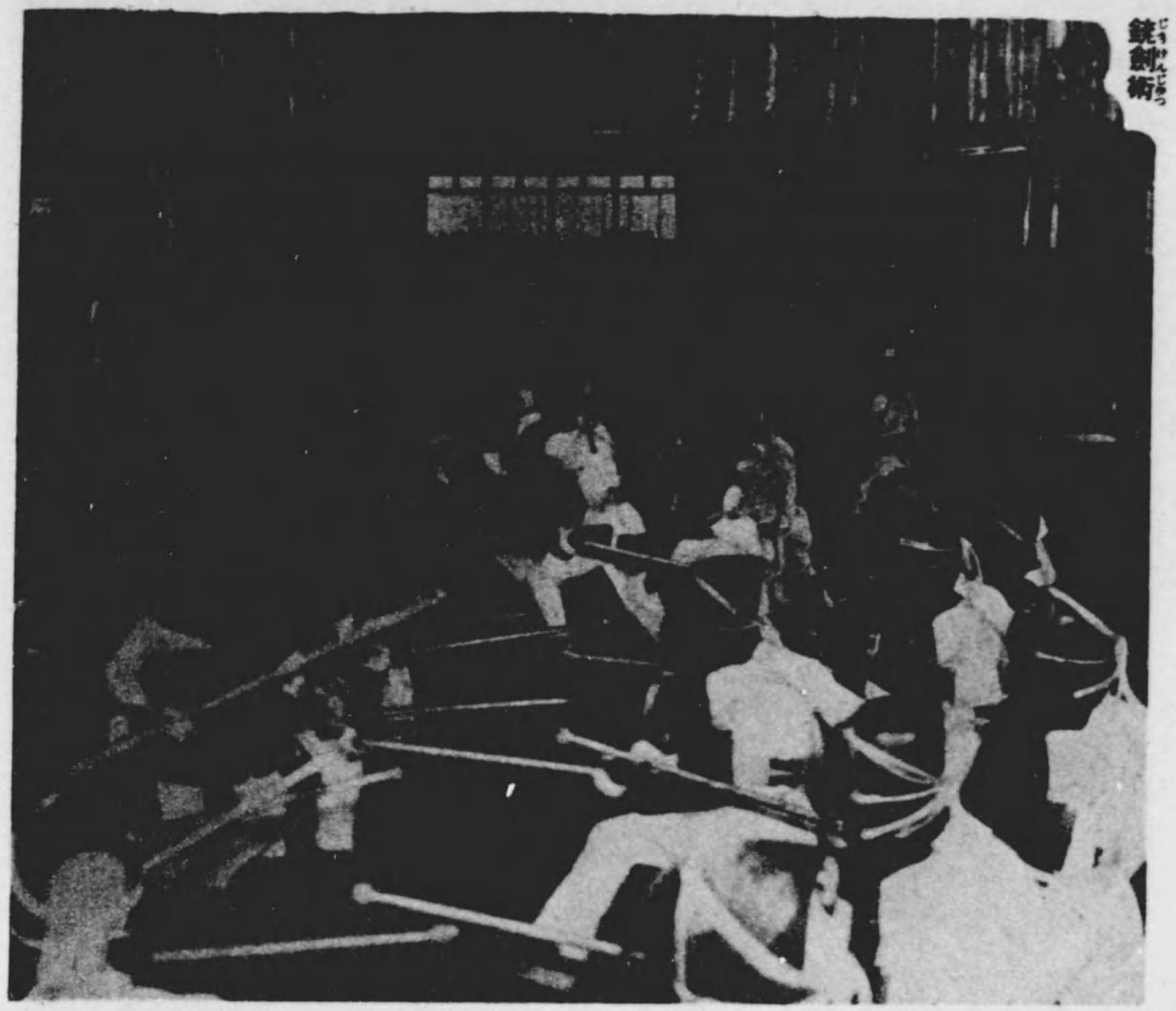
驚くほかなし　門衛氏に名刺を出して、本部に校附大佐殿を訪ねた。豫科が巍然たる洋風建築なるにくらべて、こゝは本部も生徒舍も、すべて瓦葺の純然たる日本建築であり、堂々として而も簡素のうちに、おのづから莊重な感じが滿ちてゐる。

將校生徒の最後の磨をかける練武の道場が、日本式建築であるのは、床しくも悅ばしい。正面に燦たる菊花の御紋章を拜して、本部の中に入つた。

二階の中央が校長室、幹事室、右の方に、便殿、貴賓室などがある。敎官室が渡り廊下で別棟に續いてゐる。室內へ入つてみると、半分は文庫になつてゐて、和漢洋の兵書を始め、近代軍事學その他の書籍がギツシリと詰まつてゐる。

生徒舍へ行つてみると、自習室と寢室が別棟になつて、渡り廊下でつゞいてゐる。食堂、劍術道場など、いづれも清潔に整然として、埃一つない。殊に劍術道場に、天覽席が設けられてゐるのは、拜するだに畏い。

銃劍術



飛行機庫、重火器廠、高射砲廠、野山砲廠、攻城重砲廠、自動車廠、戰車廠、輜重車廠、兵器工場、器材庫、兵器庫、被服庫など、一々見せて頂いたが、その整備せること驚くほかはない。厩舍、馬丁舍なども、ズラリと並んでゐて、實に壯觀だ。

以上の集團建築の西南に、約一萬坪の觀兵式場が見える。

『陛下親臨の下に、晴の卒業式が行はれるところであります』

と案内の副官殿が、肅然として言はれた。

全體の敷地が二十餘萬坪、廣大そのものである。東を望むと、鬱蒼たる一帶の森に蔽はれた丘がつゞいてゐる。

そこへ登つて行つてみると、將校集會所、生徒集會所、酒保、判任官集會所、醫務室、休養室、火藥庫、砲臺などがあり、雄健神社が祀られ、高臺に遙拜所がある。

丘の麓には、教育資料館、體操場などが目の下に見える。實に大規模だ。

山砲―彈藥裝塡

☆若き人傑の群

雄大剛壯　砲臺の高地に立つて、四方を展望する。相模平野が一眸の中だ。

西の方、蒼空に聳え立つてゐる大山、つゞく山脈の右が丹澤峠、左は箱根の二子峠、遙かに煙の上つてゐるのは、上溝、厚木、その他大小の町々である。南に道路を隔てて、約三萬坪の敷地があり、北を振りかへると、まだ〱廣い野原だ。

『約四十萬坪あつて、附屬練兵場です。このほかに相模川畔に工兵砲兵の演習場もあります』

と、副官殿が悠然と説明される。記者は言つた。

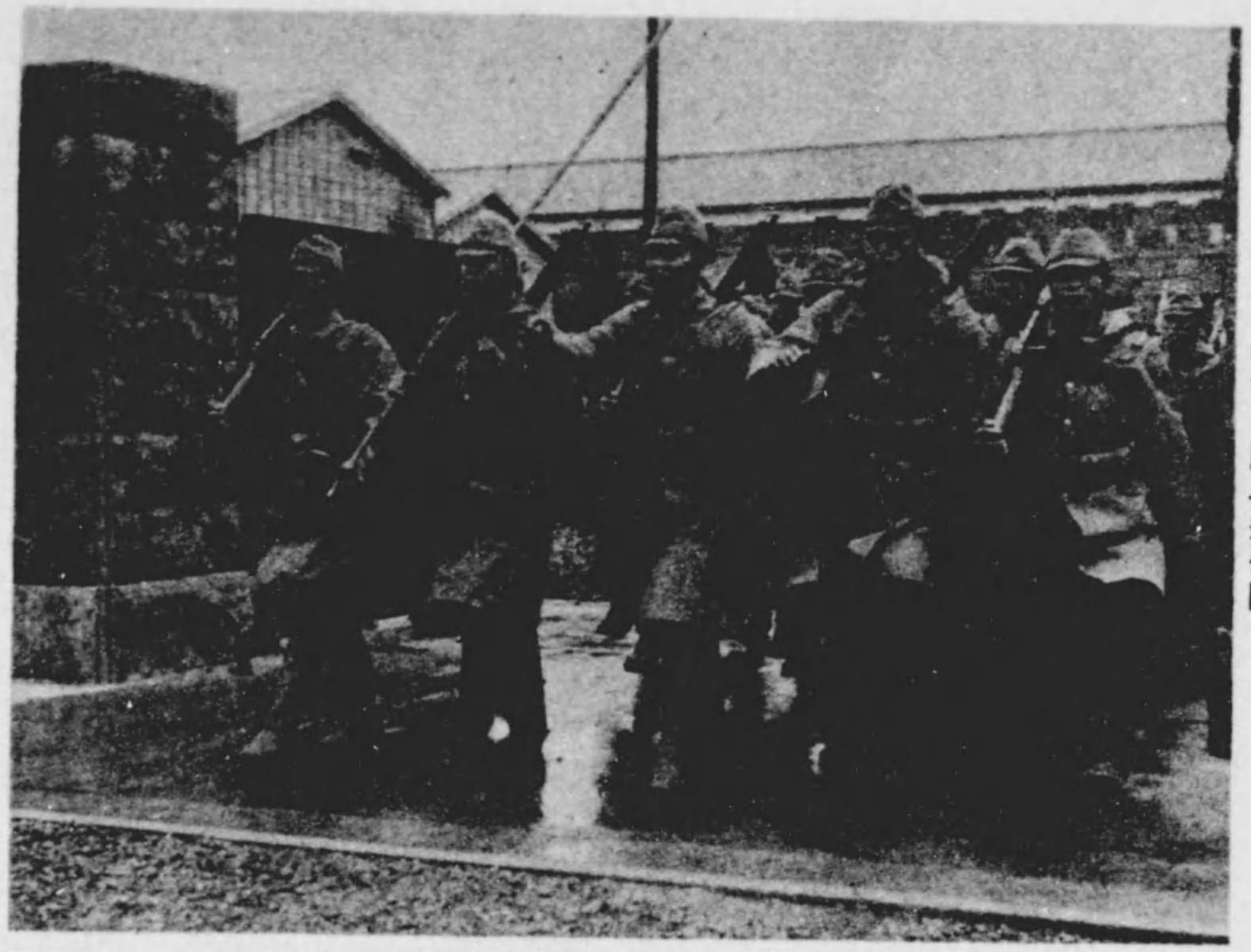
『世界一の士官學校ですな』

四圍の景觀、學校の規模、すべてこれ雄大、剛壯、記者は更に乃木將軍の詩句を思ひ出した。

『地靈人傑是神州』

眞にこの句を實現してゐるのが、わが士官學校である。

男子宜しく　生徒隊は各中隊に分かれ、一中



堂々と正門を出發する騎兵通信隊

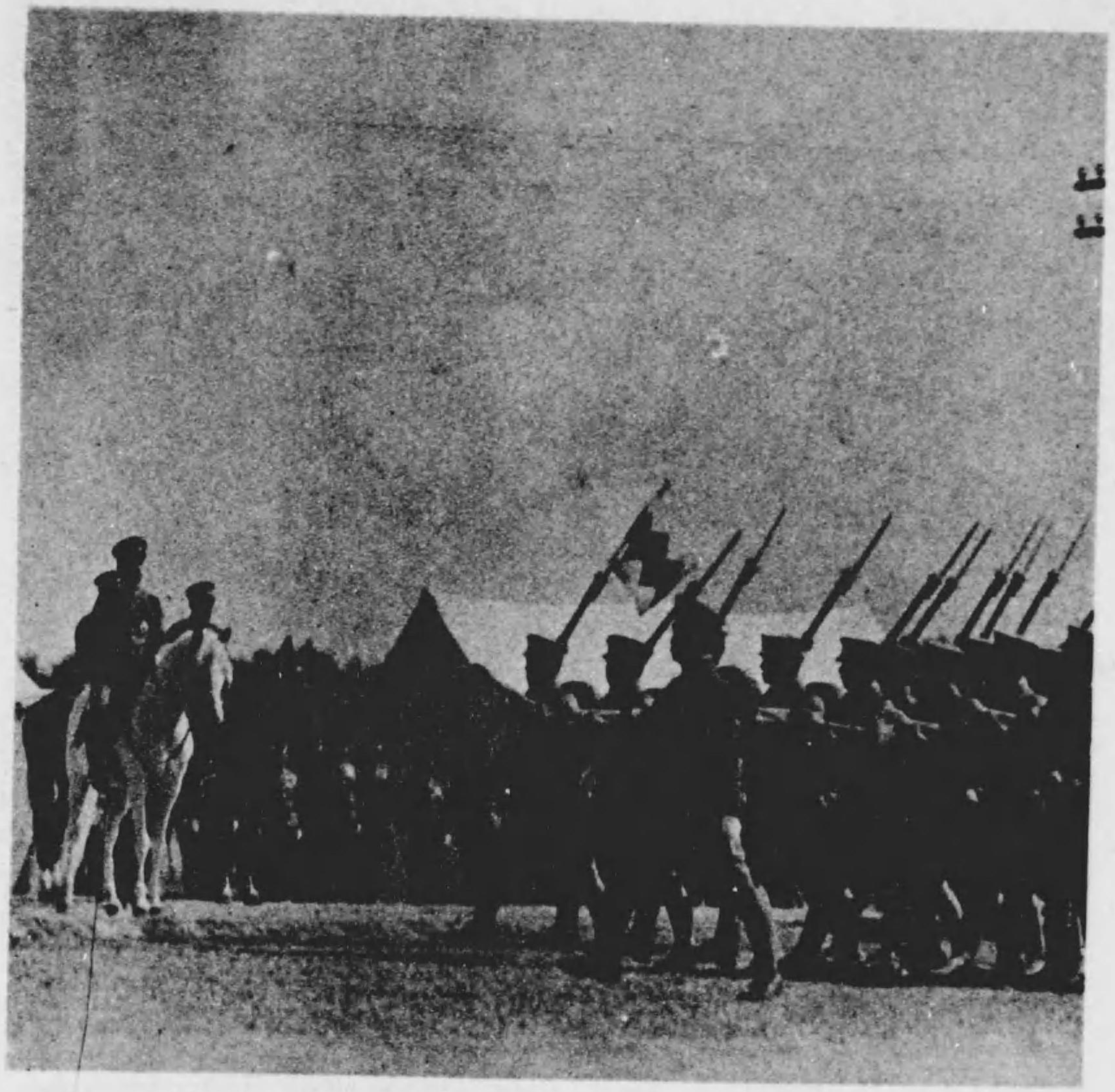
砲兵觀測隊の待機

凜然たり戰車兵

隊は數區隊に分かれてゐる。區隊長殿は兄の如き中尉殿が、身をもつて生徒の訓育に盡くしてゐられる。生徒同士は卽ち『俺、貴様』の同期生、その親しさは眞に一心同體の感がある。由緒も床しい座摩郷、神州を護る地靈に育てられる若き人傑の群は、榮あるかな。

學校の西側にある座間神社に詣でて、參觀を終つたのである。

東京幼年學校、各地方幼年學校、豫科士官學校、士官學校を參觀した記者は、『將校生徒』の壯快な生活、懇切な教育を概ね知り得て、實に限りない賴もしさ氣强さを感じた。皇軍の中心となつて護國の大任を負ふ將校が、かうして養成されてゐるのだ。同時に、全國の青少年諸君に衷心から勸めずにゐられない。男子宜しく將校生徒たるべし。



光榮の卒業式

武運長久なれ　畏くも、大元帥陛下の親臨を仰ぎたてまつり、生徒の卒業式は擧行される。全校一同の感激は言ふまでもない。起床と同時に入浴して、心身を清め、定刻前に正裝して、式場に整列する。

朝空は爽やかに晴れて、天心も行幸に感激し、青年將校生徒の今日の巣立を、「武運長久なれ」と壽いでゐる。晴の卒業生は武裝して、閲兵の隊形に列び、在校生はその後に、刻一刻、參列する。行幸の御時が近づく。敬虔、恐懼、「休メ」と號令されながら、心身共に肅然として、式場は既に水を打つたやうである。

皇軍の將校たるべき鍛錬修養を受けて、軍人精神の本源を汲み、國家元氣

御馬前に分列行進する歩兵科生徒（右）　優等卒業生の御賜品拜受（左）

の樞軸となる使命を、いよ〳〵明日から果さうとする。卒業生の抱負と感激は、いかばかりであらう。皆、猛しい顔に燃えてゐる輝きは、一死報國の不斷の決意である。

實にこの日　來賓の諸將星、學校の職員一同は、玄關前に整列、鹵簿を迎へたてまつる。前驅の自動自轉車が、校内を入り來ると同時に、陸軍軍樂隊が『君が代』を吹奏し、諸員最敬禮の中に、自動車鹵簿にて本部玄關に著御あらせられる。

便殿に於て賜謁の後、觀兵式場へ臨御あらせられ、御愛馬白雪の上に、御軍裝の御英姿を拜したてまつる。皇族殿下を御始め諸將星を隨へさせられ、卒業生を御親しく御閲兵あらせられ、陪觀者一同を嘆はせ給ふ。あゝ今、われ等の將校生徒は、龍顔を咫尺の間に拜したてまつり、感激のあまりに身の

直立せるを忘れる。

御閲兵の後、玉座に立たせらるれば、分列式となる。

軍樂「拔刀隊」の合奏と共に、歩・工の卒業生隊が、歩武堂々、御馬前に分列行進する。

「頭――右」

號令肅として、一同敬禮をさゝげたてまつれば、陛下には畏くも擧手の御答禮を賜はる。

軍樂の行進曲、急に歩調を早むれば、砲兵科の卒業生隊が、新鋭の砲車に轣轆をあげて來る。轟々と爆音をあげて來るのは戰車兵、自動車で行進して來るのは輜重兵科の生徒である。續いて白刄列び戞々たる蹄音と共に分列に行進して來るのは騎兵科の卒業生隊である。

あゝ御馬前に進みて敬禮したてまつり、御答禮を賜はる畏さ、大君の邊にこそ死なん赤誠一心の皇軍魂が、この觀兵式場にみなぎつて、全員悉く自分のあることを忘れる。

「君が代」合奏と最敬禮のうちに、便殿に入御あらせられ、卒業優等生の榮ある御前講演を聞し召され、生徒の諸作業に天覽を賜ふ。戰術、測圖、劍術、柔道、馬術等、われ等の將校生徒が平素鍛錬の結晶を叡覽に供へたてまつる。

御少憩の後、卒業式場へ出御あらせられる。卒業生の光榮、眞に至大、全生涯に忘るべからざるは實にこの日である。

丈夫の門出　畏くも玉座の御前に、卒業生が最前列に整列し、後に在校生が列ぶ。奏樂のうちに、各中隊長が中隊を代表して參進、校長より卒業證書を授與される。次いで各兵科の優等生が、御前に於て御賜品を拜受する。

時方に午前十一時前後、長時間の御起立さへ恐れ多きに、一々御答禮を賜はる畏さ、皇軍に臨ませ給ふ大御心の深く且厚きを仰ぎ、將又、本校を顧みさせ給ふ叡慮を拜して、全員一同、衷心より恐懼、唯々報效の誠をいたさんことを自ら深く盟ふ。

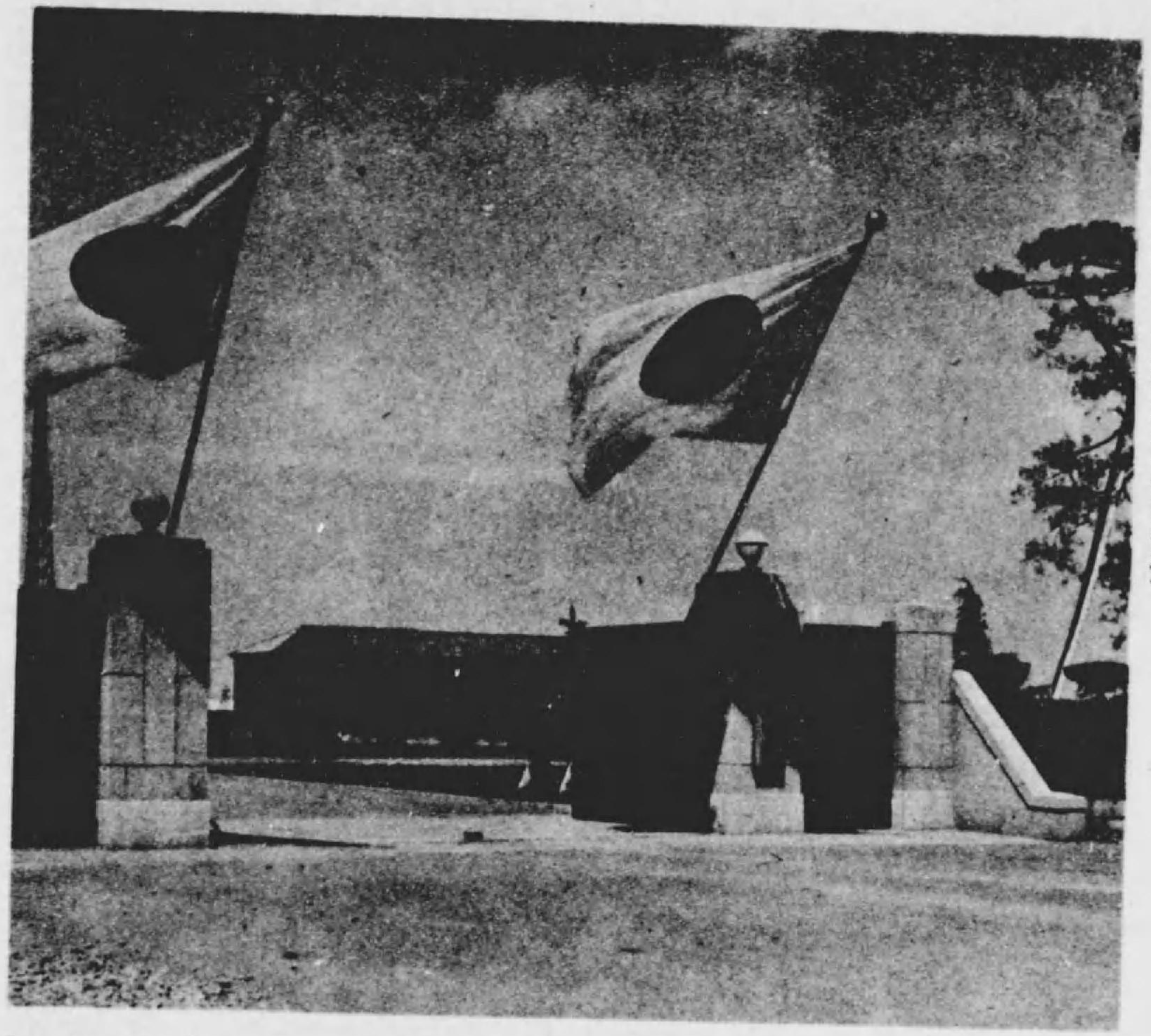
卒業式茲に終了して、陛下には便殿に入御。國歌奏樂のうちに、鹵簿還御あらせられる。來賓、職員、生徒一同、校内に整列して奉送、次いで皇族諸殿下の御歸還をお送り申し上げる。

正午より、特に御臨席を賜ふ皇族殿下、來賓、教育總監、校長を中心として、卒業生のために一大祝宴が開かれる。式辭、祝辭、答辭、それ〴〵終つて、軍樂の合奏のうちに、晴の御馳走に舌鼓を打つ。臨幸を賜はつたこの日、この卒業、この祝宴、遂には懷かしの校歌大合唱となる。

歌へ、歌へ、皇國の楯と選ばれて、永久に大八洲を護る。

今日こそ、その丈夫の榮ある門出なのだ。

陸軍航空士官學校參觀記☆



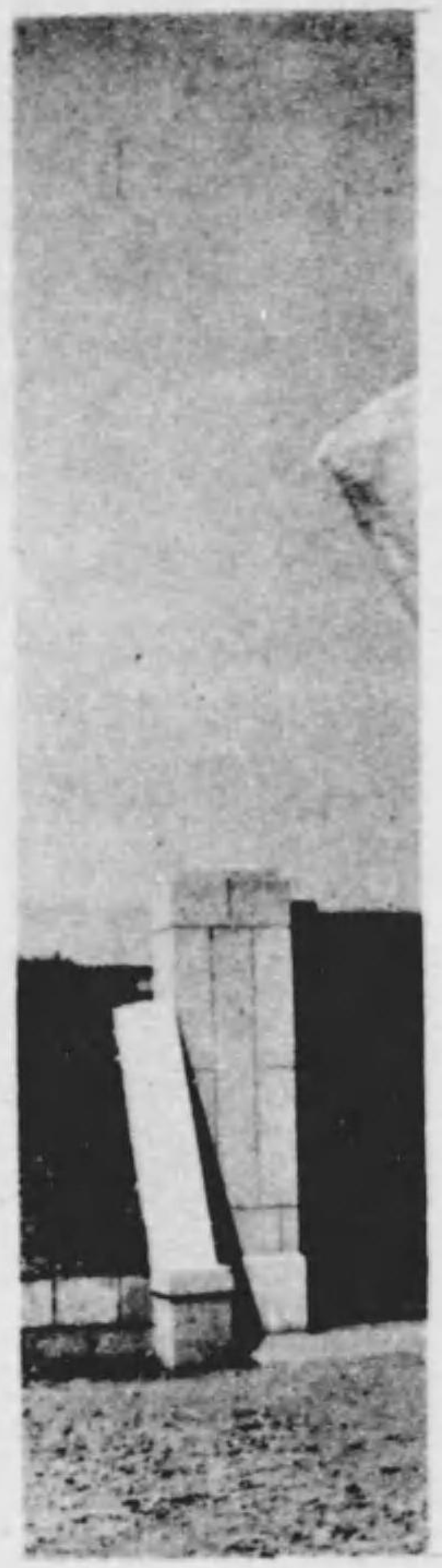
陸軍航空士官學校正門前の景

若鷲の武生活

☆操縦と整備と通信の 三大科目

靈峰を仰いで　新綠まさに爽やかなる武藏野平原を、東京池袋驛から武藏野線に乘つて、西へ横斷すること約一時間餘、風薫る雜木林あり、水淸き小川の岸に草花が咲き、なだらかな斜面の谷が低くつゞき、『夕立の空より廣き武藏野の原』と、太田道灌が歌つたとほりの廣漠たる野に、豐岡驛で下車、赤土の坂道を上つて行くと、間もなく陸軍航空士官學校の正門に着いた。

こゝは武藏野の原、しかも高地なのだ。正門を入つて本部の前庭を歩きつゝ、四方を展望するよりも早く眸に映るのは、富士の靈峰である。眞白に雪をいたゞいて蒼空に聳えてゐる崇高雄大な山容は、直ちにわれ等の日本精神を思はせる。更に關東



陸軍航空士官學校長　陸軍中將　寺倉正三閣下

平原を前にして、すぐ向かふに峰また峰つゞきの秩父連山は、綠の谷深く豪壯な曲線を描いてゐる。富士と秩父連山と關東平原、これを武藏野の高臺から一眸のうちに收めて、蒼空翔ける若鷲の雛、卽ち本校の生徒が日夜、心身を鍛へつゝあるのだ。

賴もしい印象　本部建物の正面には、菊花の御紋章が燦として、全校敬崇の中心に仰がれ、記者もまた拜禮して、二階の奥の應接室へ案内された。今まで參觀した幼年學校、豫科士官學校、士官學校とは、おのづから違つた氣分が、廊下を歩きながらでも感じられる。卽ちこれは『航空』の氣分と言ふべきであらう。廊下を行きかふ將校、下士官、受附の小使さんに至るまで、いかにも不屈に颯爽と見えて、賴もしい限りだ。

無敵空軍を養成　應接室で本校の幹事閣下から本校特有の編制、教育、訓練、その他について種々說明された。何しろ『航空』が本校生徒を養成する目的であるが、名は『航空』と言つても、祖國の聖なる空を護るばかりでない、遙かに遠く大陸の空翔けて、伸びゆく帝國の生命線を、空に於ける